
理解者 - Residents of FOC -

lazo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理解者 - Residents of FOC -

【Nコード】

N4206I

【作者名】

l a z o

【あらすじ】

横浜のメーカー、エア・アートに勤める並木湧葉が出勤すると、街道に面した工場のトラックヤードの床にボルトで固定された席が用意されていた。そこに人事部長の浅倉が現れ、仕事は読書だと命じた。

会社の執拗ないじめで、並木はうつ病に罹患してしまう。もがき苦しみながらも事態の打開を図ろうとするうちに、やがて会社の真の狙いと陰の存在に気付いていくことになる。

1 (前書き)

本書はフィクションであり、登場する個人・法人・団体等はすべて架空のものです。

行き交う車の騒音が、今朝の灰色の空気に反響していた。並木湧なみきわ葉は絶え間なく往来する車と人の波をただ眺めていた。わずか十五メートルほどしか離れていない綱島街道は朝の喧騒に包まれていた。街道沿いの歩道では、揃って同じ鞆を肩から斜めに提げた小さな子供たちが幼稚園のバスを待っている。その前をさながらモンスターのような大型トラックが唸りをあげて大綱橋の方へ駆け抜けていった。その方角からは、鶴見川からかすかに潮の薫りが運ばれてくる。

不意に背中越しに電車が高架をきしませる耳障りな音と振動がやってきて、建物を揺さぶった。それに驚き、思わず目の前の机に右手をついた。

その時すぐ横手で、トラックの荷台が閉まる金属的な音がした。同時に、眼前に黄色いキャンバスのシートシャツターが、まるでなたを振り下ろすように勢いよく降りてきて並木を外の景色から締め出した。

ここは簡素なつい立たて一つでトラックヤードの中を区切っただけの空間だった。並木は、いま手をついたばかりの机を見下ろした。掌には机からひんやりとした感触が伝わってくる。視線をさらに下の方へ移動させると、この机が一脚の椅子を伴って、太いボルトで床に直接固定されているのがわかった。椅子に腰をかければ、シートシャツターをちょうど真正面に見据える格好になるはずだ。

「工場にようこそ。初日の気分はどうかね？」
声がる方を振り向くと、そこには人事部長の浅倉泰樹あさくらたいしきが立っていた。

その姿を目にして、並木は気分が悪くなってきた。

浅倉は猫背で背が低く、五十数年間の経年劣化によって次第に薄くなってきた頭頂部を突き出すようにして、歩く時も立っている時もやや前屈みになっている。前髪を必要以上に伸ばし、ポマードで後ろになでつけて濃淡のバランスを取ろうとしていた。見かける時はいつも、高度経済成長を支えた企業戦士よろしく、代わり映えのないグレーのスーツを身に着けていた。近頃では花粉症に悩まされているらしく、顔を覆わんばかりのマスクと、色のついた大きいレンズの眼鏡をかけている。その眼鏡は、よく見ると花粉が入り込む隙間が少なくなるようにやや立体的な構造になっていた。マスクと眼鏡によつて顔の大部分が隠れてしまい、輪をかけて怪しい風体に見える。マスクの向こうから発せられた声は、長年の喫煙でかすれ、花粉がもたらす鼻炎でくぐもっていた。

「こつちへ来てくれないか」

浅倉はきびすを返すと先に立って廊下を進み、突き当りの階段を上った。並木は黙つて後についていき、二階の階段横の部屋に入った。そこは軽量アルミの間仕切りでしつらえた会議室になっていた。窓からは大綱橋の上を埋める車の列と、雲間から僅かに差す初春の陽光を受けて白く光る川面が望めた。ここは四年ほど前、うっかり東京湾に迷い込み多摩川に現れたところを発見されてタマちゃんと言付けられたアザラシが再び姿を見せた場所だった。当時、橋のたもととは、この珍客を一目見ようとやってくる人々で賑わっていた。今ではそんなことがあつたのを思い出すのも難しいほど、何事もなく、ただ水と車だけが流れていた。

背後でスライド扉が軽い音を立てて閉まった。

「並木さん、そこにかけたまえ」

浅倉が並木に近い方の椅子を手で示した。顔の大部分を覆っているマスクと眼鏡を、まだ外そうとする気配はない。テーブル越しに向き合ってみると、浅倉の姿は、さながらテロリストだなと並木は思った。

おもむろに浅倉が話しを始めた。

「君は今日からこの工場で勤めることになる。たぶん、ずっと。いや、しばらく かな」

「それはどういうことですか？ 先ほどの座席は、あれは何なのでですか？」

浅倉は答える代わりにマスクと眼鏡をゆっくりと外した。並木は説明をじっと待った。やがて浅倉の片側の口元がかすかに上がったように見えた。

「君の席は先ほど見てもらったように特別席だ。トラックヤードの他には場所がなくてな。昨日、大至急作らせたんだが、まあなかなか景色も良くて快適そうじゃないか。我が社では一人でこれほどの広さを占有できる者は誰もいないぞ。何せ社長室よりも広いんだからな。そして、君にはそこを離れずにいてほしい」

「いったいどういうことですか？ そこで何をしろと？」

一拍の間を置いてから、浅倉が尋ねた。

「君はどうしたい？」

並木は期待をにじませた口調で答えた。

「元の顧客サービス部に戻してください。責任者としてやらなければならぬ仕事がたくさんあるんです」

それに対して浅倉は即座に答えた。

「いや、だめだな。そうはいかない。君は配置転換になったんだ。

それについては諦めるんだな。君の代わりはいくらでもいる。君よりも会社のために従順でいてくれる者が」

浅倉は言葉を切り、並木にその意味を浸透させようとした。

「さて、今日から君の仕事は読書ということにしよう。本は何でもよいが、工場の仕事に役立ちそうなものを読んでくれ。もっとも役に立つ日が来るかどうかは約束できないが。君は、本をただ読むだけがいい。ひたすら来る日も来る日も読書だ。他には何もするな」

並木はどう言葉を継げばいいかわからなくなった。この事態が理解できない。しばらく続いた沈黙の後、どうにか口を開いた。

「なぜ……」

浅倉はこの言葉を待っていたかのようにニヤリとして、右の口元をこれみよがしに持ち上げた。

「おいおい、もう忘れたのか？ 昨日、君は工場に興味をもって素晴らしい提案をしてくれたじゃないか。これは、そのご褒美だよ。これからは毎日、思う存分ここで過ごしてくれたまえ」

「いつたい、私が何をしたというのですか？」

並木のこの一言が部屋の空気を瞬時に引き締めた。浅倉が突如、声を荒げた。

「何をだど。昨日、君は我が社に、このエア・アート社に何をした？ しらばつくれるな。今や君は、我が社きつての危険分子だ。これ以上、好き勝手にされてたまるものか」

「それは誤解です。あのことは会社にとって緊急性がある問題だし取り組む必要があると言っただけなんです。会社のためになると考えたんです。私はただ、製品に問題が起きていることがわかったと言っただけです。現に主力の エフレ・フォー・ペット には深刻なクレームが寄せられているというのは報告の通りです。 エアート が新たに発売されるまでに改善しないと大変なことになると危惧しています」

「君の心配など要らぬお節介だ。そもそも、それがどれだけ我が社に損害を与えるか考えたことがあるというのか。製品の流通も、新製品の開発もいまさらストップなどできるものか」

「しかし、このままではもっと重大なクレームにつながる危険があります。そうなったらもつと損害は大きくなる」

「黙れ！ エア・アート社は決して立ち止まらないんだ。我が社はそうやって急成長を遂げ、それがこの業界に革命的な歩を刻む原動力になったんじゃないか。そんな言いがかりを真に受けて、立ち止まっている暇などないのだ」

並木は少し考えてから言った。

「私は十二年間、エア・アート社に勤めています。この間、会社の成長過程と共に過ごしてきたつもりです。部長は優秀なヘッドハン

ディング組かもしれませんが、私は創業四年目から居る草の根組なんです」

「うるさい……」

「私を感じてきたのは、エア・アート社は常にお客様にきちんと向き合ってきたということです。誠実に取り組んできたからこそ、支持されてここまで成長してこられたのです。必要な時はあえて立ち止まり、改めるべきことは改めて」

「黙れと言ったんだ！」

並木が言い終わる前に、浅倉はさつと立ち上がって勢いよく椅子を蹴った。跳ねるように転がった椅子は、横のキャビネットにぶつかって大きな音を立てた。

怒りが収まらない浅倉は、並木をねめつけると、黙ったまま肩をゆすって扉をくぐり、叩きつけるようにスライド扉を閉めて出て行った。その衝撃で、ガラス戸棚の中で エフレ・フォー・ペットの容器が大きく左右に揺れて倒れ、扉の横の壁にかかっていた額縁が音を立てて床に落ちた。

並木は扉に歩み寄って額縁を拾い上げた。そこには一代でエア・アート社を築いた木田拓実社長きただくみがしたためた社是が収まっていた。

人を慈しみ自然をいたわる。それがいいものを生み出す力となる
並木はエア・アート社のそんな考え方が好きだった。それは木田社長の人柄によるものであるとも感じていた。

社長は常々、自己開示が人付き合いの第一歩であり、誰もがその延長線上に公平に存在するのだと言った。だからこそ、従業員は一番身近なお客様であり、大切な家族だ と考え、従業員との対話を特に重視していた。また折にふれ、社長は自分の生い立ちを話すことがあった。古くからここにいる従業員なら、一度ならずともその話を耳にしているはずだった。

木田拓実はいわゆる、めかけの子として生まれた。非嫡出子というやつだ。幼少の頃は母一人子一人の環境だった。母はシングルマ

ザーとして貧しいながらも立派に拓実を育てた。父親だという人物は実業家で厳しい人であると聞かされていたが、十五歳で母を亡くすまで会ったことはなかった。

身寄りを失った拓実は父に引き取られた。新しい家は母と二人で暮らした質素な家と比較のしようもないほど、広くて華美な豪邸だった。そこで腹違いの弟と出会った。それが木田也仁きたなりひとであり、エア・アート社の副社長だ。

也仁はそれまで、なに不自由なく奔放に育ってきた。鼻持ちならないと言って疎んずる者も多くいたが、拓実はいつでも也仁をかばった。

也仁が高校を卒業する頃、父の事業の雲行きがあやしくなった。家族はもつとつましい家に越し、拓実は大学を辞めて働いた。その稼ぎは家計となり、也仁の学費になった。それは拾ってもらった自分の義務だと、拓実は思った。

そんな生活がしばらく続いた後、義母が倒れ、次いで父が他界した。拓実は残された僅かな資産を売却し、頭を下げて借り歩いた資金を元手に、一念発起、エア・アート社をここ横浜、新山下の地に興した。

ここは、昔は舟運ふねいんが盛んで、貯木場があつた港街だ。中村川が海へ注ぎ、かつては丸太が浮かび、はしけ船と釣り船が停泊していた時代があつた。やがて時は流れ、船はほとんどが姿を消し、後には家主を失った古い木造家屋と空虚な倉庫やビルだけが残された。それらは後に近代的な再開発の波に呑み込まれてマンションや団地へと生まれ変わり、倉庫はレストランやライブハウスへと姿を変えた。そんな折り、拓実は知人の口利きでこの地に巡りあつたのだった。

その後、会社は順調に成長を遂げて安定期に入った。節目の十年目を迎えた時、拓実は也仁をエア・アート社に招いて副社長に据えたのだった。この話しになると決まって、拓実は真顔でこう話して締め括るのが常であつた。

「呆れるくらい弟の面倒をよくみたんだよ、ほんとうに」

拓実は人との縁を重んじ、活かすことで会社を短期間で成長路線に乗せたのだった。

最初の製品である エフレ はフレッシュエアをもじって名付けた、天然成分でつくることにこだわったプッシュ式の液体消臭スプレーだった。カーペットや衣服に噴霧しておく、その後も臭いがつきにくくなる。更に、いち早くエコロジーを意識した詰め替え用のリフィルを発売した。本体のスプレー部分を取り外せば、それをリフィルの口に付け替えることができる。その分だけ、ごみが減るのだ。使い捨て感覚からの脱却を謳い、当時、これが環境保護の意識が高い人々に受け入れられた。

その利益を投下して、次に美容成分を加えた エフレ・フォー・ペット を発売した。この時、資材や容器の見直しも行ない、廃棄した後に土に還る素材を積極的に採用した。また、外箱には消費期限と製造日を印字して早めに使い切る意識を利用する戦略を採り、配合成分からいわゆる防腐剤と言われるものを思い切って排除した。迅速な出荷に対応すると謳った通信販売方式を主体に展開し、毛並みがよくなったなどの顧客の体験談を刷り物の中に次々と並べた。その甲斐あって、ペット愛好家の間でクチコミによって大ヒットし、クローズマーケットが形成された。

そしてエア・アート社の次の一手は、このマーケットを活かしていよいよ人間向けの市場に手を広げようとしている。それに向けて開発中の新製品は社名をつづめて エアート と名付けられ、文字通りの期待をかけている。伸長傾向にあるシニア市場と介護市場を主なターゲットに、口臭や老人臭に有効な処方として売り出す計画だ。同時に、室内に噴霧できるようにLPガス式のスプレー缶の製品も発売する予定になっている。毎月一度、全社に向けて行われる恒例の朝礼放送で、これは失敗できない事業になると拓実社長は熱っぽく語っていた。

スライド扉がゆっくり開き、温和そうな声が入ってきた。並木は

つかの間の物思いから引き戻された。先ほど浅倉がけたたましく出て行った物音を聞きつけてやってきた工場長の中村雲道なかもりだった。ガラス戸棚を開けて倒れた数本のスプレーボトルを起こしながら並木に穏やかに話しかけた。

「浅倉部長は帰ったのか。うちの看板商品を倒していくとは、随分と荒れていたみたいだな。部屋に入るなときつく言われていたので隣の部屋でやきもきしていたんだ。まあ、壁が薄いから、話しはだいたい聞こえたがな。でも人事部から正式には何も聞いていないのだよ。筋違いなのはわかっとなるんだが、君から事情を聞かせてもらえないだろうか？」

「実は私にもよくわからないですよ。何がどうなっているんだか」消え入りそうな声で並木は答えた。

中村はテーブルを挟んで向き合う位置に腰を下ろした。

「まあ、そう言わずに、少し整理しながら順を追って話してくれないか。どちらにしても君は今ここにいるんだし、それは事実なんだから。こちらも、何も知らないままという訳にはいかないのでは」

並木はしばらく黙って考えをまとめようとした。その間、中村はじっと待った。やがて並木は顔を上げて話を始めた。

今からおよそ半月ほど前、並木が顧客サービス部の課長代理に就いてから三箇月目を迎えた頃の出来事だった。その前の課長は、配置転換が趣味の人事政策の餌食となり、年明けを境に物流部へ異動していった。その後任がすぐには見つからず、並木は課長にしては少々若かったがその後釜を暫定的に任されたのだった。

それはいつもと変わらぬ多忙な午後、部下の一人が受けた顧客からのクレームの電話で始まった。相手をなだめられないと悟った部下に代わり、並木が応対に出た。

電話の主は五十がらみの女性であった。彼女はペット向けの消臭美容液スプレー エフレ・フォー・ペット を好んで購入してくれるエア・アート社の優良顧客の一人であった。電話口で夫人は感情

を抑えた声で話し始めた。

「さつきの方にもお話したのですが、おたくの製品をうちの犬に使ってしまして。今まではそんなことはなかったのですが、今回はなぜか急に毛がボサボサになってしまたんです。最初はそちらの製品に問題があると疑わなかったもので、もっと余分にスプレーしてみたんです。ほら、美容成分も豊富でしょう？ それなのに、毛並みが戻るどころか抜け始めたんです。もう驚いてバスコちゃんを獣医に連れて行ったら ああ、バスコちゃんというのはうちの犬なんです。そうしたら皮膚があちこち、かぶれたようになってしまっていて。先生が言うには、何かシャンプーとか変なものを使わなかったかと訊かれたんです。いろいろとよく考えたのですが、思いつくのはおたくのエフレだけなんです。残りを捨てようと思ってスプレーを外してみたら、ものすごい臭いがして。先週注文して送られてきたリフィル？ 詰め替え？ どっちでもいいわ。それに取り替えた時までにはこんなことなかったのですが。きっとこれが原因だと思って、こうして電話しているんです」

夫人は犬の名前を口にしたあたりから興奮して早口になってまくし立てた。

並木は問題のものを全部宅配便の着払いで送り返してくれるように丁寧に頼んだが、それは夫人の口調をなお早める効果しかなかった。結局、翌日の朝、謝罪に出向いて製品を引き取ることで一旦この場は落ち着いた。

翌日の早朝、並木は新横浜駅から新幹線で静岡に向かった。先方の家では心配そうな表情の夫婦と、ぐったりと床に伏せて元気のない犬が待っていた。犬の毛は背を中心に身体の三分の一ほどが抜け落ちていて、かぶれて荒れた地肌が見えていた。

並木は真摯に詫びて問題の製品を調査して再発防止に尽力することを約束した。しかしこの夫婦は何も言わなかった。もう二度と、この二人がエア・アート社の製品を買ってくれることはないだろうと並木にはわかった。深々と頭を下げて、駅へと引き返した。駅ま

での道のりは言いようもないほど長く感じた。

新横浜から電車を乗り継ぎ石川町の駅に着いたのはもう夕方近くだった。元町を抜けて山下橋を右に折れ、釣り船屋が軒を連ねる一角を通り過ぎ、歩いて新山下の本社に向かった。並木は顧客サービス部に戻ると机に座り、報告書を仕上げる傍ら、問題の製品を網島の工場内の品質管理部へ至急送る手はずをとった。

その翌日、上司である顧客サービス部長に更に詳しい報告を行った。並木はこの問題をしっかりと追うよう命じられた。それを受けて、品質管理部に検査を急ぐように要請した。

数日後、ようやく結果が品質管理部から届いた。報告書はワープロで作られているが、所々は手書きの文字で埋められていた。それによると、検体からは若干の大腸菌類が検出されたという客観的で短いコメントと、主な原因は顧客の保存状態が悪くなったことにあると推測され、顧客がリフィルに交換する際に菌が入り込んでしまったのだらうという所見が記されていた。犬についての記述は特に見当たらなかった。そして書面上部の区分欄では、原因の欄は顧客に円印がつけられ、対策の欄は空欄であった。

並木は我が目を疑った。この報告書はどうにも辻褄が合っていない。あの夫婦の元にリフィルが届いたのは二月の第一週だった。それを待つてすぐに付け替えたという夫人の言葉を信じれば、今回届いたリフィルを使い始めてから、あのかわいそうな犬の悲痛な叫びをこちらが受け取るまで一週間かそこらということになる。その間にどこからか菌がボトルに飛び込んで、それから短時間のうちに犬の毛をむしり取るほど大繁殖することなどあり得るのだろうか？むしろ、リフィルの中でそれだけの菌が元々繁殖していたことを見逃して出荷したと考える方が合点がいくように思えた。しかし、あの報告書を出してきた品質管理部の見解はどうしてそうなったのだろうか？しばし考えを巡らせていたが答えは見つからなかった。あまり気が進まなかったが、しかたなく品質管理部に直接訊いてみることにして電話をかけた。

それからの一時間ほど、品質管理の関矢博務部長との押し問答が延々と続いた。検査の結果は報告書の通りだと言ってはばからない。再度検査をやり直すように頼んだが、そんな必要はないとの一点張りだった。

関矢は品質管理のプロフェッショナルとして期待され、ある特殊法人から昨年の春にこのポストへとやってきた。噂では也仁副社長が引き抜いてきたのだが、または押し付けられて引き取ったのだとか、と言われている。官僚天下りの受け皿となってきた特殊法人へ改革の波が及ぶようになった昨今、とかく台所事情が厳しいのだ。それはともかく、彼が期待通りの役割を果たしたかどうかは、良識ある者の間では既に評価が下されていた。

顧客第一主義、常に顧客の立場に立つというエア・アート社のモットーはいつたい何処へ消えたのか。並木は憤った。しかし、この石頭の部長には、こちらの話しなど一向に通じる気配すらない。関矢がこの検査結果を押し通そうと、なぜそれほどまでに頑張るのだろうかかと訝った。彼のプライドのようなものが、こちらの話しに耳を貸すのを邪魔しているのだろうか？ この検査をしくじったら首になるとでも思っているのだろうか？ 話が平行線を脱しないと悟って一旦受話器を戻し、並木は椅子の背もたれにどさっと身を投げ出した。

このやりとりを耳にしていた部下が一人、恐る恐る近寄ってきた。白川穂乃香は一昨年入社してきた大卒組みだ。今では顧客サービス部で中心となつて多くの業務をこなしてくれている。

「電話、長かったですね。品質管理は、検査結果に疑問がないと言ったのですか？」

並木は渋い顔で頷いた。白川が頷き返す。

「いつもあそこはそうなんですよ。こちらの話しには貸す耳を持っていないみたい。これで何度目かしら」

それを聞いて並木ははっとして椅子から背を起こした。品質管理に関わる事案はこれだけではないのかもしれない。

「今、これで何度目とか言ったな。これまでも、こんなケースがあったのか？」

「そりゃ、ありましたよ。検査に回すとたいていは、原因は顧客で対策は空欄の報告書が返ってきます。詳細を求めると、あの部長が横から割り込んできて、こちらはシャットアウトを食らうんです。」

まあ、前は三箇月ほど前のことでしたから前任の課長が処理したんですけど、結局は品質管理に撥ね付けられてお客さんに謝って終わり。お客さんはカンカンで、二度と買うかと怒っていましたよ」

「その時の、いや、その前からの記録はあるのかな？」

「やれやれ。最近のものならパソコンで見られますよ。顧客サービス部の共有フォルダの下に品管記録というフォルダがあって、そこに入っています。品質管理からの報告書の内容はみんな転記してありますから」

並木が礼を言うと、白川は肩をすくめて戻っていった。

早速、並木はそのフォルダを開いた。ここ一年半分の記録がそこにあった。きつと彼女がここに入ってから作り始めたものだろうと推測した。一つひとつ、順にファイルを開いて確認してみたが、概ね白川の言葉通りだった。

当面の問題は、顧客サービス部として今後どう処理するかに尽きる。品質管理部とのやりとりは大して進展することはないだろう。しかし顧客への説明責任はこちらにあり、顧客はそれを求めていると考えられる。エア・アート社は安心して製品を買うことができる会社なのかどうか、顧客はその対応いかんで判断することになるのだろう。

まずは今回と同じロットの出荷済み製品に同じ問題が生じた時の対応を練ることに集中するべきだと思った。そう考えていた矢先、並木の机で内線の呼出音が鳴った。そして、また別の顧客からの新たなクレームの電話が並木に回されてきた。

それからの五日間で七件の同種のクレームを訴える電話が並木に回された。最初に電話に対応したオペレーターがおさめることがで

きたものを含めると、いったいどれほどの電話が寄せられているのだろうか。

物流部にも問い合わせをしたが、問題のロットは、並木が静岡に出向いた日にはすべて出荷されてしまったこともわかった。

並木は連日遅くまで対応に追われた。新たな報告書など、書類も山のように作った。白川ともう一人、彼女の同期である本田詩帆ほんだしほの二人が文句も言わずに残業して処理してくれたが、目が回る思いがした。

それがようやく落ち着いてきた週末、今日はもう帰ろうと言って机を片付け始めた。いつもの三人の、いつもの光景だった。ふと本田が勤務表に何も書かずに閉じるのを見た。並木は自分の机を片付ける手を休めずに言った。

「ちゃんと残業をつけておいてくれよ」

この並木の投げかけに、二人は驚いたように顔を見合わせた。それを不思議に思った並木は手を止めて、本田が戻したばかりの勤務表のファイルを持ち上げた。開いてみると、二人の勤務記録は連日、定時出勤・定時退勤となっていた。今度は並木が驚く番だった。

「おいおい、残業をつけるよ。仕事した分はちゃんともらっているんだぞ」

一拍間があつて、少し戸惑った様子で白川が答えた。

「あの、今までそんなことを言われたことがなかったんです」

この二人に言わせると、残業をつけることは一種の悪行だと思っていた。それを信じ込ませたのは、他ならぬ人事部長だったと言った。彼は入社研修で、雇ってもらっていることに感謝すれば、多少残って自発的に仕事するくらいの奉仕があつて初めてバランスがとれるのだと何度となく自説を説いたそうだった。企業は従業員が働いてくれるから成長し存続していけるのだというもう一つの側面が、この話しには欠けていると並木は思った。勤務表のファイルから目を起こして、残業代を請求するのは正しいことだし、法律でも定めがあるから安心して勤務表に書くようにと二人に言った。並木から

ファイルを受け取ると、二人はしばらく迷い、一人は出勤表を訂正し、もう一人はそのまま閉じた。そして二人は気にかけてくれて嬉しかったと礼を言っただけで帰っていった。並木が手渡された勤務表を見下ろすと、白川の勤務表の残業欄に初めて数字が記されていた。

並木はエア・アート社に入社して以来、顧客も従業員も取引先の人たちまで、すべての人と縁を大切にしている心がこの会社のらしさであり財産だと信じてきた。それがあるからこそ、製品もサービスも血が通ったものになるのだと考えてきた。

あの二人はいつも率先して物事をこなしてくれるし、ここでは他の誰よりも協力的だ。それなのに二人は、時間外を無給で働いていたのだ。

並木の気持ちは沈んだ。従業員が遠慮も不満もなく伸び伸び働けなくて、どうやって顧客満足が図れると言っただけ？

週明けの月曜日、今回のクレーム問題を重大だと捉えた並木は顧客サービス部長と品質管理部長との会議を設けて、洗いざらいぶちまけて改善を求めることにした。会議室に向くと、そこにはもう一人、木田也仁副社長がいた。関矢部長から話を聞き、急遽同席することにしたと言っただけ。

並木は、これまでに寄せられた深刻なクレームについて改めて報告し、今回のクレームの件を特に強調した。その上で在庫品の検査、工程と品質の管理、関連各部の対応と連携の再確認と再構築、そしてその成果を新商品エアートの開発へ至急フィードバックする必要があると具申した。その中では工場と品質管理の役割が重要であり、それらをすぐに見直すべきだと強く訴えた。そうしないと、何か取り返しのつかないことが起こるかもしれないと、さらに警鐘を鳴らした。

二人の部長は下を向き副社長の方を見ようとしない。一方、副社長は終始真剣に並木の話に聞き入っている様子で、時折何度か頷いた。

並木が話し終わると、副社長はこれから社長に伝えに行き、至急

改善すると言つて席を立つた。関矢がいかにも不機嫌そうに立ち上がり、その後を追うように出て行った。

そしてその翌朝、浅倉人事部長が突然やってきて、並木は工場への配置転換を告げられたのだつた。まさに青天のへきれきだつた。

それを突きつけられた後の時間はただ慌しく過ぎ、翌朝、つまり今日はもうここにいるのだ。

今朝、この工場にやってきた並木を出迎えたのは、元経理課長の増田千智ますだちゆきと元デザイン部の前嶋資輝まえしましきの二人だつた。その少し後から昨春の入社式で、俺がこの会社をまとめて背負つてやる、と豪語したことで一躍有名になつた型破りな新人、武内達たけうちいたるが出勤してきた。

この三人の眼は既に光を失つていた。今日の空のような灰色の雲が垂れ込め、暗くよどんでいる。その眼は、再び雲間から陽が差すことをもはや期待してはいないと語っているかのようだつた。

この組織の人事政策においては、専門職だろうが管理職だろうが露ほどの意味も持たない。ここは流刑地なのだ。自由の共同墓所セメタリー（C）・オブ（O）・フリーダム（F）。そこが忌まわしい場所でないようにと、はかない祈りをこめて誰かがそれを逆にしてFOCフオックになつた。今の人事部長が就任して以来、一部の者は、密かにここをFOCと呼んでいた。

本来組織にはいろいろな意見を自由に闘わせる場があつてこそ新しいアイデアが生まれたり既存の概念が発展したりするものだ。ちよつとくらい変わり者がいなくては何も先には進まない。しかしそういう自由を嫌う者が、どういつか組織では管理する立場に就くことがままある。こういう輩が権限を持つようになるとたちまち組織は硬直してしまう。

この小さなFOCが、彼らが煙たがるアウトサイダーたちで賑わうほど、その組織は社会的には大きな墓場に向かつて静かに音もなく引き寄せられていくことになる。そして誰しも認められると信じられてきた言論と表現の自由は、この組織においてはいつもここで潰えるのだということが密かに知られていた。その地に送り出され

た経験を持つ者の眼に光が宿ることは二度とない。少なくとも、この会社組織から抜け出さない限り。

「そういうことだったのか」

中村工場長の穏やかで厚みのある声に、並木は物思いから引き戻された。その声にはどこかほっとするものを感じる。ここしばらくというもの、並木には休息する時間も、選択の余地もなかったような気がした。中村が続けた。

「さて、お前さんをどうするか、だな。浅倉部長は、トラックヤードに座らせて何もさせるなとぬかしおった。しかも毎日一回は直々に様子を見に来るそうだ。力ずくでお前さんを参らせるのが目的なのか。こっちはそんなことに加担する気はさらさらないのだが、問題なのはお前さんを工場業務に就けるとすぐにばれてしまうことなんだ。業務には日報というものがあつてな。そこに時間帯ごとに人数と作業者を記さなくてはならん。それを原価計算に使うんで、なるべく正確につけるように習慣づけられているんだ。たいていは誰かがその作業区分や時間帯の都度、まとめて記入しているんだが、ここにお前さんの名前が載らないようにするには、工場の全従業員にさっきの話を説明して同意してもらうか、またはお前さんを業務に組み込まないかのどちらかだ。ただ心配なのは、いろんな輩がいるから、下手をするとまた人事部長がすつとんでくる事態になる怖れがある」

ここまで話して中村は黙った。考えを巡らせてもいるが、決めかねてもいるようだ。

並木は中村の呼びかけの言葉が お前さん に変わったことに気付いた。きつと事情がわかって並木を受け入れてくれた証なのだろう。迷惑をかけてしまうことは、極力避けるべきだと考えた。

「私はどうしたらいいのか、まだわかりません。明日から当面の間は、人事部長の言う通りにおとなしくしていた方がよさそうですね。今日はもう来ないでしょうから、お邪魔にならないように気をつけ

て、少し工場の中を見せてもらいます。それから、表向きは本を読んでいるふりをしますから、製品の仕様書や製造手順書、それに日報などを見せてもらえませんか？」

「製品というのは、エフレかね？ 開発中のエアートもかね？」

「ええ、両方です。なんとかできるとしたら今ですから」

「内緒でなら見ても構わんが、事務室からは持ち出さないでくれ。

それが必要になった時にそこにないと誰が大騒ぎするかわからんかな。それから、見ていることは誰にも知られない方がいいだろう。条件が厳しくてすまないが」

「ではここの全員が退勤した後ならいいですか？」

「ああ、それならいいだろう。それに、あの人事部長なら、定時を過ぎてからわざわざここまでやって来ることはしないだろう。他人には残業させても、自分は早く帰りたい人だからな。お前さんは残っても構わないが、でも夜中にはならないでくれよ。セキユリテイをセットする時間をみれば、毎日遅くまでいたことがわかってしまうのでな」

「いろいろとすみません」

並木の口から思わずその言葉がこぼれ落ちた。中村が穏やかな口調で応じた。

「こつちのことは気にするな。それより、エア・アート社のみんなと、いつも買ってくれるお客さんのことを気にしてやってくれ」

二

その翌朝、並木はトラックヤードにいた。そこでは、昨日は工場内をうろつくことで座るのを避けてきた椅子と机が出迎えた。

簡素なつい立を隔てて、その向こう側では既に工場の日がスタートしている。シートシャッターが巻き上げられ、風が街道から排気ガスを運んできた。

並木は恐る恐る椅子に腰を下ろした。椅子と机はボルトで床に固定されていて、動かすことはできない。顔を上げて前方を見ると、ほんの僅かしか離れていない眼前の街道では、昨日と同じく車がせわしなく行き交い、歩道では若い母親と子供たちがバスを待っていた。

その時、前を通りかかった自転車に乗った中年の女性がこちらに気付いて怪訝そうな表情を浮かべた。向こうから見れば、トラックヤードの半分もの広々とした空間にぼつんと外に向いて置かれた一組の机と椅子。そこに座って本を読んでいるだけの男。その傍らの狭苦しい空間では、ダンボール箱をせわしなくパレットに積み上げている別の男たち。

双方の空間の密度は対照的に見えるのだろう。それは、充分に不自然なことであり、この後、陽が高くなれば春先の陽気に誘われて多くの人がここを通りかかり、もっと多くの目がこちらを見つけることになるだろう。さらし者とは、まさにこのことだと並木は思った。

それから夕方までの間、並木の視界は概ね外の世界と接して過ぎていった。一日三回行われる倉庫への出荷作業、入れ替わり立ち代わりやってくる納品のトラック、運送業者の路線便に宅配便、社内を巡る連絡便のライトバン、それらが入ってくる度にシートシャツターは巻き上げられ、しばらくして荷役作業が終わると次のトラックがやってくるまでの束の間閉ざされる。並木はこれだけ開け放たれている時間が長いならシートシャツターなど無いも同然だと思った。

その日は夕方になって浅倉人事部長がやってきた。今日は鞆を携えている。このまま直帰しようという魂胆なんだろうと当たりをつけた。昨日と同じ二階の会議室に呼ばれた。

「いい一日だったかね？」

浅倉が昨日と同じく、マスクと眼鏡を外しながら言った。顔には薄ら笑いを浮かべている。わざわざマスクを並木の目の前で外すこ

とで、その下に浮かぶ自分の笑みと優越感をより強く印象付けようとしていたかのようだ。並木はこの表情に嫌悪感を覚えた。浅倉はそんなことには気付く様子もなく、他愛もない話を続けた。

「綱島というのは会社から電車で一本だからいいな。みなとみらい線が通ったおかげで、ほんとうに近くなったよ。こうやって工場に来るのも苦にならない」

その話を遮るようにして、並木は強い口調で言った。

「部長、こんなことはもうやめましょう。工場の前を通りかかる多くの人の目にさらされるのは困ります。周りで作業している人や運送会社の人にもいい影響はありませんよ。それより、こうしているなら工場の手伝いをしますから」

「だめた。君の仕事は読書なんだから。他のことはしてはならん」

「それでは何ら生産的じゃないでしょう。それなら元の職場に戻してください。役に立てることがあるはずですよ」

「それもだめた」

「私や、私の姿を目にする人たちの気持ちも少しは考えてください」その言葉に、浅倉は厳然たる調子で応じた。

「ならば、君も会社の気持ちに配慮して、黙ってこちらの言う通りにしていたらどうだ」

浅倉はそう言ったとき、もう口を開かなかった。並木も諦めて抗議をやめた。

十分後、浅倉は黙って立ち上がると身支度を整え、いそいそと去っていった。きつと酒でも呑みにいくのだろう。並木はやるせない思いを押し留めて、書類を読むために事務室へ向かった。

それからの一週間は毎日同じやりとりが続き、同じことが繰り返された。日を追うごとに目立つようになったのは、工場の前を人が通る度に並木に向けられる視線と浅倉の薄ら笑いくらいだった。毎晩調べている書類にも、特におかしなところは見つかっていない。

並木はもう辞職して楽になった方がいいのかもしれないと考え始めていた。事態を改善するための足がかりは何もつかめていない。

並木がどれだけ忠義を尽くそうとも、部長連中があれではその上へは重要なことはきつと何も伝わらないだろう。もし木田社長がこの状況を知ったら、何と言うだろうかと考えた。

その時、ふとした思いがひらめいた。もしかしたら木田社長はこのことを知らないのかもしれない。そうだとしたら、社長に報告することができれば何とかなるかもしれない。少なくともトラックヤードから抜け出さなくては、何も先に進めることができない。

強い衝動に駆られて、パソコンに手を伸ばして起動した。それは中村工場長から、使うことがあればこれを使ってくれと言われていたパソコンだった。まだ自分のIDが有効なのか不安はあったが、恐る恐るキーボードを叩くとログインに成功した。

木田社長は普段から、何か気付いたことがあれば自分宛にメールを送ってくれと公言している。並木はメールソフトを起動し、共有リストから社長の宛先を選択してメールを作成した。

木田社長殿

並木です。どうしても聞いていただきたいことがあります。

顧客サービスにクレームがあり、製品に重大な問題が疑われます。至急、工場を中心に全社的に体制を見直さないとなりません。ところで社長は私の現況をご存知でしょうか？ この大事な時に身動きがとれません。なんとかお話しする機会を作ってください。宜しくお願い申し上げます。

並木湧葉

誰かに見咎められる前にと、急いで送信ボタンを押した。

翌日の夕方、この日も続いた浅倉との闘いを終えて、押し寄せる疲れをこらえて事務所に向かった。昨日より少し遅い時間になってしまった。今日はもう誰も残っていない。スライド扉の横に置かれた、くたびれた古いソファに腰を下ろすと低い背もたれに身体を預

けた。背もたれの上部がちょうど枕のようになり、首を載せて力を抜いた。そのまま少しの間だけ目を閉じていようと思った。

突然首が傾いで、並木は目を覚ました。うっかり眠ってしまったようだ。壁の時計を見上げると、もう十一時をだいぶ回ったところだった。ソファから身を起こし、昨日と同じパソコンの前に移動した。電源ボタンを押し、立ち上がるのを待つてメールソフトを起動した。ソフトが送受信をチェックする数秒間、期待と不安で固唾を呑んで画面を注視していた。すると木田社長からの返信が届いた。

並木殿

メールありがとう。どういうことだろうか？

君に会いに行く時間がすぐには取れないので、メールで概要を報せてほしい。できるだけ善処するようにする。長文になっても構わないので宜しく頼む。

社長 木田拓実

その返事の送信日時は今日の早朝になっていた。並木は飛び上がり喜んだ。やはり社長は知らなかったのだ。

それからの二時間、並木はパソコンに向かいキーボードを夢中で叩いた。自分の置かれた状況と、製品のクレームについて知っていることはすべて書いた。自分でも読み返すのを躊躇するほど、長い文面になった。ほんとに読んでくれる時間があるだろうか？ もっと端的に要点を絞って短く書き直そうかと迷った。しかし時計を見上げると、もうそろそろセキュリティをセットしなくてはならない。今日は金曜日で、明日と明後日は工場が休みになってしまう。今から書き直すのは難しい。木田社長が読んでくれると信じることに決めて、送信ボタンを押した。

月曜日、木田社長からの返信は届かなかった。そしてその次の日、並木は新しい事実に出くわした。

その日は朝から工場内が慌しかった。工場長に訊くと、エフレ・フォー・ペットが品薄になり欠品する怖れが生じたので、緊急増産するのだという。原因は三日前に発売した女性誌に新しく載せた広告だった。

エア・アート社では、これまでは既存顧客向けのチラシに力を入れてクチコミを図ってきたが、マス広告には積極的に取り組んでこなかった。そして今回、新たな試みである雑誌広告のレスポンスをまるで読みきれなかった。当然、在庫や生産計画への反映も間に合わなかった。それでも現場では何とかしようと、工場が急遽増産の体制をとることになったのだった。

工場内にはばたばたと走りまわる足音が響き、並木は座って本など読んでいる気になれなかった。席を立ちトラックヤードから出て出荷準備をしている部屋をガラス越しに覗いた。そこではみんながいつもよりも早いペースで立ち働き、ラインから流れ出てくる製品を次々と手早くダンボール箱に納めている。

その時、向こうで一人のパートの女性が手招きしているのが目に入った。周りには自分しかない。並木は近くの扉に歩み寄った。その女性は足早に駆け寄ると、いまラインに流れてきたばかりの製品二つを並木に手渡した。

「悪いけど、急いで三階の品質管理に持って行ってくれる？ 十一時のトラックに載せたいの。ちょっとその場で待っていれば、たぶんすぐに返事をくれるから」

彼女はラインの放つ機械音に負けまいと、マスク越しに声を張り上げた。あと四十分しかない。並木はわかった印しに頷くと階段に向かった。

手にした製品は一本ずつ化粧箱に入れられ、その裏面の下の方には製造日である今日の日付と、それからちょうど一年後の日付の消費期限と、製造ロットを示すアルファベットと数字の組み合わせが印字されていて、その上から化粧箱を包むようにシュリンク包装がなされていた。階段を上がり、品質管理部の扉をノックする。応え

る声が聞こえて、スライド扉が開いた。

扉を開け支えて立っていたのは丘菜月^{おかなつき}だった。彼女は若くて背が高く、どこかサバサバした印象を与える女性だった。入社して二、三年といったところだ。今日は忙しいだろうに、一応笑顔をつくってくれた。

並木は手に持ってきた製品を手渡し、トラックが十一時に出るのだと告げた。丘は並木を部屋に招き入れると、背を向けて目の前の白いテーブルについた。すばやく手の中で製品の向きを変え、あらゆる角度からつぶさに眺めている。最後に印字部分をチェックして、オーケーと言った。

器具のようなものに立てかけてあったクリップボードから紙を抜き取ると、手早く何やら記入していく。丘の肩越しに覗くとその紙が見えた。それは出荷可否の判定を記録する用紙のようで、日付やロット番号などが彼女の字で書き込まれていく。印刷されている項目をざっと見やった。

並木の目はある箇所で釘付けになった。

菌検査 OK

その横の検査の日付欄はまだ埋められていない。その時、ボールペーンが滑ってきて、可否の欄に刷られた可の字を大きな円印が囲んだ。「オーケーです。トラックに載せていいですよ」

並木は戸惑った。

「その、菌検査の欄は？」

「ああ、これは随分前に済んでいます。この工場の場合、ボトルに充填してから倉庫で半年くらい寝ちやうでしょ。だからその前に抜き取り検査をやって、別の用紙に記録しておくんです。そして後で包装工程が終わってからロット番号をつき合わせて、この欄を埋めているんです」

「半年も？ 倉庫で？ 今の検査は？」並木は問わずにはいられなかった。

「随分と質問が多いんですね。トラックに間に合いませんよ」

「内線電話をかけさせてくれないか？」

「無駄ですよ。忙しい時は誰も出てくれないんです」

並木はもどかしさに肩をゆすった。

「すぐ戻ってくるから、もう少し教えてくれないか？」

「いいですよ。午前中はうるさい部長がいないから」

並木は階段を駆け下りると、すぐにまた駆け上がった。丘はそこで待っていてくれた。

「あなたは製造工程のこと、まだ知らないんですね」

「そうなんだ。教えてくれるかい？」

丘は仕方ないというように肩をすくめて、説明を始めた。

「簡単に言います。まず製品の処方と原料を研究所が決めます。原料は、たいていは とめ型 といって、こちらのオーダーに沿って特別な配合や形状にしてもらいます。それが研究所の自負らしいのですが、おかげでロットが大きくなって、初回に納品されるのは平均して販売計画の半年分くらいです。研究所が最も厳しく求められることの一つにコストの問題があつて、とめ型で単価が上がる分、海外 特にアジア圏から原料を船便で時間をかけて安く運んできません。費用のかさむ航空便は使いません。現地の工場で製造を終えてから、一時保管と港と通関と輸送とあれやこれやで、こちらに着くのは約一箇月後です。幾つもの小規模な代理店が複雑に絡んでいて、そんなふうになるらしいです。それからこちらで借りている倉庫に入れられて製造まで待つ訳です」

「それじゃ、原料は、こちらの製造工程に乗るまでに大変な時間がかかっているんだな。気が遠くなるほどの……」

「その観点で言えば、そうですね。でもこちらにとつての 原料 には、その手前にそれを作るための別の原料と工程があるはずですからね。それは原料メーカー内のことなので覗き見ることはできませんけど、大元の原料とか材料と言えるものまで遡っていったら、確かに気が遠くなるでしょうね」

「そんな状態で、原料の品質はどうなんだい？」

「それが実は頭の痛いところなんです。現地の原料工場までいいとして、そこまでは管理できませんから、問題は港と船の上です。加えて、コンテナは積み込みを待つ間は野ざらしでしょうし、船の上では積まれる位置によっては遮るものがないまま陽光にさらされます」

「ああ、なんてことだ。せめてそのコンテナにエアコンでもつけていたらいいのに」

丘がかぶりを振った。

「空調がついたリーファーコンテナなんて、あの研究所が使うと思います？ それどころか、まったく異なる何かと混載されてくるかもしれませんよ。何しろ研究所が気にしているのはコストのことばかりなんですからね。だから結局、原料は長いことコンテナの中に閉じ込められることになる訳です。研究所は初回発注を済ませれば後は工場側に責任が移るから、それ以上はあまり突っ込んで欲しくないんですよ。同期の子が向こうにいるから訊いてみたことがあるんですが、やっぱり船の上はやばいかもしれないって言っていました。あ、これはオフレコでお願いしますね」

並木はここまで聞いて呆気にとられた。

「まあ、原料のことはこれくらいにしていいですか？ 続きを話します」

そう断って丘は続けた。

「こつちに原料が届いてから、しばらくして製造工程に乗ります。これは製品それぞれによって違いますから、一概には言えません。うちの場合は、主にエフレが二品と、これからは開発中のエアートがラインに乗ってきます。製品によって違いはあるのですが、でもごく大雑把に言えば、混ぜて殺菌してボルトに詰めるということになります。ロット番号は、混ぜたところでつけられます。この間には工程と工程の間に仕掛品 途中の状態の半製品だと思ってください それがあって、後の工程に使われるまでは在庫になります。」

品質管理はこの間の何箇所かで抜き取り検査を行います。先ほどの用紙にあった菌検査は、このボトル充填が終わった段階のものが対象です。この後、包装工程が行われるまで、そのロットはしばらく倉庫に戻ります」

「そして倉庫から再び出されるまでにはどれくらいかかる？」

「だいたい、半年くらいですかね」

「どうしてそんなに膨大な在庫と時間が要るんだ？」

「いくつかの理由があると思います。一つは考え方、つまり方針ですね。うちのように直販を行う会社では、販売戦略上での欠品の捉え方に差があります。品切れを販売機会の損失と考える会社では欠品はご法度です。切らすくらいなら、たくさん在庫を抱えた方がいいと考えます。逆に在庫の観点から見て欠品を上手く利用しようという会社もあります。初回ロットだけ生産しておいて追加注文はわざと保留しておくんです。そうすれば後どれだけ生産すればいいかわかるので、原価が上がる小刻みな生産や余剰在庫を回避できるんです。ちなみにうちの会社は前者の考え方ですね。でも在庫というのは、どちらの場合でも製品だけではなく、原料や資材や半製品など生産ラインに関わるものまで幅広く存在するんです。だからその総量は膨大になるんです。でも必ずしも在庫そのものが悪ではなくて、問題なのは在庫計画なんです。欠品やラインをコントロールするバッファとして、在庫の性質をうまく計画的に利用できれば、逆にこれらの問題はだいたい解決するはずなんです。まあ、うちの会社では、そうなっではいませんが。それから二つ目には、部門ごとに内部利益を追求させているという現状があります。たとえ見せかけの数字であっても、部門の予算に響くんです。だから、そこから小さな改善を散発して、いかにも仕事に精を出しているように見せて予算を確保しようとするんです。そんな部分的なものが企業全体のプラスになるかどうかは怪しいものだけど、内部的にはちゃんとやっているんだと言える訳です。お客さんから見れば一つの会社なのに、経営側にその感覚が欠けているんでしょうね」

話の続きを整理するかのようになり、ここで一拍の間を置いてから、丘が先を続けた。

「今の時代の主流はお客さんに商品が届くまでの全部の流れを一本の川のように見立てて、上流から下流まで全体がスムーズに流れることを目指すんです。ちょっと、鎖を思い浮かべてみてください。それぞれの輪を部門や工程やマーケットだと考えてみると、全体から見て輪の一つひとつには強度 能力には差がありますよね。この鎖の仕組みを使ってある製品を作って販売しようとしているとします。この時に輪にあたる各部門が自分のところの都合に合わせて独自に能率を上げようとしたら、それぞれの輪の能力の差はどうなりますか？」

「差は大きくなる」

「そうですね。差が大きくなると、元々能力に余裕のある輪ではもつとたくさん仕事ができるということになります。すると隣の輪との間には能力の差に相応した量の仕掛品や在庫品が溜まっていくんです。ということは、既に能力が足りている輪をさらにチューニングしても、それにかかるコストもその改善の結果も鎖全体の利益にはならないということです。それなのに、どこも自部門の都合ばかりしか言わないんです。それでそのしわ寄せは、まず他部門にいつて、やがて全体に及ぶ。研究所は大きなロットで作らせれば処方上の原価を下げられるし、物流部は荷をまとめて運んでトラック便の本数を減らせれば成果なんです。販売部門では研究所に安く作れて売れる製品をどんどん開発しろと言い、広告を打つてもそのレスポンスはタイムリーに工場や物流部には伝わらない。どの部門も次の作業を担う部門のことは二次で、実はたいした連携がとれていないんです。歪みは弱いところに現れるんですね。だからこうして緊急増産になったり、欠品を避けるためという尤もらしい理由をつけて在庫の山をこしらえることになる。とばかりは得てしてお客さんにいくのに、そのお客さんが鎖の輪の一つだとは誰も夢にも思っていない。まさに 木を見て森を見ず なんです。以前、あまりにも

在庫がかさんで問題になったことがあるらしいのですが、その時に副社長が問題を提起した人に対してこう断じたそうです。遅かれ早かれどうせ売れるのだから先に作っても問題ないだろうと。それからというもの、在庫はどんどんかさを増していつて途方もない時間をかけて滞留するようになったんです」

もう呆れたよというように、並木はため息をついて眼球をくるりと上に回した。その様子に、丘がかすかに頷いた。並木が言う。

「そんなことになっていたなんてな。驚いたよ。それにしても、君はいろいろなことをよく知っているんだな」

「なにも学生だけが勉強している訳じゃありませんから。社会に出てから勉強しなくてはならないこともたくさんありますよ。特に実地では、嫌でもいろいろと学びますね」

丘は肩をすくめて、そう答えた。

並木は頷いて次の質問に移った。

「ところで、その倉庫の空調は効いているんだろうか？」

「正直に言うと、コンテナよりは随分まし、ということなんです」

「でも、そこで寝かせた後に菌検査はしないんだろ？」

丘はばつが悪そうに頷いた。

「以前はしていたらしいんですよ。でも最近ではコストや原価がうるさく言われるし、物流や倉庫とか他のところからもいちいち止められると効率が悪いのなんのと言われて。それでやらなくなっただんです」

「それでも品質は大丈夫だと？」

「もし何かあった時はロット番号と紐付けて、製造に使った原料や製品の販売先を辿って追えるようなトレーサビリティの体制を整える方が外からの見栄えがいいだろうと、あの役人下がりの部長が指示を出したんです」

並木は閉口した。遠慮がちに丘は続けた。

「もう最後ですから。後は包装工程だけ」

「ああ、それはなんだい？」

「この工程ではボトル充填まで済んでいるものを引つ張り出してきてカートンに入れます。化粧箱って言った方がわかりますか？　そして、これを行った日を製造日、その日から一年後の日付を消費期限として印字します。それから、ロット番号も。そして化粧箱の外から全体をシュリンクで包んで、別の倉庫へ出荷するんです。ここからは物流部の管理下になるので、工場の役目は一応終わりです。ちなみに、さつき出荷可否のチェックをしていたのは、主に印字とシュリンクの破れや化粧箱の潰れの有無といった外観検査です」

「どうして包装工程が製造日なんだい？　ただ外箱に入れるだけの工程だろう？」

「それはそうなのですが、最終工程を製造日としていいことになっているんです。ボトル充填を終えているものは化粧箱に入れずに出荷されることがないため、あくまでも半製品の扱いです。化粧箱の種類はボトルの人数や組み合わせによって異なっていて、この工程で生産される最終製品の品番も様々です。一個単体の製品でも、専用の化粧箱と品番があるんです。だからこの工程を別に分けておくだけの合理性があるという訳です。お役所もそれでいいということなんです」

ここまでを聴いて、並木は信じられない思いがした。丘が付け加えた。

「この仕組みは多くの会社で利用　いえ、あえて言うなら応用されている、学生時代の友人が勤めた会社では、後は充填するばかりというところまで外注で作らせて、自社では詰めて包装するだけなんです。外注先には机一つと自社分工場と書いたプレートを置かせてもらっていて、何かあればそれで逃げるそうです。それなのに、この会社の広告には　安心の自社生産　という文言が目立つように入っています。他にも似たような例はいくらでもあります。たとえば食品の業界では、別の産地から持ってきたものが最終工程を行ったところの地名を冠して売られていることも少なくありません。どこかで栽培した茶葉でも静岡で詰めれば静岡茶だし、どこかで生ま

れた牛でも兵庫でさばけば神戸牛になる。誤解のないように言っておきますが、これは単なるたとえ話に過ぎず、特定のものとや産地を指して問題だと言いたい訳ではありません。ここで問題なのは、仕組みがそもそもこうなっているために、その気になればどこでも、どんなことでも出来てしまうということなんです。もちろん一片の偽りもないようにやろうとしている人たちはたくさんいるのですが、一部の心ない者たちが熾烈な自由競争をくぐり抜ける武器としてこつした仕組みを巧みに応用しているんです。そしてこの国では、それを責めることは難しいんです」

うんざりしたように並木が首を振った。そしてため息混じりに吐き出すようにつぶやいた。

「いつから、こんなことに……………」

丘が再び肩をすくめた。

「ずっと前からです」

並木は疲労感を覚えた。それでも頭の中では、今の話をなんとか検討しようとした。

これまでのところ、丘は正直に答えてくれた。一旦そう結論付けると、並木はずっと気になっていたことをどうしても訊かずにはいられなくなった。

「今までの話しを踏まえて、一つ教えてほしいことがあるんだ。たとえば冬にお客さんが注文したら、その前の夏に充填を終えたものが届くのかい？」

「今日みたいに緊急増産なんてことがなければ、だいたいそんなものですね」

「緊急増産っていうのは、そう滅多にはない？」

「そうですね、あまり頻繁にあっては困るので。でも、あれだけの在庫があっても対応できないほど販売の予測や計画が狂うことが時々あるんです。まあ、このところは落ち着いていましたから、増産は久しぶりですね」

「では先月辺りに買ったお客さんには、去年の夏の、あの記録的な

猛暑を空調のろくに効かない倉庫の中でじつと耐えた製品が届くつて訳かい？」

「なんだか責められているような気がしてきたわ」

「すまない。でも大事なことなんだ」

並木は謝って、先を促した。

「結果的にはそうですね。去年の夏のあの猛暑は、防腐剤がほとんど入っていない製品にとっては天災みたいなものかもしれないですね。後から品質に何らかの問題が生じることがあっても不思議ではありません」

「でも同じ時期に生産されたものが、どれも同じように問題を起す訳じゃないよな？」

「ええ。製品のロットによって状態は異なります。そこに使用した原料ロットの組み合わせも違うでしょうし、生産過程の条件もそれぞれ差があるでしょうから。ところで何か特定のロットについて訊こうとしていますか？」

並木は答えに詰まった。丘がそれを察した。

「もしかして、顧客サービス部から先月届いたやつですか？ 犬が大変な目に遭ったという、あれですか？」

「ああ。実はそのことなんだ。何か知っているかい？」

「詳しいことは何も。あれはカテゴリー四でしたから」

「なんだい？ そのカテゴリー四というのは？」

「検査依頼やなんか来ると、緊急度や重要度を推し量って四つのカテゴリーによる優先順位付けをしているんです。そもそもカテゴリーは三分類だったものを、関矢部長が来てから四つ目が設けられたんです。この四番目の分類には、普通の手順で処理してしまうと波風が立って品質管理への風当たりが強くなる怖れがあるものが選り分けられます。わかりやすく言うと、顧客サービス部にクレームが入ってお客さんのところに呼びつけられたなんて検査依頼書に書かれていたら、たいていはカテゴリー四ですね。大きなクレームは製品回収みたいな大ごとにつながりかねませんから。カテゴリー

「一から三までは私たちが処理して報告書を提出する前に部長のチェックを受けます。後に事態をややくしくしそうな記述がなければ、検査を依頼してきた部門に報告書を送って完了します。でもカテゴリ四の場合は、この手順が変わります」

並木は話についてきている印しに頷いてみせた。丘が先を続ける。「カテゴリ四と決まると、まず検査依頼書が品質管理部長に回ります。内容を確認してから報告書がプリントされ、検査依頼書と一緒に部長が検査担当に指名した人のところに回ります。後は一通りの検査をして、書類を埋めて部長に返します」

「ちよつと待つて。検査の前にどうして報告書がプリントできるんだい？」

「あまり言いたくないんですが、部長は何パターンかのカテゴリ四用の報告書のひな形を作って持っているんです。だから依頼内容について言い訳が立ちそうな結果が予め記入してあるパターンの報告書を先にプリントできるんです。心ある人によって厄介な報告書を作られるのは避けたいですね。だから、検査を担当する人まで指名するんです」

「その数あるパターンのうちの 하나가、原因欄は顧客で対策欄は空欄というやつ？」

「そつだと思えます」

並木は以前この件で品質管理部長と電話でやりあった時のことを思い出した。だから、彼はまるで譲らず強引に押し通そうとしたのか。何度やつても結果は変わらないといったのか。その時に目にした検査報告書が、ワープロ文字と手書き文字とが混ざって書かれていたことにも合点がいった。並木はたまらず目を伏せた。

短い沈黙が流れた後、丘が話を締めた。

「そろそろあの嫌な関矢部長が戻ってくるかもしれませんよ。顔も見たくないでしょ」

並木はよろよろと立ち上がった。出て行こうとして扉のところまで立ち止まり、丘を振り返って試みに尋ねた。

「君に責任がないのは承知しているんだが、もしこんなふうに各部門がばらばらに自分たちの利得を追求していったら、いったいどうなってしまうんだろう?」

「鎖は音を立てて切れるでしょうね。そうすると、もはや鎖としては役に立たなくなるから、すべての輪は鉄くずになります」

「その後には何も残らない?」

丘が首を振った。

「いえ、この建物くらいは残るんじゃないかしら。ただし、悔恨と暗愚あんぐの象徴としてね。それが切れた鎖の末路なんです」

その日の夕方、また浅倉人事部長がやってきた。並木は既に疲れきっており、浅倉と向き合っているのもやっとだった。それに気付いた浅倉は例の薄ら笑いを浮かべた。

「おやおや、随分と参っているようだね。そろそろ降参かい?」

並木は答えずに、浅倉を力なく睨んだ。

「まだ怖い顔はできるんだな。まあ、いいさ。そろそろ潮時かなと思つて、君に助け舟を出してやろうと用意してきたところなんだ」

そういうと携えてきた鞆を開けてクリアファイルを取り出し、並木の方へ滑らせた。

「それに署名して拇印をつけば、君は晴れて自由になれる」

並木が机に目を落とすと、クリアファイルの中には 誓約書兼念書 と題されたワープロ打ちの紙が収まっていた。それにざっと目を走らせる。

並木が読みえるのを待つまでもないというように、ゆっくりと浅倉が説明を始めた。その口調には、勝ち誇つたような傲慢な響きがあった。

「そこに書いてあるのは、簡単に言えば、君が我が社を無条件で去り、ここで知り得たことは一切口外しないという約束だ。もしそれを破ったら、君はこちらが算定した損害賠償を負うことになる。このことに同意するにおいて、君は何ら異論がないと、こつ書いてあ

る訳だ。それは生涯かけたって支払うことなど到底不可能な額になるかもしれないがな。まあ君が自己破産することがあれば、残りのご両親に負ってもらうことになるだろうね。君がどうあがこうと逃れることはできない。理解できたか？」

並木はぼかんとしたまま、まばたきさえもできなかった。浅倉はそれを楽しむように、より晴れやかな笑みを浮かべて、彼にとつて可能な限り爽やかに告げた。

「では、また明日」

その後、並木は身体を引きずるようにして事務所へ上がっていった。メールをチェックするも、その日も木田社長からの返信は届かなかった。今日知り得た新たな事実をメールで伝えようかと考えたが、寸でのところで思い止まった。木田社長は多忙でまだメールを読む時間がとれていないんだろうと、とりあえずそう思うことに決めた。

三

翌朝は春らしい明るい色の空で始まった。昼間は暖かく、綱島街道の人通りは多かった。そんなうらかな日の午後、学生服姿の男女数人のグループが開け放たれたシートシャッターの向こうからこちらを見ていた。それに気付き、並木は読んでいた本を机に伏せて置くと顔を上げた。

その途端、その中の女の子数人が笑い声をあげた。男の子たちは指を差して大げさに笑い、そのうちに数人が携帯電話のカメラをこちらに向け始めた。

通りかかったベビーカーを押した女性やコンビニのビニール袋を提げた老人が、それを見て足を止めた。自転車の中年女性が学生服の女の子に何やら話しかけている。しばらくその騒ぎが続き、最初にやってきた学生服の集団のうち、一人の男の子がこちらを指差し

て叫んだ。

「ブツクマン！」

並木はようやく事態を把握した。急いで机から本を取り上げて顔を隠す。本の下顔は真っ赤で、今にも火がつきそうなほどだった。男の子が押搦する叫び声を聞いて、奥から武内が走って出てきた。慌ててシートシャツターを降ろすと、並木に謝った。

「開け放してすみません」

並木は答えることも、本を下ろすこともできないでいた。工場の奥からは誰ともなく悪気ない声が漏れてきた。

「あら、こんなのはアザラシのタマちゃん騒動以来だね」

並木が顔の前に掲げた本は小刻みに震え出し、机の上を涙の粒が叩いた。

この事をきっかけに、工場みんなが並木を気にかけてくれるようになった。少なくとも、シートシャツターをこまめに閉めるという程度には。

武内は後ろめたさを引きずり、トラックヤードを任されている前嶋はそれが気になるようだった。そんな時、前嶋が声をかけてきた。「これから食堂で武内と今月の朝礼放送の録音テープを聴くんだけど、一緒にどうだい？」

そういえば朝礼放送のことなどすっかり忘れていた。エア・アート社では毎月一回、たいていは上旬に木田社長が全社に向けて放送で朝礼を行っていた。トップの方針や考え方を直接聴く機会として、全従業員は欠かさず拝聴せよと人事部長が通達文を発したのを随分前に目にしたことがある。工場や顧客サービス部など、朝礼の間に停止できない業務がある部門では録音して聴くことになっていた。抜け目のない一部の者がそのテープをダビングして取引先に売りつけているという噂が立ったこともある。

前嶋と武内と共に食堂の椅子に腰かけた。目の前にはうやうやしくラジカセが置かれている。無機質なただのラジカセに向かって、

だいの大人が姿勢を正して静かに座しているのは嘘えよりのない滑稽な光景だ。そんな並木の思いをカセットが回る音が遮った。

「おはようございます。副社長の木田也仁です。今月の朝礼は社長が出張のため、私が行います」

武内が手を伸ばしてカセットを止めた。

「副社長ですって。どうします？ 聴きます？」

前嶋は面倒くさそうに応じた。

「コーヒーを取ってくるから、待っていてくれ」

前嶋が三人分のコーヒーを持って戻ってくると、武内がラジカセのスタートボタンを押した。再び副社長の声がスピーカーから響いてきた。

「もうすぐ今期も終わります。四月から始まる来期に向けて、皆さんに是非とも気を引き締めてもらおうと思ひ、今日は南米ペルーにあるマチュピチュ遺跡に我が社の使命をなぞらえてお話しします。皆さんは、この遺跡を知っていますか？」

こう切り出した副社長は、続く三十分間を喋り続けた。

この遺跡は、深い谷と切り立った高い山をしたがえて、山の裾野からは決して気付かないほどの高地の尾根に広がり、空中の楼閣と呼ばれている。近年アメリカの探検家に発見されるまで、静かに沈黙を守ってきた。雲の切れ間に浮かぶかのごときこの天空都市は、四十の段々畑が三千段の石段でつながり、高低差を利用した水路が巡らされている。二百に及ぶ建造物は、かつてこの地に多くの人々が暮らしていたことを示しているという。

也仁副社長に言わせると、この遺跡のように大いなる天空から消費者に安全をもたらすのが我が社の使命なのだそうだ。崇高な理念をもって高みから見れば、消費者の欲するものがいつでも達観できるのだと言った。また自らが頂に立つことで、リーダーとしてこの業界とこの国を牽引するべきなのだとも。

これより先、テープの声は並木の耳には届いていなかった。このまま聴いている気にはなれなかった。かつてマチュピチュを治めた

民が聴いたなら何と云うことだろう？

やがてラジカセのストップボタンが押され、バネが戻る乾いた音で並木は我に返った。顔を上げると、正面に座っていた前嶋がぼそつとつぶやくのが聞こえた。

「まるでバベルの塔だな」

「それはなんだい？」

並木の問いに前嶋が答えた。

「旧約聖書の話なんだ。力をもった者たちが神のためではなく、自らの名声のために天空を貫く塔を造ろうとした。天と地を結ぶ壮大な塔を。人々の傲慢さに怒った神は、彼らが互いの言葉を聞き分けられないようにしてしまった。そして塔の建設は混乱のうちに頓挫した。傲慢さは、決して実を結ばないということさ。おごりを身上とする高慢ちきな連中が我がもの顔で幅を利かせている現実を見る度に、それは神が混乱させた言語をこいつらがしつかり受け継いでいる証拠じゃないかと思うよ。だって、言っていることが我々庶民には決して伝わらない。そうじゃないか？」

言葉を切り、ふっと短く息を吐くと、前嶋は肩をすくめた。そうしながら先を続ける。

「副社長は悪気があるうとなかろうと、ただお坊ちゃん育ちというだけなんだろうよ。弱い者にはるくに心を碎けないから、こんなことをつい言ってしまうんだろう。副社長なりの、精一杯というやつさ。これだから俺たちから馬鹿呼ばわりされるんだよ。でもな、こんなことを腹の中でいつも考えている輩はまた別だ。そいつらは、会社や俺たちのことを誰のものだと思っているんだろうな。くそ、いったい……」

前嶋は最後まで言わずに話しをやめた。もうたくさんだと思ったのだろう。

しばらく間を置き、ややためらいながら前嶋が再び口を開いた。

「なあ、上手く言えないんだが　いろいろなことがあるけど、なるべく気にしないようにした方がいいぞ。無責任な言葉に聞こえた

らすまないが、何と言うか、神は相対する準備ができていない試験は寄越さない。試験には意思があつて、時と相手を選ぶんだ。今ここにいることにも、きつと何かの意味があるのさ」

並木は前嶋をじつと見ただけで、何も答えなかった。そうしながら心の中では今言われたことについて考えていた。やがて並木の心に浮かんだのは、神の意思への反発だった。

カセットを巻き戻して、コーヒーを片付け、三人は食堂を後にした。残されたカセットテープとラジカセは次の聴き手がやってくるのをそこで静かに待っている。

その日は、そのまま何事もなく過ぎていった。珍しいことに浅倉人事部長はやってこなかった。そして木田社長からの返信も、やはり今日も届かなかった。

帰り支度を整えていると、昨日浅倉から渡されたクリアファイルがふと目に入った。なんだか今日は一人のアパートに帰る気がしない。実家に電話をしてみると、早く帰ってきていた父の温かい声が応えた。

並木の実家は綱島から東横線で十分ほどの武蔵小杉にある。新山下の本社に勤めた頃から借りている桜木町のアパートへ帰るよりも、工場からなら近い距離だった。

玄関をくぐると、奥から父が顔を出した。父は、ものづくりの会社で長い間まじめに勤めてきた、いわゆる典型的なサラリーマンだ。キッチンに入っていくと、テーブルに一人分の食事が用意されていた。その向こうで母が、急だったからあり合わせでごめんと詫びて、にこりと笑った。

食事の後、父とダイニングテーブル越しに向き合った。コーヒーをすすりながら父は話しかけてきた。その声には息子を気にかける優しい響きがあった。

「急にこっちに泊まるなんて珍しいな。何があつた？」

並木はためらった。その様子に、父は静かに頷いた。心配をかけ

まいと、これまで何も話してこなかった並木の心の堤防がそこで砕けた。必死にせき止めてきた分だけ、流れ出る感情のうねりは大きかった。溢れる言葉を父が受け止め、涙は母が受け止めてくれた。

並木はこれまでの事情を話し、クリアファイルの中身を見せた。そして、冷静だった父が感情的な怒声をあげた。母は泣きながら父をなだめた。三人が再び落ち着いて話せるようになった頃には、時計は日付が変わったことを告げていた。

「時間がないんだ。父さん、どうしたらいい？」

並木の問いに、父はしばらく黙ったままだった。ややあつて、重い口調で答えた。

「まず、お前の身を何とかすることが先決だ。とにかく、その座席から逃れなくては精神的におかしくなってしまう。人事異動に関して、就業規則には何と書いてある？」

就業規則？ それは並木にとって耳慣れない言葉だった。その反応を見て、父が続けて問いかけた。

「おいおい、従前の部では課長代理だったんだらう？ 就業規則も知らないのか？」

並木は考え込むが、思い当たるものが浮かばない。

「本当に知らないとする、それこそ問題だぞ。就業規則は、文字通りその会社のルールであり、そこで働く者のガイドラインになる。学生で言えば、校則や生徒手帳のようなものだ。法律では、従業員がいつでも見られるようにして備えておかなければならないことになっている。見たことはないのか？」

並木は黙って頷いた。

「ちょっと、こっちへ来てみる」

父は先に立って書斎として使っている四畳半の部屋へ並木を導いた。パソコンを立ち上げインターネットに接続すると、検索エンジンを持つポータルサイトを呼び出した。検索窓に 就業規則 ひな形 と打ち込んで検索ボタンを押した。画面が変わって、たくさんの検索結果が列挙された。父はその中の一つを選んでクリックした。

すると一般的な就業規則のひな形とおぼしきものが画面に現れた。下の方にスクロールしながら、並木に画面を見るようにと言った。そこには人事異動や残業や、その他諸々の事柄が、ごく汎用的な表現で規定されている。それを父が簡潔に説明して、ようやく並木は理解した。

次に配置転換の項に絞って、より詳しく見てみることにした。

「それから、次はこつちだ」

父はマウスに手を伸ばした。並木が少し後ろに下がると、別のウインドウを立ち上げて、また検索窓を呼び出した。今度は 労働基準法 配置転換 と入力してエンターキーを押した。検索結果のうちから一つを選び、先ほどのウインドウと並べて表示させた。

「いいか、さっきのが就業規則で、こつちが法律だ。就業規則はでたらめではだめで、両者に差がある場合は法律の方が優先されるんだ。何か問題が起きたら管轄の労働基準監督署がチェックすることになっている。まあ、見てみる」

並木は再び身を乗り出して画面を目で追った。更にいくつかのザイトをはしごしてみても、徐々に中身がわかってきた。

まず、法律や裁判の判例の解釈によると、配置転換では従業員の同意が得られるように配慮する必要がある、資格や特別な技能を有する者、勤務地や職務を限定している者については、それを無視した一方的な配転命令は無効となる場合がある。仮に配転命令の根拠を示されたとしても、業務上の必要性と労働者の不利益を天秤にかけたとき、職権乱用と判断されればこれも配転命令が無効になることがある。他にも個別のケースについての記述やたくさん判例が見つかった。

そして就業規則のひな形には、業務上必要がある場合に就業場所や職務内容の変更を命じることがあり、正当な理由なくこれを拒むことはできないと、さらにと書かれていた。

こうして見ていくと、社会の規則と社内の規程には随分と乖離があるようだ。そう考えてみると、配転命令には納得がいかないが会

社からの命令だから仕方がないと諦めて受け入れてしまったという愚痴をよく耳にしていたことに気付いた。実際、今回の工場への急な配転についても、並木は選択の余地がないと思ひ込んで、それに黙って従っていた。しかし今知り得たことからすると、一般的に信じられてきたであろう配転命令の絶対的な効力は、むしろ逆に一旦は疑ってかかってみてもよいものなのかもしれないとわかる。少なくとも、工場の前嶋はデザイナーだったし、増田は経理の専門家だった。彼らがもしこのことを知っていたら、当時の配転命令に異議を唱えることができたかもしれない。知らなかった方が悪いのか？

報せない方が悪いのか？ もし就業規則が定められたルール通り、誰もが閲覧できるようにになっていたとしたら？ いや、たぶん両方を知らないとだめなんだと結論付けた。

その時ふと、残業手当を放棄させるような歪んだ教育を受けてきたという白川と本田の話が頭をよぎった。そもそも浅倉部長の人事政策そのものが、法律に照らしたらアウトかもしれないと気付いた。そんな考えを読んだように、父が言った。

「どうやらお前だけに限った問題ではなさそうだな。明日、また頑張ってみろ」

並木は頷いた。父も頷きを返した。その時、父は何かを思い出したように尋ねた。

「そういえば、お前の座席の写真は撮ってあるのか？」

「いや、そんなこと、思いつかなかった」

「じゃあ、明日から写真を撮っておけ。それから、今までのことと明日からの出来事を時系列に沿って可能な限りメモしておけ。日付と事実をできるだけ正確に。日記をつけると思えばいい。ええと、それから、お前はICレコーダーを持っているか？」

「持っていないよ。それは会議なんかでテーブルの上に置いて、議事録代わりに録音する時に使うような、あの小さなレコーダーのことかい？」

「まあそんなものだが、間違ってもあの机の上には置くなよ。マイ

ク部分が外を向くようにしてポケットに入れるんだ。ICレコーダーのいいところは小さくて目立たないことと長時間録音できることだ。内蔵メモリーに録音するものなら百時間くらい録音できるものもあるし、こまめに抜き差しできるようなメモリーカードに録れるものもある。それだとカセットテープのように入れ替えながら使える。お前が使いやすいものがいいだろうが、三十時間くらいは録音できる方がいい。毎日一時間録音するとしても一箇月はそのまま使えるだろうから。時々カセットテープに落とせば、また繰り返し録音できる。しかし、なんだろうな。しばらく前なら労働組合が強くて、こんなことはまずさせなかつたんだが。親としてはこれ以上こんなことが続いて欲しくないな」

「労働組合？」

「ああ、企業や産業ごとに、労働者で組織する団体だ。お前の会社にはないんだよな。法律には労使対等という原則があつてな、組合員が会社から不利益に扱われたなんていうと、それこそ労働組合が黙っていなかつたものさ。今では時代に合わなくなつたとか何とか言われて元気がないようだけど、こんな廃れた世の中だからこそ、逆に必要な気がするんだが」

「最近では、労働組合はなくなつたのかい？」

「そんなことはないんだが、かつての勢いは影を潜めたように見えるな。会社内に労働組合がないところが増えた反面、会社や業界に関係なく個人で加入できる場所が出てきたようだよ。もっとも大企業となると、今でも一つの社内にくつつもの組合を抱えたりしているが。まあ、その話はもういいだろう」

それから父は少し黙って何かを考えているようだったが、やがて穏やかに語りかけた。

「ところで有給休暇は残っていないのか？」

「いや、ほとんど丸々残っているよ」

「だったら明日は午前中を休んで、ICレコーダーとカメラを調達してきたらどうだ？ それを持って、昼休みの少し前に着くように

出勤したらいいだろう」

その案について短く考えたが、ほどなく並木は答えた。

「どうだろうな。有給休暇はなかなか認めてもらえないんだ。それに、理由は何と書いたらいい？」

父は、顔にはつきりと驚きを浮かべた。

「おいおい、有給休暇には、認めるも認めないもないだろう。理由だって必要ないんだぞ」

今度は並木が驚いた。その様子に、父はやれやれというように首を振りながら言った。

「お前だけじゃないのだろうが、若い人はもう少し働くことについて学んだ方がいいようだな。いいか、有給休暇は、原則として取りたい時に取れるんだ。それに対して会社には、時季変更権といって、いま休まれると業務が機能しないから別の日に振り替えてくれと言ふことしか認められていない。しかも、単に忙しいとか人が少ないというのはだめなんだ。客観的に見て、その人がいま休暇を取ると会社の運営に大いに響くという場合にだけ、この権利行使か認められる。働く者が人並みにリフレッシュしたいと言えば、遊びに行こうが昼寝をしようが、会社は有給休暇を取らせなくてはならないんだ」

やがて並木は気が抜けたように頷いた。それを見て、父が話を締め括った。

「もう寝た方がいいぞ。明日は、まず必要なものを買ってこい。さつき話したカメラだが、日付が入る使い切りのやつがある。日付は外からいじれないから、それがいいだろう。ICレコーダーは種類が多いから、店頭でよく見てみる。お前はそれを手に入れてから会社に行けばいい。昼休みでみんなが出払ってしまえば、写真も撮れるしICレコーダーも準備できる。それに事務所が空だったら就業規則も探せるだろう」

明日、並木がやらねばならないことは決まった。それが明確になった今、夜が明けるまで可能なだけ長く眠ることが次の課題となっ

た。明日の朝は少しだけ寝坊させてもらおうと思った。

翌日、並木が工場に着いたのはちょうど昼休みに入ったところで、辺りには人けがなく、トラックヤードにはシートシャツターが降りていた。

座席に着くと、身を屈めてカメラとICレコーダーを黒い鞆から取り出した。そのままICレコーダーをポケットに滑り込ませ、いつでもスイッチを入り切りできるように数回練習した。次にカメラを取り出し、シートシャツターを背にして机と椅子の写真を撮った。それが済むと今度は椅子の後ろに回り込み、床に固定されたボルトの辺りを何枚か写した。それからシートシャツターを上げて追加の写真を撮ろうとした時、綱島街道から一台のライトバンがこちらに入ってきたのが見えた。

車は並木の目の前で停まり、運転席から寺下舞貢てらした まいこが降りてきた。彼は定年を過ぎてから、契約社員として二年前にエア・アート社にやってきた。それからはずっと社内連絡便の運転手をしている。浅黒い褐色の肌は健康的に見え、グレーに近い白髪を伸ばして後ろで束ねている。いつ見かけてもニコニコしていて、目元には柔和な性格が、口元には茶目っ気といたずらっぽさが浮かぶ印象的な表情の持ち主だ。一風変わったこの名前はハイカラという言葉が流行った時代を生きた彼の祖父から授かったそうだ。本人もこの名前を気に入っていて、周りの人たちも親しみをこめてマイクさんと呼んでいた。

「居てくれてよかったよ。道路がえらい混みようで、予定の時間から随分と遅くなってしまったよ」

寺下はそう言って荷台からボックスティシューほどの大きさのものを取り出して並木に手渡した。受け取ってみると、それは伝票らしき紙を巻き、上から輪ゴムで一つにまとめたエフレ・フォー・ペットの箱入り製品三個の束だった。

「マイクさん、これは？」

「物流から工場への返品さ。お客の注文に合わせてピッキングして出荷箱に入れる段になると、時々シュリンクが破れたり化粧箱の隅をへこましたりしたものが出るのさ。あんたが以前いた顧客サービス経由の返品は品質管理部行きなんだけど、物流からののは中身に問題は無いから工場の出荷場へ戻すことになってるんだ」

並木の左手がそれを受け取った時、寺下が右の手に目をやった。

「カメラなんて、どうたんだい？」

はっとして、並木は反射的に右手を後ろに回した。その様子に寺下はいたずらっぽく微笑んだ。

「あんたが何をしようとも、このマイクさんには関係ないさ。安心しなよ」

ばつが悪くなり、笑みを返すことで、今のとっさの行動に悪意がないことが伝わってくれるように願った。

「いいさ、気にするな。できることがあれば、俺は内緒で手伝うぞ」
ちよつと迷ったが、並木は寺下に写真を撮ってほしいと頼むことに決めた。そうすれば自分が座った姿を外から写真に収めることができる。

「なんだ、そんなことか。でもこの状況は、とてもじゃないが記念写真には程遠いようだな。あんたは写真に収まるのは嫌じゃないのか？」

並木はためらった後、沈んだ声で答えた。

「それはそうです。嫌です。この前なんて、向こうの歩道に中学生が集って携帯のカメラで撮られました」

寺下は豪快な笑い声を上げた。

「そいつら、やるじゃないか。もし今度また来るようだったら、あんたはポーズのリクエストに応えてやらないといかんぞ」

そう言つて寺下は身体をねじつてボディビルダーのようにポーズを決めて見せた。並木は思わず顔がほころんだ。二人は笑いながら握手を交わした。

「さあ、撮つてやるぞ。今から少しの間だけは笑うなよ」

寺下は椅子に並木を座らせてその背後に立ち、開け放されたシートシャツターの向こうの景色と並木の背中が共に写るようにカメラのシャッターを押した。次に外に出て建物に向き、並木を正面から捉えるように構えてもう一度シャッターをきった。

「また明日も撮ってやるよ。じゃあな」

そういい残して寺下はライトバンに乗り込んだ。

並木は受け取った返品荷物を手に事務所へ上がっていった。みんなは食堂にいて、部屋には中村工場長だけがいた。持ってきた返品を差し出すとすると中村は、伝票を外して経理担当の増田の机の上に置いて、品物はそのままトラックヤードの柵の一番下の箱に入れてくれと言った。

「その箱には ハイキ って書いてあるからわかると思う。夕方にはパートさんたちが漁りに来てあらかた持っていつてしまっけどな」「廃棄なんですか？」

「ああ。物流からの戻りというのは、外箱以外は無事なのだが、中のものを新しい化粧箱に入れて直して再出荷するという訳にもいかないのでな。こつちで製造してから日が経ってなければそれでもいいのだが、物流部がそんなに気を遣ってくれることはまずないんだよ。いつだって気まぐれに戻してくるから、返品の中に新しい日付のものも混じっていることなんて滅多にありやしない。それでもよければお前さんがこのまま持って帰ってもいいぞ」

並木は増田の机の前に立ち、輪ゴムを外して巻いてあった伝票を広げた。覆いがなくなると、その下に隠れていた化粧箱の裏面の印字が見えるようになった。次の瞬間、並木ははっとして、首筋を興奮が一気に駆け上がった。

そこには見覚えのあるロット番号があった。顧客サービス部で毎日、何十枚となく書いたクレーム報告書に記した、あの問題の番号だった。いま手の中にある三個中、二個がまさにそれだった。

急いで伝票を広げて増田の机に置くと、トラックヤードに走って

戻った。そこで改めて印字を見やる。間違いない。並木はハイキ箱の前を素通りして、そのまま今朝持つてきた黒い鞆に品物をそっと滑り込ませた。

壁の時計を見上げると、昼休みはまだ残りが二十分ある。もう一度事務所に戻った。中村は遅い昼食を取ろうと席を立つところだった。

「就業規則を見たいのですが」

「そのキャビネットの一番下にあるよ。背表紙がついた黒いファイルだ」

「ありがとうございます。ここには備えてあつたんですね」

「ああ。ここは本社からは離れているから、置かせてもらったんだ。向こうじゃ見たことがないかもしれないな。あそこでは人事部長が棚に鍵をかけてしまい込んでいるから。見たい時は都度許可を求めなければならん。それで妙な優越感に浸っているらしいから、困ったもんだ。就業規則は誰でも見られるようにしておかなくてはならないはずなんだがな」

そついうと中村は食堂に向かった。

並木は身を屈めてファイルを取り出した。思っていたよりもずつと薄い。全ページのコピーをとつてもさほど時間はかからないだろう。コピー機には緑のランプが灯っていた。

続く五分少々でコピーは完了した。用紙を拾い上げ手近にあつた封筒に収めた。ファイルを元のキャビネットに戻し、並木はトラックヤードへ向かった。

つい立の横をすり抜け椅子に腰を下ろすと、封筒の口を少し開き、中から紙の上半分だけをつまみ出した。そのままパラパラとめくり、配置転換の箇所を見つけ、その紙だけを取り出して他は封筒に戻した。

その一枚にじっと見入る。短いくだりを二度三度と読み返すが、昨夜父のパソコンで見たものとはほぼ同じに見える。その前後をざっ

と見て、別の項目に目を移す。こちらはややうる覚えだったが、それでもやはり昨夜見たひな形と同じように見えた。

エア・アート社の就業規則は、このひな形をそのまま使っているのではないかと訝った。昨夜目にしたサイトでは、ワープロソフトの形式でダウンロードできると書いてあったのだ。他にも似たようなサービスを提供しているところが、きつといくつもあるのだろう。ほとんど誰にも閲覧させることなく、ただ体裁を整えておくだけならそれで充分なのかもしれないと思った。

仮にそうだとすると、汎用的な文言のままであるということは、この就業規則は重要な細部については何も書いていないはずであると気付いた。配転命令の業務上の必要性について問い質してみるのもやぶさかではなさそうだと思った。これは突破口になるかもしれない。並木は興奮に身を震わせた。

夕方、並木はICレコーダーのスイッチにいつでも手を伸ばせるようにして浅倉人事部長を待っていた。ここに来て以来、初めて浅倉を待ち受けるという気分になった自分に驚いた。

しばらくして背中越しに、聞き覚えのあるかすれた声が聞こえた。来た！ 並木はICレコーダーのスイッチを入れた。

いつものように二階の会議室へ向かう。浅倉はトラックヤードに並木を座らせるのは構わなくても自分がそこに居るのは嫌なようだ。会議室の扉がスライドして閉まった。

腰を下ろすと、並木は前方に身を乗り出した。今回はこちらが攻撃をしかける番だった。浅倉がマスクと眼鏡を外したのを見てから、つとめてゆったりとした口調で切り出した。

「就業規則を読みました」

並木がそう言うと、浅倉の手が止まった。並木が言葉を継ぐ。

「配置転換の項を読みました。それから労働基準法も調べてきました」

この時、浅倉の両方の眉が同時に上がり、目が瞬時に一回り大き

くなつたように見えた。虚を衝かれた証だ。どうやらいい当たりを飛ばしたようだと言った。並木は押ししてみようと思った。

「それによれば、こんな一方的な配転は認められないという例がありました。それは、これが私だけの問題ではないということを示しています。社内ではあちこちで元専門職だった人が配転を命じられて、まるで畑違いの業務をあてがわれています。でも、職場や職務内容が著しく変わったり採用条件と異なる配転は無効だと書かれていました。他にも、配転先がその人にとって耐えられないと予測される場合や不利益な扱いを受けた場合も同様に、配転は無効になるんですよ。そして何より、配転の必要性や業務上の必要性が明瞭に説明されていなかったり、もしくはそれが不合理なものであれば配転はやはり無効なんです。それなのに就業規則には、業務上必要がある場合に配転を命じることがある」としか書かれていません。

「エア・アート社の就業規則は、まるでどこか別のところからひな形を借りてきて、そっくりそのまま使っているかのようだ。まあそれはともかく、そちらにはここでいう業務上の必要性をきちんと言明する義務があります。それができないなら、私と、他に希望する人がいればその人を、元の部門に戻してください」

「ここまで言つて並木は黙り、今の要求を浅倉に浸透させた。浅倉は真つ赤を通り越してどす黒い顔色になっている。怒りをこらえながら、どう切り返したらいいものか考えを巡らせているようだ。うつむき加減ながら、眼球が忙しく動いている様子がわかる。

「ようやく浅倉は搾り出すように言った。

「我々はちゃんと我が社のルールに則つてやっている。不備はない。念のために訊きただけだが、君はその話をどこから訊いてきた？」

並木は今の問いが信じられないというように僅かに首を横に振つて見せた。それから、至極当たり前のことを確認するかのようによつくりと言った。

「どこからもなにも、こんなものはどこにだって載っていますよ。なにしろ法律や判例の話ですから。図書館にだってインターネット

トにだって、それからそういう目で眺めれば新聞にだって」

ここで短く間を置き、浅倉の目を真っ直ぐに見据えた。そしてこう続けた。

「だから誰もがその気になれば、自分の権利を知ることができるということですよ」

並木は、この時浅倉の中で何かがはじける音が聞こえたと思った。浅倉は目の端を吊り上げて並木をねめつけ、深く唸るように言った。「何様のつもりだ。元の部門に戻せだど？ 要求ばかりするんだな。もっとも君に言わせればそれを提案というんだろつが。だがそれが何だろつと、もうどうだつていい。はつきり言うが、君は黙つてこちらに従うしか選択肢はないんだ。それが会社であり組織というものだ。弱いものが強がってみせるのは見苦しいんだよ。はつきり言うぞ、本当にもう辞めてしまえ！ 君は手渡された誓約書に署名して我が社を去るんだ。そしてこの先ずつと口をつぐんで過ぐす。あの誓約書に従つてな」

「そんな横暴な。法律に反しないということは、会社にとって最低限の社会的責任のはずでしょう」

「うるさい。本当にうるさいな、君は。はつきり言うが、ここはエア・アート社だ。だからここは治外法権なんだよ。はつきり言つて、この国の法律なんて関係ない。現実に関係ない。ここにまで及ぶことはないんだから。いいか、よく覚えておけ」

浅倉は興奮を抑えられないといった様子で立ち上がり、この前と同じように椅子の脚を勢いよく蹴飛ばした。転がった椅子を跨ぎ越してスライド扉に向かった。

「すぐ戻るから、そこで待っている。こっちからも話がある」
そう言い残して浅倉は、怒りをこめて扉を勢いよく開けて出て行った。

並木は心の中にこみ上げる興奮と怒りを何とか抑えようとした。ようやく少し落ち着くと、先ほどのやり取りに考えを集中することにした。

冒頭、こちらの指摘に浅倉はドキツとしたようだった。痛いところを突かれたのだ。こちらからの話し方は、そんなに悪くはなかったはずだ。ある程度のダメージを受けた証拠に、浅倉は頭を冷やしに一旦退室したではないか。

そこから後はどうだ。そういえば、浅倉の口調がどこか普段と違っていたような気がする。何か引つかかる。もう一度やりとりを正確に思い返そうとした。するとふと、それが何であるのかわかった。そういえば、浅倉は はっきり言うとか 本当にとか、過度に強調するような表現を何度も用いた。それは、自信がない時にそれを補うべく、つい口をついてしまう言葉であると、並木は顧客サービス部での経験から知っていた。

浅倉が口にした 法律なんて関係ない という啖呵が気にかかった。だがそれよりも、その根拠が ここはエア・アート社だ ということの方が驚くに値した。

その時、開け放しになっていたスライド扉から靴音とタバコの臭いがぬつと入ってきた。

「さあ、再開しようじゃないか」

浅倉はむせ返るような息を並木に吐きつけながら話し始めた。

「さっきの話だが、そんなに言うなら就業規則はすぐに変更できる。問題のないようにする。まずはそれでいいな」

並木は頷くしかなかった。浅倉は続けた。

「次はこっちの番だ」

そう言っつて鞆に手を突っ込むと、クリアファイルを取り出して並木の方へと放った。拾い上げてそれを眺めた並木は凍りついた。浅倉の口の端がゆっくり上がり、例の薄ら笑いが浮かんだ。

「そういうことだ。明日にはここに挨拶に来させる」

それだけ告げると浅倉は鞆を持ち上げて席を立った。扉のところまで振り返って並木の様子を確かめると、今度はスライド扉を静かに閉めて出て行った。

並木は指一つ動かすことができなかつた。やがて最後の力も抜け、

クリアファイルが手からずりりと離れて床に落ちた。上になった面が蛍光灯の光を力なく反射してファイルの表面が歪んで見えた。その下には、異動通知というタイトルと白川の名前が書かれた紙が挟んであった。

四

並木は電話の音で目を開けた。動こうとすると毛布が身体に絡まった。何とか立ち上がり、電話を探した。見慣れたスライド扉の横の壁にかかった電話機に手を伸ばす。受話器越しに男の声が話しかけてきた。

「警備会社ですが、十二時を回ってもセキュティが作動しなかったので確認の電話をしています。まだ業務中ですか？」

そういえば工場長から以前聞いたことがある。深夜までセキュリティがかからないと警備会社が確認の電話をしてくることになっており、電話にでない場合は現地に警備員が飛んでくる契約だった。

「はい。こちらから連絡しなくてすみません。今日は徹夜作業になりそうなんです。後はこちらでやりますから」
並木はとっさに答えた。

「わかりました。ご苦労様です」

そう言っただけで電話は切れた。並木は頭を左右に大きく振って目を覚まそうとした。部屋を見回すと、どうやらそのまま会議室の椅子で眠ってしまったようだと思った。それとも気を失っていたのだろうかと言った。

誰かが毛布をかけてくれていた。クリアファイルは床から拾われて、紙の印刷面が下になるよう伏せてテーブルに置かれていた。並木は顔を洗おうと、トイレに向かった。

次の朝は重苦しく始まった。並木はストレスと寝不足からふらつ

く身体で事務室に立っていた。みんなの前には中村工場長と白川がいた。並木は彼女を見ていたが、彼女は並木を見ようとはしなかった。

白川の挨拶が済んで散会すると、並木は白川の元へ歩み寄った。白川は黙っていたが、うつむき加減でその頬がかすかに震えていた。やがて白川が顔を上げた。その口元に力のない笑みを浮かべたが、目には厳しさが宿っている。そして並木に向かってささやくように言った。

「残業をつけてはいけませんですって」

並木は愕然とした。膝がくず折れ、その場にへたり込んだ。並木はこれが自分に責任があることだと思い知った。顧客サービス部でのあの日、残業をつけるようにと奨めなければ、こんなことにはならなかったはずだったのだ。

白川は、今日は挨拶だけですからと言って帰っていった。

並木はまるで魂が抜けてしまったように、その場を動けないでいた。膝について石像のように固まってしまった身体を、意識だけが離れて天井から見下ろしているような奇妙な感覚に陥った。天井の奥の闇が、かろうじて残った意識までも吸い寄せ、今にも呑み込もうとしているように感じた。

不意に誰かに腕をつかまれ、意識を引き戻された。ゆっくり重い頭を持ち上げると、中村が並木の腕を支えて立っていた。

「事情は知らんが、きつとお前さんは悪くない」

並木は頷くように首を垂れると、そのまま意識を失った。

気がつくと、並木は食堂の隅にひっそりとつくられた八畳程度の和室に寝かされていた。身体には昨夜と同じ毛布がかけられていた。並木は自力で身体を起こすことができなかった。力がまるで入らない。天井を見上げて、再び意識が身体を離れてそこへ上っていないようにと願った。

「大丈夫ですか？」

その呼びかけに、顔は上を向いたまま、目を動かして声のする方を見た。ふすまを遠慮がちに少し開けて、武内が心配そうにこちらを見ていた。

「すまなかつたね」

消え入りそうな声で並木はそう答えた。

「びつくりしましたよ。相当疲れていますね。無理もありませんよ。あんな席に座らせられたら誰だって精神的に参りますし、このころまたいろいろとありましたからね」

「今、何時だい？」

「もうすぐ十時です」

よく覚えていないが、意識を失ってから三十分ほどといったところか。

「ここに運んでくれたのは？」

「工場長と私です。でも気にしないでください」

「ありがとう。すまないが、起き上がるのに手を貸してくれないか」「無理しない方がいいですよ」

「すまないね、頼むよ」

並木は上体を起こしてもらって、畳の上に座った。

「落ち着いたら事務所に顔を出してあげてください。工場長が心配していました。でも無理して動くのはやめてくださいね。私はもういかないと」

壁の時計の方をちらりと見やって足早に出ていく武内の後姿を見送り、自分はみんなに迷惑をかけているのだと悟った。

何もかも自分ひとりが原因で起こったことだと、つい考えてしまう。浅倉に黙って従っていれば、白川に残業のことなど奨めなければ、際限なく自分を責めた。あの時、クレームをただ事務的に処理していれば……そう考えてみて、はつとした。果たしてそうなのか？ そうしてしまったら、あのかわいそうな犬は？ あの夫人の気持ちは？ このままで、この先そんなことはもう起こらないといえるのか？ 並木は目を大きく見開いた。

身体に少し力が戻ってきたような気がした。ふすまの横の細い柱をつかみ、よろよると立ち上がった。

並木が事務所へ入っていくと、中村が気付いて椅子から立った。

「大丈夫か？ 無理をするな」

中村はスライド扉のすぐ横のソファに腰かけるよう並木に手振りで見し、自分もそちらへやってきた。並木が頭を下げた。

「すみませんでした」

「それは気にするな。それより今日はもう帰って、医者に診てもらったらどうだ？ 無理もないのだが、精神的にやられているように見える。このところ、どこか身体でおかしなところはなかったのか？」

「いや、自覚できるものは何も。しいて言えば、食欲がないのと、時々目が回るような気がするのと、吐き気がたまに」

「それだけあれば立派なものだよ」

「医者といつても、頭が痛い訳でもないし、熱がある訳でもないし。どこに行ったらいいのかわからないですよ」

「確かなことは言えんが、自律神経をやられたんじゃないか？ 現代人は多かれ少なかれそこをやられとるらしいが、お前さんの場合はストレスの度合いが普通じゃなかったからな。心療内科って、聞いたことないか？」

「いいえ、それはなんですか？」

並木は聞き返した。

「まあ精神科みたいなものだと思うが、あちこちで何とかメンタルクリニックとかいう看板を見かけるんだ。ストレス社会になって、近頃じゃこの手が増えたんだな。駅の近くでも見たような気がするが」

「そうなんですか。わかりました、行ってみます」

「そうだな。それから、余計なことかもしれないが、役所にも行ってみたらどうかかな？」

「役所、ですか？」

「ああ、役所といつても労働基準監督署だよ。労働局の出先みたいなものだ。よくは知らないのだが、この前お前さんが就業規則を見せてくれと言った時に、もしかしたら相談に乗ってくれるんじゃないかと思っただ。お前さんはあんな席に座らされているし、気の毒だが私がかどうかしてやることはできそうにない」

そういえば父が何か問題が起きたら管轄の労働基準監督署がチエツクすることになっていると言っていたのを思い出した。

「ありがとうございます。そっちも当たってみます。明日、有給休暇をとつてもいいですか？」

中村がゆっくりと頷いた。

「いい方に向くことを祈つとるよ」

工場を後にした並木はとりあえず一旦実家に戻ることにした。武蔵小杉の駅を降り、実家に向かった。

少し歩いたところで赤信号に立ち止まり、ふと顔を上げると通り向こうの小さなビルの前の看板が目に入った。目を凝らすと、そこには濃い緑色の字で 小杉 心の診療所 とあった。

信号が変わるのを待つて通りを渡り近付いてよく見ると、緑色の字の下にはそれよりも小さな黒い字で神経科・精神科・心療内科と書いてある。診療時間に目をやる。今日は木曜日だ。診察時間は昼までとなっている。

腕時計を確かめると、あと三十分あるのがわかった。それ以上考えることなく、ビルの中に入り、エレベーターのボタンを押した。

四階でエレベーターのドアが開くと、そこには短い廊下とその突き当たりに白い木の扉があった。恐る恐る扉を押し開けると、待合室には二つの長椅子があつて六人ほどの患者が名前を呼ばれるのを待つていた。他のスペースにはいくつもの背の高い観葉植物が置かれ、緑の葉を広げていた。右手のカウンターから女性の声が呼びかけた。

「初めての方ですか？」

「ええ」

「申し訳ありませんが、診察は予約制になっておりまして、初めての方は二箇月ほどお待ちいただいているんです」

「そんなに、ですか……」

「申し訳ありませんが」

カウンターの女性がそう言いかけた時、その向こうの扉が開いて、医者らしき一人の男性が出てきた。こちらに気付き、またかという顔をしている。並木はもう一度頼んでみることにした。

「体調が悪くて、会社から診てもらって来いと言われたんです。このまま待ちますので、何とかお願いできませんか」

カウンターの女性は渋った。判断を仰ごうと後ろを振り返る。男はやれやれというように肩をすくめてから小さく頷いた。

「わかりました。でもかなり待つことになりますよ」

「それでも結構です。ありがとうございます」

並木は目の前の女性にというより、奥の男性に向かって礼を言った。男は黙ってカルテを拾い上げると扉の向こうへと姿を消した。

カウンターの女性は次の患者を呼び、並木は長椅子に腰を下ろした。それからの四時間、並木は待ち続けた。この手の病院が一人の患者にかける診察時間の長さに驚いた。前の患者が呼ばれて診察室に入って行ってからもう一時間ほどになる。待合室にはうつむいたまま座って順番を待っている患者がまだ何人もいた。これで午後の診察がある日はどうなるんだろうかと訝った。それでも観葉植物のおかげなのか、ビルの一室にしては室内の空気は幾分爽やかに感じられ、気分はいつもより落ち着いていた。

長椅子の横には何冊もの週刊誌が置かれている。とても読む気にはなれなかったが、時間を持て余し、ややあつてそのうちの一つに手を伸ばした。ぱらぱらとめくる程度に眺めていたが、ほどなく全部に目を通し終えてしまった。ここに座って最初に手にした雑誌に三度目にとりかかろうとした時によやく名前を呼ばれた。

診察室の中には先ほどの男が座っていた。胸にはネームカードが

下がっており、 医師 小杉崇至^{こすぎたかし} と書かれている。小柄で恰幅がよい体つきで、歳は四十代半ばといったところだ。四角い眼鏡の奥でやや神経質そうな目がこちらを値踏みするように見ている。どうやら、この部屋の中までは観葉植物の恩恵が届いていないようだ。並木は思った。医師はそれからの一時間をかけて並木の話聞き、多くの質問をした。

「じゃあ、ちよつとテストをしましょう」

そう言つて一枚の紙を並木に手渡した。そこには二十項目ほどの質問と、それぞれに四つの選択肢があつた。医師は、あまり考えずに記入するようにと指示した。

そこには一見すると疲れたサラリーマンならほとんどの人がいつもとかしばしばや時々 に丸をつけるだろうと思われる質問が多く並んでいた。 仕事は几帳面な方だ、 判断に迷うことがある、 疲労感がある、 気分が落ち込むことがある、 食欲があまりない、 夜はよく眠れない、 便秘や下痢がある、 些細なことで泣きたくなることがある、 将来に希望が持てない 等々。またその中には少々極端と思える質問もあつた。自分は役に立たない人間だ、 死んだ方がいいのにと思ふことがある など。これには いいえ と答えた。

記入を終えて紙を返すと、医師はなにやら計算を始めた。集計を終えると彼は並木の目をしばらくじつと見ていたが、やがて意外なほどそつげなく言つた。

「うつ病ですね」

カウンターに戻り三種類の薬を渡され、次の予約を入れられて、並木の初めての診察が終わつた。エレベーターを降りると、外は薄暗くなつていた。再び実家に向かいとぼとぼ歩いた。うつ病……

・ 並木にはあまりにもショックな響きだつた。それがどんな病気だか詳しくはまだ知らないが、それでも病名の意味はわかつた。自律神経がちよつとやられたどころではなさそうだ。これからもつと悪化したら、自分はいつたいたいどうなるのだろうか？ 先ほどのテスト

の設問を思い出して寒気を感じた。

実家に辿り着くと、そのまま布団にもぐりこんだ。母が心配そうに覗き込んだ。並木の背中中は小刻みに震えていた。

それから一時間ほどした頃だろうか、父の声がして目を覚ました。少しうとうとしていたようだ。そのおかげで少しだけ気分がましになっていった。頭もさつきよりはすつきりしてきたが、身体は相変わらず重い。ゆっくり起き上がり、キッチンへ向かった。

並木はダイニングテーブルを挟んで両親と向かい合って座った。そして二人に何があったかを話した。父と母はこの前ここに来た時と同じ反応をし、並木も涙を流した。そして父が言った。

「明日は休みがとれてよかったな。大変だろうが、その工場長が言うように労働基準監督署に行ってみたらどうだ？ お前の工場は綱島だから、新横浜の監督署だな」

「でも人事部は新山下の本社にあるんだ。新横浜じゃないよ」

「いや、勤務する事業所の所在地を管轄する監督署が担当なんだ。お前の場合は工場が事業所ということになる。明日監督署に行ったら担当の監督官によく話してこい。それから、すべては本社の人事部が直々に行ったことで工場長はむしろ板挟みなんだということも話した方がいい。監督署が勧告や命令を出したら矛先は管轄内の工場に向けられかねない。工場長はそれも覚悟の上でお前に奨めてくれたのかもしれない。そうだとしたら、たいしたもんだよ」

それから三人は黙り、静かに時が過ぎた。やがて無言のまま部屋に戻ると、医者から出された薬を飲んで再び布団にくるまった。

その翌朝は、目が覚めても身体が動かなかった。自分で上体を起こすこともできない。なかなか起きてこないのを心配して母が様子を見に来た。

「なんだ、目が覚めているなら起きてくればいいじゃないの」

「いや、母さん、起きられないんだ。引っ張ってくれないか」

「えっ」

驚く母にもう一度頼んで、並木は腕をもって引き起こしてもらった。

「どうしたの？ 大丈夫なの？」

その表情から、母がこの状況にショックを受け、戸惑っていることがわかった。並木はうつむき加減に首を振った。

「自分でもわからないんだ」

その後、午前中は立って歩くのもおっくうだった。外に出る気力はなく、そのまま窓際の椅子にもたれてぼうつとして時間を過ごした。

昼近くになって、雲が切れて窓から陽が差し込んできた。レースのカーテン越しに光が顔を照らした。しばらくそのまま、心地よいぬくもりに包まれた。やがて大きな雲がやってきて太陽を隠し、明かりのシャワーは止まった。

少し身体に力が入るようになってきたのを感じた。思い切って立ち上がり、服を着替えた。並木は心配する母をなだめて新横浜に向かった。

菊名で電車を乗り継ぎ、新横浜に降り立った。環状二号に沿って歩き、太尾新道を左に折れて更に進んだ。道は平坦だったが労働基準監督署までの道のりは、並木には遠く長く感じられた。

エントランスをくぐり、エレベーターに向かう。横の壁には公衆電話が据え付けてあり、その隣の透明な箱にはタクシーのフリーダイヤルが刷られたメモ紙の束が雑多に挿してあるのが見えた。往路の道中にうんざりしていた並木は、帰りはタクシーを頼んだ方がいいだろうかと考えた。しかしそれほどの距離があった訳ではないこともまたわかっていった。

余計に重くなったように感じる足を押し出すようにして、三階でエレベーターを降りると、正面のガラス扉を押し開けた。

訪問に応じたのは、程なく定年を迎えるであろう年格好の男性だった。その監督官は眼鏡を少し下げて怪訝そうに並木を見た。

並木は自分の状況を丁寧の説明した。父の助言に従い、人事部の

ことも詳しく話した。話を終えると、監督官はそれを待つていたかのように即座に答えた。

「話はわかりました。でもね、こちらでは何もできないのですよ」その言葉に、並木は耳を疑った。

「どうしてですか？ 一方的な配置転換命令を下されて、トラックヤードに座って一日中ただ本を読んでいるように命じられたばかりでなく、外を通る人からブックマンとあざけり笑われ、その上うつ病だと診断されているんですよ。業務上の必要性についても、一向に説明はありません。それに誓約書を書けと迫られて。これは辞めさせようとしている証拠じゃありませんか」

「でもあなたは、まだ首になっていないのでしょうか？」

監督官は、何か疑いようなない当然のことでも確認するかのような調子で続けた。

「配置転換命令っていうのは、発せられたら黙って従うものですよ。業務上の合理的な理由なんて、もし我々が問い質したとしてもうまく説明できない会社の方が珍しい。現にあなたは毎日会社にも行くし、どんな景色が見えるにせよちゃんと座席も与えてもらっているじゃありませんか。ここには首になって明日からどうしようっていう人が大勢来るんですよ。配置転換やうつ病がなんだって言うんですか？ うつ病なら労災を請求してみますか？ 近頃は随分認可が下りるようにはなってきましたが、しかしそれはなかなか難しいことですよ。その覚悟があるなら、ご自由にどうぞ。それからあなたが持つてきた誓約書だかなんだかだって、退職届はこれとは別の書類なんでしょう？ この余白にそう書いてありますよ。誓約書を書けと言われるのと退職届にサインしろと言われるのは違うんですよ。これだけじゃまだ、退職勧奨とは言えないと思いますけどね。まあなんであれ、私に言わせれば、あなたの訴えは甘えですよ。さて、他には何か？」

そう言うと、監督官は啞然とする並木から視線を外した。首を伸ばして、誰もいない並木の背後向かって声を張り上げた。

「はい、次の方」

もう用事は済んだとばかりに、老監督官は席を立つて奥の方へと引つ込んだ。それと入れ替わりに別の若い監督官が苛立たしげに立ち上がり、並木の横をすり抜けて扉の外へ出て行った。並木はしばらくその場を動くことができなかった。

ようやく並木は立ち上がったが、まだ諦めきれないように周囲を何度も見回した。しかし、だれもいなかった。仕方なく扉を引き開けて廊下へ出た。エレベーターの横手には階段があり、下へ伸びた傾斜はとても急であるように思えた。これを下りてしまつたら、もう二度と上がって来られないような気がした。もう一度先ほど出てきたばかりのガラス扉を振り返つてから、並木はゆつくりと階段を下りた。

エントランスから外に出ると、建物の横で先ほど席を立つて出て行った若い監督官がタバコをふかしていた。空いたほうの手には小さな紙片をぶらぶらさせている。目が合うとその男はタバコを建物の壁に押し付けてもみ消し、こちらに歩いてきた。横をすれ違おうとして立ち止まり、並木の肩をぽんと軽く叩いた。

「悪かつたな。やつは窓際なんだ。監督官が全部あんなやつだとは思わないでほしい。ただ、役人つていうのにはどうにも嫌な指針があつて、九十九パーセント黒だと思つても残りの一パーセントがグレーだと全部がグレーになつちまう。あいつらじじいに言わせると疑わしきは罰せず と言うんだそうだ。もし百パーセント黒だつたら徹底的にやるものまた役人気質なんだが」

そこまで言うとなんは手に持つていた紙切れを差し出した。黙つたまま並木が受け取ると、もう一度軽く肩を叩いて去つていった。男が建物に消えるのを見送り、並木は受け取つた紙を見下ろした。それはロビーの公衆電話の横にあつたメモ紙だつた。薄く刷られたタクシーのフリーダイヤルの上に、書き殴られた濃くて大きな字が躍つていた。

負けるな！

よろよると実家に辿り着くと並木は真っ直ぐに布団を目指した。

身を硬く丸めて、先ほどの老監督官とのやり取りを頭から追い出そうとした。しかしそうすればするほど、同じ言葉が目の奥で繰り返す響く。甘えだ　その言葉は、どれだけ払いのけても執拗に追いつがってくる。やがてこの言葉がいくつもの立体的な文字となつて現れ、目の前を縦横無尽に駆け巡り始めた。それをなおも必死で振り払おうとした。抗ううちに力尽き、目が回りだした。その回転がどんどん速くなる。もうだめだと思つた時、突如すべての映像と感覚が瞬時に途切れ、すべてを深い暗闇が覆うように呑み込んだ。

やがて近付いてくる足音がおぼろげに聞こえた。ゆっくりと意識が回復してくる。明かりを感じて重いまぶたをゆっくり押し上げてみると、そこには母が立っていた。身体を起こすのを手伝ってもらい、部屋着に着替えた。

キッチンに入っていくと、父がいつものように座って待っていた。並木は椅子を引き出して腰かけたが、口を開くのをためらった。その沈黙を破つたのは母だった。

「少しは眠れたみたいね」
そう言つて母は力なく微笑んだ。

この言葉に心のたかが外れ、沸き返る感情を抑えることができなくなつた。そんな並木を母は黙つて温かく受け止めた。

しばらく後、並木はどうにか落ち着きを取り戻し、黙つて座っている父を見上げた。そして静かに今日の出来事を話し始めた。父は一言も発しないまま耳を傾けていた。

頃合をみて、父が一枚の紙を取り出し、並木に手渡した。

「今日のことは残念だったな、ご苦労さん。今すぐにどうとはならないが、役所に行ったことはきつと無駄にはならないさ。ところで、その紙を見てみる。うちの会社には小さいながらに労働組合があつてな、いろいろと訊きにいったらそれをくれたんだ。ちょうど明日の午後、横浜駅の東口で労働相談会があるんだそうだ。上の団体が

主催するのだが、相談に応えるのは役人じゃなくてお前や父さんと同じ労働者だ。それに労働問題に詳しい弁護士さんも来るそうだ。少なくとも突っぱねるんじゃないで、こっちの目線で相談に乗ってくれるだろう。お前も大変なのはわかっているんだが、どうだ、行ってみないか？」

並木は渡されたばかりの紙を見下ろした。そこには大きな文字でオープン労働相談会 と書かれている。並木はその下の 悩むのはもうやめよう！ という文字に心惹かれた。日時は明日の午後一時から五時までとなっている。明日は土曜日で工場は休みだった。

並木は顔を起こして頷いた。

「父さん、ありがとう。行ってみるよ。今度こそ何か突破口を見つけてくる」

その決然とした言葉の響きに、父は優しい表情で応えた。

土曜日は春色の明るい空が広がるいい天気だった。朝は少し寝坊をさせてもらった。そのおかげで、いくらか気分がよかった。時間をかけてゆつくりとシャワーを浴びて、白いコットンシャツに袖を通した。駅までの道のりは、心地よく薫る午後の風を久しぶりに楽しむことができた。

横浜駅を降り、地下街を真っ直ぐに抜けて会場へと向かった。既に数人の人が簡素な茶色い折り畳み式の長机を挟んで真剣な表情で向き合っていた。昨晚見たのと同じ文字が、きれいに印刷されたポスター大の紙となつて長机の端から垂れ下がっている。ちょうど一人の若い女性が相談を終えて立ち上るところだった。並木はそこに歩み寄り空いたばかりのパイプ椅子に腰かけた。

応対したのは、小柄でスマートな女性だった。三十代の初めくらいで、頬が高く鼻筋の通った小さな顔の中央では、くつきりとした黒い大きな瞳が抜群の存在感を放っていた。その眼光には底光りするような力強さと、優しく包み込むような慈悲の光が共存しているように見えた。彼女は田中です、と名乗った。

それからの十分ほど、並木は促されるままに会社で自分の身に起こったことを要約して話して聞かせた。彼女はとても驚いたようだが、同時に興味を惹かれたようにも見えた。

「そこは魔の座席ね」

そう言ってから後を続けた。

「今日ここに来られて良かったと思います。まずは製品の問題のことより、あなたがその魔の座席から脱出することが先決です。そこに座っていたままでは身体も心ももたないでしょうから。そんなことがまかり通っているということは、そちらの会社には労働組合はないのですね。一般的な意味としてですが、労働組合のことは何か知っていますか？」

「いえ、父から少し聞いたことがあるという程度です」

「そうですね。詳しくは後で知ってもらえればいいのですが、ごく端的に言えば働く仲間で作る団体なんです。最近では職場に組合がないところがあるので、業種業態の枠を越えて個人で自由に加盟できる組合が組織されています。これに加盟すると、法律で守られたいくつかの労働者の権利を行使できるようになります。その代表的なものが団体交渉権で、たとえば組合として会社に対して組合員の不利益な扱いを改善しろと交渉することができるようになります。根底には労使対等という原則があるんです。あなたの選択肢の一つとしては、こうしたことでも可能です」

「そんなことができるのですか？ 知らなかった」

「可能だと思います。ですが、組合には様々なやり方があるって、じやあ明日そちらの会社に交渉に行きましょうという訳にはいかないんです」

並木は少し戸惑ったような表情を浮かべたが、田中はそれを確かめてから先を続けた。

「それには、まず個人加盟できる組合に加入します。そこには他にもたくさん労働問題に取り組む仲間がいます。あなたと同じように精神的な病に悩む人もいます。そこでみんなにあなたの状況を理

解してもらって、あなたは他の人が抱えている問題を理解します。事案ごとに定期的に集って研究し、それに沿ってみんなで考えて手を打っていくんです。その一つが先ほど話した団体交渉ですね。それから、そのためにはあなた自身が労働関連の法律や組合について勉強していく必要があります。これは定期的に勉強会を開いて対応しています」

ここまで聴いて、並木は自分がもう話についていけそうにないと感じた。思わず手を上げて田中の話を制した。

「ちょっと待ってください。組合が大切なものだということはおわかりました。でも今の話としては、その活動を通して私が抱える問題が解決に向かうためには、かなり長い時間が必要になるということですか？」

田中は並木の目をじっと見た。

「確かにさっき言ったように明日や明後日にどのという訳にはいきません。緊急性は勘案しますが、時間はかかります。それはどんな機関や手段でも同じです」

並木はどう答えたらいいものかわからなくなった。それを察して田中が付け加えた。

「今までの話しは組合の一つのやり方であって、あなたの選択肢の一つです。でも一番の正攻法だし、多かれ少なかれ必要になることだと思います。でも別のやり方で、とりあえず手榴弾程度ならそちらの会社に投げ込んでやれるかもしれない」

驚いて並木が顔を起すと、田中が小さく頷いた。

「今日の相談会には労働弁護士も来ています。弁護士の中でも労働者側の立場で問題解決にあたることを得意としている人が。私たちの組合では、そういう人たちと協力することがあるんです。法律家の視点からみたら、何か打てる手があるかもしれない。訊いてみますか？」

並木は大きく深く頷いた。

田中は立ち上がり、首を左右に動かして長机の両側を見渡した。

そして目当ての人物を見つけると、並木を残してそのまま席を離れた。会場の端へと歩いて行き、そこで少しの間立ったまま会話を交わした後、スーツ姿の男性と一緒に戻ってきた。

その男性は並木と同年代かあるいは少し上といった年の頃で、ひよろりと背が高く髪はボサボサで、頬と顎にはところどころに手入れを怠ったとおぼしき無精ひげが伸びていた。紺色のスーツはくたびれていて、強力なスチームアイロンをもってしても歯が立たないであろう深い皺が無数に刻まれている。彼は後ろに畳んで立てかけてあった予備のパイプ椅子を引き寄せて、それを開いて並木の向いに腰を下ろした。

「弁護士まきやまこうだいの牧山宏大です。話は要点だけナナギさんから聞きました。大変でしたね」

「ナナギさん？」

田中が苦笑いを浮かべて説明した。

「私の名前なんです。田中たなか南風。変な名前でしょ。穏やかにそよぐ南風のようにと母がつけてくれたの」

「ぴったりの名前じゃないですか。で、どうしましょうか？」

横槍をいれた牧山のにやけ顔を横目で睨みつけてから田中が続けた。「さつき並木さんに話したんだけど、まずは彼がそのトラックヤードから抜け出して、他の人と同じように何らかの正規の業務に戻るようにしないと。そこに絞って取りかかったらどうかしら」

田中の提案に二人は同意した。

続く十五分ほどを費やして、三人は議論に熱中した。次々と浮かぶ牧山の疑問に並木が手早く短い言葉で答え、事実関係を検討した。しかし、当面とるべき策がまとまるには至らなかった。

気がつくくと、長机の顔ぶれは入れ替わっており、並木の背後には順番を待つ別の人が二人ほど立っていた。田中はこの議論を打ち切り、今はここまでにしましょうと告げた。

「じゃあこの続きは別のところでやることにしましょう。並木さんにはまだ訊かなくてはならないことがたくさんあるわ。牧山先生、

近々のご予定は？」

牧山は手帳を取り出し、難しい顔をしながら何度かページをめくった。

「近い日程がいいですよ。明後日、火曜日の夜はどうですか？」

「私はいいわよ。並木さんは？」

「はい、大丈夫です。何時に何処に行けばいいですか？」

「私は、その日は組合の事務所に用事があつて武蔵小杉に思う。牧山先生の事務所も武蔵小杉だから、その辺りはどう？ 並木さんの会社はどこでしたっけ？ 綱島？」

並木は急いで答えた。

「そうですね。会社は綱島です。でも実家が武蔵小杉にあつて、今日もそこから来ました。武蔵小杉であれば、私も助かります」

「じゃあ決まりね」

三人は火曜日の午後七時に牧山の事務所まで再会する約束をして別れた。家路についた並木の足は、久しぶりに幾分軽く感じられた。

次の日が日曜日だったのがありがたかった。この連日の出来事で溜まった疲労が一気に並木にのしかかった。心身共に困ばいしていた。

前の晩、夜更けにトイレに立った時、廊下には母が父と話している声が漏れていた。母は涙声だった。この前の朝、並木が自分で身体を起こせず、腕をとって引き上げてやらねばならなかったことがよほどショックだったようだ。このところの息子のただならぬ様子に戸惑い、どう接してあげたらよいものかわからないと母は言った。父はそんな母をなだめた。母の言葉と自責の念が並木の胸を深くえぐった。

長い夜を過ごした後、その日はとにかくひたすら身体を休めることに努めた。

やがて窓の外で家々の明かりがぼつりぼつりと灯り始めた頃、並木の携帯電話が鳴った。応じると、それは同期で本社の経理部に勤

める山口一栄やまぐちいちえからだった。

「しばらくぶりだな。工場はどうだ？」

彼は何も知らないのだ。並木はかい摘んで事情を説明した。工場に異動してからの処遇とうつ病の診断、労働基準監督署の対応までなるべく端的に話した。ただし昨日の労働相談会のことは言わないことにした。

「それは知らなかったよ。てっきりうまくやっているのか思っていた」

そう言いながら山口が次の言葉を探しているのが、並木にはわかった。

「なあ、元気だせよ。がんばれよ。うつ病なんてさ、すぐ治るよ。病は気からって言うだろう。要は気の持ちようさ。病気だと思っから余計沈むんだよ。元気だせよ、お前が頑張らなくてどうするんだよ。なあ、ぱつと騒ぎにいこうぜ。酒でも飲んで何曲か歌えば気が晴れると思うぜ」

山口はそれから延々十分ほど一方的に熱弁をふるった。

「今からそつちに迎えに行つてやるから出て来いよ」

並木は絞り出すように答えた。

「ごめん」

「なあ、お前のために言っているんだぞ。がんばれよ、俺はお前の味方だぞ」

山口が言い終わる前に並木は通話を切り、そのまま携帯電話の電源も切った。もうたくさんだと思った。

翌朝、工場に向かうのは容易なことではなかった。途中で何度も立ち止まって道端で休み、停車駅ごとに一旦電車を降りてベンチで休んだ。

始業時間ぎりぎりに工場に辿り着くと、事務所では中村工場長が心配して待っていた。二人は食堂に向かった。コーヒーはいるかと訊かれたが並木は断った。隅の和室に腰を下ろすと、並木は週末の出来事を中村に伝えた。

「そうか、ご苦労さん。労働基準監督署は残念だったな。病院の方はしばらく通うのか？」

並木は仕方なさそうに頷いた。

「まあ無理はするなよ。身体が辛ければ食堂に来ていい。ここは昼時と休憩時間を除けば人がいないからな。何かあれば、医者
の助言だと言えば誰も文句も言えないさ」

そう言つと、中村は並木の肩に軽く片手を置いてから出て行った。

しばらく並木はその場に座っていた。向こうで扉の開く音がした。顔を上げると、白川が入ってきたのが見えた。並木はばつが悪くなり、思わず下を向いた。足音が近付いてきて、並木の前で止まった。顔を上げると、そこには白川が立っていた。

「隣に座っていいですか」

並木は何も言わず、じつと彼女を見上げた。沈黙が流れ、やがて白川が切り出した。

「あの、この前はごめんなさい。私、どうかしていたんです。並木さんは悪くないってわかっていたのに。つい、自分のことばかり考えてしまつて。金曜日ここに来た時に中村工場長から話を聞きました。ほんとにごめんなさい」

並木は黙ったまま、しばらく白川を見つめた。白川は神妙な表情で立ちすくんでいる。並木がゆっくりと頷くと、白川の表情が少し緩んだのがわかった。

再び沈黙が降りた。しかし、今度の静けさは先ほどのものとは異なり、お互いの間の空気が柔らかくなっているのを感じる。白川が口を開いた。

「これからまたよろしくお願いします。工場長によるとこれからしばらくの間、私は午前中が製造ラインで午後が事務所仕事になるんだそうです。その後のことはまだわからないけど、研究所とのやり取りが時々あるからその担当になるかもしれないそうです。実は私、農学系の学部出身なんです。生物や土壌や食品や、そんな分野の化学を勉強してきました。だから入社した時には研究所を希望しました。こんな形で希望した部門に近付けるなんて思わなかったけど。あつ、でも顧客サービス部は楽しかったですよ。電話の受け応えには、勉強してきた知識も活かせました」

白川はそう言っ、はにかんだ表情を浮かべた。そしてやや上を向いて、何気なく天井を見るようにして先を続けた。

「それに、もう自分のことばかり考えるのはやめることにしたんです。なんととってもここはあのF O Cですからね。それにしても墓場とは、ちよつとひどいネーミングですね。でもこれ以上先にはもう流されるところなんてないんだから、体裁も何も、守るものも失うものもない。また機会が巡って来れば、後は行きたいところに行けるでしょ」

それだけ言うと、並木に向いて微笑んだ。今度の笑みには、もはやわだかまりはなかった。並木が右手を差し出すと、白川の白くて細い手がそれを強く握った。

並木は数日ぶりに、悪夢のような座席に戻ってきた。落ち着かない思いで本を広げた。

なんとか読み進めようとするが、本に集中しているのは難しかった

た。ほどなく疲労感を感じ、活字がぼやけて焦点が合わなくなってきた。あきらめて本を閉じ、何か別のことに意識を向けようと考えた。

あれこれと頭に断片のようなものが浮かんではすぐに消えていく。もう一度机を見下ろした時、一つしかない広くて浅い引き出しの間から、紙の端が覗いているのに気がついた。

引き開けてみると、それは就業規則をコピーした紙の一枚で、配置転換の項目が載っていた。それは数日前に事務所でコピーをとり、ここで封筒から一枚だけ取り出して読んだあの紙だった。その時は興奮気味だったので、封筒に戻したつもりだったが入れ損ねて床に落ちたのだろう。親切な誰かが拾って引き出しに挿しておいてくれたに違いない。並木はこのささやかな幸運を喜んだ。そして、それを放さずにつかんでいたいと思った。ごみ箱ではなく、机に戻ってきたこの小さなラツキーを。

その時、ある考えが浮かんだ。実家でこの件を話した時、父は何か言っていた。写真と録音と……そうだ、日記と言っていた。これまでの出来事と、これから起こることを時系列に沿ってメモしておけと言っていた。

並木は手の中にある紙を裏返して机に置くとボールペンを取り出した。その紙に、思い出せる限りの出来事とその日付を書きつけていった。

社長に宛てたメールのところでは不意に手が止まった。しばし眺めて再度書き始めたが、朝礼放送まで書いたところで再び筆が進まなくなつた。今書いたばかりの箇所をじつと見てみる。

九日夜 社長にメール送信

十日夜 返信あり 再度メール送信

その後、現在まで返信なし

十三日 品質管理から新事実

十四日 副社長の朝礼放送

ここまでをもう一度ゆっくり見直してみた。そこから慎重に思い返してみる。何か引つかかる。社長は報告を求めるメールを返してきたのに、どうしてそれから返事が来ないのだろうか？

今度は一つ一つの事柄を更に詳しく再点検してみる。メール送信とチエックは夜になってから事務所のパソコンで行った。その後、土・日の休みを挟んだ。翌週になって、品質管理の丘と話し、新しい事実に行き当たった。きっかけは緊急増産した商品の出荷可否を求めたことだった。翌日はそのトラックヤードにいて、外から学生たちに笑われた。その後、武内たちが気にかけてくれて、前嶋と三人でカセットテープを聴いた。カセットテープ？

十四日の朝礼放送の後にカセットテープと書き加えてみた。その時、見落としていたものを見つけた。その時は気にならなかったが、並木が前嶋たちと聴いたのは、放送されたものを録音したカセットテープの音声だということだった。したがって、実際に放送が行われたのは十四日ではなく、それより以前の別の日だと気付いた。

今まで、顧客サービス部の頃も、並木はいつもリアルタイムでこの放送を聴いていた。毎月、放送の日が決まると全部門にメールで連絡があり、放送の始まる時間に業務が重ならない人は手を休めて聴くことになっていた。顧客サービス部では当番制にっていて、数名の者を残して放送の行われる三十分間は食堂に移動して聴いていた。だから、目の前で回っていたカセットテープのことを忘れ、歪曲されたマチュピチュの話と、それをバベルの塔だと評した前嶋の話だけが印象に残り、今までのように放送を直接聴いたものと錯覚していたのだ。

あの時、放送の冒頭で副社長は何と言った？ 確か社長が出張中だと言わなかったか？ 先ほど書き付けた時系列に沿って、もう一度メモを眺めた。

九日の夜に並木が送ったメールには社長から返事が来ている。そ

の送信日時は十日の早朝だったのを覚えている。このメールは社内向けの仕組みで、普段から従業員同士や部門間の連絡に頻繁に用いられている。このことからすると、その時に社長は社内にいたことになる。そして放送日は不明だが、朝礼の時はどこかに出張中で不在だった。

もし、十日の朝以降、長期の出張に出ているとしたら？ しばらく不在になると、きっと社長宛てのメールは膨大な量になるだろう。まだ見ていないとか、再度返事を書く時間がとれていないということはあるだろうか？ あの時並木が送信したメールが大変な長文だったことを考慮すると、その可能性は大いにあると思った。まだ返事が来ないことに、並木はおぼろげに納得し始めていた。

その時、思考を破るようにシートシャッターが勢いよく巻き上がった。開けた視界の中にライトバンから降りてくる寺下の姿があった。

「よー、久しぶりじゃないか。専属カメラマンを放っておくとはい度胸じゃないか」

寺下はそう言って笑顔を寄越した。

「マイクさん、ちょっと訊きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「ああ。でも先に荷物を下ろしちまうから、ちょっと待っていてくれよ」

そう言うのが早いのか、寺下は馴れた手さばきであったという間に荷台の荷物をトラックヤードに投げ入れた。

「終わったぞ。あまり長くは時間をとれないが、良ければこっちへ出て来いよ。今日はお陽さまが気持ちいいぞ」
そう言って寺下は大きく伸びをした。

並木は近くのサンダルを突っかけるとトラックヤードの短い階段を下りた。

「で、どうしていたんだい？」

寺下の問いかけに、並木は手短に具合が悪くて休んでいたとだけ答

えた。

「それで、マイクさん、教えてください。今月の朝礼放送のことなんです、流れたのはいつでしたか？」

「あのチュピチュピがどうのっていう副社長の訳がわからんやつかな？」

並木は思わず笑みを浮かべた。寺下は実に自由でいい。彼と話していると気持ちがあぐれていくのがわかった。

「マチュピチュですよ、マイクさん。その放送なんですけど、覚えていますか？」

「俺も車で走り回っているから、後でカセットテープを借りるんだよ。仕方ないから車のデッキで聴くんだが、今回はあまりにつまらなくて危なく事故の原因になるところだったよ。スリップ事故のな」

並木は、今度は声をあげて笑った。寺下はにやりとして続けた。

「残念だが、日にちはよく覚えてないんだよ。カセットテープのラベルに確か日付が入っていたと思うんだけどな」

その時、武内が籠を抱えてやってきた。

「お待たせしました。今日はこれだけです。お願いします」

寺下が手を伸ばして、社内連絡物の入った籠を受け取った。

「今日は少ないね。おっ、これじゃないか。おい並木」

そう呼ばれて寺下を見やると、籠の中からカセットテープを取り出して掲げてみせている。ラベルには 三月十三日 と書かれていた。武内がそれを見て言った。

「ああ、今月の朝礼のカセットテープですね。パートさんのシフトの関係でやっと全員が聞き終わったんですよ。本社から返すのが遅いと言われたら、そう伝えてもらえるありがたいんですが」

「ああ、伝えておくよ」

「よろしくお願いします」

寺下が請合うと、武内は奥へ戻っていった。

寺下は振り向くと、大手柄だろと言わんばかりに無邪気な笑顔を

広げた。並木は大きく頷いた。

「マイクさん、もう一つ。知っていたら教えてほしいんですが、最近、木田社長を見かけましたか？」

寺下は少し考えてから答えた。

「いや、随分と見かけてないな。弟の方はよくうろろろしているけどな。聞いた話じゃ、何でも近頃はお兄ちゃんの方は外回りが多くてろくに会社にいないらしい。海外出張なんて行っちゃまうと、それこそ帰ってこないんだそう。それで社内とか関係先とのことは弟が仕切り始めたらしいぞ。あの面倒見のいいお兄ちゃんは、そろそろ会社もぼんぼんの弟に譲るんじゃないかって噂だ。でも、もしかすると今日はいるかもしれないな。俺が本社を出てくる時に、お兄ちゃん用のスペースに白いボルボがあるのを見かけたから」

「白いボルボ？」

「ああ、買ったばかりの役員車だよ。と言っても相変わらず運転手なしだけだな。あの人は運転好きだから、自分でハンドルを握っていたいんだろう。知っているか？ 随分と前に雪が積もったバイパスをすっ飛ばして、そのまま料金所のバリケードに突っ込んだことがあるらしい。その時、なんて言ったと思う？ こんなところにはバリケードなんて置いたら危ないじゃないかって。道路そのものが危ないから通行制限しようと思いついたところをふっ飛ばしちまったんだとよ。ところで、何でボルボなのか知っているか？」

「いいえ、知りません」並木は笑いをこらえながら答えた。

「まあ、これも聞いた話だがな。欧州では水力や風力、太陽光や太陽熱、それに地熱などの自然エネルギーや、リサイクルを徹底してそこから別のエネルギーを生み出すとか、環境問題への取り組みが進んでいるそうだ。下水からだって、ガスを取り出して発電しちゃうんだぜ。そして、それらがエネルギーの相当な割合を賄うまでになっっているんだと。石油には おさらばだ と言った国だってある。たとえばアイスランドでは地熱発電がさかんで、そこには火山と温泉が豊富な我々の国の技術を使っているんだよ。街には水素で走る

バスが走っていて、排出するのは水だけなんだそうだ。そのうちに、その水も内部で循環して水素をまた作って延々と走るような車ができるかもしれないと、つい期待してしまうな。それからドイツでは太陽光発電に力を入れていて、家々が屋根にパネルを設置して発電し、そこから生まれた電力は高い値段で買い上げてもらえる。十年そこそこで設備の元が採れるんだ。だから、計画よりもずっと早く普及している。ドイツは陽光が短くて弱いから本来は不向きなはずなのに、いまや世界一だよ。そのドイツはスペインと共に風力発電でも欧州一さ。まあ、やる気になれば、この国でもできるはずなんだがな。政治的な観点ではいろいろあるのかもしれないが、俺みたいな凡人にもわかるのは、そういつた取り組みが地球を今よりもましな状態にしてくれるだろうということなんだ。何ととっても、環境問題のつけは子供や孫たちの世代にいつちまうからな。地球は未来の子供たちから俺たちが一時的に預かったに過ぎない。きれいにして返さないといけないな」

そう言つて寺下は顔を上げて空を眺めた。少し間があつて、それからおもむろに話を続けた。

「ボルボつて会社は欧州のスウェーデンにあるんだ。町の中にはあちこちにリサイクル用のごみ箱があつて、そこから市民が分別した生ごみを集めて、発酵させてガスを作るんだ。それを自動車の燃料や暖房に利用するらしい。かたや我々の国じゃ、そもそも、そのごみの分別でさえ上手くいっていないというのにな。普段、食べ物を買に行けば、後は捨てるしかないプラスチックや発泡スチロールや紙箱が、もれなくついてくるだろ？ この国の消費者は金を払つて、ごみ込みで買い物させられているんだ。そして今度は、それを捨てるのにまた金を払うという訳だ。家庭ごみの回収は既に住民税に含まれているのに、さらにごみ有料化なんて自治体も増えそうだし、そうなると思つてよ。有料なんかにしたところで、ごみそのものは減りやしない。もし減つたように見えたとしても、その分は隣近所の回収が無料の自治体に捨てに行っているか、有料のごみ袋が一

杯になるまでためてから捨てるようになることで回収当たりの量が減ったように見えていただけのことさ。残念なことだが、不法投棄されることもあるだろう。実態は、ゴミのほとんどをメーカーや小売店が出しているようなものなのに、行政は産業界にはうるさく言えず、立場の弱い一般人が家庭から出すごみの方に規制の矛先を向けやがる。ごみが出る仕組みを改めないとうとうもうもないという議論は、なかなかしんどいからな。でも、出口の栓だけを閉めようというのは本末転倒さ。まあ、それでな、そういう立ち遅れた国が取り組みの遙かに進んだ国をやっかむと、得てしてこう言うんだ。おたくは経済成長と環境保護のどっちを採るんだってな。でもスウエーデンでは、その両方を採ったんだ。現に温室効果ガスの排出量はマイナスで、且つGDPはプラスに伸びているらしい」

「そんなことが可能なんですか？」

「ああ、もちろん可能さ。いろいろな面で恵まれていたと見る向きがあるかもしれないが、一見相反すると信じられていた二つのものを両立させているというのは紛れもない事実さ。要は、二者択一しかないなんてものは、実はそれほど多くはないということだ。選択肢の双方が必要ななら、両方とも選択するにはどうすればいいかを考えればいい。上手くいかないとすれば、それは初めから両立しないだろうという観念が心のどこかにあるからさ。本気で何とかしようとするれば、たいていのことはできるんだ」

並木は賛意を込めて頷いた。寺下が頷き返して、先を続けた。

「それでな、スウエーデンでは循環型社会とかって言ってるな、もう原子力もやめるんだとき。それなのに、かたやこの国じゃ、原発から出たごみの捨て場に困っているながら、捨てる先のないそのごみを出す施設がまだ必要なんだとぬかしてやがる。しかも、電力需要を作ろうと、オール電化だとかなんだとか。冗談じゃないぜ。核廃棄物が安全なレベルになるまでには何万年とかかるといふのに、地震の震源よりも遙かに浅い、僅か数百メートル程度の穴を掘って、それを埋めちまおうとしているんだぜ。この国は地震大国じゃなかつ

たか？ それに、数万年もの間には、もつと大規模な地殻変動だつてないとは言えないだろう。現に今だって、山のとつぺんや丘陵地から貝殻が掘り出されているだろ？ でもそんなことには目をつぶって、二酸化炭素を出さない原子力は環境にいいなんて、たいそうなコマーシャルまで流しているじゃないか。でもな、そんなものは歪んだ解釈だよ。現実には、原発は発電効率が悪くてロスも多いんだ。加えて、そこから海に捨てられる廃熱を帯びた大量の温排水は水蒸気を立たせ、せつかく海が吸収していた二酸化炭素まで再び解き放っているも同然だという指摘もある。これで、原子力のどこをクリーンエネルギーだと言えるんだ？ それなのに、これまで二酸化炭素をじゃんじゃん排出してきたツケをいよいよ払わなくてはならなくなったら、今度は数万年単位で厄介な核のごみを、はるか先々の子孫にまで押し付けようというんだから、たまらないぜ。そんな馬鹿な国がある一方で、スウェーデンは国民投票で原発をやめることに決めた。そりゃ向こうの国にだって核廃棄物の問題はあるし、同じように穴に埋めようとしているさ。でもな、こつちとの決定的な違いは、もう核のごみを増やさないという決意だよ。原発をやめるからには、子供たちの世代のために負の遺産をきっちり清算しようというんだ。だから国民の理解度も高い。これはとても大きな違いなんだ」

そしてふつと息をつくとき、寺下はいつもの笑みを浮かべて言った。

「まあそんな訳で、うちの会社では、環境問題に積極的な国を応援するつもりでボルボの車に替えただつてよ。しかも純白。白いボルボのセダンが役員車なんて会社は、この国じゃなかなか見かけないぜ。たいていは黒のいかつい車だろ？ エア・アート社らしくて俺は好きだな」

並木は エア・アート社らしい という言葉を久しぶりに聞いたと思った。最近では、こんな言葉を知っている者はもはや絶滅したのではないかとさえ思っていた。多くの者はそんな言葉の意味を知ろうとさえしない。しかし寺下はこの らしさをたった二年で感

じ取ってその価値観に共感してみせた。

「そうですね。うちらしいですね。私も好きです」

寺下はもう一度微笑み、もういかないと、と言ってそそくさと行ってしまった。

並木は一人になって考えた。これで辻褄が合う。並木が木田社長にメールを返したのは金曜日の深夜で、土・日を挟んで十三日の月曜日には放送の中で社長は出張中だと言っていたことになる。寺下の話では、近頃は社長を見かけた覚えがないという。ということは、社長はまだメールを見てないのだろう。あるいは、まだ返事が書けていないのだ。しかし今日は社内にいるかもしれないと言っていた。そんなに出張が多いとなると、今日を逃すと次はいつ捕まえられるかわからない。並木は腕時計を見た。もうすぐ昼休みになるところだった。

昼を告げるベルが鳴った。作業場からだんだんと人がいなくなる。並木は少し待ってから、事務室へと上がっていった。スライド扉をそろそろと開けてみた。誰もいない。

いつものパソコンの電源ボタンを押すと、ファンが回り始める音が聞こえた。起動画面を急かすように見つめた。自分のIDとパスワードを入力する。程なく正常に立ち上がり、メールソフトをクリックした。できるだけ急いでメールを作成した。

木田社長殿

並木です。社長に至急ご報告しなくてはならないことがあります。このメールでは詳細を申し上げられませんが、重大な事実をつかみました。

研究所、品質管理、製造工程、物流と倉庫について、とんでもないことになっているのを実際に確認しました。それぞれが自部門の利益を目指して、結果的に大変なしわ寄せがお客様にいつていることが判明しました。その中でも特に、製造日の決められ方は大問

題です。今のままで新製品が発売されたら、それこそ取り返しがつかないことになるという確信があります。

すぐにこれを何とかしないとなりません。どうか直接お伝えできる時間をください。今は時間がないので、これにて。

並木湧葉

それだけ書くと送信ボタンを押した。こちらも時間がないが、木田社長も時間がないはずなのだ。このメールは少しでも早く送りたかった。

パソコンをシャットダウンし、画面が消えるのを待つて廊下に出た。階段を下り始めたところで背後から陽気な話し声が聞こえてきて、その声は事務所の辺りでスライド扉の閉まる音に吸いこまれるようにして消えていった。

その日は夕方になっても浅倉人事部長は現れなかった。事務室が空になるのを待つて、パソコンに向かった。メールをチェックしたが、木田社長からの返事は届いていなかった。

がっかりしつつ送信ボックスへ目を移し、その中から昼間慌てて送ったメールを呼び出してゆっくり読み返した。画面から顔を起こしてそのまま椅子の背にもたれかかり、長いため息を漏らした。

「お疲れみたいですな」

不意に背後から声がかかり、並木はびくつとした。目の前の画面の隅に細長い人影が映り込んでいるのを認めた。振り向くと、声の主は白川だった。

「驚いたな、もう帰ったものと思っていたよ」

「あら、私を帰らせてから何をしたかったわけ？」

白川がいたずらっぽい口調で言った。並木は肩をすくめてみせた。彼女はすらりと細い首を伸ばして並木の肩越しにパソコンの画面を覗き込んだ。画面の中ほどには開いたままの社長宛のメールが表示されていた。並木は観念した。白川は並木の表情を読み取り、わざ

とすねた調子で尋ねた。

「まだ私を帰らせたいですか？」

並木は両手をあげて降参の意を伝えた。

白川は工場の作業着から着替え、オフホワイトのカットソーに細身のパンツといういでたちだった。昼間は結わいていた髪はほどかれて肩の向こうへ広がっている。白川は隣の椅子を引き出して静かに腰を下ろした。

それからの一時間をかけて、並木は白川が既に知っているであろうことを含めて洗いざらい話して聞かせた。話が終わるまで白川は一言も口にしなかったが、やがて並木が口を閉じると重く息を吐いた。

「そんなことになっていたんですか。一人で大変でしたね。それで、これからどうするんですか？ 私にできることは？」

並木はあいまいな笑顔を向けて、お手上げだと伝えようとした。その様子に、白川は考え込むようにこめかみを指でさすった。

「うーん、せめて品質管理の検査がたらめだと立証できれば少しは前に進むのかな。もし、あのクレームの時の検体が手に入ればこつちで再検査して、顧客サービス部に送られてきた検査報告書と突き合せることができるんだけど。そうすればあれは偽装だったと追及できるかもしれない」

確かに彼女の言う通りだ。一つを暴ければ、そこから生じる疑問が次の疑念を芽づる式に解き明かそうとしてくれるだろう。あの時の検体が……。

その時、並木は不意に跳ね起きると部屋から飛び出した。訳がわからず驚いた白川が慌てて後に続く。それに構わず並木は階段を転がるように駆け下りた。トラックヤードに辿り着くと、屈んで魔の座席の下に手を伸ばし、黒い鞆のジッパーを引き上げた。そこへ息を切らせてやってきた白川に向かって並木は三個の細長い箱を掲げてみせた。

「検体、ここにあったぞ」

白川は浅く屈んで息を整えながら指でオーケーサインをつくった。

それを持って二人は事務室に引き返した。並木はそれを以前、工場返品の中に見つけてロット番号を確認してから鞆の中にしまったんだと説明した。

「すごいじゃないですか。お手柄だわ」

「ほんとはよかったよ。この三個のうちの二個が該当ロットのものだったんだ。さて問題はこれをどうやって検査するかだ。品質管理部には頼めないし、社外の機関だと時間も費用もどうなることかわかったもんじやない」

「それなら大丈夫。この前、私の出身校の話をしたのを覚えていますか？ 設備や機材は揃っているし人手もあるわ。まだ後輩がいるから、頼めば品質の検査くらいなら嫌がらずにやってくれるはずよ」そう言うが早いか、白川は携帯電話を取り出して短縮ダイヤルを押した。

続く五分ほどの間、白川と携帯電話を、魔法使いと魔法の杖を見ているような気分で眺めた。やがて白川は携帯電話を畳むと並木に向かって親指を起こした拳を突き出して片目をつぶってみせた。

並木は二個を検体として差し出した。白川が言った。

「その残りの一つはどうしますか？ どうせなら一緒に検査に出したらどうですか？ そうすればこのロットだけが問題なのか、その他のものも危険性を秘めているのか、判断する材料になるかもしれないよ」

その意見に同意して、三個すべてを白川に預けることにした。

それから二人は帰り支度を整え、セキュリティロックをかけてから工場を後にした。この足で検体を後輩に届けるのだと白川は言った。

一緒に行くと並木が言ったが、大学は藤沢にあつてここからだと言いつつ遠いからと白川は断った。代わりに携帯電話の番号を教えるから、今は早く帰って薬を飲んで寝るとたしなめた。並木は今はその甘えることにした。駅で白川が横浜方面の電車に乗るのを見送り、並

木は武蔵小杉へ帰っていった。

翌朝はいつもより早めに出勤した。夕方には武蔵小杉に戻って弁護士を訪ねる約束だった。誰かが来る前に、昨日送信したメールの返信を確かめたかった。その計画は、程なくやってきた白川によってあえなく頓挫した。

「あら、早いですね。私が一番乗りだと思ったのに」

「昨日はありがとう。後輩の方はどうだった」

「ばつちりです。でもすぐには取りかかれなから少し時間がほしいと言っていました。まだちょっとだけ春休みが残っているんだそうです」

「ああ、そんな時期だったな」

そう言っただけで並木は小さく微笑んでみせた。

「もしかしてお邪魔だったかしら。メールを見ようとしていました？ ごめんなさい、着替えてきますね」

そう言っただけで白川は廊下に出て扉を閉めようとした。並木は慌てて声をかけた。

「パソコンを立ち上げておくよ。着替えたら一緒に見よう」

その言葉に、白川は嬉しそうにちよつとはにかんだ笑顔をみせた。

白川は、戻ってくるかと昨夜と同じ椅子を引き出して隣に並んで腰を下ろした。メールソフトを立ち上げて送受信のボタンを押し、画面に顔を寄せて待った。右下に送受信完了と小さい表示が現れてすぐに消えた。受信ボックスには何も変化は起きなかった。

「残念ね。後でまた見てみましょうよ。さあ他の人が来る前に片付けてしましましょう」

並木は頷き、手を伸ばしてパソコンをシャットダウンした。

「ところでコーヒーはいかがですか？」

白川は並木を促して席を立った。

時計が十一時半を指した。それと同時にライトバンが滑らかに入

つてきてシートシャッターが巻き上がった。運転席のドアが開き、いつものように寺下が降りてきた。

「おはよう。今日もいい天気だな」

「おはようございます。マイクさんは時間に正確ですね」

「当たり前よ。路線バスより正確なのが売りなんだ」

そう言つて寺下はにやりとした。

「今日も写真、撮るだろう？」

「ええ、お願いします」

「任せとけ、ばっちり美男子に撮つてやるよ。でもこんなペースだとフィルムを撮り切つて俺の作品を拝めるのは随分と先なんだろうな。おっと、でもその前にあんたがここから救い出されたらもつといいんだけどな」

その言葉を聞いて並木はあることを思いついた。

「マイクさん、今日は別のカメラでも撮つてもらえませんか？」

「ああ、いいけど。どんなカメラだ？」

「ポラロイドカメラですよ」

工場ではラインを分解した時や新しい設備が入ってきた時など、ポラロイドカメラで写真を撮ることがしばしばあった。そうして撮つた写真を記録や手順書に添付しておく、後で何かと役に立つのだ。この前など、武内が何人かのパートとおどけながら写真を撮っていたのを増田に見つかつて、フィルムをまた無駄に使つたと怒られていたのを目にしたばかりだった。

「カメラを借りてきます」

席を立とうとした並木を寺下が呼び止めた。

「ちょっと待った。あんたが行くとややこしいことになりかねん。深い意味はないんだが、念のためだ」

そう言つと寺下は運んできたばかりの籠の中に手を入れて四角い箱を取り出した。

「ちようどよかったよ。この前、ここの誰かがポラロイドカメラで遊んじまったというんで、予備のフィルムを届けてくれと言われて

いたんだ」

寺下は箱のふたを丁寧に開けて中からフィルムパックを一つ取り出して、元通りにふたを閉じた。

「あと二つパックが残っているから、このまま渡しちまおう。向こうに使いかけのがあったからと言えば大丈夫だろう。それからポラロイドカメラは俺の車にもあるよ。万一事故があったら必要になるだろうって、心配性の誰かさんが乗っけてくれてるんだ。俺に事故の心配をするなんて失礼極まりないやつなんだが、そのおかげで今はこうしてちょっとした役に立つという訳だ。俺のカメラに入っているフィルムパックも十枚撮りだから、このパックと入れ替えればいい。ほら、こうすれば誰も困ることはないだろう」

寺下は片手にポラロイドカメラを、もう一方の手に並木の使い切りカメラを持ち、それから十分ほどをかけてアングルを変えながら十カット計二十枚の作品を撮影した。

「つい調子に乗ってあんたのカメラのフィルムもたくさん使っちゃったな。ごめんよ」

「いや、いいですよ。こちらこそお手間をとらせてすみませんでした。それから、ありがとうございます」

「ああ、また明日な」

寺下はポラロイドカメラで撮る理由も尋ねずに帰っていった。こういうさりげない心遣いが心の重石を少しずつ軽くしてくれているのだと、並木は感じていた。

ポラロイドカメラで撮った十枚の写真に、やがて魔の座席に座った自分の姿がおぼろげに浮かび上がってきた。それをひとまとめにして鞆に入れた。

昼休みが終わって程なく、浅倉人事部長がやってきて二階の会議室へ呼ばれた。近頃の並木はいつも無意識にポケットに手を入れるのが習慣となっていた。並木はその手でICレコーダーのスイッチを入れた。

向いに腰かけるように促され、顔が同じくらいの高さに落ち着くとタバコとコーヒーとにんにくが混じった息が並木に飛びかかってきた。浅倉はいつたいたいどんなものを食べてきたんだろうかと訝った。そんな考えを跳ね飛ばすように、今度は圧力的な調子で言葉がぶつかってきた。

「誓約書を渡してもらおうか」

並木は黙って浅倉から僅かに目線を逸らせた。

「まだ書いてないとは言わせないぞ。さあ出せ。君は誓約書を出して、私の前から永遠にいなくなるんだ。何も選択の余地はないんだよ」

並木は浅倉の息から身を守ろうと、なるべく呼吸をしなくて済むように息を止めた。その間にも浅倉からは容赦なくきつい言葉が浴びせられた。

じつと耐えていたものの、ついに息苦しくなり、気管を開放する時がきた。今までせき止められていた分の酸素を取り戻そうと、肺が大きく膨らんだ。しかしそれは同時に、浅倉の息から漂うあの臭いを吸い込むということでもあった。とたんに並木はむせ返り、腹の奥から何かが勢いよく喉を駆け上がった。

次の瞬間、前に座って怒鳴り散らしていた浅倉が慌てて椅子から飛びすさり、後にはうずくまった並木と、たちまち辺りに広がったすえた臭いだけが残された。

並木は午後の残りの時間を食堂脇の和室を閉め切って過ごすことになった。休憩時間になっても、食堂にやって来る人はいつもよりだいぶ少ない。パートの女性たちも閉め切られたふすまを気にして話に花が咲かないようだ。やがて彼女たちも仕事に戻っていった。

食堂が静かになると、ふすまがそつと開き白川の顔が覗いた。畳の端に腰を下ろすと、手に持ってきたマグカップを差し出した。

「白湯ゆです。ちょうどいいくらいにさめていると思います。気分はどうですか？」

並木はカップを受け取り口に運んだ。一口含んでからゆっくり飲み下し、力なく笑みを返した。それを見て白川は小さく肩をすくめた。

「だめそうですね。あと二時間もすれば終業ですから、もう少し横になっていてください」

「すまない。それから会議室も掃除させてしまったら。ほんとは申し訳ない」

「大丈夫です。でも血を吐いたんじゃないわ」

白川は大げさに言って、ふすまを閉めようと立ち上がった。それを引き止めるかのように、並木が尋ねた。

「なあ、事務所はどうだい？」

白川が振り向いた。

「それは私が仕事に慣れたかってこと？ それとも今は誰もいないかってこと？」

その言葉に並木ははっとした。

「両方だ」

白川は再び肩をすくめてから答えた。

「両方とも、イエスです」

並木はよろよると事務所に入っていた。部屋は空だった。他の者は会議で三階に上がり、留守番を頼まれていたんだと言っ、白川は小さく舌を出した。

パソコンの前に座り、慣れた手順でメールを確認する。やはり木田社長からの返信はなかった。

並木が僅かに頭を垂れたのを白川は見逃さなかった。

「気にし過ぎるのもよくないわ。相手があることだし、来ないものは仕方がないじゃない。大学の休みが明けて検体の検査結果が届くのを待ちましよう」

並木は顔を上げて頷いた。

夕刻、並木は武蔵小杉の駅を降りた。腕時計を見ると、午後六時半を少し回ったところだった。北口に出て、鞆からノートを取り出す。表紙をめくり、そのすぐ裏の走り書きを確認した。東横線の下をくぐって綱島街道へ向かう。少し進んでから角を左に折れたところに目的の小さなビルを見つけた。外に面した二階の窓からは蛍光灯の明かりが漏れている。

階段を上ると正面に、コルクボードがかかった鉄製の扉があった。ボードには濃いオレンジ色のマーカーで 手連人法律事務所 と書かれていた。そのすぐ上には TARENTO と黒色のマーカーで読み仮名が添えられている。扉の横手には色をあせたインターホンがあり、故障中と書いた付箋紙がテープで留めてあった。恐る恐るドアノブに手をかけると、同時に扉が内から開いた。

「ああ、来た、来た。良かった。ここを見つけれられるかと心配していたんですよ」

出迎えてくれたのは牧山弁護士だった。並木は開け支えてもらって扉をくぐった。内は明るく、外から想像したよりもだいぶ広かった。後ろで鉄扉が音を立てて閉まり、その扉の裏側には長方形に切った白いマグネットシートが三枚貼ってあった。一番上のシートには 弁護士、その下には 夏目 響、一番下には 牧山 宏太 と、手書きの太い文字が入っていた。

牧山は照れながら、ようこそと言った。改めて部屋の中を見回す。手前にはカウンターがあり奥のスペースと鉄扉の玄関を隔てていた。鉄扉を支える壁は両側に延びていて、一方の側は来客を誘う役目を担い、もう一方の側はダンボール箱が低く積まれて人が踏み込むことを許していない。ダンボールの山の上には、風景写真のようなものと手書きの格言らしきものがそれぞれ額縁に収まって壁にぶら下がっている。その奥まった先にはコピー機が設置され、カウンター

の向こう側からでないと近寄ることができそうにない。

カウンターに目を戻すと、横手にはつい立がいくつか置かれ、その向こうは広めに取られた空間に大きめの会議用テーブルが鎮座している。そちらの方からラジオの音がかすかに流れてきた。

事務所の一番奥には、グレーの大きなスチール机が二つ並んでこちらを向いて置かれていて、周囲には大小さまざまなキャビネットが所狭しと配置されていた。その様子はお世辞にも整然とはしておらず、並木は雑多な印象を受けた。

「驚いたでしょう？ 弁護士事務所ってどんな風に想像してました？ うちはこのに来てからずっとこんな感じなんですよ。カウンターも机もキャビネットも、みんなリサイクルとよそからのもらいもの。いつかもっと大きなところに引越すまではこのままでやるつもりなんです。要はハートの問題ですよ」
そう言つて、牧山は自分の胸をこぶしで軽く叩いた。

牧山は、前回初めて会つた時と同じ服装に見えた。同じようなデザインと色のそのスーツは、似たような箇所にはやはり手強そうな深い皺がついていた。あの時と変わっているのはネクタイだけのようないな気がした。

「立ち話もなんだから、こちらへどうぞ」

牧山はそう言つて右手の一つきりの会議用テーブルへと並木を案内した。

「お茶でも飲みますか？」

並木がその申し出を辞退すると、牧山は一旦奥に引込み、手帳とペットボトルのお茶を取つて戻ってきた。手を伸ばしてラジオを消し、テーブルの端へ押しやった。

「もうすぐナナギさんが来ることになっています。それからうちの事務所のもう一人の先生も」

並木は鉄扉の裏に貼られたマグネットシートに名前が書かれていたのを思い出した。牧山が続ける。

「みんな揃つてから始めましょう。話が途中で何度も行ったり来たりするのは面倒ですから。それまで、何か訊きたいことでもあれば

どうぞ」

少し考えてから並木が口を開いた。

「牧山先生とこの事務所のことを話してくれませんか」

「おっ、いいことを訊いてくれるな」

牧山は椅子に座りなおして笑顔を浮かべ、事務所のことを話し始めた。

五年ほど前、牧山は川崎駅の近くにある法律事務所に入所した。

弁護士登録をするまでに民間企業で一年少々の間働いた経験を持つ変り種だ。

川崎の事務所は活気に満ちていて、優秀な先輩にも恵まれた。その頃から主に労働事件を扱ってきた。

この事務所のもう一人の弁護士、夏目響なつめきょうは牧山と年は同じだが弁護士登録では二年先輩で、当時は横浜にある別の事務所であり労働事件と向き合っていた。そして二人はある事件を通して知り合うことになる。

弁護士は、他の事務所の弁護士と一緒に弁護団を組んで一つの事件に取り組むことがある。夏目と牧山はそこで出会った。それが二年がかりで解決に向かった頃には、他の事件でもたびたび組むようになっており、二人の間には何か共通の目標があるような気がし始めていた。いつの頃からか、弁護団会議が夜遅い時間にかかった日は、たいてい二人はそのまま事務所近くのいきつけの店へと向かい、そこで灯りを消されるまで酒を酌み交わすようになった。

そして今から二年前、二人は独立してこの地に共同で事務所を構えることにした。ここには南武線と東横線が乗り入れていて、都内へも横浜へも短時間で出られる。そんな利便性が高い反面、裁判所からは離れているせいか法律事務所はまだ少なかった。しかし労働事件に使命感を燃やす二人にとって、そのことはたいした問題ではなかった。

このエリアには工場を抱えた企業とその労働組合が多い。そこで起こるであろう労働問題の受け皿になろうと考え、さほど迷うこと

なく、ここを拠点にしようと決めた。

事務所の名前は、二人の思いを込めて名付けた。多くの手と手がつながり、支えあい連れ立って頑張れるような社会になれば悩める人々は救われるのだ、という大きな目標を掲げて、手連人と書いて タレント と読ませることにした。

そして近い将来には、この地に横須賀線の新駅と市が計画中の鉄道新線の駅が開業するという計画が持ち上がっている。牧山は自分たちのマーケティング戦略に神様が微笑んでくれたんだと言って胸を張って見せた。

その時、向こうで鉄扉が開く音がして、二人分の足音が入ってきた。それは鉄扉のところで二手に別れ、一つはこちらに、もう一つは事務所の奥へ向かった。

程なく顔を出したのは田中だった。少しして、後からもう一人、別の男性がやってきた。手にはペットボトル入りのお茶と手帳と小型のノートパソコンを持っていた。

「お待たせしてごめんなさい」田中が詫びた。

牧山が初対面の二人をそれぞれ紹介した。夏目は体格がよく肩幅が広い。髪は短く刈り込んでいて、ひげもきちんとあたっている。

この辺りは牧山と異なる印象だが、身に着けているものはそれほど違わなかった。

並木はこの二人に妙に納得した。おぼろげに抱いていた弁護士のイメージとはかけ離れているが、テレビドラマの弁護士よりどこか人間臭くてかえっていいと思った。

「さて、始めましょう」

牧山がテーブルを見渡して声をかけた。

それからの一時間、並木はこれまで起こったことを説明した。夏目がそれを聴きながら同時にノートパソコンにタイプしていく。

身に降りかかったことを一から話すのはもうこれで何回目だろう。並木はどこをどう話せば要点が伝わるかを心得はじめていた。しか

し今回は新しい要素があった。それはICレコーダーの音声とポロイドカメラの写真だった。

十枚の写真テーブルに広げる。そこには机と椅子を床に固定しているボルト止め部分をアップで写したものの、外からトラックヤード内の位置関係を的確に把握できるもの、並木の背中とその向こうに見える景色を一まとめにして収めたものが、アングルをやや変えながらそれぞれ数枚ずつ撮影されていた。寺下の写真の腕はたいしたものだった。

続いてICレコーダーを再生して、浅倉人事部長とのやりとりの録音を、ところどころ飛ばしながら一通り聞いてもらった。三人は声も出ない。長い沈黙の後、やがて田中が口を開いた。

「ここに居るの？ 毎日？ それに、こんなことを言われているの？」

並木は頷いた。それを契機に、三人から質問が次々と出てきた。それに答えるだけで、次の一時間が過ぎた。

その後、概要を把握した三人は具体策の検討に移った。前回の相談会の時と同じく、並木をこの魔の座席から救出して仕事に戻すにはどうすればよいかということに議論が集中した。並木はノートを広げてメモをとろうと試みたが、それが無理だと悟るのにさほど時間はかからなかった。安全配慮義務違反がどうか、罹患と業務の因果関係だとか、次々に難しそうな言葉が乱れ飛ぶ。聞き覚えがあったのは、配転命令の合理性という言葉くらいだった。話の展開は早く、ついていくのさえ容易なことではなかった。並木は後で見返しても判読できないかもしれないと覚悟して、耳についた言葉だけでも断片的にメモしておくことにした。

やがて今日の結論が出て、それが並木に示された。まず牧山弁護士と代理人契約を結び会社に待遇を改めろという旨の内容証明郵便を送る。それを受けた会社の動向を踏まえて、並木はこれまで通り、できるだけ記録に留める。それと並行して、並木は田中が所属する労働組合になるべく顔を出すようにして、他の会社の労働者と交流

を持ちながら分かり合える仲間を作る。しかしこれらは、あくまでも負担にならない範囲で並木に判断を任せるというものだった。

並木はたった今、三人から提示されたことについて考えようとした。しかし、そろそろオーバーフロー気味で思考の巡りも緩慢になつてきていた。

そんな時、ある心配ごとが浮かんできた。並木は思い切つてそれを尋ねるべきか迷った。そんな様子を感じとつた牧山が、天井を見上げて独り言のようにつぶやいた。

「労働事件っていうのは弱者救済のようなものですよね。だからたいていはお金にならないけど、何かそれでも使命感を感じるんですよ」

そしてちらりと並木に目を向けて言い添えた。

「あつ、もちろんお金になる事件も大いにやりますけどね」

並木は牧山がかすかにウインクするのを見たと思つた。夏目は、またかというように苦笑いを浮かべ、やれやれというように首を振つた。並木は緊張が解けて両肩から力が抜けていくのがわかった。

椅子に座りなおし、少し間をあけて大きく息を吸ってからきっぱりとした口調で言つた。

「よろしく願います」

それから委任状を作成して、並木は牧山と代理人契約を結んだ。牧山からはいくつかの指示があり、並木はノートにメモをとつた。

まずは、毎日の出来事をなるべく正確にメモしておくことと、時間がある時にICレコーダーに録音したものをカセットテープにダビングしておくこと。またICレコーダーはこれからも携行しておいた方がいいと言つた。

「こちらは何かあれば録音しておきたいですからね。誰か　いつても人事部長だと思いますが、やりとりを録音している時はなるべく相手に話させてください。嫌でしょうが、相手の目を見てやると聴いているんだとわかるからいろいろと喋りますよ。時々適度に頷いてやるのも向こうを喋りやすくします。でもこれは注意し

てください。絶対に露骨にやらないでください。後で向こうの話がこっちに到達していたと言われかねないので。ところで別の部門に気軽に話せる役職者はいますか？」

「ええ、いくつかの部門の部長や課長が数人います」

「その中で並木さんが何かを訊いても、それを決して他言しない人は？ そういった意味で信頼できる人は？」

「四つの部門に七人というところですね」

「ではその中から、役職や立場を常に重んじて行動するタイプの人を除くと何人残りますか？ たとえば人を名前でなく常に役職で呼んでいたりと、相手によって発言の中身を使い分けていたりという人を外すと？」

しばらく考えてから並木が答えた。

「三人、ですね」

「ではその三人に訊いてみてください。そちらの部門では人手が足りているか？ 誰かにやつてもらいたい仕事はないか？ そんなことを訊いてきてください。こちらが読書ではなく仕事を与えるという申し入れをした時に、その人事部長ならどこにも仕事がないから仕方なくあそこで読書をさせているんだと言いかねないですから」

「わかりました。明日から早速当たってみます」

牧山が頷いた。

「それから、今後何か強い圧力によって判断を迫られたり、もうかわせないと思うほど追い詰められたりしたら、弁護士に任せていると言っていていいですよ。これから急いで内容証明郵便を送りますから、こっちが誰かはすぐ向こうにわかりますから。ところで、内容証明に必要なので会社名と代表者名を正確に教えてください」

「代表者は社長の木田なんですが、今回の件は浅倉人事部長のやったことですよ。内容証明は人事部長宛になるのではないですか？」

夏目がノートパソコンから顔を上げた。

「今回のことは、本当に人事部長が独断でやったんですかね？ こんなひどいことをやっておいて、それが職務権限の範囲だったと言

い通せると考えるものだろうか？　こちらから見れば、その人事部長は問題が表面化した時に真っ先に切られるトカゲの尻尾のようなもんだと思うが。本人もそれくらいはわかっていても不思議はないと思うがな」

田中が意見を挟んだ。

「だから必死に自分を守ろうとして、誓約書を書けと迫っているんじゃないかしら」

「保身にもいろいろあるさ。録音を聴いた印象では、ことを起こす前に責任を分散しておこうとするタイプなんじゃないかと思ったんだ。まあ、やってしまつて引つ込みがなくなつたから並木さんを葬り去ろうとしゃかりきになつているのかもしれないと考えることもできるがな。いずれにせよ、内容証明は会社の代表者宛の方がいい。ところで、牧山先生？」

そう言つて夏目は牧山に目配せした。牧山は渋々ながら頷くと、並木に向き直つた。

「正式に受けるので、一応お話しておきますね。こちらの規程では事件を引き受けた時に着手金がかかり、解決した時には経済的利益に対して解決報酬がかかります。その間に生じたものについては実費です。たとえば、これから出す内容証明郵便とかコピー代とかです。厳密に言つとそういうことなんです」

夏目がやれやれという顔をして言つた。

「受けるんじゃないかと、受けただん。厳密に言つたら、今だつて相談料をもらわなくてはならないんじゃないか？　本当は受ける前に伝えるべきことだろう？」

「まあいいじゃないですか。二年前の法改正で弁護士会の報酬規程は廃止されたことだし。並木さんの場合は解決しても経済的利益はないだろうから、後で無理のないように考えてあげれば」

夏目が諦めたように言つた。

「まあ、一応つていうやつだよ。気にしないでくれ」

それがおかしかつたようで、田中が今日初めて笑顔を浮かべた。

並木はほっとしたようにボールペンを置き、今日新たに三ページが埋まったノートを閉じた。

七

その翌日からの数日間はいくらか静かに過ぎていった。

木田社長からのメールの返信はまだなかった。白川の後輩に託した検体の検査結果も同様に届かなかった。

浅倉人事部長は会議室での一件以来あまり姿を見せなくなった。週末を挟んだ延べ十日間あまりの間に二度、昼前の時間にやってきたが二階の会議室へ行くまでもなく用が済んでいた。浅倉は立ったまま誓約書の催促をしたが並木が答えないとすぐにきびすを返して立ち去っていった。そんな日は、並木はきまってその後には昼食をとる気になれなかった。それでなくても食欲がなく、体重も既に五キロほど減っていた。

小杉の病院にも通ったが、そっけなく様子を訊かれて前回と同じ薬が出されるだけだった。

並木はその他の時間を使って、牧山の助言に従いこれまでの出来事をリストにまとめ、ピックアップした信頼に足るはずの三人の直通番号に電話をかけた。受話器越しの答えに共通していたのは、並木の現状を知らされていないこととその部門では人手がすぐにも欲しいと思っていることだった。

そしてもうすぐ三月が終わろうかという晴れた日の午後、勢い込んで浅倉が駆け込んできた。トラックヤードは休憩時間で他には誰もいなかった。いきなりそこに現れた浅倉は今にも殴りかからんばかりに敵意をあらわにして並木をねめつけた。

「どういうことだ」

並木はいつもの習慣で手を入れていたポケットの中でICレコーダーのスイッチを入れた。浅倉は並木を睨んだまま続けた。

「どっかの弁護士から手紙が届いたんだよ。これが何なのかと訊いているんだ」

並木はなおも黙ったまま答えない。しびれを切らしたように浅倉が言った。

「ちよつと来い」

二人は二階の会議室で座って向き合った。数日前の吐き気が戻ってくるような気がする。浅倉もすぐに飛び退けるように身構えているのがわかった。

浅倉は持っていたクリアファイルの中から一枚の紙を取り出し、何か汚いものでも持ち上げるかのように親指と人差し指でつまんでみせた。そして厳しい口調で言った。

「はつきり言うが、弁護士だかなんだかなんて関係ない。私は君と直接話すし、これからもそれに変わりはない」

並木は今の一言を咀嚼するようにゆっくりと間を取ってから答えた。

「だったら私の話もちゃんと聞いてくださいよ。この状況を改めて元の部門に戻してください」

「それはだめだ」

「それなら工場の手伝いをしますから仕事をさせてください」

「君の仕事は読書だ」

「どうしてですか？ どうしてだめなんですか？」

並木の声は怒りでかすかに震えた。

「他に与えてやれる空きのある仕事はないんだよ」

「あるでしょう。ここにも他の部門にも。私は訊いてみたんです」

「いや、どこにもない。それは勘違いだ」

並木は次の言葉を呑み込んだ。この話は堂々巡りで先には進まないのだと悟った。黙った並木を浅倉が改めて一瞥した。

「これで君はようやく理解できたって訳だ。今の状況は合理的なもので仕方がないことなんだ。それなのに弁護士がなんとやってきたと思う？ 不法だってよ。それに、改善しない場合は法的手続きを

とることがあると念のため申し添えます、だとよ。でも君はこうして納得したんだからこれでお終いつてことだ」

並木は決然とした口調で言った。

「私は納得も理解もしていません」

その言葉に浅倉は跳ねるように立ち上がった。椅子の脚を激しく蹴った。大きな音を響かせて椅子が床に転がった。浅倉はその場に立ったまま並木を見下ろした。そして低い声で命じた。

「理解しろ」

そして指でつまんでいた紙を持ち直して真ん中から二つに破って床に放ると部屋を出て行った。

翌日の日の午後に浅倉が再びやってきた。手にはまたもやクリアファイルを携えている。並木は二階の会議室へと呼ばれた。

その日の浅倉は昨日とはどこか違って見えた。妙に落ち着きがある。並木はICレコーダーの録音をスタートさせた。

浅倉はゆったりと腰を下ろし、花粉からその身を守る大事なマスクと眼鏡を外した。そしておもむろに口を開いた。

「我々の検討の結果、君の希望を叶えてあげてもいいだろうということになった。君は感謝を捧げた方がいい」

そう言つて二枚の紙を取り出して並木の方へ重ねたまま押しやった。それをテーブルから拾い上げてみると、上にあった一枚は 就業規則の改定通知 と題されていた。

そこには 配置転換 という項があり、 (旧) 業務上必要がある場合に就業場所や職務内容の変更を命じることがあり、正当な理由なくこれを拒むことはできない という表記に代わり、 (新)

業務上必要があると判断すれば就業場所や職務内容の変更を命じることができ、著しい不利益であると認められない限りこれを拒むことはできない と改める旨記されていた。その下の段には、残業代に関する記述があった。 時間外労働 という項には、 業務上の都合により所定労働時間外あるいは所定休日に労働を命じること

がある という元々の表記に、（新） なお、割増賃金は従業員から正しく申告がなされたものに対し、別途定める賃金規定により支払うものとする というくだりが追加されていた。

どちらの項もひどい改定だった。それらは会社側に都合が良いように、厳しく改められた。あたかも、ずさんな実態が先行していて、それを無理やり正当化するための言い訳を後から設けたような内容だった。なにしろ現に、残業を勤務表にたった一日記入しただけで別の部門に追い払われた女性が目の前にいるではないか。そんな中で従業員が 正しく 申告などできるものか。

並木は顔を起こすと怒りに燃えた目で浅倉を射るように睨んだ。それを見返した浅倉の目には何か優越感のようなものがあつた。

「君の言う通りに直したつもりだが、不服かね。これで君は、これ以上のあら探しができなくなつたし、命令に黙って従わなくてはならなくなつた。まあこのことを指摘 いや、提案したのは君の方だからな。会社の役に立てて良かったじゃないか」

浅倉はここまで言つて一旦口を閉ざして間をとつた。並木を見下ろしたまま、にやにやと薄ら笑いを浮かべている。

「さて、次にその下の紙も見てみたらどうかね」

並木は浅倉を睨んだ目をゆっくりと手元に向けた。上の紙をどけると下から次の紙が出てきた。それを見た並木の目はそれに釘付けとなり、身体は瞬時に氷のように硬く冷たくなった。つい今し方まで目の中で轟々と燃えていた怒りの炎までが一瞬で凍って砕け散つたように感じた。そこには 異動通知 というタイトルがあり、その下には並木の名前と 本社情報システム部勤務を命じる と短く書かれていた。

「どうなっているんですか？ どうして？」

「昨日、君は他の部門に余っている仕事があるんだと言つたじゃないか。私が訊いてみると、その部長が君を引き取つてあげようと言つたんだ。いや、それでは語弊があるかな。情報システム部が君を迎えたいとこちらに申し入れたんだよ。あそこは人が足りないら

しい。早朝でも深夜でも文句を言わず、山のような仕事を黙々とこなしてくれる人手がな。優秀な君のことだ、きっと向こうの希望に合うことだろう」

今度は何が自分の身に降りかかってこようとしているのか、並木は悟った。情報システム部長もその課長も、先だって人手や仕事のことを訊こうと電話をかけた三人には含まれていなかった。

もはやわずかな声を絞り出すこともできなかった。それがわかると浅倉の口角がさらに上がり、その表情は、よりはつきりとした笑みに変った。

「土日はゆつくり休んで、月曜日からは情報システム部に出勤してくれ。辞令はそれまでに向こうに渡しておくから、あちらで受け取ってくれ。ちょうど新年度だし気分も新たに頑張ってくれたまえ。期待しているよ」

浅倉はそう言うのと、満足そうな笑い声を残して出て行った。

浅倉が出て行っても並木はそのままじっと座っていた。どうしてこんなに人を好き勝手にあちこちへと動かせるんだ？ 従業員なんて会社からみたらチェスや将棋の駒に過ぎないというのか？ こちらの人事政策には適材適所や人材育成といった考えはないのか？ そんなことをつらつら考えている時、ふと自分が、もはやそういう人事政策の対象からも外されてしまったと思いつた。少なくとも浅倉が今の職責を預かっている間は再び対象としてみられることはないだろう。果たして自分が耐えられなくなつてここを去るのが先か、それとも浅倉が今の職務を他の誰かに譲るのが先だろうか考えた。しかし、この問題が片付くような奇跡は当分起こりそうもないということもまたわかった。

スライド扉がゆつくり開く音がした。並木が顔を上げると、中村工場長が後ろ手に扉を閉めたところだった。こちらにやって来ると、テーブルの上に載ったままの二枚の紙に目をとめた。

「これを見ても構わないかな」

並木は小さく頷いた。中村は頷き返すとテーブルから二枚を手に取り、しばらくそれらをじっと眺めてから顔を上げた。中村の目がいつもより一回り大きくなったように見えた。

「これは驚いた。こんなことが簡単にできていいのか？」

中村は再び手元の書類に目を戻し、下を向いたまま並木に問いかけた。

「向こうでは何をしろと言われたんだね？」

先ほどの浅倉の言葉を簡潔に伝えると、中村は珍しく苛立ちの表情を浮かべた。

「こんなことをするなんて、やつにはいつか鉄槌が下るだろう。私の方が自分でそうしてやれないのがもどかしいよ。また放り出されるようでお前さんには辛いことが続いているな。ここの連中もお前さんのことを徐々にわかり始めていたところだったんだが。何もしてやれなくて心苦しいよ。本当にすまない」

そう言つて中村は頭を下げた。

並木はゆっくりと首を大きく左右に何度も振った。

「もういいんです。そんなふうに思ってくれてありがとございませう。こちらこそ迷惑をかけました」

そう言つた声はかすれ、涙が頬を伝い落ちた。

中村は顔を上げて、並木を元氣付けようとするかのようにゆっくりと言葉をつむいだ。

「もしかしたら、これはお前さんにとっていいチャンスなのかもしれないぞ。少なくともこれから行く先には仕事がある。もう読書じゃないんだ。大変かもしれないが、それを乗り越えれば元のように戻れるかもしれない。それにお前さんはF O Cから解放されたんだ」

並木は中村がそう言うのを聞いて驚いた。中村は静かに頷いた。

「ここがF O Cと呼ばれているのは知っているよ。流刑地だとか共同墓所だとか、ひどい言われようだ。でもここは、それほどまでに悪くはない。確かに追い詰められて疲弊したやつらが次々とやって来たよ。でもな、いつも競争ばかりを強いられる仕組みからドロツ

プアウトするなら、ここの生活はまんざらでもない。ここでは競争より協調を求められるんだ。最初は、自分にはここには溶け込まないぞとどんなに肩肘を張ってみても、最後にはそんな虚栄心など脇へ押しやってみんなまで助け合わなくちゃならなくなる。そうやって自分や周りの人をこれまでと違った眼で見つめ直すことができるようになるんだよ。これまでと別の生き方を見つけると言ったら、言い過ぎかな？ まあ、お前さんにも少しそう感じてもらえていたら嬉しいのだがな」

並木はゆっくり力強く頷いた。中村は優しい口調で言った。

「心配なのは、お前さんの体だよ。どうか無理をしないようにな」

中村が出て行つてからも、しばらくの間、並木はそのまま椅子に身を預けていた。壁の時計に目をやると、そろそろ作業場が休憩になる頃だった。食堂に人が来る前に顔を洗おうと決めて立ち上がり、テーブルから書類を取つて後ろのポケットに丸めて差した。

廊下に出たところで向こうから白川が歩いてくるのが見えた。並木はこんな顔を見られたくないと思った。とつさに反対の方向へ体の向きを変えてぎこちなく歩き出すと、白川が歩を速めてこつちへ来るのがわかった。

並木に追いつくと白川はすねてみせた。

「なによ。私を見かけて待つてくれないなんて」

そう言いながら並木の顔を見て、そこで白川は言葉を呑み込んだ。

並木の頬には白く乾いた涙の跡が筋になっていた。白川は並木の頬へ手を伸ばして指でそつと触れた。

「また何かあつたんですか？」

並木は顔を少し後ろに反らせた。

「たいしたことじゃないんだ」

そう言つてまた歩き出そうとした。

その時、白川が並木の後ろポケットに差ししてある丸めた紙を見つけて、すばやくそれを取り上げた。並木が制そうとする前に白川は

背を向けるようにして、それを開いて読もうとした。数秒間、白川は抗ったが、その紙に書かれた文字を目にした後はそうするだけの力もなくなつたようだった。並木は二枚の紙を取り戻すと、再び丸めてズボンのポケットに押し込んだ。

「顔を洗つてくる」

そう言つて白川の横をすり抜けて食堂に近い洗面所へ向かつた。白川は少し迷つてから、離れて並木の後ろを歩いてきた。

蛇口から勢いよく水を出し、並木はその下に頭を差し入れた。髪と首を伝つて顔に水が流れて落ちていく。そうすればあの忌々しい出来事を洗い流すことができるかもしれない。しばらくの間、そのままの流れの中でじつとしていた。やがて手を伸ばして栓をひねり、水の止まつた蛇口の下で顔をこすつた。

頭を起こそうとして、何も拭くものを持っていないことに気がついた。なるべく頭を動かさないようにして脇からちらりと後ろに目を向けた。そこには白川が手にタオルを持って立っていた。並木の視線に気付いて、白川はタオルを並木の濡れた頭にふわりと被せた。並木は頭を拭きながら白川を振り向いた。

「ありがとう。それから、さつきはすまなかつた。下に行かないか」
白川は黙つたまま何も答えない。並木は先に立つて階段を下りた。トラックヤードにはシートシャツターが降りていて誰もいなかった。並木は机から昨日浅倉が引き千切つた内容証明の残骸を取り出し、サンダルを突っかけて外へ出た。傾きかけた太陽から少し弱くなつた夕方の陽射しが降り注いでいる。やがて並木は白川に向き直ると、おもむろにポケットから丸めた紙の束を取り出して開き、手に持ってきた千切れた紙と重ねた。もう片方の手は上着のポケットからICレコーダーの端を持ち上げて白川にちらりと見せた。

「これを読んでこいつを聞けば、何が起こつたのかわかる。どうする？」

白川はきつぱりと言つた。

「今日、一緒に帰るわ」

それから三時間後、並木は陽が落ちて暗くなった歩道を白川と一緒に歩いていった。白川は、どこか静かに考えられるところを知らないかと並木に尋ねた。二人とも工場に来てさほど日が経っていなかったし、その間にこの辺りを探索する時間と気力があつた訳でもなかった。並木が思いついたのは、実家のある武蔵小杉駅北口のシテイホテルのラウンジくらいだった。

十五分後、二人はホテルの薄暗いラウンジの中にいた。窓のない隅の席に腰を落ち着けた。程なくテーブルの上には二組のコーヒーカップが載った。

並木は再び紙束を取り出して白川に渡した。白川はテーブルに置かれたキャンドルの灯りでそれを読んだ。目を通し終わると、黙ったまま掌を上に向けて右手を差し出した。並木はその手にICレコーダーを置いた。白川がヘッドホンをつけて再生を聴いている間、並木は目を閉じて静かに待った。

やがてヘッドホンをテーブルに置くかすかな音を聞いて、並木はゆっくり目を開けて白川を見た。白川はすべてわかったというように頷いた。

しばらくの間、二人は今日並木に降りかかった出来事について若干の会話を交わした。そのどれもが既に起きてしまったことであり、何かを変えることが難しいということもまたわかつていた。

会話が途切れ沈黙が訪れると、白川は小さなあくびをして背を反らせるように軽く伸びをした。椅子に座りなおしてテーブルのコーヒーカップを手に取ったが、コーヒーはもう冷めていた。あきらめたようにカップをテーブルに戻し、並木を真っ直ぐに見た。

「さて、私たちはこれからどうします？　たとえば上に行って少し眠るとか？」

薄暗いラウンジは、かすかに流れるジャズのしらべに染まっていた。その背景の中で、キャンドルの淡い灯りが白川の顔の右半分を浮かび上がらせている。アンバー色のベールをまとった右目の奥に

は、そこに映りこんだ並木の姿が揺らめいて見えた。炎が二人の間の空気を揺らす。そこにいる彼女は息を呑むほど美しかった。

しばし見つめ合った後、彼女はいたずらっぽい笑顔を浮かべて小さく舌を出し、左手にバッグを取って席を立った。並木も椅子を引いて立ち上がった。彼女はゆっくり歩み寄り、空いている右手で並木の腕に触れた。

八

四月最初の月曜日、並木は桜木町のアパートを出た。ここから会社に向かうのは久しぶりのことだ。扉に外から鍵をかけ、かかどが鉄板を蹴る音を伴って階段を下った。

通りに出ると左に進んで桜木町駅へ向かう。券売機を横目に駅構内をそのまますり抜けると、通称コンテナ街道を横断して一筋奥の海岸通に入った。そこからは真っ直ぐな道だ。横浜税関を左手に見ながら県庁舎の裏を進む。山下公園沿いに差しかかると蒼い海と停泊中の大型船が望めた。柵越しに見やると、芝生の向こうで犬を連れた老夫婦が朝の散歩を楽しんでいた。青々とした銀杏の若葉が屋根をなした長い歩道を過ぎて、山下橋の交差点を越えて釣り船屋の軒先をもう少し先に進んだところにエア・アート社の本社があった。並木の足で四十分少々のかねて通い慣れた通勤コースだ。

エア・アート社では浅倉が人事部長に就いてから、経費削減の名の下に通勤交通費が大幅に削られた。地図上の最寄駅はみなとみらい線の元町中華街だが、通勤経路として認められる乗降ターミナルは根岸線の石川町に統一された。理由はただ一つ、定期代だった。会社は、通勤に利用可能な路線の中で費用負担が最も少なくて済むルートしか認めないことにしたのだ。同じ理由で、バスや地下鉄は原則として利用できないということになった。さらに、それまでは毎月支給されていた通勤費が、六箇月定期分の代金を年に二回支払

うだけに改められた。これによって、実質的に支給される金額が大幅に減った。多少は自腹を切つてでも最短ルートで通勤して時間的な負担を軽減しようとする殊勝な者は、これで淘汰されることになった。

このルールは仕事で外出する際の交通費の精算にも適用された。しかも通勤定期でまかなえる区間を除いて請求しなくてはならないという徹底ぶりだ。しかし、自分で承認印を押せる一部の役職者は何らかの適当な理由を付記するだけで堂々と地理上の最寄り駅を利用できるという抜け道がすっかり用意されていた。そして、その例外的ルールを最も活用していたのは他ならぬ浅倉だった。このことは多くの従業員が知っていたが、それを指摘してやろうという冒険者はいなかった。

元町中華街から会社までは一キロ程度の道のりだが、これが石川町からとなると急ぎ足でも十五分はかかる。それならいつそのこと歩いて通おうと、並木は決めたのだった。天気さえよければ、それを苦痛だと感じたことはなかった。

今朝のよく晴れた空と穏やかな潮風が、並木の気持ちを少しだけ軽くしてくれていた。

並木は始業時間の三十分前に情報システム部のフロアに足を踏み入れた。一番奥の机には五十がらみの小太りの男が座っていたが、顔を上げて無愛想に並木を見ただけで声をかける素振りはない。机の間の狭い通路を進んでその前に立った。この男が部長の北村利世きたむらじよだ。

「おはようございます。並木です」

北村は挨拶を返す代わりに忙しく動かしていた手をパソコンのキーボードから離し、パソコン用のモニターの上に置かれた一枚の紙を差し示した。

「君の配属辞令だ」

並木は右手で拾い上げたが、その紙を見ようとせず、手を身体

の横へと下ろした。その様子を上目遣いに見ていた北村が素っ気なく言った。

「席は向こうだ」

それだけ告げると、北村はまたキーボードに顔を戻した。

並木は小さく肩をすくめると、自分の席を探そうと身体の向きを変えた。どうやらここでの毎日も思いやられるものになりそうだなと思った。救いがあるとするれば、それはトラックヤードに座っていないくていいことくらいかもしれない。そんな思いを振り払うかのように、ゆっくりと辺りを見回した。

情報システム部には、机を寄せ合った島が三つあった。そこでは誰もが、今のやりとりにもこの新参者にも興味がないというように黙々とそれぞれの机に向かっている。この時間が止まっていないという唯一の証拠は、右からも左からもせわしなく響いてくるカタカタというキーボードを叩く不快な乾いた音だけだった。

その時、奥の壁際に立つてこちらを見ている一人の女性に気付いた。視線が合うと、その女性は小さく手招きした。並木はもう一度北村をちらりと振り返ってから、諦めたようにそちらに歩いて行った。

並木が近付いていくと彼女は隣の席を示してから言った。

「私はここでグループウェアを担当している汐崎ひなたです。よろしくお願ひします」

これまで情報システム部とあまり縁のなかった並木は苦笑いを浮かべて尋ねた。

「ここはいつもこういう雰囲気なんですか？」

「まあ、こんなものです。きっとそのうちに慣れますよ」

そう答えた汐崎は、濃い茶色の瞳と、小さな八重歯が覗くあどけない笑顔の持ち主だった。この乾いた砂漠のような空間で、そのことがちよつとした安堵感を並木にもたらした。

挨拶を簡単に済ませて腰を下ろすと、並木が問いかけた。

「それで、私がここで何をするのか、君は知っているのかい？ さ

つき言っていたグループウェアとかいうものの仕事をするんだろうか？」

「ええ、仕事としてはそうです。ここでは社内のLANネットワークに関することが主な業務なんです。今は全従業員が利用するグループウェアの再開発に取り組んでいます。並木さんは、コンピュータやネットワークのことに詳しいですか？」

並木は首を横に振った。

「残念ながら、メールのやりとりがせいぜいさ」

それを聞いた汐崎は少し困ったような表情を見せた。

「それではちよつと大変かもしれませんね。では、わかっていただけるように頑張つて説明してみます。コンピュータを扱う仕事は、大きく分けてハードウェアやソフトウェアやネットワークなど、本来はいくつかの分野があるんです。でも私たちの担当にはそれぞれ要素が少しずつ入ってきます。ですから専門的なところは外注先に協力してもらいながら進めています。まず、社内では全部の部門がケーブルでつながっているのはご存知ですね。そのケーブルは決まった場所を基点に各所へ伸びているんです。喩えて言うなら、駅のようなものですね。会社から交通費をもらうためには、通勤でも外出でも石川町の駅を通るでしょ？ そうやって会社に来たり家に帰ったり工場へ出かけたりにして、石川町を基点にして会社や自宅などを線で結んでいるんです。この基点のことをサーバーと言っています。ちゃんと交通費をもらうためには、どこへ行くにもここを通つていくんです」

汐崎はここで一旦言葉を切つて並木を見やり、話についてきていることを確かめた。

「サーバーには駅の改札のような機能があつて、ちゃんと切符を持つていないと通れないようにできています。切符には種類があつて、この仕組みの中でその人が得ている許可の範囲によってどの切符が割り当てられるかが決められます。このことをアカウントと権限と言っています。そして切符を使つて改札を出たり入ったりするのが

データという訳です。こうして関わりがある人たちで使えるように用意された枠組みをインフラと言い、その上でつながるそれぞれの導線の集まりをネットワークと呼んでいます。……あれ、かえってわかり難いかしら？」

真剣な面持ちで、並木にもわかるように工夫して説明しようと思戦苦闘している汐崎に、並木は思わず微笑んでいた。それを見て少し自信が湧いたようで、汐崎は話を先に進めた。

「それで、この仕組み上で交通費を請求しようと思ったら、共有のフォーマットにルールに従って記入して提出します。そうして建て替えたお金が返って来るんです。ここで使う伝票や提出の方法など、みんなが共有して使うソフトがグループウェアにあたります」
再び汐崎が言葉を切った。並木が頷くと、汐崎はまた話し始めた。

「これをつまく使うと仕組みに乗っている人たちの利便性が向上するんです。これまでは従来のものを改良しながら使ってきたのですが、最近は従業員が急に増えたので対応できなくなってきたんです。それに仕組み自体も古くなっていて、今となっては機能も中途半端なんです。たとえばメールを使おうとした時に、どのパソコンでもログインすればメール送受信そのものはできますが、今までの送受信履歴は普段と違うパソコンでは見られないとか。これは、ネットワーク環境を上手く使えていないから起こることなんです。社内の送信先をまとめたアドレス帳リストはネットワーク上にあるからどのパソコンからでも利用できるけど、メールの履歴は個々のパソコン内部に保存されているから他所からはいつでも見られる訳ではないといった具合ですね。常に自分専用のパソコンを持っている偉い人にとってはあまり問題にならないのですが、数台のパソコンをみんなで共有している部門などではとても不便になってきています。まだ従業員が少なかった頃なら上手く融通できたでしょうし、異動があればその度にパソコンを担いで動けばよかったです。異動がそろそろネットワークの利点をしっかり活かすべき頃合だろうという判断になったんです。人事異動のたびにみんながパソコンを抱え

て移動するのも経費がかかることだし、それはもうやめたいですからね。まあ諸々あって、今回は費用をかけてもやるうということになりました。だから今のものに代わる新しい仕組みを開発しようとしています。あっ、そうそう。誤解のないように言っておきますが、さっきの交通費の請求は喩え話で、実際には別の業務システムで経理部が処理していますので、今の話と混同しないでくださいね」

並木は話をうまく咀嚼できずにやや困惑していたが、今は汐崎の努力を買うことにした。もう少し先に進めば理解できるかもしれないと思った。戸惑いを顔に出さないように気をつけて先を促した。「それで、そのグループウェアが完成すると、どんなことができるようになるんだい？」

汐崎は軽く頷いて、説明を再開した。

「まず一つとしては、ネットワークでつながっている人同士で、ファイルやデータを簡単に共有できるようになります。現状では、業務を処理するためのシステムは各部門がそれぞれの事情に合わせて別々の仕組みを持っていて、それらは実はシステムの連携がらくに取れていません。ある部門が別の部門で処理されたデータを利用しようと思ったら、とても手間がかかってしまふんです。たいていは、目的のデータがどこにあるのか探すところから始まります。ネットワーク自体はあるのですが、実態は端々で途切れてしまっていて、つながっているんだと実感できるのはメールくらいのもんです。でもせっかくインフラがあるのだから、ある部門のシステムから出てきたデータを、別の部門のシステムで読み込めたらずつと効率的でしょ？ そのために、部門間のデータをマッチングさせて、ボタンの一つで目的のデータまで辿り着けるようにしようと計画しているんです。いわば交通整理をして、バイパスを通そうという訳です。たとえば、販売部門が広告計画やそのレスポンスを需要予測システムや販売管理システムから出力しておき、それを工場の生産管理システムが取り込んで製造工程の計画に使う。次に工場は生産計画を出力しておいて、それは物流部の在庫管理システムが利用する。こ

うすれば、必要な情報をタイムリーに相互活用できることになりま
す。システムのデータを自動で渡すというところまで突っ込んで
やる訳ではありませんが、まずはこちらで通したバイパスをちゃん
と認識して使ってもらうためには全部門に跨って使えるインターフ
ェイスが要るといふことなんです」

「中身はちよつとしたコンサルティングだな」

「ええ、システムは手仕事を機械的な作業に再設計するものでは
らね。絡んだ糸を多少は解いてからでないシステムにならないん
です」

並木はようやく話が呑み込めてきた。小さく頷いてから再び尋ね
た。

「それができた暁には他にどんなことが可能になるんだい？」

「使い方を工夫することでいろいろと考えられますね。まず、権限
に差のあるアカウントを利用すれば必要な情報に絞ってアクセスす
ることができます。たとえば経営幹部が経営判断に用いるデータや
資料をいつでも取得できるようになれば、月報を早く寄越せと現場
をせっつく回数が減りますね。また、何か新しいアイデアについて
の意見を集めたければ、ネットワーク上でアンケートをとることも
できるでしょう。それから、自分の情報を公開することを選んだ人
については、個人のスケジュールを見ながら同僚に作業分担を依頼
したり、その情報を管理職が利用すればタスクの割り当てや業務負
荷を平準化するのも容易になるでしょう。他には、共有設備や会議
室などの使用予約もここに統合されます。予約と同時に、日程や議
題を会議の参加者へ一斉に通知したり、簡単に出欠の確認をとりつ
けることができるようになるでしょう。さほど深い議論を要しない
議題なら、パソコンを介して簡易な会議を開くことも可能になりま
す。一風変わった使い方としては、ブログや掲示板を開設して従業
員同士のコミュニケーションを図るなんていうことも考えられます
ね。それからさっきの交通費の喩えで言えば、經理のシステムから
精算に必要な機能だけを手早く呼び出したり、処理済みデータを力

レンダーに連携させて現金の出金予定日を画面で確認したりできるようになると思います」

汐崎はここで深く息を吸った。

「そんなふうになれば、もう伝書鳩の足に切符をくくりつけて飛ばして、コインをくわえて戻ってくるのを待っていなくていいんです」この最後の言葉は、まるで夢の話語るような口調だった。

エア・アート社の現状は疑いようのないアナログ式で、何でも紙の書類と伝票と人の手に頼っている。会議室の予約も、管理部に電話すると受話器の向こうから台帳をめくる音が聞こえてくるほどだ。しかしここ最近では従業員の数が急増したために必要に迫られ、パソコンの大群がIT化の号令を伴って荒波のごとく押し寄せて古いやり方を瞬く間に流し去ろうとしている。それでも今の汐崎の話はまだまだこれからのことなのだ。そんなことを考えながら、並木は頷いた。

「なるほど。社内のネットワークをもっと活用して、様々なニーズのマッチングを行うことで業務効率やスピードを飛躍的に上げようということか。それには、みんなが同じように便利に使えるインターフェイスが要るから、これからここでそのツールをこしらえる。すると、いま飼われている勤勉な鳩たちはめでたく山に帰される訳だ」

その言葉に、恥ずかしそうに汐崎が顔を赤らめた。

「なんだ、わかってるじゃないですか。あんな下手な喩え話なんかするんじゃないわ」

並木は今はまずかったというように顔の前に手を上げて、慌てて言った。

「いや、君の話が上手かったから理解できたのさ。ありがとう」

汐崎は小さく頷いた。

その時、並木はあることに気がついて話題をかえた。

「ところで、君はずっと情報システム畑なのかい？」

「いえ、大学では英文学を専攻していました。その後は翻訳の仕事

を志したのですが、なかなかうまくいかなくて。結局は出版社に六年ほど勤めて、そこで高校生向けの英語教材の編集をしていました。五年前、この広告部門が求人を出していて、チラシや雑誌向けの編集ならできそうだと思って応募したんです。採用はされたんですが、「配属が決まってみるとなぜかパソコンの前にこうして座らされていたんです。もう出版社は辞めてしまっていたし、仕方ないと思って受け入れました。実は今でもまだ、そんなに納得がいつていないんですけどね」

並木は肩を落とした。ある程度は答えを予期していたものの、突きつけられてみるとやはり驚く。採用条件さえ守られていないとは。汐崎はこれまでの経験とも自らの希望とも異なる畑に放り込まれ、気がついた時に周りに居たのはコンピュータを扱うスペシャリストたちだった。彼女はどれだけの苦勞をしてこれほどの知識や技能を身につけてきたのだろうか？ なぜここでは働く者の目標やそれに向かうエネルギーを活かそうとしないのだろうか？ 企業は人なり。それをしなければ、いずれ会社は衰退の道を進むことになってしまう。並木はそう思うと、嘆きと憤りが入り混じった奇妙な感覚を覚えた。そしてまたふと気付く。汐崎は大学を卒業してから六年間別の会社に勤めてきて、ここには五年いる。ざっと足し算をしてみても並木とほぼ同年代ということになる。しかし汐崎の顔立ちはそれよりずっと若く見える。そんなことをつらつら考えていると、汐崎がそれを察したように、いかにも恥ずかしそうに言った。

「計算が合わないって思ったでしょ？ 童顔だっって言われるんです。いいことかどうかはわかりませんが」

きつと、それはよく問われることなのだろう。並木は微笑んで、ここで話を戻すことにした。

「ところで、グループウェアのことだけど、どんな仕事になるんだろうっ？」

「そうですね、まずは各部門の業務を簡略に一通り知るところから始めます。個別の業務システムで完結しているものは除いて、他部

門と関連すると思われるものに絞っていきます。端的に言えば、業務が重複しているところをピックアップしていくんです。次に全体をざっと見渡して、無駄を省いて標準化できるものはないか検討します。それから」

「なんだか大変そうだな」

並木は思わずそうつぶやいた。汐崎がそれに頷く。

「ええ、そうですね。でも、これはとても大切なことなんです。一昔前の景気がいい頃の話では、その頃は部門ごとの要求に合わせて個別にシステムを作り込んでいたそうです。事情が変われば、後からそれに何度も手直しを加えていくんです。でもシステムをなだめて使うにも限界があつて、いずれどこかでうまくいかなくなつて大きな歪みが出てくるものなんです。こちらを直せば、あちらに影響があるという具合で、システム自体にバグが起こります。やがて収拾がつかなくなるとそれを棄てて、システムそのものを新しく作るしかなくなります。そこで最近では、一つの標準化された仕組みを用意して、その使い方を個々の部門が工夫するといった流れが主流になってきたんです。それは、全体の大きなルールの下で、小さな集団が調和しながらうまくやっていくということです。個別の事情や要求に他が合わせるのではなく、全体の最大公約数の中で個々のやり方を考えていくんです。それをするには、この作業が必然なんです」

並木は、その話がわかつた印に頷いた。汐崎は先を続けた。

「まあ、今回は業務システムを作る訳ではありませんから、個々の中身を掘り下げて分析するつもりはなくて、本に喩えれば目次のような役割のものをイメージしています。ここから必要なバイパスに効率よくアクセスしてもらうんです。それから、ここにはメールやスケジューラーなども統合して、トータルで業務効率が上がる一助になるようなツールを目指します。それがまとまってきたら、グループウェアで実現するべき機能を確定させて仕様化します。この時に、枠は大きくとっておくとしても仕組みは極めてシンプルになる

ように設計します。大がかりなものにしてしまっても、使われないと意味がありませんからね。こうしている間にも作業は進んでいて、もう最初の方はだいたいの片付いています。この後は、集めた情報を再検討して、足りない情報を補いながらあるべき姿を描く段階に入ろうとしています。ここからは外部のソフトウェア会社が作業に加わることになっていて、開発はそちらに外注されます」

そこまで聞いたところで、並木は再び不安になり始めていた。そんな専門的な業務の中で、果たして今の自分に何ができるのだろうかと考えた。そんな思いが口をついて出てしまった。

「その中で私は何をすればいいんだろう？」

汐崎はちよつと驚いたような表情を浮かべた。

「何って、あなたはこのプロジェクトのリーダーなんですよ」

「えっ、何だっつて？」

並木は我が耳を疑った。汐崎がもう一度繰り返した。

「そう、責任者です」

汐崎は並木に他のプロジェクトのメンバーを紹介した。それから山のような資料を見せてこれまでの経過を説明したが、並木は心ここにあらずといった様子だった。

その後の時間は飛ぶように過ぎていった。時計を見上げると、針はもうすぐ食堂がランチの提供を終える頃だと告げていた。汐崎が昼食にいきこうと誘ったが、並木は食欲がないからと断った。

汐崎たちが席を立てて出て行くと、入れ替わりに浅倉人事部長が入ってきた。今日は例の眼鏡をかけていないが、マスクはつけていた。それを外すと、下からにやけた表情が覗いた。その時、浅倉の後ろを通り過ぎようとした女性が立ち止まって声をかけた。

「部長、花粉症ですか？」

浅倉が顔だけ振り向いて答えた。

「河合さんか。そう、花粉症なんだ。ほんとと嫌になるよ」

「そういう人が多いですね。部長のもスギですか？」

「ああ、今はスギだがこの後間もなくヒノキが来て、夏が終わるとブタクサとヨモギに襲われるんだ。近頃では初夏にもう一山くるようになって、何か別の草が放った矢にもこの目と鼻が応戦するようになってしまったんだ」

「まあ大変ですね。それはイネ科か何かなのかしら。都会でもそんな雑草は多いですからね。それにしても一年の半分はその大きなマスクをしていることになるんですか？ 何か木や草の恨みを買うようなことをしました？」

浅倉は大げさに肩をすくめて答えた。

「身に覚えはないんだが、きっと重罪だったんだらう。おかげで外に出る時は眼鏡とマスクが欠かせないんだ」

「眼鏡って、あのスキーゴーグルみたいなやつですか？」

「いや、それは嫌だったから、なるべく普通の眼鏡と同じ形のものを探したんだ。しかしどうしてもレンズが大きめになってしまいうから、多少はおしゃれに見えるようにカラーレンズにしてみたんだが」

「あらそうですか。似合いそうですね。では、お大事に」

そう言つて河合と呼ばれた女性は歩み去った。

浅倉は並木に向き直った。顔はにやけたままだが、口調には皮肉が込められていた。

「新しい職場と仕事は気に入ったかね、プロジェクトリーダー君」

並木は浅倉を睨んだ。

「そんなに怖い顔をしなくてもいいだろう。ご要望通り、君の環境は何もかも新しくなったんだ。ところで仕事のことは聞いたな？」

並木は黙って頷いた。それを確認して浅倉が続けた。

「そういうことで、君のプロジェクトには大変な期待と経費がかかっている。失敗はできないぞ。もし結果が出なければ君は責任をとらなくてはならないだろう」

ここまで言つと浅倉は片方の口元を持ち上げて、よりはつきりと笑みを強調した。

「こんな大役を仰せつかつて、君の弁護士さんはさぞ喜んでおられ

ることだろうな。そっちの言う通りになっただから。まあよろしく言ってくれたまえ。もつとも連絡を取る時間があればの話だが」
並木はなにやら嫌な予感がした。背筋が妙にぞくぞくする。その時、ふとあることを思いついた。試みに尋ねてみる。

「もう誓約書とやらは出さなくていいんですね？」

「いや、出してもらおう。君の場合はどうせ必要になるんだから早い方がいい。明日、取りに来る」

並木は言葉を継ごうとしたが、浅倉はそれに構わず背を向けて出て行った。

その日、仕事が終わって並木が自宅に辿り着いたのは、日付が変わる僅か数分前だった。

翌日の昼前、並木が汐崎と並んで資料を検討していた時、昨日と同じように浅倉がやってきた。浅倉は社内ではいつも、革靴を机の下に押し込んで底の平たいサンダルに履き替えて過ごしていた。こちらに近寄ってくる時にそれがペタペタと不快な足音を立てた。

浅倉は並木の前に立つと汐崎には構わず乱暴に言った。

「約束の時間だ。誓約書を出せ」

「昨日は仕事が終わって帰ったのが遅かったんです。用意していません」

その言葉を聞いた浅倉の顔が一気に紅潮した。身を乗り出して目の前の机を激しく叩いた。その大きな音に、何人もの耳と目がこちらを向いた。

「私は出せと言ったんだ。君の事情など知ったことではない」

「出せません。それにもし部長が言われる通りなら、この配置転換によって責任ある仕事に就いたのですから、仕事がないから辞めるかもしれないという前提は崩れたはずですよ。もはや誓約書は必要ないはずで」

「必要だから、私は出せと言ったんだ。君はここで生涯勤め上げるとでも言うつもりか？」

浅倉が声を一層荒げた。

並木はできるだけ冷静でいようと努めた。間を取り、深く息を吸い込んだ。

「私はエア・アート社が好きです。だからずっと勤めてきたし、今もこうして頑張っているんです」

浅倉は並木を鋭くねめつけると、吐き捨てるように言った。

「ふざけたことをぬかすな。君にずっと勤められては困るんだよ。さっさと誓約書を出して、ここから出て行け」

浅倉はそれが失言だったと気付いたのか、落ち着こうと一呼吸置き、取り繕うようにわざとらしく背筋を伸ばした。

「まあ、何にせよ誓約書を早く出してくれ。そうじゃないとこっちも叱られるんだよ。我が社が好きだと言うなら、もっと協力してくれ。もう一日待ってやる」

そう言うつと身体の向きを変えて立ち去ろうとした。並木の言葉がその背中を追った。

「弁護士とまだ話ができているんです。今回の配置転換のことも伝えることができます。少し時間をください」

「弁護士など関係ない。明日また来る」

浅倉は振り返りもせずに出て行った。それを合図に、こちらを向いていた者たちは一様に押し黙ったままそれぞれの机に向き直り、辺りにはまたいつものようにキーボードを叩く乾いた音が戻ってきた。

そのやりとりを傍で聞いていた汐崎は、ちらりと北村部長の席に目をやり、そこに誰もいないことを確かめた。そして遠慮がちに囁いた。

「なんだか複雑な事情がありそうですね。よかったら聞かせてくれませんか？」

並木は驚いて汐崎を見た。みんなが申し合わせたように自分は関わらずに済むようにと素知らぬ顔で振舞う中、この女性は自らこの揉め事に首を突っ込もうというのか？ 並木は気を取り直し、穏や

かな口調で言った。

「ありがとう。でもこんな面倒には巻き込まれない方がいい」

しかし汐崎はきっぱりと答えた。

「教えてください。もし並木さんが嫌でないなら。ただ、私はあんなやつが許せないんです」

そう言うてのけた汐崎の口元には決然とした厳しさが浮かび、そこにはもう八重歯は覗いていなかった。

並木は汐崎の目を正面からじっと見つめた。やがて彼女は頷くと、並木を促してそつと席を立った。二人が出て行くこうとする時も、辺りに反響するカタカタという乾いた音はやまなかった。

二人は廊下に出ると黙ったまま奥へ進んだ。階段の手前に差しかかる、そこまで平面だった壁にくぼんだ場所があった。そこにはひっそりと隠れるようにして白い鉄扉があり、黒いカツティングシートで 機械室 と記されていた。汐崎はそれを開けて中に入った。並木を奥へ通すと扉を閉めて、内から鍵をかけた。

部屋の中を見回すと、天井の辺りにはこの階へ引き込まれた配線があつて、それは上下の階へと延びた太い線の束につながっていた。壁には配電盤や空調の切り替え盤などが埋め込まれている。普段この部屋に立ち入るうとする者は滅多にいないのだろう。

ここは意外に広くて蛍光灯の照明もあつた。床には口が開いたままのダンボール箱が雑然と置かれていた。箱の広い方の側面には 保管箱 と印刷されている。狭い方の側面には 保管場所 倉庫 と印刷されたシールが貼られ、黒のマーカーでその横に 仮 と書き加えられていた。

汐崎の説明によると、ある時この部屋の利便性に気付いた少数の者が内緒で倉庫の代わりに利用し始めた。鉄扉の鍵はいつもかかっていた。ないかつた。

いつの間にか、ここにはちよつとしたルールができていた。まず、誰かが使用している時は中から鍵をかける。外からノブを回しても

扉が開かない時は使用中だとわかる。ノブが二回以上続けて回された時は、招かれざる者であるという証拠なので中にいる者は用心して速やかに退散しなくてはならない。そもそもこの鉄扉を開ける用事がある者は、密かなここの利用者と、滅多にやってくるこのない管理部の連中くらいのものだった。ここは次の消防検査で指摘されるまでは、社内で最も秘匿性の高い場所なのだ。

汐崎が話しを続けた。

「ここには長居をしないルールなの。せいぜい三十分くらいで出ていかなければなりません。それで収まるように話を訊かせてください。そうしたらその続きを訊くための、別の方法をきつと思いつくわ」

並木は腕時計を確かめてから、これまでに起こった出来事をごく大雑把に話して聞かせた。汐崎はそれを聴きながら、次第に呆気に取られた表情へと変わっていった。そして並木が話を終える頃には、汐崎の両目の端は斜めに吊り上って見えた。

「ひどいですね。許せないわ。それに就業規則の身勝手な変更のことも気になるわ。みんなに降りかかることだもの。でも、まずは誓約書の件から何とかして逃れなないと。どうも話の流れからすると、並木さんがつかんだ製品の問題が漏れ出さないという保険をかけてから、なるべく早く首を切りたいというように聞こえますね。そうだとすると目下の課題は、弁護士さんに急いで連絡を取ることですね。昨日のように残業していると、それもままならないもの」

汐崎は言葉を切って考えを巡らせるように黙りこんだ。やがて顔を上げると、再び口を開いた。

「ところで、さっきの浅倉の言葉で気になったことがあるんです。確かあの時、困るとか叱られるとか、そんなことを口にしていませんか？ いったい何に困ったり誰から叱られたりするんです？ だって自分の一存でこんなことをしたはずでしょう？」

その言葉に並木ははっとした。しばらく目を伏せて、そのことを考えた。そういえば以前にも、何か似たようなフレーズがあったよ

うな気がする。腕時計を再び見やる。時計の針は確実に進んでいた。この限られた時間の中ではその答えを見つけられそうにないとわかった。後でノートを読み返してみようと頭の片隅に留めた。

「とりあえず一旦席に戻りましょう。次に立つときは携帯電話を持っていつてください。どこかで弁護士さんに電話できる時間を作りましょう。明日また人事部長がやってくる前にできることはしておいた方がいいわ」

そう言うと汐崎は鉄扉に手を伸ばして鍵を開けた。

二人は少し距離を空けて歩いた。先に汐崎が席につき、まだ北村が戻っていないことを確かめた。後から廊下を歩いてくる並木に目配せし、小さく頷いて敵が不在だと知らせた。並木は小走りに席に戻ると、何事もなかったかのように机の上の書類に再び目を通し始めた。隣では汐崎が別のファイルを取り出して何かを探すようにペー지를めくっている。やがて目的の箇所を見つけると向いの座席まで聞こえるように言った。

「物流部に追加のヒアリングに行ってきます。並木さんも一緒に来てください」

並木は頷いて上着を羽織り、ポケットを上からそつと叩いて携帯電話があることを確認した。それからふと思いついて鞆からノートを取り出して脇に抱えて立ち上がった。

物流部の扉の前まで来ると汐崎が小声で言った。

「私は事務所に行きます。追加のヒアリングを一応しなくてはならないので。適当に時間を稼ぎますから、そちらが終わったら私の携帯電話を鳴らしてください」

汐崎から携帯電話の番号を受け取ると、並木は扉を素通りして裏からそつと外に出て、トラックヤードを回り込んで建物の影に入っていた。

フェンスと建物の間は陽が当たらずひっそりとしていた。足元の地面は苔むした土の上に小石が散らばり、そこに人の足跡はなかった。建物からこちら側に直接出てこられる扉も、開いたままの窓も

ない。周りを見回して誰もいないことを確かめると、並木は携帯電話を開いた。短縮ダイヤルを叩いて牧山の事務所をダイヤルした。

呼び出し音が八回鳴ったところでようやく応答があった。電話をとったのは牧山だった。

「ああ、並木さん？　ちょうどよかった。今、外から帰ってきたところなんですよ。会社の方はどうでしたか？　連絡がなかったから心配していたんですよ」

並木は今立っている場所のことと今日までに起こった出来事を手短かに伝えた。黙って話を聞いていた牧山が答えた。

「うーん、そうでしたか。まずは魔の座席からは脱出できたんですね。それはよかったです。しかし、まだ難題が山積ですね」

言葉が途切れ、短い沈黙が降りた。考えをまとめ、牧山が再び口を開いた。

「推測するに、人事部は内容証明にびつくりして一旦は突っぱねようとした。だけど、それは難しいだろうと思いついた。ならば今度は一転、仕事漬けにして弁護士のところへなど、そうそう行かれないようにしてやろうと考えた。しかし本音は、何とかして会社から追い出したい。そこで並木さんの専門外で且つ責任の重い仕事をあてがって、何か失敗をすれば即刻責任を取らせ、もし何もミスがなかったとしても精神的な重圧に耐えかねて自分から逃げ出すように仕向けることにした。だが一方では並木さんが握っている情報が気になって仕方がない。だけど、それが何なのかわからないから、うかつに手を下せない。万一にも欠陥や何か外に漏れては困るから一刻も早く誓約書を書かせておきたい。想定外の事態が起こった時には、並木さんに責任を負わせられるように。そんなふうに考えれば辻褄が合いますかね。でも、どうしてだろう？」

「何がですか？」

並木が問い返すと、牧山はちよつと考えてから答えた。

「いや、今まで並木さんから訊いていたことやICレコーダーに録音されていたやりとりから私が想像していた浅倉のイメージと、今

回の動きが符合していないような気がするんですよ。浅倉はどちらかというと思慮深いとか戦略的という印象ではなかったんです。感情的で場当たり的で、いざとなれば何であれ権限をかざせば押し通せるだろうと考える短絡的なタイプだと思えた。並木さんが最初に問題を具申した時に、その対応として浅倉は工場　FOCでしたっけ、そこへの左遷を手配した。単に、そこがFOCと呼ばれる場所だったことが理由だったんでしょう。でも顧客サービス部と工場との業務上の関連や、そもそもこの問題の発端になった事柄が工場とつながっているかもしれないと考えるほど、彼は利口じゃなかった。そして並木さんは、そこで新たな事実をつかむことになった。しかし今回の立ち回りはどうです？　少なくとも、この一連の事情とは関連のなさそうな部門や業務を選んだとは思いませんか？　もしさっきの推測が当たっているとしたら、少々手がこんでいるように感じるんですよ。今までがこういうことの対応に慣れていなかったとして、その分を割り引いたとしても、随分とギャップがあるような気がするんです。誰かが知恵をつけたか、別の人物の判断が介入したと考える方が自然だと思っんです」

そこで並木ははつとした。そういえばついさっき、機械室で汐崎は何と言っていた？　浅倉の言葉で気になったことがあると。そう、彼女は浅倉の　困る　とか　叱られる　といったフレーズを指摘していた。だって自分の一存でこんなことをしたはずでしょう　とも。その時に頭の片隅に留めておいたことも思い出した。そうだ、ノートだ。

並木は携帯電話が落ちないように肩で押さえるように挟むと急いで両手でノートを広げてページを繰り始めた。あった、初めて牧山の事務所に集った時に夏目が投げかけた疑問の言葉だ。ノートには職務権限、　トカゲの尻尾　と書き留めてあった。確かこの時、夏目は　人事部長の独断　だと思つかと訊き、浅倉のことを自分で責任を取りたくない保身に長けたタイプだと感じると言っていた。

その時、電話の向こうで牧山の声がした。

「並木さんつてば、訊いてますか？」

「ああ、すみません。考え事をしていました」

「大丈夫ですか？ 話を続けてもいいですか？」

「はい、お願いします」

「では、今の話しを並木さんはどう思います？」

並木はきっぱりとした口調で答えた。

「私もそう思います。たぶん全部が人事部長の権限のうちに行われたものではないでしょう。前回夏目先生がそんな指摘をしていたのを思い出したんです。それに浅倉部長の態度がある日を境に変化したんです。以前、内容証明が届いたと言いに来た日までは、とても苛々していてお前の仕事は読書なんだと突っぱねていました。でも翌日になって異動通知を持ってきた時には不気味なほど落ち着き払っていたんです。この間に何かを決断した人物がいたんでしょう。」

浅倉部長とは別の誰かが。そう考えれば腑に落ちます。そのせいなのか、浅倉部長の発言の節々には微妙に引っかかるところがあるんですよ。他の人物の存在を推測できるような言葉があるんです。今日、浅倉部長とのやりとりを聞いていた同僚も、言い回しにおかしな点があると言っていました」

しばしの沈黙の後、牧山が言った。

「黒幕がいますね」

それから二人はこの黒幕の存在を確認する方法を議論した。しかし、なかなか妙案は浮かばない。牧山が問いかけた。

「その黒幕ですが、そいつは社内の人物だと思えますか？ 向こうも弁護士か誰か、社外の人物がついたとは考えられますか？」

並木はその可能性を素早く検討した。確かにそうかもしれない。会社にも顧問弁護士はいるだろう。しかし並木はもう一つ思い出したことがあった。

「社外の人物である可能性はあると思います。牧山先生の内容証明が届いた後で浅倉部長がやってきた時に、そこに書かれていた不法 という言葉を苦々しげに吐き捨てるように言っただけです。だか

法的解釈を気にかけてのなら、法律の専門家に相談したということとは充分考えられます。でも今はまだ、オブザーバーのような立場で単に助言する程度なんじゃないかと思えます。その時、彼はこうも言ったんです。我々、検討の結果、そして感謝を捧げる。この三つの言葉がどこかしっくりこないような気がして印象に残っていたんです。特に最後の言葉。誰に捧げろというんだろ。その時はピンときませんでした。今考えると推測がつきま。彼がそれほどうやうやしく言うのは、自分の上司だけです。「その上司というのは？」

「常務と専務と副社長、それから社長です」

短い沈黙が降りた。それを破って口を開いたのは牧山だった。

「なるほど。それで、その三人の中で最も黒幕に近いのは誰ですか？」

「まだわかりません。製品の重大な問題や期待の新製品のこととなると、経営的には大きな問題ですからね。この中の誰でも立場や会社を守るうとするでしょう」

「ではその中で、今回の一連の出来事の中に並木さんと接点があった人はいますか？」

並木はしばらく考えた。

「接点があったのは副社長と社長です。特に……」

そこまで言って、並木は胸を矢で射られたような鋭い痛みを感じた。

牧山が先を促す。

「特に、誰ですか？」

やがて並木は観念したように口を開いた。

「社長です」

並木は裏切られたように感じて気分が沈んでいくのがわかった。それでも、鈍ってきた思考回路を突いて、なんとか考えを巡らせた。もし社長が黒幕であるとするなら、社長宛に送信したメールに返信がないことにも合点がいく。しかし、あの人のいい社長が果たしてこんなことを指示するだろうか？ そんな疑問が浮かんだが、並木

はすぐにそれをかき消した。この状況は社長に疑いの目を向けると言っている。

電話の向こうでは、様子を察した牧山がひとまず話をまとめようとした。

「とりあえず社長に関しては、現段階では仮説に基づく疑いの対象でしかありません。後で事実をつかんだら具体的に検討することにしてしましよう。それからもう一ついいですか？」

「はい」

そう答えて、並木は気持ち切り替えるように努めた。

「改定された就業規則の件なのですが、労働基準監督署には問い合わせましたか？」

監督署と聞いて並木はドキッとした。あの嫌な思い出が脳裏をかすめる。

「いえ、訊いていません」

「それなら電話してみてください。就業規則は会社が勝手に変更できないようになっていて、従業員の代表者を選んでその人の書いた意見書を添付して監督署に提出しないとならないことになっています。ちなみにその代表者には誰が選ばれましたか？」

並木は狐につままれたようにぽかんとした。代表者？ 選出？

意見書？

「いえ、そんな様子は何もありませんでした」

「それなら人事部長がいない時を見計らって人事部の誰かにその意見書を見せてもらったらどうですか？ コピーか何か、控えをとつてあると思います。あまりにも短期間にあっさり就業規則を変えましたから、きっとそこも強引なやり口でやったんでしょう。ほころびが残っているかもしれせん。もし何か出てきたら監督署に持ち込んでみましょう」

「わかりました」

「それからまた人事部長が来たら、誓約書云々という件は弁護士から会社に申し入れをするように準備しているとでも言っておきましょう」

おいてください。こちらも検討しているからと。そもそも全従業員がそれを書かされていて並木さんだけがまだだと言うならわからない話でもないんですが、今回は明らかにイレギュラーですから、向こうの主張は押し通せないだろうと思います。最後に、今後もし何か起こればこちらに連絡してください。ご存知のように土曜日などは事務所が留守番電話になっていますが、私は出てきていることが多いですから。番号をもう一つ教えておきますね。いわゆる裏番号ってやつです。誰もいない時には私の携帯電話に転送されるようにセットしておきます。それでもつかまらなければファクシミリを送ってください」

そう言つて牧山は二つ目の番号を伝えて電話を切った。

並木は携帯電話を畳んで、今の電話の内容と自分が置かれた状況について考えた。会社の拘束時間中はなるべく席に座っていて、北村の目を気にしてはいなくてはならない。こつやつて必要な都度、電話を使うことは難しそうだ。まずはできることからやろうと決めて、もう一度電話を開いた。

また少し考えてから、携帯電話のウェブサイト接続した。そこから辿つていって、番号案内サービスを呼び出した。地域を横浜市に絞つて労働基準監督署を探すと、間もなく携帯電話の画面に候補が表示された。その中で同じ中区の住所に該当するものを見つけた。スクロールさせて青い文字の電話番号を選び、真ん中の操作ボタンを押した。画面は通話の表示に切り替わり、受話器からは呼び出し音が聞こえる。三回目のコールに年配らしき男性のしわがれた声が応じた。

「はい、監督署です」

並木は手短かに、牧山から教えられた手続きについて確認しようとした。電話の相手は手順としては確かにその通りだと答えた。並木は疑問をぶつけてみることにした。

「いくつか気になることがあるんです。こちらの会社で就業規則が改定されたところなのですが、従業員の代表者を選出する様子がま

るでなかったんです。だから従業員の意見がそこに書かれて提出されたかどうかは疑問を持っています。それから改定後の記述が会社にとって都合がよいものになっていて、従業員側からすると条件が一方的で厳しいものになっているんです。だから私は、会社が正しい手順を踏まなかったのではないかと考えています。それについて、そちらでは意見書を受け取った時にどう判断したのですか？」

相手の声が不機嫌な響きを帯びて、電話越しに返ってきた。

「それはですね、まあこういうことですよ。こちらとしては、提出されたものを受理したということなのです。その都度、中身がどうかと精査する訳ではないのですよ。いちいちそんなことをしていたら、どれだけ人がいても足りなくなつて、行政が破綻してしまいますよ。法律を満たしているかどうかは、いずれわかることなのです。その後に深刻な問題が起これば、こちらに何とかしてくれと労働者や労働組合から相談が来ますからね。それから、代表者の選出や意見ということについても、同じようなものですね。こちらで見ているのは必要な書類が揃っていて漏れなく記入されているかどうかといった事務的なものですから。体裁が整っていれば問題はないのです。他に何かご用は？」

並木が呆気にとられている間に電話は切れた。

しばらく時間を置いて気を落ち着けてから携帯電話の時刻表示を見下ろした。汐崎と物流部の前で別れてから、もう少しで一時間になる。そろそろタイムリミットだろう。教えられた番号にダイヤルすると、コールを待っていたかのように汐崎がすぐに応じた。二人は二階の休憩室で落ち合うことにした。

並木が休憩室に入ると既に汐崎がコーヒークップを二つ持って待っていた。実は電話を受けた時にはもうここに居て、物流部にはたいてい訊くことがなかったと汐崎は白状した。並木は待たせたことを詫び、ここに連れ出してくれたことに礼を言った。汐崎は微笑みながら頷いた。

それからの十五分ほどをかけて、並木は先ほどの電話でのやりと

りを汐崎に説明した。彼女は弁護士に惜しみない賞賛を送り、監督署の対応に激しく憤った。そんなふうには素直に感情を表す汐崎を見て並木は少し羨ましく思った。これまで、もつと感じたままに自分を表現して来られたなら、どんなによかったことだろうと思った。実直さは、もつとも人を共感させる価値観なのかもしれない。そんなことを考えながら、手にしたカップを口に運んだ。コーヒーマだ温かかった。

不意に汐崎が何かを思いついたように立ち上がった。近くの壁に下がっている電話機へ歩いて行って、内線電話をかけた。

「もしもし。情報システム部の汐崎です。ごめんなさい、どなたですか？ ああ、内田さんね、お疲れさまです。実はちょっとお願いがあつて。いえ、たいしたことじゃないんです。こちらで新しいシステムの要件を検討していて各部門から業務内容のヒアリングをしているのをご存知でしょうか？ この前、就業規則の改定の通知を見ていて気付いたんですが、その辺りに関わる手続きの聴き取りをまだ行ってなかったんです。こちらで見落としていたのかしら、ごめんなさい。それで、この前の改定でそちらが作った書類だけ見せてもらえればいいんですが。いえ、システムに乗るかどうかはそれからこちらで判断します。実物を見せてもらって二、三のメモをとるだけです。書類はその場でお返しします。いま私は会議室を出たところで、二階の休憩室の電話からかけているんです。休憩を挟んでこの後また戻らなくてはならないんです。あら、こちらに来てくださるの。助かります。ええ、五分もかかりませんお手間を取らせてごめんなさい」

受話器を置くと汐崎はこちらを振り向いて小さく舌を出した。ぽかんとしている並木の隣に戻ってきて再び腰を下ろした。

「驚いたな。就業規則の改定まで、本当にシステムに乗せられるのかい？」

汐崎はさもおかしそうに声を上げて笑った。

「いつか遠い未来に、もし役所がオンラインで各企業とつないで電

子的にデータをやりとりしようなんていう奇跡が起こればね。まあその時が来たら、この国からは印鑑を売るお店が消えてなくなっていることでしょうけど」

それを聞いて、並木はまた驚いた。なんと機転がきくのだろう。こうすれば人事部に向かなくなるとも、何の問題も伴わずに必要な書類を目にすることができる。改めて羨望のまなざしで汐崎を見た。

まもなく休憩室に一人の若い男性がファイルを抱えて入ってきた。見かけない顔だったが、それが内田だろうとわかった。汐崎は立ち上がり、近くの四人がけのテーブルへ移動した。内田は手短に挨拶して、汐崎にファイルを手渡した。内田が腰を下ろすのを待って、汐崎は正面ではなく互い違いになるように斜め前の席に座り、自分の前にファイルを広げた。

少し間を置いてから並木はその奥の壁際へ歩み寄り、内田の背中と汐崎の手元が何気なく見える位置を選んで壁にもたれた。汐崎はぱらぱらとめくって目指す書類を見付けると、ファイルを開いたまま自分の前から壁に近い方へ少し押しやり、手前にノートを置いていくつかメモを取り始めた。逆さまではあったが、並木の位置からでもファイルの中を見ることができた。そこには 意見書 とタイトルが書かれた書類があり、下の段には代表者として山口一栄の名前と押印があった。やがて汐崎はファイルを閉じ、内田に返して礼を言った。内田はどういたしましてと言い、そのまま立ち去った。

二人だけになったのを確認してから並木は汐崎の前の椅子に再び移動した。目が合い、二人は同時に頷いた。

「山口だったのか」

並木は重く息を吐いた。

「知ってる人？」

「ああ、同期だよ。この前、携帯に電話がかかってきて酒に誘われたばかりだ」

「じゃあ、並木さんの状況は知らなかったわけ？」

「その時はそうだった。でも電話は随分前のことだ。その時に話を

したから、今は知っているはずだ」

「それなのに、こんなものにサインしたというの？　なんてやつ」
汐崎は目に怒りをたたえた。

「山口をここに呼ぼう」

そう言つて並木は立ち上がり、壁の電話機に歩み寄つた。

黒い紐で吊るされている内線番号簿をめくり、山口のいる経理部にダイヤルした。向こうで受話器を取つたのは山口本人だった。並木はひどく苛立つた気分になった。

しばらくして山口が休憩室に入ってきた。並木が一人でないのに少し驚いた様子だったが、並木はそれには構わず汐崎を紹介した。汐崎は顔では微笑んでみせたが、目の奥では怒りが燃えていた。三人がテーブルにつくと並木が切り出した。

「今まで知らなかったんだが、山口、お前は従業員の代表に選ばれていたんだつてな。いっとうやって選ばれたんだ？」

山口は驚いた表情を浮かべた。

「何の代表だつて？　いったい何のことだ？」

並木は少し語気を強めて言った。

「いや知っているだろう。こっちは代表者つていう欄にお前のサインと印鑑が押してある書類を見たばかりなんだ」

「それは何の書類なんだ？　この話は何なんだ？　本当にわからないんだよ」

山口の表情が明らかに戸惑っているのがわかった。とぼけて言い訳をしようとしているようには見えない。並木は黙り、しばし考えを巡らせた。そして再び口を開く。

「質問を変えよう。最近お前がフルネームでサインして印鑑をついた書類はあるか？」

この問いに、山口は腕組みをして目を閉じ、しばらく考えていた。やがて何かを思い出したように目を開けた。

「そういえばこの前、人事部の浅倉部長に呼び出された。向こうに行くとは応接室に通されて、ほとんどを別の白い紙で覆った何かの用

紙を差し出されたんだ。はみ出して見えたところには、ワープロで打たれたような罫線が印刷されていた。その一番下の欄に名前を書いて押印してくれと浅倉部長から言われた。これが何かと尋ねたんだが、浅倉部長は唐突に、君は会社を愛しているかと訊き返してきた。頷かない訳にいかないじゃないか、わかるだろ？ はいと答えると、これは愛社精神があると宣誓するための書面で、この隠れている部分はまだ部外秘なんだと言われた。解せなかったんだが、浅倉部長は、君は期待されて全従業員の中から一人だけ選ばれた者であつて、この榮譽を受ければ君の貢献は優先して評価されるから、昇進は約束されたようなものだよと言ったんだ。なにしろ選ばれし者なのだからと。その時は場所が滅多に入ったことのない豪華な応接室だったし、浅倉部長は真剣に話していたから、まあそれもいいかもしれないなと思つて言われた通りにしたんだ。何か問題があつたかな？」

並木は汐崎と顔を見合わせた。汐崎の目からは怒りが消え、代わりに憐憫の色が浮かんでいた。既に二人とも、この件ではもう何も知りたいとは思わなくなつていた。

山口はしきりに顔を左右に動かして二人を代わる代わる見て次の言葉を待つていた。並木と汐崎は黙つたまま席を立ち、山口を一人残して扉へ向かった。戸惑う山口が二人の背中に向かって何か問いかけてきた。だが、その声はもう二人の耳に届いていなかった。

次の日も同じ時間に浅倉はやつてきた。並木は牧山からの助言通りに浅倉に告げた。予想を裏切らず浅倉は怒鳴り散らし、誓約書を出せと言つた。それでも並木が黙っていると浅倉は明日も来ると宣言して出て行つた。周りの席からはたくさんの刺すような冷たい視線が向けられた。

それを除いた他の時間はすべて、汐崎と共にプロジェクトの作業に没頭した。様々な資料を集め検討し、新たな資料を作成した。そんなことが、毎日のように繰り返されていた。

夕方の終業時間を告げるチャイムが鳴っても、北村を除いて誰も席を立とうとしない。さらに二時間ほどの間は、ずっとキーボードを叩くあの不快な音がいつも響き続ける。それがここでの暗黙の了解であった。まれに定時であらうと試みる勇敢な者がいると、普段は他人のことに見向きもしない連中が、この時ばかりは冷めたい視線を一斉に投げかける。それはさながら、お前は出世する気がなくなつたのかと責め立てているかのように並木には映つた。それを目にする度、働く者同士の気遣いやチームワークといった感覚は既に潰えてしまつたのかと、心の中で声にならない嘆きの叫びを上げた。

そんな毎日が二週間ほど続いた。その間、並木が帰宅するのはいつも深夜だつた。十二時に確認の電話を寄越す警備会社も、こちらの声をもう覚えた頃だろう。並木が桜木町のアパートで過ごす時間は、眠る時間を含めても一日にせいぜい五時間といったところだ。医者にも通うことができなくなり、薬もとうになくなっていった。眠気を感じてうとうとすることはあつても、薬がないと、いくら目を閉じてみても睡眠は一向に訪れはしなかつた。眠れぬ夜が続き、毎日の疲労に拍車をかけた。そしてとうとう、身体が悲鳴をあげた。その日も忙しかつた。会議が続き、僅かな休息を取ろうと期待した昼休みも浅倉によつて潰されてしまつた。どうにか浅倉をやり過ぎ、ほっとため息をついた。しかしその一呼吸が終わると同時に次の会議がスタートした。

部内の一角を簡易間仕切りで区切つて設けられたミーティング用のスペースには、プロジェクトチームの面々が顔を揃えていた。まだ充分とは言えないものの全部門のヒアリング結果が一通り整い、ようやくそれらを並べて検討できる段階を迎えていた。目の前にはうず高く積まれた資料の山がいくつもできていた。

汐崎が声をかけると、それを合図にテーブルを囲んだ面々が議論を始めた。それは次第に熱を帯びていき、専門用語が激しく飛び交つた。

並木は話の内容がさっぱり理解できなかった。口を差し挟む隙もない。さらに四十分ほどが経過し、その頃には並木の耳は音を拾うことさえ諦めたように、何も聞こえなくなった。目の前では、他のメンバーの口は閉じることなく忙しく動き続けている。並木は無音映画を観ているような感覚にとらわれた。次第に自分だけが独り置き去られていくように感じられ、いたたまれなくなった。これだけ努力しても、みんなの話についていくこともできないのか……
現実が縮んだ心に重く圧しかかってきた。そのうちに視野の端が傾き、だんだんと視界が歪み始めた。それは徐々に渦を巻き、次第に回転が速くなった。もはや目を開けていられなくなると、急速に意識が薄れていくのがかすかに感じられた。次の瞬間、どさっという大きな鈍い音と、汐崎の空気を切り裂くような甲高い叫び声が辺りに響いた。

ゆっくり目を開くと、そこは暗闇の中だった。視界はぼやけ、手足の感覚がおぼつかない。時間をかけて徐々に目が慣れてくると、ようやく焦点が合いはじめた。

並木はベッドの上に横になっていて、消えたままの蛍光灯が二本並んでこちらを見下ろしている。目だけを動かして周りを見ると、ここが軽量アルミの簡素な壁に囲まれた空間であるのがわかった。小さな窓の外はもう陽が落ちていて、代わりにぼつりと街灯の弱い明かりが見えた。

どうやらここは二階の医務室のようだ。簡易ベッドが一つ置かれただけの部屋だ。滅多に利用者はなく、ベッドに敷かれ放しのマットレスは黄ばんでいて、カビの臭いが鼻を突いた。

何が起こったのか、まだはつきり思い出せないでいた。確かミーティングの最中に天井が回り始めて……それ以降のことは覚えていない。うつ病を発症して以来、時々目が回るような感覚に襲われて、その直後の記憶が途切れてしまうことがあった。そんな時は、ごく短い時間だったとしても、きっと今のように気を失って

いたのかもしれないと思つた。もし周りにいた人がそれに気付いたら、こちらが倒れでもしない限り、あいつは仕事中に居眠りをしてるんだと言つていても不思議ではないとわかつた。時折感じていた非難がましく射るような視線は、厄介者というだけではなく、そういう意味もまた込められていたのだらうかと訝つた。

そのままぼつとベッドに横たわつてしていると、カチャという音を伴つてゆつくりと扉が開いた。そちらに目を動かすと、隙間から汐崎の顔が覗いた。そして囁くように小さな声が遠慮がちに部屋に入ってきた。

「気が付きましたか？」

並木がかすかに頷くと、扉をもう少し広く開けて汐崎が入ってきた。昼間見た服装と違ってジーンズにスニーカーというラフないでたちで、髪は横で一つに束ねて左の肩から前に垂らしていた。電気はつげずに並木に話しかけた。

「動けそうですね？ 一旦帰つて車を取ってきました。どこへも送りますよ」

再び並木は小さく頷いて、汐崎に近い方の腕を伸ばそうとした。だが、まだ小刻みに震えていてうまくいかない。それを見た汐崎が近付いてきて、そつとその腕をとつた。そのまま身体の下に腕を回し、肩で押して並木の上体を起した。

汐崎の介助でよろよると立ち上がり、身を預けるようにして少しずつ歩いた。多少ふらつくものの、次第に足に力が戻ってくるのを感じた。

厄介な階段を手すりとは汐崎のおかげでどうにか降りて、ハッチバックの青いホンダの助手席に、転がるようにして何とか乗り込むことができた。これを見越していたのか、並木が乗り込む前からシート^トの背もたれが倒してあつた。そこに身体を預けて、ようやくほつと息をついた。

汐崎は運転席に乗り込むと並木の方へ身を屈めてシートベルトを引いた。彼女の身体が真上にきた時、並木は思わず息を呑んだ。そ

れはまるで柔らかいベールのように、身体の上に見えないブランケットをそつと落としていった。汐崎はそんな並木の思いに気付くことなく、身を起して運転席に座りなおした。

並木が住所を伝え、汐崎はそれをカーナビに入力した。機械的な音声がルートを告げると、それに従って車を走らせた。その甲斐あって道に迷うこともなく、程なく桜木町のアパートの前に到着した。車を降り、もう大丈夫だという並木の言葉をまるで信じようとしてない汐崎は、並木の背中に再び腕を回して押し上げるように階段を上った。部屋の扉の前まで来ると、汐崎は何か食べるものはあるかと尋ね、食欲がないと並木が答えると、ジーンズのポケットから粉末のスポーツドリンクを取り出して玄関に置くとそのまま階段を降りていった。再びエンジンがかかる音が聞こえ、車はゆっくり走り去った。

その夜、並木は一晚中自分を責め続けた。汐崎に大変な迷惑をかけてしまった。いったいどんな思いで自分を介抱してくれたんだろうか。

それに振り返れば、白川も既に巻き添えにしてしまっていた。彼女は将来を嘱望され、みんなの中心になって活き活きとやっていたのに、自分の不用意な助言によって、いまやF O Cと呼ばれる工場にいるのだ。

すべて自分が悪いのだ。そんなつもりであろうがなからうが、自分の言動をきつかけに周りのみんなが不幸になっていく。現に、仕事でも足を引つ張っているだけだし、みんなの射るような視線がそれを雄弁に語っているじゃないか。でも頭は働かないし、身体もまるで言うことをきいてくれない。どうやら自分には人並みの能力すらないし、それを補う才能も持ち合わせていないようだ。どんなに辛かろうと、それが紛れもない事実なんだ。

もはや、そう結論付けるしかなかった。並木はもう生きていても仕方がないと思った。そんな価値は自分にはないのだと思った。自

分さえいなくなれば、少なくともこれ以上誰かを巻き込んで苦しめることはないはずだ。心の中で、二人の女性に必死に詫び続けた。そのまま眠れぬ夜を明かした並木は、朝になっても身体を起すことができなかった。外からは雨の音が聞こえてくる。

まず汐崎の携帯電話に電話して、かほそい声で昨夜の礼を言った。その後、会社に電話をかけて、北村部長に休ませてほしいと伝えた。その日、並木はずっと布団に横になったままで過ごした。どんなに目を閉じても、まったく眠りは訪れない。最近の睡眠不足でうつらうつらとはするものの、うたた寝から覚めて時計に目をやってみても、その前に見た時から一時間も経っていないかった。そんなことを夕刻までずっと繰り返し続けた。やがて辺りに暗闇が降りてきた頃、並木はこの日はじめて訪れた眠気を受け入れた。

どれくらい眠れたのだろうか。控えめに扉を叩くかすかな音に、並木は目をあけた。重い身体を引きずるようにして扉に辿り着く。チェーンをかけたまま少し隙間をつくると、そこには夕闇を背にして昨晚と同じ顔が覗いていた。

「寝てました？ ごめんなさい」

汐崎の声が謝る。並木は待つてくれと断って一旦扉を閉めてチェーンを外した。改めて扉を開けて目が合うと、汐崎がこらえられないというように小さく笑い声を立てた。

「ごめんなさい。だって髪の毛、すごいボサボサよ」

急に並木は恥ずかしくなった。今日は自分の見かけなど気にする余裕もなかった。鏡を見たら、きつと誰にも見せたくないほどひどい姿なのだろう。思わず下を向いた並木に、汐崎は優しく声をかけた。

「寄ってみた甲斐があったわ。いつものパリッとしたスーツ姿より、この方がほっとさせられるわ」
そう言つて汐崎は微笑んだ。

並木は涙がこぼれそうになるのをじっと耐えた。それを察した汐崎が、帰ろうと身体の向きを変えた。並木はとっさに彼女の腕をつ

かんだ。その手には、たくさんのおにぎりと二つの味噌汁のカップが入ったコンビニの袋が提がっていた。

翌日の朝は、幾分ましな気分だった。昨夜の差し入れが効いたのだろう。久しぶりに食べ物が胃の中にすっきりと収まった。

並木は二箇所に電話をかけた。まず会社に架電し、北村部長にもう一日休ませてほしいと言った。北村はどうでもいいと言わんばかりに、勝手にしるうだけ答えて電話を切った。

次に財布から診察券を取り出して番号を確認し、小杉の病院に電話をかけた。診療開始までには若干の時間があったが、留守番電話になっていないように祈った。五回目の呼び出し音が鳴った後、女性の声が応答した。その声から、いつもカウンターのいる女性だとわかった。

並木が名乗ると、女性は慌てた様子ですぐに電話を小杉医師に取り次いだ。電話に出た小杉の声は、心配そうでもあり不機嫌そうでもあった。

「もしもし、並木さん？ こっちに来てないけど、どうしたんですか？ 具合が悪かったの？」

「いえ。あつ、ええ……」

電話ではうまく話せそうにないのはわかっていた。並木は、とりあえず診察を受けたいと頼むことにした。

「会社でまたいろいろとあって、昨日から休んでいます。今日はなんとか布団から出られそうなのですが、これからそちらに行ってもよろしいですか？ もう薬も手元にはありません」

「いいですよ。こっちに来てから具合を訊きますから。何時頃になりそうですか？」

並木が今は桜木町のアパートにいるから一時間ほどで着くと思うと答えると、小杉は小声で女性に予約表を確認するように指示した。

それが済むと電話口に戻ってきた。

「他の患者さんの合間に入れるようにします。少し待つかもしれませんが、あなたの場合はまずこっちに来ることが大事です」
それだけ言うとすぐに電話は切れた。

並木はよたよたとおぼつかない足取りで馬車道の駅に向かった。桜木町の方が歩く距離は短くて済むが人の多い横浜駅での乗り換えは避けようと思い、武蔵小杉まで電車一本で行ける馬車道を選んだ。駅までの道のりは、実際よりも遙かに長く感じられた。少し歩いでは立ち止まって休みながら駅を目指した。途中、沿道に人通りがそれほど多くなかったことが、せめてもの救いだと思った。混雑して人の流れが速い場所では、こうして何度となく立ち止まるのは難しかったことだろう。みなとみらい駅ではなく、こちらに向かったのは、そういう意味でも正解だったと思った。

改札を抜けてホームに降りていくと、ちょうど入ってきた電車に乗ることができた。座席に腰かけても、まだ足元が揺れる感じと軽いめまいが残っていた。途中の駅に電車が停まるたびに一旦降りて休もうかと悩んだが、それを決めきれないうちに扉が再び閉じた。そんなことを何度も繰り返して、ようやく武蔵小杉の駅に到着した。

小杉の病院に着いた時、時計の針はもう十一時を指そうとしていた。待合室の長椅子には三人の患者が座っていた。並木は空いているところに腰を下ろし、低い背もたれに身を預けて深く息をついた。既に疲れ切っており、それからの長い時間、並木はじつとそこに座っていた。

それから一時間半ほど経った時、カウンターから呼ぶ声があった。並木はそれに気付いてゆっくりと身を起し、よろよろと奥の診察室へと向かった。

小杉と向かい合って座ると、医師は複雑な表情を浮かべた。並木がしばらく来院していなかったことについて小言を言う前に、まずは事情を訊くべきだろうかと思案しているようだ。やがて彼の方針が決まった。

「どうしていましたか？ 電話では、会社で倒れたと言っていましたか？」

並木は、ここに来たのがしばらくぶりになってしまったことを詫びてから訊かれたことに答えた。会社から重責を負わされて毎日深夜まで仕事をしなくてはならなかったこと、その仕事は今までと違う分野のものになってしまつて、みんなについていくのもやつとの状態であること、人事部長が毎日やってきては声を荒げて責め立てていくことなどを話した。それから、会社で倒れて意識を失つて汐崎に送り届けてもらった夜、一晩中眠れずに自分を責め続けたことも話した。死ねたらいいのにと思つたことを。

黙つて並木の話聞いていた小杉の顔が曇つた。

「並木さん、状況がよくない方に進んでしまつたようです。今日から薬を増やします。今までのものより強いものになるから、喉が渇いたり眠気を感じたり便秘気味になつたりと、いろいろと気になることが出てくるかもしれません。それから薬は効くようになるまで少し時間が要ります。うつ病では服薬が大事な治療法ですから、薬はちゃんと飲み続けてください。それから薬の管理は誰か他の人に任せられるといいのですが。自分である場合、間違つても多量に服用しないでください。この手の薬は一定量以上を一度に飲むと嘔吐を促すようにできていますから。そうなつたら、ただ不快感をこらえるだけという、つまらないことになりますからね、念のため。それから、しばらくは通院の間隔を短くして、こまめに来るようにしてください。診断書を出しますから、会社に提出して理解を求めた方がいいですね。それから、業務中に気分が悪くなりかけたら早めに席を外して休むようにしてください。それも書いておきます」

小杉はそう言うのと忙しくペンを走らせ、本人にしか読めそうにない個人的な文字でカルテが埋まつていった。並木は不安になった。

「先生、会社が私に配慮するでしょうか？」

ペンが止まり小杉は顔を起して言った。

「自分の身を自分で守らないとだめですよ。仕事の責任もあるでし

ようが、まず健康を取り戻さないと。同僚には理解してもらって、あなたは余計な遠慮をしないことが大事です。それに病気を理由に一足飛びに解雇することはできないはずです。まずは、ちゃんとここに通ってきてください」

そう言うのと小杉は顔を机に戻し、診断書に取りかかった。病名と通院の必要性を縷々綴っていき、最後はそれを封筒に入れてしつかり封をした。

並木はカウンターに戻って診断書と薬を受け取った。薬の袋は膨らんでいて、その中に収められた薬の種類は前回の倍ほど増えている。

病院を後にして、とぼとぼと駅に戻る道を歩き出した。実家に向かうことも考えたが、こんなにやつれた様子を見せたくない、それは思いとどまった。

その先の赤信号で立ち止まると、不意に背後から声をかけられた。振り向くとそこに田中が立っていた。田中は並木の姿を見て驚いた様子だった。

「並木さん、ですよね？ 急に随分と痩せちゃったじゃない。一目ではわからなかったわ。いったいどうしたの？」

うつむいたままの並木に、田中は優しく話しかけた。「これから組合の事務所に行くところなんです。一緒に来ませんか？」

二人は並んで歩いた。田中は小柄で、彼女の頭にちょうど並木の顎が載るくらいの背丈だ。歩きはじめてほどなく、目的の事務所に着いた。そこは小さな古いビルの一階で、看板も表札も出ていなかった。田中は軽くノックしてから扉を開けた。

事務所の中はそれほど広くはなかった。入ってすぐのところにはチール製の事務机が二つ置かれていて、その上にはそれぞれ電話機が載っていた。その奥にはつい立があって、その向こうからは真剣に話す男性の声が漏れてきた。そこは会議室として使われている空

間のように、そこが事務所の面積のほとんどを占めていた。

机の横の壁には大小様々なポスターやビラが貼ってあった。手書きのものもあれば、印刷を経てきたものもある。それを見ると、ここに属する者たちが抱えている問題の一端が垣間見えた。並木は順に眺めていき、ひときわ大きなポスターのところで目をとめた。中央には 知っていますか 最低賃金 と印刷され、その周りを様々な職種のイラストが囲んでいる。右下には行政機関の名前が入っていた。並木の目を惹いたのは、そのポスターに誰かが大きく書き込んだマーカールの黒くて太い文字だった。ワーキングプアは、もうたくさんだ！

並木はその意味がわからず、じっと眺めていた。それに気付いた田中が話しかけた。

「その意味、わかりますか？」

並木が首を振ったのを見て、田中が説明を始めた。

「最低賃金法というのがあって、都道府県別や産業別に最低限の賃金が決まっています。時々見直されているんですが、金額は上がっても、これぞ雀の涙という程度なんです。決して十分な水準とは言えないのに、これにも満たない給料で働いている労働者が、実はたくさんいるんですよ。テレビや新聞でも時々取り上げられているけれど、タクシー運転手や派遣労働者や日雇い労働者、それに高齢者や外国人労働者とか、例を挙げたらきりがなし。派遣や日雇いだと当たり前のようにピンハネされるし、手元に残った労働の対価は、時給に換算してみると定められた最低賃金を割り込んでいることが往々にしてあるんです。ひどい場合だと、最低賃金の半分ほどしか支払われていないこともあって、中には時給換算で三百円台だったなんていうものもあるの」

並木は驚いて目を丸くした。

「そんな給料じゃ、いくら働いたって生活がかなり厳しいんじゃないですか？」

「ええ。実は生活保護で支給される額よりも、最低賃金の方が低い

くらいなんです。それだけでもきついのに、さらに残業代を不当に認めない会社もあって、サービス残業 だと言って勤務記録につけることを許さないという実態も問題になっていくんです。また予め内規や暗黙の了解をこしらえて、たとえば朝礼の十五分間とか終業時刻後の三十分間は残業にカウントしないなんてところもある。

ミーティングとか仕事の準備や片付けを、労働ではないと言い張る会社もある。でもこれらは、法的には紛れもなく労働なの。たとえばそれが法定労働時間内だったとしても、ただ働きさせていいはずはない。挙げた例はどれも違法なことなのに、労働者がそれを知らないという場合もあるんです。仮に知ったとしても、会社が請求に応じない不払いのケースもあるから、実情は最低賃金どころではないかもしれない。はたまた、労働基準法を会社が都合よく勝手な解釈をして、それを当然のように適用しているところも多いんです。よくあるのは、給与区分上の待遇が管理職扱いになつた途端に残業代がゼロになつたなんていう話はざらですね。これについては、管理監督者としてのを管理職として拡大解釈しているんです。本来の管理監督者というのは経営者と同等の立場にある人のことで、実は多くの管理職はこれには当たらないの。堂々ともらえるはずの賃金を、正しく受け取っていない人が実に多いんです」

「ちょっと待つてください。確かに、私も前の部門で課長代理になつた途端に残業代や休日手当などが一切つかなくなりました。それって、実はもらえたものなんですか？」

「ええ、たぶん。それに代わる手当てなどの条件が個々に異なるでしょうから、一概には言えないけど。その当時にこのことを知っていたら、別の対応の仕方があつたかもしれないですね。以前にも話したと思うけど、こういうことを学ぶのも労働組合の意義の一つなんです。そうじゃないと会社と交渉できないでしょ？」

並木は頷いて理解したことを示した。田中がそれに応えるように先を続けた。

「こつやつて賃金の問題だけをとつても、もらえるはずのものを受

け取っていない人が実に多いんです。それは結果的にはピンハネと同じことね。さらに言えば、この国の物価は諸外国と比べたらまだまだ高いから、所得との均衡がとれているとはお世辞にも言えたものではない。だから、生活が厳しいというのは、社会構造からすれば、ある意味では当然なのかもしれないね。もちろん賃金の問題は氷山の一角で、雇い止めや解雇が容易な有期雇用が野放しになっているなど、他にも労働問題は目が回るほどたくさんあります。そんなことがあいつつて、ワーキングプアとって、働く貧困層がとも増えているんです」

「でも、最低賃金をせめて生活保護の水準に上げれば？」

「それで憲法が保障する生活ができるのであればね。でも、ことはそう簡単じゃないんです。この国の政治家は、経済を底上げすればみんなが幸せになれるというようなことをまことしやかに囁くでしょ？ 確かに経済が活発になれば、企業は利益を上げて、労働者の賃金も上がるかもしれないわ。だけど、それにかかる経費は原価に跳ね返るだろうし、その分を吸収できるほどの一つの商品やサービスが長く売れ続けることは滅多にない」

田中の瞳が次第に熱を帯び、苛立ちと憤りが募り始めたことがわかる。さらに話は続いた。

「結局それは競争を生むの。企業はコストを下げようとし、そのツケは得てして下請けや中小零細の企業にいく。下請けはいいように叩かれて、仕切りを下げられなければ彼らは仕事を失うことになるし、競う相手には、賃金も物価も安い外国が含まれる。じゃあ、その歪みは誰がどうやって吸収するの？ 詰まるところ、犠牲になるのは、いつも弱い労働者なの。彼らは低賃金で長時間働かなくてはならない。やっとの思いで手にした収入は、高い物価にあつという間に呑み込まれてしまう。生活もままならない。だからと言って、やみくもに最低賃金をもつと上げると言えば、今度は雇用を減らす口実に使われかねない。しかも、弱い労働者を守ろうとする労働法制は、強大な財界に配慮した抜け道だらけ。極論すれば、一部の大

企業の莫大な利益のために、みんなが犠牲になっている。そして大企業は国の仕組みをうまく利用してさらに儲けを伸ばす。輸出戻し税なんて、いい例だわ」

「えっ、何ですか、その輸出戻し税って？」

その並木の問いかけで、田中のはりつめていた緊張感が少し緩んだ。「ああ、ごめんなさい。耳慣れない言葉ですよ。輸出戻し税というのは、製品を輸出している企業が仕入れなどに対して支払った消費税分の還付を受けられる仕組みなの。消費税は、販売した時に預かる分の税額から仕入れの際に支払った分の税額を差し引いて、その差額を納税するの。でも輸出製品の販売先は基本的に国外だから、国内の租税である消費税は乗せられない。すると販売時の消費税率はゼロだから、常に差し引く方の税額だけが計上されることになり、それがそっくり還付されるというわけ。これが去年は二兆円ほどあったの。しかも大企業の下請け叩きが問題になっていて、仕入れにかかる消費税分くらいはおそらくカットさせているでしょう。すると輸出企業の側としては消費税を納める以上の還付を得ているということになるし、今後消費税率が上がれば還付額がさらに増えるだろうという話しなの。だから、一部のジャーナリストや学者や税理士などの専門家たちが、この仕組みは問題だと言っているわ。でも一応断っておくと、これには賛否含め、様々な見解があるの。利権が絡むことだし、財界が増税の必要性を国に説いていることに穿つた見方だってできる。何が真実なのかは、なかなか見えてこないわ。私はいま話したことに筋が通っていると思っっているけど、事の真相は輸出企業の実務担当者が知っているんでしょうね。まあ、この国はいつもそう。富める者にだけ、こっさり便宜を図るのね」

「それは、ちよつと驚くな。じゃあ、似たようなロジックを潜ませた仕組みが他にもあるかもしれませんね。消費税は平等な税のはずじゃなかったのかな？」

「理論的には、きつと平等なんでしょうね。でも、私たち庶民にとつては必ずしも公平とは言えないんじゃない？ たえば酒税やガ

ソリン税の上に再び消費税が乗せられる二重課税の問題もあるし、生活必需品もぜいたく品も同じ税率で、なんでも一律の税率になっているとかね。限られた収入の中から切り詰めてなんとか生活している人にとってはとても切実だし、今後増税にでもなったら、それこそ死活問題だわ。欧州と比べてこの国の税率は低いんだと政治家は言うけれど、欧州の多くの国では食料品などの生活必需品の税率が極めて低いということはあまり言いたがらない。イギリスでは食品や交通の税率はゼロだし、教育や福祉は非課税なのよ。ぜいたく品と生活必需品でやり方を分けていて、この国のように取りやすいところから取っている訳じゃない」

並木は、田中の声のトーンの変化に気付いた。彼女の表情は一層厳しさを増していた。

「この国では庶民の生活は痛めつけられる一方だわ。給料は上がらないのに、公的手当や税の控除枠はどんどん切り捨てられ、負担はじわじわと巧妙に増えていく。実質的には税が上がったようなものなのに、でも社会保障はそれに見合うと胸を張れるほど充分ではない。この国の社会保障のレベルは欧州の足元にも及ばなくて、社会保障給付費の水準は北欧の実に三分の一程度なのよ。特に北欧は高負担高福祉だと言われるけど、この国のバランスがいいという訳でもない。たとえばこの国では、年をとってから受ける国民年金の平均月額額は六万円にも届いていないというのに、支給開始年齢は引き上げられるし、受給に必要な加入期間は突出していて世界一長い。暮らしていけないからと、やむなく海外に移住していく人も増えていて、年金移民なんて言葉もあるくらい。実は私たちが、総じてどれほどの負担を強いられているか、法律や条例が義務付けているものを全部合算してみればわかるはずよ。それなのに他方では、政治家や役人の年金は桁が違っし、他にも天下り先を渡り歩いた分だけ退職金をたんまりと手に入れる官僚もいる。国会議員の報酬だって世界一高額だというのに、その上ばら撒けるほどのタクシードライバーや領収書なしで使えるお金が豊富にあって、さらに常識外れ

に安く住める広い宿舍があつて、高価な肖像画まで描いてもらえる。特権や優遇措置だらけ。これじゃ、公僕であることが、おいしい儲け話みたいなものじゃない。世襲した輩はごろごろいるし、お金がかかる公務の仕組みは何も変わらない。その原資は紛れもなく私たちの税金なのに、税収が不足すれば増税すればいいと思つていて、自分たちの財布は切り詰めようとしなない。彼らにとって、国民が金のなる木なら、庶民の痛みなんてわかるはずもない。こんなふうだから、経済成長がある種の解決策になるといふのは一部の者にとつての話でしかなくて、社会的弱者にとつては必ずしもそうじゃないのよ。実態はもっと切実なの。将来に希望を持ってなど言われても、事はそう単純ではない。この国の国民は、今こそもつと怒るべきなのよ」

話すほどに田中の口調は早くなつていった。そこにはやり場のない怒りがこもつていた。

ふと並木は、以前、品質管理部の丘が会社での部門間の関係について話していたことを思い出した。彼女は部門を鎖に喩えて、力の強い輪から生じた歪みは常に弱い輪が被るのだと言つていた。ここで最も弱い輪は国民であり労働者だ。会社という小さな仕組みで起こることは、社会という大きな鎖においても起こるといふことなのだろう。並木は思わず肩を落とした。

「それでは、働く意欲そのものをなくしてしまうじゃないですか」「ええ。この国の現実はその如実に示していると思つわ。経済優先の社会構造に揉みくちやにされて、安い賃金でこき使われた拳句に、簡単に使い捨てにされる。そこで切り捨てられるのは、経営を景気のせいにしたたり失策を演じてきた経営陣ではなくて、いつも現場でひたむきに頑張つてきた労働者なのよ。次にやつと見つけた求人だつて、年齢や学歴といった制限だらけだわ。経済の論理が人を殺しかねない現実を、この社会は黙認してきた。そんな中、それでも多様な働き方を懸命に模索することを余儀なくされてきた人たちにとつては、もし正規雇用の口が今後増えたとしても、本音ではそ

れを今さら望みはしないという人が既に増えているかもしれない。現に労働力人口が低下傾向にあるのは、就労意欲の低下が一因だと考える向きもある。高い山のとっぺんから算盤そろばんの梯子はしを下るされてさあ登れと言われることには、もはや多くの人が辟易している。これまで本当なら怒るべきだった時を我慢してやり過ごしてきてしまつと、そんな気力さえも失せてしまつ。それは同時に、他のことに費やすエネルギーもなくなるということなの。本当に目を向けるべきなのは、もう疲れきってしまった人たちが世の中にたくさんいるんだということだわ」

そして気持ちを切り替えようとするかのように深く長い息を吐いてから、僅かな希望の糸をたぐるように言葉を継いだ。

「人も社会も、労働についてもつと柔軟になれたらいいんだけど。雇用契約の期間や給料や休暇といった格差をなくして安定性をきつちり確保した上で、一人ひとりが自分に合った働き方を選べるような社会にすれば今よりずっといいはずよ。正規だろうと非正規だろうといいじゃない。働くことが人生そのものの目的ではないのだから。政策をつくる側は財界とよろしくやるのじゃなくて、労働者の生活をしっかりと守らなくてはならない。ここを改めないと、この国は変わらない。まずは安心して生活できることが第一で、それが安定して続く社会的な仕組みが、この国には必要なの。人は社会に流されてやみくもに走り続けるばかりでなく、時には立ち止まって、これまで駆けて来た道とその先の双方をゆっくり見渡してみることもあるよ」

並木はやりきれない思いに頭を揺すつた。

「そうかもしれないですね。でもこの国では、立ち止まることが善しとされない社会になっていくように感じるな。むしろ盛んに自由競争を加速させようとしている。少なくとも、これまでの経験からはそう感じますね。だけどこうして別の角度から見ることができると、また新たに気付くことがある。実はこうして多くの人たちが駆り立てられているその競争にはゴールなんてなくて、後にも先にも果て

しなく繰り返される競争だけしかないんだ。それなのに、そこから生み出された利益は、競争にさらされてきた者が公平に受け取れる仕組みにはなっていない。その格差は競争を煽るほどさらに広がっていくのに、経済成長という便利な大義名分がその矛盾の隠れ蓑になっていくような気がする。社会構造が、追い立てる側と大多数の追い立てられる側とに分かれてしまっていて、一部の威権のためにあまたの人々がひたすら汗を流しているというのが実態なのかもしれない。だからなのかな、何と言うか、ゆとりがなくて社会全体がいつもせかせかしている」

「ええ、問題はそこなの。過度な競争で社会が不眠不休に向かつて突き進む中、大人にも子供にもまるでゆとりがないわ。子供たちにしても、朝早くに学校へ行き、塾や習い事が終わって布団に入っても、休む頃にはもう夜も更けているという子が増えている。大人だって、そんな長時間労働が毎日のように続いたら心身共に参ってしまうでしょう？ それなのに体力が発展途上にある子供たちは睡眠時間まで削ってそれに耐え、ほどなく次は大人社会へと送り出される。立ち止まって何かを考えるゆとりもないままで。そんな時を過ごしてきた人に、他人を思いやり自然をめでなさいと言ったとしても、ピンとくるとはとても思えない」

「確かにそうですね。子供の頃からそれでは、どこかで何かの捌け口がなければ参ってしまう」

「一日の大半をテスト問題や参考書と向き合って点数や順位を物差しに自分を測るのもいいけれど、親の期待に応えようとするのを除けば、そんなことが子供自身にとってどれだけのモチベーションになるのかしら？ 本来なら、子供の頃には他にもっと大事なことがあるんじゃないかと私はいつも思うの。草木や生き物に触れ、土や水や風の匂いを感じ、友だちとの関わりの中で過ごす。そんなことが今の世の中で現実にとれただけできるのかは問題じゃない。そういうことにどれだけ意識を向けて時間を割こうとしたかが、大人になってから効いてくると思う。つまり、そういう価値観に触れた

かどうかよ。たとえば、一片の木切れや枝がいくつのおもちゃに変わるかを考えて工夫して遊んだ経験が、後に機転が利くとか応用力といったことの幅になると思う。それが、木切れを単にごみと片付けるか、そこから何かを生み出せると考えるかの分かれ道になる。後者の人は、きつと気が利くようになるだろうし、思いやりとかおらかな赦しゆるの心を持つだろうし、けんかや仲直りや助け合う体験を通して人は独りきりで生きている訳じゃないんだと知る。そしてこれは、テストや競争の中で身につくものじゃない。学力が云々と言われるけど、そもそも学力って何なのかしらね。こういうことだつて立派な学力であり、その人を助ける能力になると私は思うわ」

「学力は子供の頃の遊びと体験の中にある　か。作られた遊びばかりでなく、遊びを創る経験も要するということですよ。なるほど、そうかもしれないですね。言われてみれば、思い当たる節がありますよ。たとえばテレビゲームがいい例だ。用意された遊び方がある。説明書で足りなければマニュアル並みの攻略本がある。しかも、遊んだ結果は点数や順位で相対的に評価されるんだ。そこには他と比べたりせず、自分で自分を評価するという絶対的な達成感や満足感はないし、多くの子供たちはそれを味わう前に大人になってしまう。遊びまで、今の世の仕組みそのままじゃないか。これではいずれはこんな競争社会についていける人は誰もいなくなるかもしれない」

田中が大きく頷いた。

「私は、この国では競争社会そのものが成り立たなくなる日が、いつか来ると思っているの。必死に競って、いい学校からいい会社に進んでも、そこから先も思い描いたように幸せに生きられた人が、現実にいつたいたいだけいるというの？　小難しい公式や文法を血眼になって覚えても、それを次に思い出すのが、将来自分の子供の宿題を見てやる時でなかったという人が、いつたいたいだけいるというの？　必要なもののほとんどがパソコンや携帯電話の中にあつて、それを使いこなせるように攻略本ならぬ種々の解説書が山のよ

うに目の前に積み重ねられている時代になってしまったのよ。良くも悪くも、ね」

「ええ、やり方と結果の関係が、これまで盲目的に信じられてきたものと違っているということに、多くの人がもう気付いているんじゃないかな。でも、それを正面から認めたり、そこに一石を投じたいと本気で考えている人は、それほど多くはない。そうしてしまうと、当面のやり方を見失ってしまうとか、何か漠然とした怖れを感じてしまうのかもしれない」

「そうかもしれないわね。でも、いつまでも、このまま歪みに目をつぶってばかりという訳にはいかなくなってきているわ。たとえば、昔とは違って一人っ子が増えてきているでしょ？ これから先、もっと増えるかもしれない。また兄弟姉妹は、昔ほど多くない。五人兄弟とか大家族とか、今では珍しくなっちゃったわ。私が言いたいのは、それがいいとか悪いとかではなくて、これまで競争社会を支えてきた構造の一部が既に変わってきているということなの。今の子どもたちは、競うことに慣らされる境遇で育ってきたとは限らないし、大人のエゴを除けば競争そのものにたいした意味を見出さないかもしれない。しかし、大人の期待には際限がない。もうちょっとというやつね。中継点はあっても、やはりここにも明快なゴールというものはないわ。それは子供にだって、おぼろげにわかるものよ。仮にそういうことに振り回されない価値観の子が増えていけば、大人が組み立ててきた競争社会は、これまで通りには機能しなくなるかもしれない」

並木はそのことについて考えを巡らせた。

「そんなことは考えてもみなかったな」

そうつぶやいた並木の様子に、田中は小さな笑みを浮かべた。

「私が一人っ子だから、何となくそう思ったのかもしれないわ。子供の頃にかけてっことで一着になっても、順位にこだわる人が他にいれば、私は一等の旗の下をこっそり譲ったの。何のわだかまりもなかったし、競争や順位は私にとってはどうでもいいものだった」

並木はそれに頷きながら、自分には思いもよらなかつた考えに触れて、少なからず驚きを覚えていた。田中が先を続けた。

「競争を信奉する人たちは、新しいものや進んだものを生み出すのは競争の成果なんだと言うけれど、決してそれは万能の答えじゃないわ。だって、競争理論は現代の経済構造に根ざした考え方の一つに過ぎないもの。そんなものがなくても、いいものはちゃんと生まれてくる。本当に優れたものや新しいものは、情熱とか、異なる様々な意見を交わす中から創り出されている。何でも数の理論で決まり、本流と考えを異にする少数派や異端児を認めたがらない右へならえの世の中では、競争はお尻を叩く効果はあつても創造力を与える道具にはならない。それに、叩かれてばかりのお尻は、時に暴走することがある。未来の社会を担うのは今の子供たちよ。選択権は子供たちにある」

目を伏せたまま少し考えて、並木が言った。

「この国は歩を緩める頃合なのかもしれないね。一つの主義や思想があまりにも行き過ぎるのは不幸なことかもしれない。人間にというよりも生き物にとって、不眠不休は自然のリズムに向かつて中指を突き立てるようなものだ。子供の頃からずっと走り続けてきて、もし途中で何かにつまずいてしまったら、また出直すには大変なエネルギーがいる。でもこの国の社会はそういうことには寛容ではないし、そこに飛び込めと言うには社会の流れが速すぎる」

田中が頷いた。

「ええ、それに加えてもう一つ、多くの人が気付かなければならぬことがあるわ。この国では、ゆとりがない人ほど、あくせく働いているという現実がある。そういう人の多くは、働いても働いても一向に生活が楽になっていない。一日乗り切ることでも精一杯で、本当は少し立ち止まってみる必要がある人ほど、経済的にも精神的にも、そうするだけの余裕を持ってない。そんな状況にある人を社会の激流に放り込んだら、押し流されていく先に何がその人を待っている？ 答えは、たぶん多くの人が既にわかっているはず。」

ゆとりがない人でも、心配せずに立ち止まってあたりを見回して息を継ぐことができる世の中でないと、誰もが元気に働ける社会にはならない。それは国の舵取りにかかっている」

並木は、工場からの異動を告げられた日のことを思い出した。中村工場長がFOCのことを語った時、いつも競争ばかりを強いられる仕組みから抜け出してみるのだと思えば、この生活もまんざらでもないんだと言っていた。ここでは競争よりも協調を求められ、そうやって自分や周りの人をこれまでと違った眼で見つめ直すことができるようになるのだと。時には歩を緩めてみるのも大切なことなのだろうと思った。その時にふと、並木にある考えが浮かんだ。少しためらってから、それを思い切って口に出してみた。

「ちょっと突飛な考えかもしれないけど、もしかしたら、年中無休とか二十四時間営業の会社やお店が減るだけでも、様々な問題に解決の糸口が見つかるのかもしれないね。たとえば食事と睡眠が多少でも規則的になれば肥満や健康の問題も改善するかもしれないし、ストレスが減れば何かとキレル人も少なくなるかもしれない。二酸化炭素の排出量だって飛躍的に減るかもしれない。それに深夜でなければ成り立たない産業ばかりという訳じゃない。二十四時間営業は競争社会の産物だ。その仕組みを世に放った時に、人は夜眠るという生理的なリズムを捨てたんだ。後はそれを正当化する社会が作られていった。しかし今後は労働力人口が減少基調だし、しかも高齢者が増えてきているんだから、これまでのように発展を無限に追い求めることに、いつまでも必然性がある訳ではないと思うんです」

そう言うつぎこちない笑みを浮べた並木に、田中が真剣な表情で深く頷いた。

「いま必要なのは、まさにそういったパラダイムシフトなのよ。私たちは現代社会の常識や前提を抜本的に見直して、その価値観を大胆に転換すべき時にある。経済にしろ何にしろ、本質的に発展や成長が未来永劫ずっと続くものはない。そう認めることで解決に向かう問題もあるはずよ。人も地球も、このままのスピードで突っ走っ

ていると、いつか何かにつまずき、大事故をひき起こすかもしれないと思うことがあるわ」

「そうなってしまふと取り返しがつかない。この国は、経済を追い求めることに、そろそろ一区切りつけてもいい頃合だろう。これからは国内外の貧困の問題や地球環境など、この国だからこそ担える役割が他にあると思えてならない。何よりもまず、傷ついたものを癒すことに本気で取り組むべきなんだ。ゴールのない競争を煽られるのも、それに踊らされるのも、もううんざりだ」

「あら、ひよつとして、並木さんも一人っ子なの？」

並木がそれに頷くのを見て、田中は微笑んだ。そして親しみを込めて言った。

「そんな気がしてたわ。ところで話は変わるけど、五月一日はメーデーなんです。毎年大きなイベントが各地で行われていて、たくさん労働者が仲間が集まります。みんなで力を合わせて、労働の権利や人権や平和を守ろうと気持ちを一つにするんです。無理はないでほしいんだけど、よかったら来てみませんか？」

並木は少し迷ってから答えた。

「大勢の人が集るところに出かけるのは自信がないんです。また倒れたらと思うと。すみません。でも、そのイベントが盛り上がりすぎてほしいと願っています」

田中は優しく微笑むことで、それに応えた。

「そうですね。心から仲間を思う人たちが集って、そのエネルギーがきつとみんなを盛り上げてくれると思う。もし来る気になったら私の携帯電話に連絡してね。ところで、そろそろ椅子に座りませんか」

田中が椅子を勧めた。話に夢中だった並木は、ずっと立ち放しだったことに今になって気付いた。二人はポスターの前を離れて事務机を挟んで椅子に腰を落着けた。おもむろに田中が尋ねた。

「会社の方はどうなりましたか？」

その問いかけに答える代わりに、並木は机の天板をゆっくり見下

るした。しばし沈黙が流れ、やがて並木は顔を起こして、前回田中と会った後に起こったことをかい摘んで説明し、先ほど医者に書いてもらったばかりの診断書の封筒を掲げて見せた。田中は同情するように並木を見つめた。

「大変なことが次々と起こったのね。身体は大丈夫？」

並木は力なく微笑んだ。その様子に、田中は目を閉じて首を小さく振った。

「そうね、そんな目に遭ったんじゃないわ。その診断書は会社に提出するんでしょう？ もうコピーは取りましたか？」

「いえ、まだです。そうか、コピーを取っておいた方がいいですね」「その方がいいですよ。なんといっても内容証明を破って放り投げたんでしょう、その部長？」

確かにその通りだと並木は思った。田中が続けた。

「それから、牧山先生に見せておいた方がいいですよ。コピーを取ったら、こここの帰りに寄っていくといいわ。でも疲れているようだから、程ほどにね」

田中が事務所のコピー機を使わせてくれた。並木がコピーを終えると、ここでの経費は持ち寄りだからと言い、田中は自分のポケットからコインを取り出して、コピー機の横の箱に入れた。並木が礼を言うと、田中は微笑んでそれに応えた。その笑顔の中央には力強い光と包み込むような優しさを共にたたえた大きな黒い瞳があり、それは見つめられた側に勇氣と力を惜しみなく与えてくれるように感じられた。

その時、並木はふと気付いた。いま田中と熱っぽく語り合っていた話題が、並木に直接関することではなかったということに。このところ、誰もが口を開けば並木の身に降りかかった出来事に話が終始していたような気がする。それ以外のことを考え、こうして議論したのは、いったいいつ以来のことだろう？ あれだけ長く話していたというのに、疲れを感じるどころか一種の興奮を覚えてさえいる。それは今の並木にとって、ちょっとした驚きだった。そして、

それは田中が心を開ける相手だと認めたということでもあった。

これまでのやりとりを経て、この女性が会話の相手に対して否定から入ることがないということを知り始めていた。今の並木にとって、それはこの上ない安心感となっていた。

このことが次の問いかけへと素早く並木を導いた。ろくに考えをまとめることもせず、思いついたままの言葉で田中に尋ねた。

「田中さんはどうして、こうやってみんなの相談に乗ってあげているんですか？ それは大変なことなのに、どうしてそんなに人に優しくできるんですか？」

その問いに田中は驚いたように目をしばたいた。それからぶつと吹き出した。

「随分と面白い質問をするのね。そんなことを訊かれたのは初めてよ」

並木は恥ずかしくなって顔が火照った。やはり、訊き方をもう少し考えればよかったと後悔した。その様子を見て、田中がまた笑った。

「ごめんなさい。笑ったりして」

そう言って、落ち着くまで少し間をおいてから田中が答えた。

「私が優しいかどうかはわからないけど、なぜみんなの相談に乗っているのかという質問にはたぶん答えられるわ。私は単に自分ができることをしているだけ。無理しないでできることを、ね」

田中はややかしこまった表情を浮かべ、穏やかな口調で語り始めた。

「私は、自分の持ち物 物でも心の中にあるものでもいいんだけど、それは私だけのものじゃなくて誰かと共有するために預かったものだと考えているの。だから私は、持っているものは、いつでも黙って自分の前に出しておくようにしているの。必要とする人がそれを手にしてくれたらいいと思って。でも、こういうのは押し付けたり言い広めるものではないから、ただそっと出しておくだけなの。それから、このことには私なりの掬みたいなものがあった、そうす

るからには誰からも見返りを一切期待しないって決めているの。これをしてあげたんだから相手にはこうしてほしいなんて少しでも思ったら、その時点で誰かの役に立つことはできなくなるし、そんな気持ちで困っている人と話すのはむしろ罪なことだわ。だから私の持ち物は、まさに「ご自由にお持ちください になるの」

並木は黙って聴き入っている。その様子に田中がかすかに頷いて先を続けた。

「持ち物というのは人によって実に様々だから、形や価値にとらわれなくていいの。たとえば、ある人にとってはお金を寄付することがそうであつたり、ある人にとっては食べ物や衣類や毛布を提供することだつたり、または何かの献身的な行為であつたり。でもそれは要らなくなつたものや余っていたものではなくて、自分にとって今もこれからも必要なものを、誰かのためにもつたいぶらずに出しておくの。でもね、ここに分かれ道がある。自分の持ち物を他の誰かのために役立てようとするかどうか、または自分だけの持ち物として終わらせてしまうかどうかは、その人の価値観で決まる。たとえばお金を得るのに、それを自分の持ち物として考える人は、得ようとする金額に際限がなくて、これだけあれば満足するという明確な基準を持っていない。だから もうちょっととか もっともつと」という誘惑にたいていは屈してしまうし、それがお金に対するやましさを意識の底に抱かせることにもなる。だけど足ることを知っている人は、決して我欲を満たすために贅沢に奔走することはないし、自分が必要とする以上のお金やものを他人のために使うことをためらわない。そういう人のところへは、やがて感謝と信頼が戻ってくるようになるの。大事なのは物理的なものではなくて、心の富なの。それって、見返りを求める人のところへは決してやってこないものでしょ？」

この話に並木は衝撃を受けた。そして、少なくとも今までこんなことは一度も考えたことがなかったと気付き、自分のことで手一杯で、大切なことが何も見えていなかったのだと悟って、思わず目を

伏せた。

ついさっきまで、並木は、今回のことはすべて自分が招いてしまったことであり、周りの人を巻き込んで傷つけてしまったのだと、心の奥で悔いてばかりいた。その思いが頭をもたげない日はなかったし、そうやって眠れぬ夜を過ごしてきた。しかしそんなやましさの傍らでは、傷ついた相手から向けられる、あの射るような冷たい視線を怖れてもいた。縮み切った心の中では、自責の念と募る不安の狭間を、乾いた孤独感が支配していった。なんとか抗おうともがき苦しむほどに、その身体は重みを増し思い通りに動けなくなり、心はさらなる深淵しんえんへと転がるように落ちていった。近頃では感情の抑制がうまく効かなくなり、涙に暮れることが多くなった。そんな自分を、心の奥底ではどこか持て余していて、気分はどこか苛立っていた。並木はそれが密かに負のループを生んでいたのだと気付いた。

視座を少し変えてみると、これまでとは別のものが見えてくることに、ふと気付いた。そしてそこに見えたのは、差し伸べられている多くの善意の手であった。果たして自分は、こんなふうに誰かに手を差し伸べようとしてきたのだろうかと考えた。

やがて並木は顔を起した。まだ自分にもできることがあるはずだし、しなくてはならないこともあるはずだとわかったのだ。身体の中から力が湧き出してくるのを感じる。

そんな並木の思いを感じ取ったかのように、田中が静かに口を開いた。

「自分の前に何も出しておかない人は、自分に向けて差し伸べられている手があることにはなかなか気が付かないんです。そういう人が、最後にすがるうとするのは自力なんです。たとえそれが、もう限界をとうに超えていたとしても。もう後がないとか、自力で何とかするしかないと思いついて、かえって自分を追い詰めてしまうんです。ずっとそうしていると、こうあるべきなのに結局は自分だけができないんだという高い壁が目の前を塞ぐように突如現れてくる。

自分がだめな人間だと考えるようになって、次は、他人との比較が気になりだして、自分をまた追い詰めてしまうようになる。人が自力でできることには限界があるのに、それを意識の底では認めずに無理をして必死にあがこうとしてしまう。そのうちに臨界点を超えてしまうと、心で感じるということができなくなって、何でも頭で考え始める。人生の意味なんて遠大なテーマに取り組み出したら、今度はそれを自分自身に課して意識の奥に刷り込んでしまうから、そこから抜け出せなくなってしまふ。そしてどんどん辛くなっていて、果ては心を閉ざして孤独に陥り、自分や他人を責めるようになってしまふ」

並木は深々と頷いた。田中の目には柔らかい光が宿り、彼女は思いつむぐようにゆっくりと丁寧に言葉を継いだ。

「でもね、自分ができないことは、それを得意とする誰かが知らず知らずに手を貸してくれているものでしょ？ そのことに気付いて、それを受け入れれば、次第に周りの人を認めて自分自身も救せるようになっていくんです。足りないものを受け取って、自分の持っているもので他人の役に立つ。短所は正すより素直に認めてしまう方がいいの。長所を活かして誰かの役に立てたなら、それが立派な個性になるわ。そうやって支え合って、その人たちは仲間になるの。それは自分も他人も、強さも弱さも、ありのままを謙虚に受け入れて、赦し感謝するということ。大事なのは、頑張れと言うことだけじゃ決してない。人は違って当たり前。どんなにすさんだ世の中でも、本当の意味で一人ぼっちの人はいないわ。今まで気付かずに通り過ぎてきたところにだって、実はそつと手を伸ばしてくれている理解者がいるはずなの」

並木は、この話がどれほど今の自分に当てはまっているかを悟った。人は独りではたいしたことはできないんだと、改めて気付く。多くの人や、はたまた自然の中にあつての、小さな自分なんだと。そう感じると、人は自ずと謙虚な心になれるものだなと思えた。

そしていつの間にか、並木は田中に問いかけていた。それは自然

にこぼれた問いだった。

「いったい、そのことをどうやって学んだんです？　どんなきつかけがあったんですか？」

田中は答える前に、それと分らないほど小さく深呼吸をした。やがて視線を起すと、大きな黒い瞳が並木をまっすぐに捉えた。そこには何かを決心したような強い光があった。

「以前、墮ちるところまで墮ちた時、最後に気付いたのがこのことだった。私は経験から学んだの。自分がどん底にいと、他の誰も時間が仕事に追われていて、たいていの人はいつも何かに苛立っているのがわかった。その人たちは苦しんでいる私を何とかしたいんだ、助けたいんだと言ったの。でも、それは表面的には優しい言葉でも、その深層には怒りが垣間見えた。中には善意でそう言ってくれた人もいたけど、結局は引きこもるのは悪で、常に人とたがわずにすることが社会的責務だと言われているように私は感じたわ。

私が欲しかったのは励ましではなく、立ち止まって一休みするのを許してくれることだった。頑張れという言葉じゃなく、大丈夫よと言って欲しかったの。私は人と関わるのが怖いと感じたし、社会との関わりも、できるだけ持ちたくなかった。でもこの国は、そういうことに寛大ではなかったの。それがこの国の社会性なんだと思っただ。苦しくて、必死にもがいたわ。生き続けることは試練だと感じたし、何もかもおしまいにしたいと何度も思った。やがて、どんなにあがいたところで自分の力では何もどうすることもできない状況になって、もはや最後の力も尽きたと感じた時に初めて、今まで見えなかったものが見えたと思った。人生が比較的うまくいっていた時には気にとめてもいなかったけれど、そこには差し伸べられた温かくて優しい人の手が確かにあったの。その手は誰かに握られるまで、黙って静かに、ただそこにあった。私はそれに夢中でしがみついた。他に選択の余地はなかった。そうしたらわかったの。自力では、所詮たいしたことはできないんだなって。人の役に立つというの、こういうことなんだろうって。前に誰かが言っていた人を

助けるというのは、おこがましい考えなのかもしれないってね。そして、おごりを全部捨てたら、後には感謝だけが残った。深淵から引き上げてもらって、これからは謙虚に生きようと誓った。その時人は決して独りで生きているんじゃないんだと思い知ったの」

並木は田中の瞳をじっと見つめ返した。その時、涙が一粒だけ、乾いた頬を伝い落ちた。

静かに見つめ合ううちに、周囲の音は消え去り、耳には何も聞こえなくなった。完全な静寂に包まれると、呼吸は穏やかなリズムへとかわった。それが並木の心をほぐし、ゆっくりと癒していった。やがて並木は、胸のあたりがほのかに温かくなるのを感じた。

十

週明けの月曜日、空にはどんよりとした曇りが広がっていたが、会社に向かう並木は決意に満ちて足取りはしっかりとしていた。

先週末に牧山と対応を協議し、並木は診断書を会社に提出して、これ以上うつ病を悪化させないことを最優先にしようということになった。汐崎にも電話をかけ、状況を説明して理解を求めた。彼女は快く応じてくれて、仕事はフォローするから気にしないようにと言ってくれた。医者からももらった薬のおかげもあって、昨夜は久しぶりにぐっすり眠れた。

これから診断書を提出するのだ。これがどう扱われるか、まだわからない。しかし不安より、それによって事態が少しでも前に進むことへの期待の方が今は勝っていた。

並木は情報システム部に到着すると真っ直ぐ北村部長の席を目指した。北村は例によってパソコンに向かっている。時間が早いいため他の従業員はまだほとんど出勤してきていなかった。北村はやってくる並木に気付き、ちらりと目を向けたがすぐにまたパソコンのモニターに視線を戻した。

机の正面に立つた並木を、北村はそこには誰もいないかのように無視し続けた。それでもただ黙って立っている並木にやがて業を煮やし、不機嫌そうにぼそぼそと何事かつぶやいたが、依然として顔と目はモニターに向き、手はキーボードを叩き続けている。並木はそれには反応せず、北村が顔を起こすまで無言で待った。

五分が経過し、とうとう北村は顔を上げた。モニターの代わりに並木を睨みつける決心がついたようだ。その眼には怒りが満ちていた。並木の背後では、ぱらぱらと数人が出勤してきて、挨拶を交わす声がした。やがて誰もが、この異様な緊張感を感じ取って口をつぐんだ。

並木はおもむろに上着のポケットから淡いグリーン細長い封筒を取り出して北村の机に置いた。北村は並木を睨んだまま、手を伸ばしてそれを拾い上げた。裏返しもしせず雑に封をちぎって開け、中の紙を取り出した。それを片手で掲げ持つて、横目でざっと眺めた。一瞬の間があつて、次には紙に接さんばかりに顔を下げて、今度は慎重に読み返している。そこで並木が口を開いた。

「医者からはこれ以上具合が悪くならないようにしろと言われました。調子がよくなければ席を外して休めと指示されています。倒れてまた誰かに迷惑をかける訳にはいきませんので」

それだけ言うと並木は北村に背を向けて自分の机に戻っていった。北村は何か言いかけたが思いとどまり、手の中にある診断書にもう一度目を走らせた。少し考えてから急いで席を立ち、足早に廊下へ出て行った。

並木が自分の席につくと、隣の机には汐崎がいた。いつの間にか出勤してきて、このやりとりの一部を見ていたのだらう。汐崎は黙ったまま、そつと微笑んだ。並木はそれとわからないくらい、かすかに頷いた。それからポケットに右手を入れて？レコーダーを握り、その後起こるであろう事態に備えた。

それから五分もしないうちに廊下にけたたましく足音が響き、浅

倉人事部長が駆け込んできた。すぐ後には北村が続いていた。浅倉の手には、先ほどの薄緑色の封筒がきつく握られている。

真つ直ぐ並木の席にやってくる、浅倉はいきなり並木の腕をつかんで強引に立たせた。激しく憤り、怒鳴るように叫んだ。

「なんだこれは？ どういうつもりだ」

並木は浅倉の手を振り解いてから、ゆったりと落ち着いた口調で答えた。

「診断書です」

浅倉はさらに声を荒げた。

「だから、これはなんなんだ！」

並木はやれやれというようにわざと肩をすくめてみせた。

「見ての通りです。医者への指示は北村部長に伝えてあります。業務に支障をきたさないように、プロジェクトチームのメンバーにはちゃんと説明して理解してもらいます。それでよろしいですね」

浅倉は後ろに立っている北村を横目で睨んだ。北村はそわそわして落ち着かない様子だ。浅倉が並木に目を戻した。

「だめだ。与えられた仕事をこなせないなら君はここにいる必要はない」

並木は短く息を吐いた。それからきつぱりとした口調で答えた。

「ここではチームでの仕事ですから。結果は出します」

この言葉に浅倉は激昂し、瞬く間に顔がどす黒く変色した。怒りと興奮が抑えられないといった様子で、浅倉の頭頂部あたりの空気がかすかに揺れて歪んで見えた。

しばらく両者は黙って睨み合った。やがて浅倉は並木から目を逸らし、きびすを返すと北村を手荒く押しつけ、足を踏み鳴らすようにして出て行った。北村はおろおろと周りを見回したが、慌てて小走りに浅倉の後を追って行った。

足音が廊下へ消えると、それまで固唾を呑んで見守っていた者たちが一斉に立ち上がり大きな歓声をあげ、惜しめない拍手を送った。汐崎が飛び上がって並木に抱きついた。歓喜の大きな渦が、ここに

あるすべてを飲み込んだ。それは、いま目の前で威権を振りかざした敵とのささやかな対決に勝利してみせた並木への賞賛であり、また、抑圧にこれまで無言で耐えてきた者たちの魂の叫びでもあった。拍手はしばらく止まなかった。

みんなが落ち着きを取り戻し、それぞれの業務に戻っていった後で、並木はプロジェクトチームのメンバーに声をかけてミーティング用のテーブルに集まってもらった。テーブルを囲んだ面々は静かに並木が話しを始めるのを待っている。並木は時間をかけて全員の顔を見回した。そしてゆっくり口を開いた。

「みんなにお願いします。既にご存知のように、私はシステムのことについては素人です。みんなと同じことを、同じようにはできません。加えて体調を崩していて、先ほど診断書を提出したところです。医者からの指示があつて、席を外して休まなくてはならないことがあります。時々あると思います。それについては、みんなに謝ります。でもその代わり、私は自分にできることでみんなの役に立ちたいと考えています。そこで、まずは事務的なことや書類仕事は全部私に回してください。それを私が引き受けますので、みんなは開発の方に全力を注いでください。自由にやって構いません。もし何かあつても、責任は全部私が負います」

そう言つて、並木は頭を下げた。しばらくして再び顔を起こすと、全員が真っ直ぐ並木を見ていた。やがて一人が頷くと、それは全員に伝染した。口々に任せると威勢のいい言葉が発せられた。そして最後に汐崎が言った。

「やりましょう、私たちはチームよ」

それからの毎日は目が回るようだった。並木の机は山をなした書類に埋め尽くされ、もはや僅かなスペースを見つけるのも難しい有り様だった。電子化だ、ペーパーレスだとはよく言ったものだ。パソコンでタイプされた書類は次々とプリンターから吐き出され、後から校正が加えられたらまた印刷し直される。あつという間に最新

版にとって代わられた哀れな紙たちは、続々とシュレッダーに飲み込まれて短い生涯を閉じていった。

並木はずっとパソコンにかじりついていた。時々めまいを感じたり体調が崩れる兆候を察知すると、早めに休憩を取るように心がけた。うつ病の作業なのか、集中力を長い間持続させることが今の並木にとっては困難であり、そんな時は席を立って休憩室へ向かった。並木のチームのメンバーはそんな姿を目にしても、もう冷たい視線を投げて寄越すことはなかった。それどころか、「戻ってくる時にコーヒーを取ってきてくれませんか」などと笑顔で気軽に声をかけて、並木が席を立ちやすくしてくれる者さえいた。ここには並木が以前感じたよそよしさは、もはや存在していない。誰もが支え合うことをためらわず、活気と仲間意識で満たされていた。

もう一つ、並木がみんなに提案したことがあった。それは仕事にメリハリをつけようというものだった。それぞれが無理をしないことを前提に、自分で判断して定時で切り上げて帰れる者は積極的にそうするように呼びかけた。その代わり、並木も通院日には遠慮なく医者に行かせてもらうからと言った。チームのみんなはその申し出を受け入れた。このことによつて、誰もが生活の中にオンとオフの区別を取り戻した。それは本来は当たり前のことなのだが、ここにいる者にとつては、ようやくその手に取り戻した懐かしい感覚であった。

こうして士気が上がり、並木のチームはうまく機能するようになっていった。それに呼応するかのよう結果も出てきた。システムの仕様も徐々に固まってきた。作業のピッチが上がった。そして何よりの成果は、みんなの表情が明るくなったことだった。誰もが生き活きと業務をこなし、近頃ではその合間にジョークが交わされるまでになった。どんどん仕事は多忙になっていくのに、その表情からは余裕さえ感じられた。人材を人材と書く人もいるが、まさにここでは人は宝だった。知らず知らずのうちに、それぞれが仲間を気遣い、それが結果となつて現れていた。そのことに全員が

喜びを見出していった。並木はみんなのおかげでまた一つ大切なことを学んだと感じていた。

一方、この間も浅倉は毎日決まった時間に欠かさずやってきた。並木の前か横に立って、誓約書を出せと言ってひとしきり怒鳴り散らすのだ。並木はそれには答えず、いつも黙ったままでいた。するとそのうちに浅倉は手近にあるものに怒りをぶつけて出て行くのだった。その被害に遭うのは、たいていは椅子やゴミ箱だった。そんな浅倉を、この部の者たちは中指を突き立てて見送った。この浅倉の一連の行動にかかる時間は、日を追うごとに短くなっていった。昨日と今日は、とうとう二分ほどで撃退できるまでになっていた。

そんなことが続いた後の水曜日、並木は小杉の病院に行くために午後半日休暇を取った。病院が患者よりもゴールデンウィークを優先して休診日を決めたため、この日にしか予約が入らなかったのだ。

好天に恵まれた大型連休が明けてからの数日はどんよりとした雲が空を覆い、今日は雨の一日だった。並木を送り出して、プロジェクトチームの面々は遅い昼食をとろうと席を立とうとした。その時、食事を終えて戻ってきた北村が彼ら呼び止めた。面々はこれから食堂に行くところだと伝えたが、北村は時間は取らせないと言った。チームのメンバーは北村に促されて、渋々ながらミーティング用のテーブルに移動した。そこに腰を下ろすと北村が切り出した。

「ご苦労さん。ここのとこ随分とうまくいっているようじゃないか。実は仕事の進捗の報告がほしかったんだ。並木さんに訊こうと思っていたんだが、彼は半日休暇で帰ってしまったんでね。うつかりしていて、訊き損ねてしまったんだ。ちょうど君たちがいてくれてよかったよ。プロジェクトがはかどっていることはわかっているんだが、どんな様子なのかをこつちにも報告しておいてほしいんだ」

この北村の言葉に一同は怪訝な表情を浮かべた。それを見た北村が言葉を補った。

「だいたいのは訊いているから、手短かに話してくれればいいん

だ。部を預かっている立場上、知っておかなくてはならないというだけのことだから。さあ話をして、食堂が閉まってしまいう前に飯を食いに行ってくれ」

テーブルを囲んだ者たちはためらって互いに顔を見合わせた。やがて一人が口を開き、プロジェクトがうまく進んでいると認めた。それをきっかけに、一人また一人と話をはじめて当たり障りのない内容の報告をした。そして汐崎が話す番になった時、彼女は並木がみんなを支えてくれたことがその成果に大きく寄与したのだと言った。それを受けて他の者たちも口々にそれに同調した。そして北村は満足げな表情を浮べて話を締め括った。

「そうか、良かった。ありがとう。さあ、飯を食ってきてくれ」
全員が立ち上がり、食堂へ向かおうと急いで出て行った。北村はそれを見届けてから席を立って廊下へ出ると、ゆっくりと階段を上っていった。

週が明けた月曜日は陽の光がたっぷり降り注ぐ朝だった。五月に入ってから灰色にけぶる空が続いていて、こうして太陽と対面したのは実に久しぶりのことだった。今朝を迎えるまでは、五月晴れという言葉が何か縁遠いものを感じられていた。

並木は通勤路の明るい景色をしばし楽しんだ。うつ病の具合は依然として回復の兆しが見えなかったが、みんなのおかげでそれ以上悪化してもいないように思えた。山下公園越しに薫るさわやかな潮風を顔に感じ、今日も何とかして一日を無事に乗り切ろうと思った。情報システム部に入っていくと、いつものように北村がキーボード相手にささやかな会話を交わっていて、他の者たちはまだほとんど出勤してきていなかった。

始業時間が近付くとようやく部内の席が埋まり、またキーボードを叩くあの音があちこちで飛び交うようになった。ふと北村に目を向けると何かそわそわと落ち着きがないように見えた。どうしたんだろうかと訝っていると、不意に廊下からペタペタという聞き覚え

のある足音が響いてきた。並木が顔を向けると、こちらに向かつて歩いてくる浅倉の姿が目に入った。その表情は苛立たしげで、いかにも不機嫌そうに見える。並木はたちまち嫌な予感を覚えた。浅倉は並木の横に來ると、立ったまま睨みつけながら言った。

「誓約書を出せ」

そして右手を並木の方に伸ばして二、三度指を曲げては広げて、寄せせという意思表示をした。その腕がかすかに振動していることに並木は気付いた。そのまま並木が答えずにいると浅倉は声を一段張り上げてもう一度同じ要求を繰り返した。並木は黙って浅倉の目を無表情に見上げた。しばし沈黙が流れた。やがて浅倉は手を引つ込め、それで傍の机を激しく叩くと、きびすを返して出て行った。

それから一時間後、再び浅倉がやってきた。彼は同じことを求め、並木も同じ態度を返した。浅倉は先ほどより少し長く粘ったが、やがてまた廊下へ出て行った。

汐崎が小声で囁くように言った。

「今日はどうしたのかしら。浅倉のやつ、なんだかいつもより苛々していますね」

並木はそのことについてしばらく考えた。確かに、いつもと何かが違っている。朝からやって来たり、こんなに短い間隔で同じ話をしに来たことは今までなかった。今日はこんなことが、まだ何度も続くかもしれない。そう思うと、憂鬱な気分になった。

その日の夕方遅く、また浅倉が入ってきた。やはり午前と同じことを言った。並木はもうたくさんだと思ったが、これ以上仕事の邪魔をされるのは嫌だった。仕方なく少しだけ浅倉に付き合うことにした。

「もういい加減にしてください。仕事の方はちゃんと進んでいますし、結果も出します。だから誓約書はもう提出する必要はないですよ」

「私は出せと言っているんだ。これまで我々がどれだけ我慢してき

たか君にもわかっているだろう。今日こそ提出してもらおうからな」
並木は怒りをたたえた目で浅倉を見た。

「必要性が理解できません。なぜそんなに」
浅倉が並木の言葉を遮って声を荒げた。

「君が理解しようがしまいが、そんなことはどうでもいいんだ。誓約書がないとこっちが困るんだよ」

この言葉に並木は一瞬息を呑んだ。

「困るって、何ですか？ 誰が困るんですか？」

浅倉は口をだらしなく開けたまま、しまったという表情を浮べた。
並木はたたみかけるように言った。

「さつき我々とも言いましたね。我々というのは誰のことですか？」
浅倉の顔はやや下を向き、並木から目を逸らして口ごもった。眼球が忙しく動いている。言い訳を探しているのだ。並木がなおも攻め込む。

「誰なんです？」

不意に浅倉が弾けたように顔を上げた。目には焦りと困惑が浮かんでいる。

「それは君、我々というのは会社のことだ。私を含めてね。私は人事を預かっている立場だから会社のいうことをきかない従業員がいると非常に困る……とまあ、そういうことだ」

これによって、並木は優位に立ったことを認識した。

「私にはまだわかりませんね。会社が決めたことだと言うなら、浅倉部長以外の方もこのことをご存知なんですか？ 浅倉部長がすべてを決めていたとばかり思っていましたよ」

「……いや、ちゃんとその都度他の人と相談してきた。私はきつちりとすべきことをしてきた」

「じゃあ、浅倉部長が私にしてきたことを他の方も知っているのだと？」

「当たり前じゃないか。私はちゃんと事細かに報告を送っているんだ。こちらに手落ちはない。君にとやかく言われる筋合いはない」

とりあえず、いま手に入るだけの手がかりをつかんだと並木は思った。後は浅倉を追い払うだけだ。

「私は弁護士と相談しながら対応します。まだ弁護士は諸々検討している最中ですから、今は何も提出しません。浅倉部長、それもちやんと報告に含めておいてくださいね」

浅倉は怒りでどす黒く紅潮した顔をこちらに向けて何か言おうとしたが、それは無駄だと悟って言葉を呑み込んだ。そしてやや肩を落とし、並木に背中を向けて出て行った。

並木はふっと息をついて、ポケットのICレコーダーのスイッチを切った。その時、隣で汐崎が頷くのが見えた。彼女は、今の浅倉とのやりとりについて話そうというのだ。おもむろに腰を上げると、並木は廊下へ出た。汐崎が黙って後からついてきた。二人は機械室のドアを開けて中に入った。鍵をかけると、汐崎が切り出した。

「随分とおかしなことを言っていましたね、浅倉のやつ。それに何か切羽詰っていた。何と言うか　そう、お尻に火がついたみたいだった」

「ああ、でもそのおかげで黒幕がいることがはっきりした」

「それに黒幕との連絡方法もね」

この言葉に並木が驚いた。

「連絡方法？　そんなこと何か言っていたか？」

汐崎はしたり顔で頷くと言った。

「気付きませんでした？　浅倉部長は　送っている　と言ったの。事細かな報告をいちいち手紙や電報で送ると思う？」

並木ははっとした。

「そうか、メールだ」

汐崎はウインクして指で丸を作ってみせた。

ここでもう一つ、考えなくてはならないことが浮かんだ。

「それじゃあ、メールの相手は誰なんだ？」

「確かめてみればいいじゃない」

そう言っつて、汐崎の瞳がいたずらっぽく光った。

夜の十一時を回ってから、並木は再び会社にやってきた。情報システム部に入っていくと、そこで汐崎が一人で待っていた。

その日の夕方、機械室を出る時に汐崎は、今夜みんなが帰ってから人事部長の席に行ってみようと言った。もしまた浅倉が来ると面倒だから、並木は一旦会社から離れて十一時過ぎにもう一度戻ってきた方がいいだろうということになった。汐崎はこのまま留まっただけに残業している人を帰らせておくと言った。

「あら、早かったですね」

汐崎が茶目つ気たつぶりに言った。

並木は肩をすくめて、こんなことに付き合わせる羽目になって悪かったと詫びた。汐崎は気にしてないわとさらりと言い、備品棚から懐中電灯を取り、いつも持ち歩いているシステム手帳を手にして立ち上がった。二人は部屋の電気を落としてから廊下に出て、上の階へ向かった。

人事部のフロアは暗くひっそりとしていた。電気をつける代わりに懐中電灯の明かりをつけると、その向こうにたくさん無人の机が不気味に鎮座しているのが見えた。一番の奥の窓際にひときわ大きな机があった。それが浅倉のものだった。

椅子を引けばすぐ後ろは大きな窓で、日中そこに座った浅倉の背中を捕らえることができるのは太陽と鳥くらいのものだろう。机の脇に斜めに置かれたパソコンのモニターには低反射の偏光フィルタ―が被せてあった。

懐中電灯の限られた明かりを頼りに、パソコンの電源へ伸ばした並木の手を汐崎が制した。

「パソコンはだめよ。どうせパスワードがわからないし。仮にログインできたとしても、そうしてしまつと後で調べる気になれば時刻

が記録に残ってしまうの」

並木はその手を引つ込めて尋ねた。

「じゃあここで何をするつもりなんだい？」

「パスワードを探すの。IDはログイン画面に記憶されていると思うけど、パスワードはそうはいかないから。知つての通り、パスワードは八桁のアルファベットと数字をランダムに組み合わせたものを情報システム部が割り振っているんです。しかも大文字と小文字も区別しているから、ほとんどの人は覚えられないわ。当てずっぽうに試して他人にログインされると困るから、下手に単語のスペルみたいに秩序的なものにできないの。だからプログラムでランダムに生成していて、このやり方は定期的にパスワードを割り当て直すのには向いているんです。ちなみに訊くけど、並木さんは自分のIDとパスワードを暗記している？」

「ああ、覚えている。工場の時に自分のパソコンを与えられていなかったからね。みんなが居ないのを見計らってこっそり使っていたから、暗記せざるを得なかったんだ」

「あら、そんな人はここじゃ奇特だわ。でも並木さんのような人は滅多にいないのよ。たいていはIDとパスワードを紙に書いてどこかに貼るか挟むか、あるいは机の引き出しに入れている。今はそれを見つけようと思ったの」

並木は苦笑いを浮べて言った。

「確かに以前はそうしていたよ。でもパスワードを情報システムが割り振っているなら、そのリストはないのかい？」

「あるにはあるんだけど、それは北村部長の管理下なんです。何かあると困るからという理由で管理者が決められているの。パスワードを更新するとリストも新しくなるんだけど、それは私たちの手元にはないんです。メンテナンスなどで誰かのパソコンにログインしなくてはならない時にはアドミニストレータという全権ユーザーを使うんですが、さっきも言ったように、ログインすればそのIDと時刻が記録されてしまう。後から調べようと思えば、直近の記録を

あたることができるんです。こんな深夜に浅倉部長のIDでログインするのは危険なんです。だから今はパスワードを書いた紙を見つけて、ちょっとした罫を仕かけようと思って。後で誰にも疑われずに、浅倉部長のパソコンを堂々と調べられるように」
そう言つて汐崎は口元に小さな笑みを浮べた。

それから二人は浅倉の机を調べた。いくつかの書類の束が重ねて脇に積み上げられていて、透明なデスクマットの下にはそこに挟んだ内線番号の一覧表が見えた。机の端に載っている電話機の横には、備品棚から持ってきたとおぼしき水性インクのペンと銀行の名前が印刷された薄い紙質のメモ用紙が揃えて置いてあった。メモ用紙には何も書かれておらず、他にめばしいものはなかった。横に目を移してパソコンとモニターを見たが、そこにも目的のものは見つからなかった。次に袖机の引き出しを開けてみようとしたが、そこには鍵がかかっていた。残るは天板の下の広くて浅い引き出しだけだ。

ここには鍵はなく、手でそつと引くと小さな音を立てて開いた。しかしその中には経済情報を書いた薄っぺらな週刊誌とボールペンやハサミやスタンプ台や、その他がらくたが無造作に押し込んであるだけだった。使い捨てのライターやリップクリーム、チューインガムのパックやキャンデーのケースまであった。

どうやら探し物は見つかりそうにない。並木はその広い引き出しの中をもう一度眺めた。

「うーん、無いようだな。この引き出しなんて、どうでもいいものばかりだ。それにしても、どうしてこんなところにガムやキャンデーまでしまつてあるんだ？」

そう言いながら並木はピンク色のキャンデーの缶を持ち上げた。

その時、中で何かが動いて、かすかに硬く乾いた音を立てた。キャンデーの音だろうか？ 確かめようともう一度軽く揺すってみると、今度ははつきりと金属的な音が聞こえた。二人ははつとして顔を見合わせた。そつとふたを持ち上げると、そこにはセロファンに包まれたキャンデーが四つと小さな銀色の鍵が一つ入っていた。

並木はその鍵を取り出し、袖机の鍵穴に挿した。鍵は抵抗することなく穴に収まり、それを慎重にひねるとカチャという音と共に鍵が開いた。並木はその引き出しをそつと手前に引いた。

中はプラスチックの仕切り板で区切られていて、その一番手前の小さな区画には一枚の紙が入っていた。それを見下ろすと、印刷された銀行名の上方に書き留められたIDとパスワードが目に入った。並木が振り返ると、汐崎が頷いた。彼女が興奮している様子が、その表情からも口調からもありありとわかった。

「やったわ！ この会社では従業員のセキュリティ意識なんて所詮こんなものなのね。ここからは私に任せて」

汐崎は手を伸ばして引き出しからそのメモ紙を取り上げ、懐中電灯の明かりを当てて仔細に眺めた。そこにはこう書かれていた。

ID：173592

パスワード：Qm?kRPnD

その紙を机の上に置き、懐中電灯を並木に手渡した。そこを照らしていてくれるように頼むと、電話機の横から新しくメモ用紙を一枚破り取り、それを先に机に置いた紙の上に重ねた。すると薄い紙質を通して下の紙に書かれた文字が透けて見えた。

印刷された銀行のロゴが一致するように慎重に重ね直して、さつき見かけた水性ペンを手にとり、新しいメモ用紙の上から浅倉の字をなぞって同じように書き始めた。途中、パスワードの二文字目と七文字目を空白にし、四文字目の k は、まず縦の線だけを描いた。そして k の残る斜めの線をなぞり、慎重に先を延ばして大文字の K に見えるように書き換えた。次に上の紙をずらしながら、二文字目の m と七文字目の n の位置を入れ替えて書いた。

パスワード：Qn?KRPM D

そして並木から懐中電灯を受け取って、二枚を仔細に比較した。文字も揃っているし、使用したペンも同じものであるようだ。さらに裏写りやペンの跡がついていないことを確かめて、いま新たに書いた紙の方を引き出しに戻した。元の浅倉のメモ紙は、それ以上折り目が増えないように、手帳を開いてページの間に挟んだ。

「これでいいわ」

並木が問いかけた。

「念のために訊くんだが、朝になってパスワードを打ち込む時に気付くことはないかな？」

「それは大丈夫だと思う。覚えていないから、こうしてメモしているよ。IDはずっと変わっていないのに、この紙にはわざわざそれも書きつけているでしょ？ 定期的に新しいパスワードを受け取る度に、このメモを作り直しているはずよ。どちらか覚える気がないという証拠ね。もし何かおかしいと思ったとしても、どうやって正しいIDとパスワードを確認する？ せいぜい、このメモ紙を確かめるのが関の山だわ。それに書き換えた m と n はキーボードの配列が隣同士でタイプする指が一緒だし、k はこの字の前に小文字が続くから一文字分早くシフトキーを押すかどうかなんて些細なことについて確信があるとは思えないわ」

並木は頷き、腕時計に目をやって言った。

「それをどうするのか訊きたいが、もうあまり時間がないな。あと十五分でセキュリティロックをかけないと警備会社から電話がきくしまう」

汐崎は頷くと、袖机の引き出しに再び鍵をかけ、その鍵をキャンデーの缶に戻した。懐中電灯を向けて机が元の状態と変わらないことを確かめて、二人は足早に人事部のフロアを後にした。

通用口にロックをかけて会社を出た時、腕時計の針は間もなく日付を跨ぐことを示していた。昼間とは違って変わって人も車もまばらな道を歩きながら、二人は先ほどの成果を話し合った。手に入れ

たものをどう使うのかと並木が訊くと、汐崎は笑みを浮べた。
「ちよつと考えていることがあるの。お楽しみはこれからよ」

翌朝、汐崎はいつもよりだいぶ早い時間に出勤した。情報システム部のフロアにはまだ北村だけしかいない。一方通行の挨拶をして席に座り、予備のノートパソコンを取り出した。

これは部の備品として数台が用意されていて、必要がある時に持ち歩いて作業することが認められている。そのほとんどが自由な裁量で行われていて、誰がどれをいつ使おうとまるで管理されていない。中にはある日誰かが持って帰ったまま紛失してしまったものさえある。それでもお咎めなしの暗黙の了解があった。

そのうちの一台でしばらく作業していると、目の前の電話が鳴った。汐崎が受話器を取ると、それは浅倉からの内線電話だった。

「ああよかった。まだ誰も来ていないんじゃないかと心配したんだ。パソコンにログインできなくなったんだよ。何度も試したんだがパスワードが認証されないんだ。ちよつと見に来てくれないか」

「わかりました。今から行きますので、そのまま待っていてください」

汐崎は電話を置くと北村の方に顔を向けた。相変わらずこの男は誰にも関心がないというように無心でキーボードを叩いている。それを見て、ノートパソコンを閉じて、そこにメモ紙を載せて赤い字で使用中と書いた。諦め顔で立ち上がり、システム手帳と携帯電話を手に持って廊下へ出て行った。そして誰もいない階段に向かう時、そつと小さく舌を出した。

人事部のフロアでは浅倉が一人で待っていた。汐崎が入っていくとにこやかに微笑みかけた。

「いや、助かったよ。うちの部はまだ誰も来ていないし、そちらに誰もいなければ困ってしまうところだった。問題のパソコンはこれなんだが、こつちへ来て見てくれたまえ」

汐崎は浅倉のパソコンの前に立ってモニターを覗き込んだ。

「いいか、こうやってパスワードをここに打つたんだが、何度やってもだめなんだ」

浅倉はそう言っただけで袖机の上の引き出しを開けて、中に置かれたメモを見ながらキーボードに文字を順番に打ち込んでエンターキーを押した。振り返って汐崎を見た浅倉の顔には「ほらな」と書いてあるかのような顔があった。汐崎が言った。

「だめみたいですね。ゲストIDでよければそれでログインすることはできますが、ご自分のメールなどは使えません。このままパソコンを少し空けていただければ、正常に戻せるかとトライしてみますけど」

「ああ、そうしてくれるとありがたい。メールが使えないと仕事にならんからな。どれくらいかかるかな？」

「そうですね、二十分くらいでテストしてみます。それでだめだったら、パソコンを外してこちらで預かることになるでしょう。それでいいですか？」

「ああ、頼むよ。二十分でも三十分でも、ここを空けるから」

「わかりました。ではしばらく席をお借りします」

「助かるよ。そうそう、私のIDとパスワードはここに入っているから必要なら使ってくれ。引き出しはそのまま開けておくよ。私は立会っていた方がいいかな？ それともどこか別の部屋に行っていく方がいいか？」

浅倉は後の選択肢を口にしながら、そこをさりげなく強調して言った。既に心は食堂か休憩室に向かっているようで、そわそわしているように見えた。

「どうぞ、コーヒーでもタバコでも。ここに居ていただかなくても大丈夫ですよ」

そう言っただけで汐崎は微笑んでみせた。

「あっ、そういうつもりじゃなかったんだが。でもせっかくだから、行ってきてもいいかな？」

「どうぞ」

汐崎は笑顔で答えた。

「ところで、今日の部長はなんだかご機嫌ですね。何かいいことでもありましたか？」

浅倉はほっとしたようにわざと大きく息を吐いてみせ、そして満面の笑みをたたえた。

「わかるかい？ 実は、ずっと悩みの種だったことが一つ解決したんだ。そのおかげで、まさに肩の荷が下りたという心境なんだ」

「そうでしたか。何かは知りませんが、それはよかったですね」

汐崎は椅子に腰を下ろし、手に持ってきた手帳と携帯電話を机の上に置いた。それを見て、浅倉が何気なく言った。

「へえ、携帯電話に小さなぬいぐるみをぶら下げているんだね。それは熊かな？」

「あら、失礼ですね。犬ですよ。ちゃんとパンツをはいているですよっ？」

「あはは、そうだな。熊はパンツをはかないかもしれんな。じゃあよろしく頼むよ」

そう言って浅倉は嬉しそうに足取りも軽く廊下へ出て行った。

それを見送ってから、汐崎はパソコンに向き直ると、手帳を開いて昨夜挟んでおいたメモ紙を見ながら難なくログインを果たした。

それから携帯電話を手に取って、ぬいぐるみの犬を外した。犬のはいたパンツを下ろすと、そこからUSBの端子が顔を出した。それをパソコンに挿し込むと、フラッシュメモリーが認識された。

パソコンのローカルドライブの中から手早くシステムフォルダを呼び出し、メールソフト用のフォルダを開いた。その中から浅倉のメールアドレスが格納されたデータファイルをすべて選んで、それをUSBメモリーにコピーした。これはパソコンが深刻なトラブルに見舞われた際に度々行う、メンテナンス時のメールバックアップの手順でもあった。

続けてパソコンの簡易メモ機能を立ち上げてIPアドレスを書きつけ、それもUSBメモリーに保存した。

そして次にTempフォルダを開き、USBメモリーから一つの実行ファイルをそこにコピーした。それをダブルクリックして起動させた。画面上は何も変化はなかったが、システムのプロセスを見ると作動していることが確認できた。続いてセキュリティソフトを開いて、外部アクセスの許可リストにそれを加えた。

最後にスクリーンセーバーの待ち時間を五分間に変更し、電源の設定で十五分後にモニターの電源が切れるように変更した。

パソコンの画面上に開いているウインドウが無いことを確かめ、ファイルとプログラムについての履歴を削除した。続いて、USBメモリーをパソコンから引き抜き、元のようにパンツをはかせて携帯電話に下げた。そして手帳からIDとパスワードが書かれた浅倉のメモ紙を取り出し、空いている引き出しの中の偽のメモと入れ替えた。そつと引き出しを閉めてから時計を確認すると、ここまでで十分ほどが経過していた。

汐崎は手帳と携帯電話を持って立ち上がると、ちょうど出勤してきた人事部の一人に話しかけた。

「人事部長からパソコンがおかしいと呼ばれていたのですが、一応終わりました。ログインできないと言われていたのですが、キャップスロックが何かの拍子にオンになっていたようでした。それで大文字と小文字の認識がうまくいかなかったんでしょう。よくあることなんですよ。一通りのチェックはしておきましたので、これで大丈夫だと思います。パソコンは立ち上げてありますからそのまま使えます。念のために、今日は帰るまでシャットダウンや再起動はしないように伝えてください。まあ、何かあればまた見に来ますけど。私はもう戻らなくてはならないので、後で部長にお電話します。空いている時間を知りたいのですが、今日の部長のご予定を教えてくださいませんか」

「それは朝早くからご苦労さまでした。しかしなんであの年代の男性は誰よりも早く出勤して来ないと気が済まないのかな？ 我々だって余裕をもって来ているのに、それよりももっと早いんだから。」

そんなに早く会社に来て、いったい何をしてるのか不思議でなりませんよ。掃除もしなけりやお茶も淹れない人なのに。その拳句、キヤップスロツクに気付かないでそちらに電話するなんてね。まあ、あの人らしいんだけど、そちらにとっては迷惑でしたね。あつ、すみません。もう戻られるんですね。予定表を見ますから、ちょっと待ってください」

そう言つて彼は壁に吊り下げてある行動予定と書かれたホワイトボードを見た。

「ああ、もう今日の予定が書かれているな。部長は、これだけはまめなんですよ。今日は、午前は会議ですつといなくて、午後は一時からまた会議で四時から来客ですね。確実に捕まえたければ四時の来客の前か、その後の時間がいいでしょう。それから部長は何もなければ定時に帰つてしまいますから、夕方遅くなるともういないと思いますよ」

「ありがとうございます。部長は忙しいんですね」

「今日はそうみたいです。そうやって席にいないでくれるとほつとしますよ」

汐崎は微笑んでそれに同意すると、礼を言つて人事部を後にした。

情報システム部に戻ると、ほとんどの席が埋まり、いつものようにキーボードが不快な和音を奏でていた。並木の姿もそこにあつた。汐崎は再び、予備のノートパソコンを開いた。続いてLANケーブルを、手近なところにあるHUBに挿し込んでネットワークにつないだ。ノートパソコンを机の隅に置き、誰からも覗かれる心配のない角度に調整した。それを起動し、いくつもあるメンテナンス用のIDの一つを使ってログインした。

続いて、先ほど浅倉のパソコンに忍ばせてきたものと対になるプログラムを起動した。朝方のうちに、こちらにもこつそりインストールしておいたのだ。画面が現れるのを待つて、そこに浅倉のIPアドレスを打ち込んで設定を終えると別のウィンドウが立ち上がり、

スクリーンセーバーが表示された。

それから三十秒も経たないうちにスクリーンセーバーは消え、代わりにデスクトップの画面が現れた。その中を勝手にカーソルが動き回り、メールソフトのショートカットが選ばれると、カーソルは砂時計に変わった。じっと見ていると、続いてメールソフトが開き、受信ボックスが表示された。次いで画面右下にバックグラウンドで送受信していることを示す表示が出て、その後五通の新しいメールが受信された。汐崎は、受信ボックスにリストのように一覧表示されている差出人と件名をざっと見たが、その範囲には社長と関係ありそうなものはなかった。

その後、右側に別の小さなウィンドウが開き、新着メールのうちの一通が表示された。汐崎がそれを読み終えるのとほぼ同時に、カーソルが再び動いて返信ボタンが押された。画面が切り替わり、返事がタイプされ始めた。短い文が打たれ、続いて送信ボタンが押された。その小さなウィンドウが消えると、カーソルは次に送信ボックスをクリックした。そこに一覧が表示されると汐崎はすばやく送信済みメールの宛先と件名を画面下の方まで見渡した。その中に木田社長宛のメールが二通含まれているを見付けた。そのうちの一つは件名の中に「報告」という文字を認めた。次の瞬間、メールソフトが閉じられた。

汐崎はノートパソコンをそのまま置んだ。上には先ほどの使用中のメモ紙がまだ貼られている。これで見かけ上は閉じているが、パソコンはスタンバイを維持した状態となる。机の上から新たなメモ紙を一枚取り、「機械室」と書いて並木にそつと渡して席を立った。

並木がドアノブを回すと重々しく鉄扉が開いた。機械室の中では汐崎が待っていた。並木が扉を閉めて鍵をかけるのを待つて、汐崎が今朝起きたことを話した。

早い時間に出勤すると、思った通り浅倉からパソコンをみてほしいと依頼があったこと、浅倉の席を空けてもらいメールデータをコ

ピーしてきたこと、情報システム部に戻ってからノートパソコンで浅倉がメールをやりとりするのを見ていたことを並木に説明した。並木はそこで話を制するように手を上げた。

「初めの方は理解できたんだが、いったいどうやって情報システム部に居ながらにして浅倉部長のパソコンが覗けたんだい？」

汐崎は訳知り顔を作って、声のトーンを落として囁くように言った。

「それは、大きな声では言えないんですが、今朝浅倉部長のパソコンからメールデータをもらう代わりにお土産を置いてきたんです。リモートとか遠隔操作ってわかりますか？ 元々の用途は、離れたところにいながら別のパソコンをメンテナンスしたり、外出先の別のパソコンから自宅のパソコンにつないで操作したりするためのソフトなんです。最近はフリーウェアでもいいものが出回っていて、操作される側のパソコンには単体の実行ファイルを置いてくるだけでいいという簡単なものがあるんです。しかも煩わしくないようにと、リモートソフトが立ち上がっていることが気にならないための機能までついているんです。それを使って、浅倉部長のパソコンをちよつと覗かせてもらったという訳です」

「大胆だな、驚いたよ。そんなことができるということさえ知らなかった。でも、もしその実行ファイルがあることに誰かが気付いたら？ 覗いたことがわかってしまわないのかい？」

「大丈夫だと思います。まずそんなものがあるとは思わないでしょうから。念のためにプログラムの起動履歴などは一通り削除してきました。まあセキュリティソフトの外部アクセス許可リストには実行ファイル名が残ることになりますが、ここを見たり、これが何かを調べるということはまずありません。仮に後でそうすることがあったとしても、その頃には該当する実行ファイルはパソコン内部から消えているんです」

並木はぼかんとして汐崎を見ていた。汐崎が説明を続けた。

「このお土産はTempフォルダに置いてきました。ここはシステ

ムファイルやログなどが一時的に作られる場所で、基本的にここにあるものはゴミなんです。メンテナンスする時は無条件でこのフォルダを空にしています。それで、毎月半ば頃に順番に行っているメンテナンスが今夜なんですけど、今回の対象がどこの部門だか知っていますか？」

汐崎はぺろりと舌を出すと、あっけらかんとして言った。

「明日の朝にはきれいになっていますよ。今月は私が当番じゃないのが残念だけど」

それで並木はようやく理解した。メンテナンス前日というのが絶好のタイミングだったのだ。その作業は決まった手順通りに淡々と行われる。汐崎はこの機会を、痕跡を消すことに利用したのだ。確かに彼女の言うように、明朝にはきれいになっていることだろう。

それから汐崎はおもむろにまじめな表情になった。

「さっきの話に戻りますが、浅倉部長の操作を覗いていたら送信済みのメールが表示されたんです。少ししか見えませんでした。その中に木田社長へ送ったものがありました。後で会社の外に出てから、今朝コピーしてきたメールアドレスの中身と一緒に確認してみましょう。これで少なくとも浅倉部長が木田社長にメールでコンタクトしていたことはわかりました」

並木はゆっくりと頷いた。汐崎が続けた。

「それにしても、よくもこれだけいろとやってくれたものよね。その分はきつちりと裁きが下らないと不公平だわ」

そう言うと、汐崎はいたずらを思いついた子供のように笑みを浮かべた。この女性が秘めた意外な側面の底知れぬパワーに、並木はただ圧倒されていた。

その後、ヒアリングの足りないところがあったからと言って、汐崎は顧客サービス部へ行った。並木は席に残って書類仕事をした。た。

しばらくして、横に人の気配を感じて並木は顔を上げた。そこに

は北村部長が立っていて、こちらを見下ろしていた。

「ちよつといいか」

北村は尋ねるといふより命じるような口調で言った。並木はそれに従い、ミーティング用のテーブルへ移動した。

「これが人事部から届いた。宛先は君だ」

北村はそう言つて手にしていた二枚の紙を並木の方へ押しやった。

並木はテーブルからそれを拾い上げた。その手は顔の前で止まり、眼はそこに釘付けとなった。同時に、たちまち血の気が引いて身体が硬直していくのを感じた。

「そういうことだ」

北村はそれだけ言つと立ち上がった。

「ちよつと待つてください」

並木はなんとか言葉を絞り出した。しかしそれは北村の耳までは届かなかつた。立ち去ろうとする北村の背中に向かつて、同じ言葉をもう一度叫ぼうとした。しかし、もはやそれは声にならなかつた。その時には既に目の焦点は定まらず、身体には力が入らなくなつていた。かすかに震えていることだけが、かろうじてわかつた。

どれくらい経つたのだろう、左の方から何やら声が聞こえてきた。その声ができる方に、苦労して眼球を動かした。視界が次第にはつきりしてくると、汐崎がこちらに来るのが見えた。汐崎は様子がおかしいことに気付き、慌てて走り寄ると並木の両肩を手で抱えた。

「どうしたの？ 大丈夫なの？」

それに答える代わりに、並木はようやく焦点が合い始めた二つの眼で汐崎の瞳を見た。

汐崎はそれを見つめ返し、それから並木の身体を椅子の背にもたせかけた。空いた手を足元の床に伸ばして、裏返しになって落ちていた二枚の紙を拾い上げた。それを読もうとして汐崎の手もまた、止まった。

長い沈黙が流れた。やがて並木は背もたれからゆっくり身を起した。よろよろと立ち上がると、汐崎の腕を取つて彼女を椅子にかけ

させた。力なく下ろした汐崎の手から二枚の紙を受け取り、テープに並べて置いた。

あらためて並木はそれを読んだ。一枚目の上段には 異動通知と、その下には並木の名前と、 独立行政法人 衛生分析機構への出向を命じる と書かれていた。二枚目は 命令書 というタイトルがあり、下段には二つの項目が記されていた。

一．出向命令

六月一日付で命じられた出向先の勤務に就くことを命じる。

出向先 独立行政法人 衛生分析機構

所在地 埼玉県川口市青木 川口駅より徒歩十五分

二．提出命令

かねてより提出を命じている「誓約書兼念書」について、この度の出向命令に伴い次の期限までに必ず提出することを命じる。

提出期限 五月十九日 午後五時

並木は心の奥底で怒りが頭をもたげようとするのを感じた。なぜまた異動なんだ？ 衛生分析 まるで畑違いではないか、そこで何をさせようというのだ？ しかも今度は出向だ。とうとう会社から追い出そうというのか？ もう少して仕事の成果を出せるというのに……。まだ回転の鈍っている頭がそんなことをつらつら考え始めた時、汐崎がやっとの思いで口を開いた。

「いったいどういうことなの？ どうして……」
並木は首を振った。

「さっぱりわからない」

それからしばらく時間をかけて、どうすべきかを考えようとした。首を伸ばして間仕切りの上から情報システム部のフロアを見やると、奥の机で北村がパソコンのモニターを凝視しながら盛んに手を動かしていた。迷った末に、並木が諦めたように言った。

「仕方ない。北村部長に尋ねてみるか」

それにはじかれたように汐崎が尋ねた。

「北村部長？ 浅倉部長ではなくて？」

「ああ、突然北村部長に呼ばれて、この紙切れを渡されたんだ」

このことを少し考えてから汐崎が言った。

「たぶん訊いても無駄だと思う。今まで並木さんに関しては浅倉部長が直々にやってきていたのに、今回はそうじゃない。何か引つかかるわ」

「まあ確かにそうだが、業務命令は上司から告げられるのが普通ではないかい？」

「普通、ならね。今までの一連の中で、並木さんは業務命令を誰から受け取った？ 特に異動に関して。部門の上司からだった？」

ようやく並木は、汐崎の言わんとすることが呑み込めた。彼女の言う通りだった。顧客サービス部を出された時に始まり、それ以来ずっと、異動は浅倉から直接告げられていた。

汐崎は並木の反応を見て頷いた。

「そうだとしたら、今回のケースは異例ね。今朝、浅倉部長が肩の荷が下りたと機嫌よく言っていたの。たぶん、このことだったんだわ。普通の手続きに戻ったということは、浅倉部長が直接並木さんに働きかけるのを止めたということよ。そうする理由は、たぶん一つしかない。会社として腹を括った。それを決断したのは」

二人は顔を見合わせて頷いた。

「黒幕だ」

並木は休憩に立つふりをして一人で建物の外に出ていった。隣とのフェンスの間にそっともぐり込むと、携帯電話を開いて牧山の事務所にダイヤルした。呼び出し音は鳴り続けたが誰も応じない。一旦電話を切り、次に牧山から教えられた裏番号にかけた。十回の呼び出しを経て、電話は転送された。さらに六回のコールの後、今度は牧山が応じた。

「ああ、並木さんですか。どうしました？」

「会社から今度は出向命令が出たんです。いま話せますか？」

「裁判所に向かっているところですが、歩きながら話せますよ。なんでまた出向命令なんて出てきたんですか？」

「それがわからないんです。ただ今回は浅倉部長が姿を見せず、上司の北村部長から書面を渡されたんです」

牧山は少し考えてから言った。

「それは通常の手続きのようにも見えますが、並木さんの場合は異常なことのようにも感じますね。黒幕がいるとすると、その人物が浅倉部長にこの件から手を引かせたのかもしれないですね。そうだとすると、この命令は今までのものより厄介だと思った方がいいということか」

「そうかもしれません。事情を話した同僚も、同じことを言っていました」

「うーん、そうですね。あまり時間がないので、その命令の中身を簡潔に教えてください」

「出向は六月一日付で埼玉の独立行政法人に勤務するよう命じられています。それに付随して命令書というのが別に添えられてきていて、以前から提出しろと迫られていた誓約書を今月十九日までに出した上で、期日までに出向先に就くことと書かれていました」

そこまで聞いて牧山は唸るような声を出した。

「随分と手の込んだやり口になってきましたね。異動の通知だけで済ませずに、それに命令をさらに被せて念を押してきたんだ。意思の到達を、より確実にしようとしているな。それに埼玉となると、そこからだと東京を丸々縦断してそのまた先じゃないですか。通勤時間もかかる上に都心へ向かう電車はえらく混むし、健康な人だって毎日通うとなったら大変ですよ。誓約書については、出向とはいえ、これからは別の法人の元で働くようになるんだから、まずは守秘義務を誓ってから行けという論立てですね。出向と言えば、並木さんの会社では、過去にどこか他の会社へ出向した人がいますか？」

並木は少し考えてから答えた。

「いえ、知っている限りではいけませんね。こちらへ出向してきたという人はいましたが」

「じゃあきつと、就業規則はいい加減な定義のままかもしれないですね。でもそこを突いても、また都合よく変更されてしまうだけなところで、最近は並木さんの任された仕事はうまくいっていたんですよね？」

「はい、うまく進んでいます。みんながよく頑張ってくれていて、浅倉部長に約束したように、成果がもう少しで出るころまできていると感じています」

「えっ、浅倉部長に成果を約束したんですか？ 自分のところの部門長ではなくて？」

「しばらく前に診断書を提出した時に、浅倉部長と北村部長が、十分な状態で働けないならこの部にいる必要はないと言ったんです。私はチームの仕事だから協力して結果を出すと約束しました。その時に話を主導していたのが浅倉部長だったんです」

「それだ。きつと、それですよ。だから結果を出される前に並木さんを外そうとしたんだ。そうしておかないと、後で下手に手が出せなくなる。そうだとすると、チームでの仕事なんだから、別の誰かに進捗状況の報告を求めていたはずだ。この命令を下すタイミングを計るために。何か思い当たることはありませんか？」

「いえ、いま思いつくことはありませんが、後で同僚に訊いてみます。でもこのところ私に進捗報告を求めたことはありませんでした」
「うん、わかりました。今はここまでしか進めませんね。すみませんが、もう裁判所の前なんです。今回は提出期限と出向期日までに少し時間がありますから、急いで対策を練りましょう。今日は裁判所の後は、別の弁護士団会議で東京へ行かないとならないんです。明日の都合はどうですか？」

「大丈夫です。有給休暇を取れば時間も合わせられます」

「では、そうしましょう。こちらも調整してみても、なるべくまとめ時間を取ります。もし今日のうちにまた誰かにこの件で何か言わ

れることがあれば、弁護士と相談してから答えると言ってください。それから、できれば今日の夕方か明日の午前中にでも医者に行ってみてください。並木さんの心身の状態で埼玉まで通勤することが可能なかどうか、医者意見をもらえるといいのですが」

「わかりました。この後で電話してみます。ところで、もう少しで黒幕の正体がかめそうです」

「そうなんですか。誰ですか？」

「たぶん前回予想した通りです」

「そうか、社長か。もしそうなら、今まで推測してきたことに筋が通りますね。詳しいことは明日また教えてください。一応、昼頃にこちらの事務所に来ていただけますか？」

「はい、伺います」

「ではまた明日」

そう言つて電話は切れた。続けて小杉の病院に電話をかけ、予約の合間に入れてもらえるように頼み込んだ。五分ほど粘った末に明日の十一時なら、と返答をもらった。並木は丁重に礼を言つて電話を切った。

並木は畳んだ電話を見つめた。そしておもむろに再度開いて汐崎の携帯電話にかけた。二度呼び出しを鳴らしてそのまま切った。すぐに汐崎が折り返し電話をしてきた。

「二階の休憩室に来てるの。そろそろじゃないかと思って」

並木は苦笑いを浮べた。汐崎にはいつも考えを先回りされているような気がする。電話を畳んで建物の中に戻ると休憩室へ向かった。

扉を開けると休憩室には汐崎の他には誰もいなかった。汐崎は戸口から離れた奥のテーブルに座つて待つていた。そこにはコーヒ―を満たしたコップが二つ載つていた。並木は腰を下ろすと、牧山の見解を汐崎に伝えた。

「さすが弁護士さんというところね。じゃあ、明日は有給休暇を取るのね。お医者さんからも何かいい知恵をもらえるといいですね」

並木が頷くのを見て、汐崎は微笑んだ。

「ところで、帰る時にノートパソコンを持っていくから、後で例のデータを確かめてみましょう」

そして汐崎の瞳がいたずらっぽく光った。

「それから、もう一つお楽しみを準備しているの。聞きたい？」

「お楽しみ？」

並木は眉を寄せて、つかの間考えてから答えた。

「いや、楽しみは後にとっておくよ。君のことだから、きつとすこいことを思いついたんだろう」

そう言つて、カップを持ち上げてゆつくりコーヒーをすすった。少し間をおいてから、ちらりと顔を上げると、妙にニコニコしている汐崎の笑顔が目に入った。いたずらを思いついた子供のように、瞳がきらきらと輝きを放っている。その笑みは、そんなことを言わずに早く続きを尋ねてくれと催促しているかのように見えた。こんな無邪気な表情に打ち勝てる者は、そうはいないことだろう。並木は折れた。

「それで？ 今度は何をやらかそうというんだい？」

汐崎は満足げに頷くと、並木の方に身を乗り出して声を落とした。

「秘書課の河合さん、知っていますか？」

「直接は知らないな。いや、ちょっと待って……ああ、思い出した。しばらく前のことだけど、いつものようにやってきた浅倉部長に話しかけた女性がいたんだ。カールのかかった髪で年の頃は四十前半くらい。派手な色柄の服を着ていた。確か河合さんと呼ばれていた」

「そう、たぶんそれが河合和奏かわいわかなさん。昨年転職して来たんです。社長のお気に入りだと言われていて、今じゃ秘書課のお局さま。悪い人じゃなんだけど、全然いい人じゃないんです。役職者にはいい顔をするけど、そうじゃない人にはろくに挨拶もしない。プライドが服を着て歩いているような人」

そう言つて汐崎は頬を小さく膨らませた。

「それで、そのマダムがどうした？ 浅倉のやつとデートでもしていたのかい？」

「あら、よくわかったじゃない？」

「まさか！」

汐崎が思わず吹き出した。笑いながら続ける。

「いえいえ、正しくは、これからデートしてもらおうと思っているんです」

「どういうことだい？」

「それは、こんなふうにしようと考えているんです。まず、今朝のうちに浅倉部長のパソコンにリモートを仕込んできたのは話しましたね。これで向こうをモニターできるから、やつが席にいるのを見計らって河合さんからデートのお誘いをしてもらうんです」

汐崎の口元には、まだ八重歯が覗いている。計画の説明は、そこから細部に入っていた。

「まずこちらから浅倉部長に偽メールを送る 従業員のメールアドレスは送受信テストに使うためにこちらに一覧があるんです。そのメールでやつを外に呼び出して、いっぱい喰わすんです。やつが外に出る時の格好を知っているでしょう？ 大きなマスクに色付き眼鏡ですよ。それでなくても見た目がよくないのに、さらに怪しさを増すんですから。そこで、山下公園の辺りでやつに待ちぼうけを喰わせれば、あの辺りは観光客ばかりですから目立ちますよ。路上駐車やちよつとした揉め事を未然に防ごうと巡回する警官も多く通るし、場所によっては警備員もいるから、その間にきつと誰かに職務質問をされますよ。そのまま何事もなく解放されても、絵面としては面白いでしょ？ それを写真に収めて、大きなポスターを作ろうと思っただんです。見出しは、そうねえ、 浅倉人事部長、テロリスト容疑で逮捕 なんてどうかしら。社内の至るところで展覧会ができますよ」

並木はもう笑わずにいられなかった。それを見て汐崎もまた声を上げて笑った。それが落ち着くと並木が訊いた。

「ところで、いま言っていた偽メールって、どうするんだい？」

「なりすましメールって、聞いたことありますか？ 実はやり方さえ知っていれば他人の名前を差出人にしてメールを送ることができるんです。たとえば、私が並木さんの名前で浅倉部長に くそつたれ と書いたメールを送ることもできます」

苦笑いする並木に、汐崎は茶目つ気たつぷりの笑顔を向けた。それからまた先を続ける。

「まあ、それを悪用した犯罪も起こるので、いろいろと対策がとられ始めてきたところです。でもうちの会社内では、まだまだですね。言ってみれば、ざるみみたいなものです。ちなみに、その仕組みはこうです。たとえば並木さんが名刺カードくらいのとても小さな小包を作って、そこに鈴木太郎さんという宛名と、差出人名を書いて郵便局に持っていったとします。窓口で、これでは規定の最小サイズに満たないので別の封筒に入れてくださいと言われました。並木さんは小包を別の大きな封筒に入れて、そこに改めて宛先と差出人を書きました。それをもう一度窓口に出せば、ちゃんと鈴木さんに届きますよね？」

並木はこくりと頷いた。

「ええ、配達する人は外側の封筒の宛先しか見ませんから、ここにきちんと書かれていれば配達ができます。次に受け取った鈴木さんですが、たとえば届いた日はひどい雨で封筒はびしょ濡れでした。すぐに外側の封筒は破いて捨てました。すると鈴木さんは小包だけを目にするようになります。そこに書かれた宛先と差出人を見て、並木さんから自分に届いたものだとかわかるんです。ではこの時、もし差出人の名前が、たとえば私の名前になっていたらどうなります？ 実際には並木さんが送った小包であっても、鈴木さんにとって は並木さんからではなく私から小包が届いたんだという認識になります。逆に私が並木さんに内緒で、並木さんの名前で鈴木さんに送ることもできます。配達する人は外側の封筒の宛先を見て、受け取る鈴木さんは中の小包に書かれた差出人を見るんですから」

並木はまた頷いたが、その表情からは笑みが消えて、代わりに驚きが浮かんでいた。汐崎は小さく頷いて先を続けた。

「それと同じことをメールでやると、なりすましメールになるんです。でもSMTPというメールの仕組みでは、これは決して特殊なことではないんです。通常の手順として封筒と小包にあたるものが用意されていて、それぞれに宛先や差出人を書くようになっていきます。でも先方に届く時に封筒は外されて、中の小包だけが渡されます。受け取った人は、小包を見て差出人を知るんです。実はメールを作成して送信ボタンを押すと裏側ではこんな処理が高速で行われているという訳です。この情報はメールのヘッダ部分に記録されているのですが、メールソフトが普及したから、そんなことは誰も気にも留めなくなっただけですね。まあ、それを見たとしても、意味がわからない人の方が多いと思いますけど」

「そうなのか。じゃあ、設定の仕方さえわかっていたら、なりすましメールが送ってしまうということか。それで、もしそのメールを受け取った人が、そのまま返信しようとしたらどうなるんだい？」

「意図したところに返信させることができます。メールソフトのアカウント設定には、返信用のメールアドレスを設定するところがあるんです。メールを受信した人が返信ボタンを押したら、そこで作成される返信メールの宛先はそのアドレスになります」

並木は深く息を吐き、あらたまった口調で尋ねた。

「念のために訊くんだが、河合さんにとばっちりがいかなかったらね？ たとえどんなに嫌な人だとしても、そこに火の粉が降りかかるのはよくないから」

「そこはぬかりないから大丈夫。河合さんには何も知らないし、現地にも現れない。浅倉部長が待ちぼうけを喰わされても、後で河合さんに何かを訊けると思いますか？ 社内はポスターだらけになるのよ。そんな大スターから 君はデートにこなかったじゃないか なんて言われたら、私だったら恥ずかしくて横面を引っ叩き

たくなつちやうわ。それに、ポスターに使う写真をインターネットの投稿サイトにでも載せておけば、誰でもポスターを作れたことになるでしょう？ 非アダルト系の話題を扱う投稿掲示板がいくつもあるの。ポスターにそのサイトのスクリーンショットかURLを入れておけばいいわ。それに、なんと言っても彼女は社長のお気に入りだもの。浅倉のやつが何を言ったって、そんなたわごとを信じる訳はないし、もちろんん人事権もそこまでは及ばない」

並木が頷くと、それを確かめてから汐崎がさらに続けた。

「お誘い用のメールは浅倉部長が自分でパソコンから削除するように仕向けるし、それがうまくいかなくてもリモートで監視するからこちらでも削除ができます。それにメールはパソコン側で受信された時にサーバーから消されるし、送信したメールもうちの会社では容量の関係でサーバーにコピーを残さないようになってるの。それから、さつきこつそりリモートを使って向こうのメールソフトの設定を変えたの。ソフトを終了すると同時に、削除済みボックスに残ったメールも完全に消されるように。ほら、受信ボックスから削除しても削除済みボックスに残ることがあるじゃない。でも、これに残るものは何もない。特殊なツールで調べたりしなければ、何も出てくることはないわ。それは浅倉部長が自分でできることではないだろうし、そうするためには誰かにいきさつを話さなくてはならないでしょう？ でも、それは同時に自分がいかに間抜けだったか説明するようなものだわ。結局、やつは何もできない」

ふと並木は、このことがきつかけとなつて、今度は汐崎がFOCに送られることになりはしないだろうか、不安が脳裏をかすめた。それを汐崎に悟られないように気をつけて、遠まわしに尋ねた。

「こんなことをしている間、君は安全だったんだろうね？」

「ええ、大丈夫。今朝のうちに浅倉部長の予定を聞いておいたので、席を外している時間がわかっていたの。タイミングを見計らうのが楽だったわ。ついでにスクリーンセーバーとモニターの電源が切れる時間を調整して、二十分間何も操作しないと画面が真っ黒になる

ようにしておいたので、やつが席に居ないことに確信が持てたの。机の後ろはすぐ窓になっていてから、こちらの操作で画面が勝手に動いていても、鳥でもない限り誰も気付きやしないわ。何にせよ、証拠が残っていないんだもの、もしも浅倉のやつが何かおかしいと言ったとしてもやつを信じる者は誰もいないでしょうね」

並木は納得して頷いた。汐崎が立ち上がった。
「さあ、準備しなくちゃ。他に黒幕がいようとまいと、指示されれば何でもするようやつは許せないわ。実行犯をやつつけましよう」

机に戻ってから、汐崎は今日の業務を片付けることに没頭した。そして夕方、それを終わるとノートパソコンを開いた。

パソコンがスタンバイ状態から復帰するのを待つて、リモートの画面を最小化した。次にノートパソコンのメールソフトを起動させ、使われる頻度が最も低い送受信テスト用のアカウントを設定した。続いてそのうちの三箇所をいじって、送信元を河合に、メールの返信先をこのテスト用アドレスに変更した。そしてメールの新規作成ボタンを押し、表示されたウィンドウに本文をタイプした。

突然でごめんなさい。本当のことを言うと、実は私、あなたのことが気になっていているんです。ずっと、外でお会いしてゆっくりお話ししてみたいと思っていました。やっと、お誘いする決心がつきました。

ご迷惑だとは思いますが、外で会っていただけないでしょうか？ 今日、会社が終わったら、山下町のサニーワーフホテルの外でお待ちしています。もし来てくださらなくても、私はずっと待っています。

それから、とても恥ずかしいので、このメールは削除してくださいね。あなたのお返事がオーケーなら、後で私を見かけたらリンクしてください。そうしたら私はわざとあなたにつれない態度を

してみせます。だって、恥ずかしいから。それが私のあなたへのサインです。

W・K

文中にはあえて固有名詞を使わなかった。秘密めいたイニシャルが親密度を増して見せていた。また、万一の場合には誤送信だったという推測を加える役にも立つことだろう。

汐崎は文面を読み返して、その出来栄えに独りで頷いた。そして隣で書類作りに集中している並木の方をちらりと見て、小さくウインクを投げた。時計に目をやり、午後五時の少し前であることを確かめてから送信ボタンを押した。

モニターに、再び浅倉のパソコン画面を表示させた。ちょうどそこにポップアップウィンドウが出て、新着メールが届いたことを告げていた。やにわにカーソルが動き、メールソフトが立ち上げられた。いま汐崎が送ったばかりのメールが開かれて、カーソルの動きがそこで止まった。そして間もなくそれは閉じられ、その五分後に画面はスクリーンセーバーに変わった。

浅倉はペタペタというサンダルの音を響かせて秘書課へと急いだ。そこへ足を踏み入れると、すぐ近くには河合が、その奥にはもう一人、彼女の部下の若い女性がいた。河合は愛想よくにこりとして、浅倉に話しかけた。

「あら、部長。何かご用ですか？」

浅倉は少しためらったが、咳払いをしてから意を決したように河合を見やり、小さくウインクをした。

突然のことに河合は驚いたが、努めてそれを顔に現さないようにして、もう一度尋ねた。

「それで、ご用はなんですか？」

そう言った河合の口調には、多少の苛立ちが滲んでいた。それを読み取った浅倉はもう一度、よりはっきりとわかるように片目をつ

ぶつてみせた。それを見た河合はツンと露骨に顔を背けると、浅倉を無視して足音高く奥へ歩いて戻っていった。部下の女性が河合にすり寄って、囁くように何事かと尋ねた。河合は大きな声で叫んだ。「なんでもないの！」

それを耳にした浅倉は満足気な表情を浮べて頷くと、きびすを返して廊下へ出た。独りほくそ笑み、そして小さな声でつぶやいた。「彼女はなかなかの演技派だな」

汐崎がモニターを注視して待っていると、やにわにスクリーンセーバーが解除されて再びカーソルが動いた。受信ボックスが開かれ、一覧の中から先ほどのメールが選択された。次にカーソルのすぐ横に小さなグレーのメニューが現れ、カーソルはその中から削除を選択した。そして、そのメールは一覧から姿を消した。

ちょうどその時、終業時刻を告げるチャイムが厳かに響き、ほぼ同時に浅倉のパソコンはシャットダウンが実行された。

汐崎はにやりと小さく笑みを浮かべた。そしてノートパソコンを操作してリモートを解除し、プログラムを、その痕跡も含めて消去した。次にメールソフトを再び立ち上げて、浅倉に送信した偽メールを削除し、アカウントを元の通りに直した。そしてシャットダウンして、キャリングバッグに収めた。それを手に立ち上がると今夜の当番の一人に向かって、人事部のメンテナンスを頼むわねと言った。

「さて、並木さん。帰りましょうか」

山下橋を渡り、二人はマリントワーの前から山下公園の中へ入った。歩きながら汐崎は、送った偽メールの内容と浅倉が取ったと推測できる行動について並木に話した。それを聞いた並木はまた唸った。

「君はすごいな。どうしてそんなことを思いつくんだ？」

汐崎は肩をすくめて微笑んだ。

「さあ、どうかしら。これまでずっと室内に閉じこもる仕事が多かったから、ストレスが溜まっていたのかも。時々、無性にはじけたくなる時があるんです。仕事が性に合わないのかもしれないかもしれませんね。まあ、何にせよ、こんな手にまんまと引つかかる浅倉部長こそ、すごいと思いますけど。ある意味、驚きだわ」

並木はじつと汐崎を見つめた。汐崎はその視線から恥ずかしそうに目を逸らして言った。

「行動が突飛過ぎて、外見からは想像がつかないって言いたいんでしょう？　そういうのって、よくあることじゃない？」

そう言くと、不意に汐崎が並木の腕をつかんだ。彼女はそのまま黙って先に立ち、足早に進んでいく。公園と外の歩道を分かつ柵に近寄り、石造りの小さな建物の裏側へ回り込んだ。背の低い植え込みの間に隠れるように身をかがめると、小声で言った。

「いたわ。やつよ」

柵の向こう、道路を隔てたところにサニーフホテルはあった。陽あたりのよい波止場　という名前のこのホテルは、赤いレンガを敷き詰めた趣のあるポーチを持ち、その奥には大きなガラス張りのエントランスを構えている。石畳の歩道が広がる周囲の景観に調和しながら、その存在感を静かに示していた。

このホテルには独自のサービスがあつて、今、ちよつとした人気を集めている。ホテルの上階には長期滞在向けの特別室があるのだが、その部屋には時計もテレビもない。時を告げるものは、壁のほとんどを占める大きなガラス窓から射し込む陽の光と船の汽笛だけだ。時計のない贅沢　それがここの売りだった。時間に追い立てられる日々とうんざりしている人々に、このホテルの名前そのもののサービスはとても魅力的に映るようだった。滞在者が求めたものは、刻々と正確に時を刻む時計ではなかった。

サニーフホテルの隣には、同じレンガ色の壁と数段の低い石段を伴った聖堂を持つ教会があつた。その前の歩道には青々と葉を広げた銀杏の木々が立ち並び、多くの観光客が港の風景と木漏れ日

を楽しむようにゆっくりと行き交っていた。

そこに一人、どうやっても景色の一部になれない男が立っていた。大きなマスクと色付き眼鏡で顔を覆い、ベージュ色のスプリングコートに身を包み、やや前傾姿勢で落ち着きなく二つの建物の間をうろろしている。ホテルのロビーではドアマンが努めてさり気なくその様子を伺っている。その前を通りかかったカップルが、顔を下げて歩を早め、無言で通り過ぎていった。

「どこからどう見ても怪しいわ。さすが浅倉部長、期待を裏切らないわね」

そう言っただけで汐崎はショルダーバッグに手を入れてコンパクトなムービーカメラを取り出した。それは彼女の掌に収まるほど小さなサイズだった。

「さあ、決定的瞬間をスクープするわよ」
並木は微笑を浮べた。

「ここからだと言った道路があるけど、大丈夫かい？」

「ええ、向こうに何か動きがあったらその木の陰に立ってカメラを向けます。運悪くバスが通過しないでくれれば、いい写真が撮れると思いますよ」

「そのカメラはそんなに高性能なのかい？」

「これですか？ 結構いいですよ。ムービーカメラなんですが、静止画はざっと一千万画素並みの画質で撮れます。光学ズームが十倍とかなりしっかりしていて、デジタルズームと合わせれば百倍まで寄れますから、これくらい離れていても大丈夫ですね。撮った写真はメモリーカードに記録されて、スロットがついているパソコンならそのまま取り込めます。これだけの性能があれば、デジカメより便利なんですよ」

「動画も撮れるのかい？」

「ええ。でも今回の目的はポスターなので静止画でいきます。撮影はばっちりですから任せてください」

そう言っただけで、レンズを浅倉に向けた。機械ものに疎い並木は、独り

苦笑して首を振った。

それから二十分ほどが経過したが、先ほどの景色に変化は起きていなかった。汐崎がカメラを持った手を下ろした。

「みんな確実に怪しんでいるんだけど、なかなか誰も声をかけに行きませんね。こんな時に限って警官の乗った自転車も通らないなんて。いつそのこと思い切って女子高の前にも呼び出せばよかったですから」

「そうか。あれだけ見た目が怪しければ、女子高の前なら確実に警備員から声をかけられただろうな」

「そうですね。会社からそれほど離れていないところで、隣がレストランかホテルになっている女子高があれば最高だったんですけど。残念ながら、そんな都合のいい立地は見当たらなかったんです。デパートの待ち合わせ場所が女子高の前ではちよつと不自然だし、男の期待も高まらないでしょ？ それに前には広い道路がある方がよかったです。道幅が狭いと、そこに居づらくなったら通りを渡って離れたところに移動できてしまうし、こちらが見物するのに適した場所もなかなか見つからない。だから、ここを選んだんです」

並木は汐崎の計画に感心して頷くと、目を転じて浅倉とその後ろの建物を見た。先ほどと同じように、浅倉はホテルと教会の間をうつろっている。時折立ち止まり、落ち着きなく顔を左右に動かしている。ホテルのロビーではドアマンが警戒感を強めたようで、責任者らしきスーツ姿の男性がやってきて何やら話を始めた。次に隣の教会へ目を移した時、道路に面した教会の角部屋で窓のカーテンが揺れたのを見たと思った。さらに目を凝らして待つと、カーテン越しに人影が動くのを確かに捉えた。

ポケットに手をつ突っ込んで、並木は携帯電話をつかんだ。取り出して素早く開き、ウェブサイトに接続して地図サービスを呼び出す。画面をスクロールして、今いる場所を探す を選んだ。続けて G PS 情報を通知します という表示が出て、まもなく現在の周辺の検索する画面へ移行した。検索結果の中から業種一覧を選び、次

いで教会を指定すると、いくつかの候補が表示された。その中でここからの直線距離が最も短い教会を選んだ。画面が切り替わり地図が現れ、そこに示されたのは確かに目の前の教会だった。地図を閉じると、元の画面には電話番号の青い文字があった。それを選んで携帯電話の発信ボタンを押した。発信者非通知番号を付加するかどうかを問う小さな画面が現れ、付加する方を選んだ。やがて呼び出し音が鳴り、三回目で男性の声が応えた。

「こんにちは、みなと山下教会です」

「いつもお世話さまです。こちらは隣のホテルの警備担当ですが、いま外に怪しい男がいるんです。マスクと眼鏡で顔を隠していてコートを着ています。随分と長い時間、おたくとうちの前をうろつろしているんです。そちらから見えますか？」

教会の角部屋でカーテンがめくれて、その隙間から人の顔が覗いた。「もしもし。ああ、確かに男性がいますね。でも、マスクは花粉症か何かのために、実は誰かと待ち合わせをしているということは考えられませんか？」

「ええ、こちらもそれは考えました。でもそれにしては不自然なんですよ。こちらから正面に見える位置には来ようとしなくて、時々立ち止まってはそちらを盗み見ているように感じられるんです。こちらのお客様なら、待ち合わせの相手と行き違いがないか確認しようとしてもいいはずで、一度くらいはロビーに入ってきててもよさそうですね。こちらは客商売なので下手に声をかける訳にもいかず様子を見ているのですが、もしそちらに何かあつては大変だと思ひまして」

再び教会の窓のカーテンが揺れ、そこから電話の相手が受話器を手にしたまま外の様子を伺っているのがわかった。ちょうどその時、浅倉の目が教会の窓で一瞬止まり、その後また首が左右にぎこちなく動いた。

「わかりました。確かにこちらを伺っているように見えますね。ここは教会だから、用があろうとなかろうと中に入るのは自由なのに

そうする気配がないというのもおかしいですね。教会に来られた人に危害があると取り返しがつきませんから、急いで見に来てくれるように警察に要請します。ご連絡くださってありがとうございます。ごさいます」

「どういたしまして」

並木が電話を置くのを汐崎が感心した様子で見入っていた。並木は肩をすくめて言った。

「ストレスが溜まっていたからね、はじけたくなっただ。それに携帯電話の扱いの方が、そのカメラやパソコンより簡単だろ？」

それから十分も経たないうちに、けたたましいサイレンの音を響かせて一台のパトカーが走ってきて教会の前で停まった。浅倉はいったい何事だろうと、うろつくのをやめてパトカーを見た。そこでドアが勢いよく開き、二人の警官が降りてきた。その二人は浅倉に目を止めると、その獲物へ向かって真っ直ぐに駆け出した。それに驚いた浅倉は、身に迫る危険を本能的に察知し、警官に背を向けて訳もわからず一目散に逃げ出した。

その逃走劇はわずか十メートルと続かなかった。ホテルの正面あたりで警官の一人が浅倉に追いつくと、後からもう一人も飛びかかった。浅倉はあつという間に路上に組み伏せられ、後ろ手に締め上げられた。三人が立ち上がった時、浅倉は警官に両脇を固められ大きな声でしきりに何事かわめていた。そのまま引きずられるようにしてパトカーに辿り着くと、後部座席に乱暴に押し込められた。一人の警官が浅倉の隣に乗り込んでドアを閉めると、もう一人は通報を行った教会の石段を上っていった。

汐崎は興奮を抑えられないといった様子で、並木の横でカメラを掲げたまま言った。

「思った以上の出来だわ。浅倉のやつがこんなに役者だったなんて知らなかった。警官を見て逃げ出すなんて、最高のアドリブだわ。こっちも何かの賞が取れるくらい素敵なポスターを作らなくちゃ」

そう言うてから、汐崎はようやくカメラを持った手を下ろした。

二人はその場をそっと立ち去り、再び公園の中へ戻った。そのま
ま海辺をしばらく並んで歩いた。ホテルのポーチが木立の向こうに
消えると、汐崎はそっと並木の腕に手を回した。夕暮れ時の淡い景
色の中を二人は黙って歩き続けた。

その頃、柵の向こうでは、教会の前に停まっているパトカーの傍
らを一台の白いボルボが速度を落としてゆっくり通過していった。

二人は小さなソファに並んで腰を下ろした。公園を出た後、ネッ
トカフェの受付でペアシートインターネット席を頼んだのだ。そ
こは身じろぎも容易にできないほどの狭い区画で、すぐ目の前には
やや幅広の机があつてパソコンとモニターがこちらを見下すように
鎮座していた。

汐崎は立ち上がり、キーボードを少し脇にずらした。シヨルダー
バッグからムービーカメラと携帯電話を取り出して、いま空けたば
かりのスペースに置いた。ムービーカメラからメモリーカードを引
き抜いて、それをパソコンのスロットに挿した。続いて携帯電話に
つながれた犬のぬいぐるみを外し、パンツの下からUSBフラッシ
ュメモリーの端子を引き出してパソコンのポートに挿した。

それから二人は、ムービーカメラで撮影したたくさん写真をパ
ソコンの画面で吟味していった。そのうちの三枚はとてよく撮れ
ていて、賞賛するに値する出来だった。

やがて二人は、その中の一枚を選び出した。それは浅倉が警官に
両脇を抱えられて引き起こされたところを写したものだ。顔は
ややうつむき加減だったがほぼ正面を向いていて、必死に何ごとか
叫んでいるその表情は狂気に満ちた男として写真に捉えられていた。
その写真のファイルをUSBメモリーにコピーした。次にそれを編
集モードで開いて伸縮率を六十パーセント程度に設定し直してから
ファイル名に枝番号を加えて保存した。汐崎の説明によれば、画像
データはこうして一旦縮小すると、その容量がずっと小さくて済む

のだそうだ。

それからインターネットに接続し、検索エンジンを備えたポータルサイトを呼び出した。そしてあつという間に写真を投稿できる掲示板を見つければ、そこにUSBメモリーに保存した枝番号がついた方の画像ファイルをアップロードした。しばらくすると画面が切り替わり、火事で焼けたどこかの家を写した写真の上の段に、浅倉と警官の写真が表示された。それを確かめてから、キーボードのAltとプリントスクリーンのキーを同時に押した。

続けてワープロソフトを立ち上げた。用紙をA3に設定して、メニューから貼り付けを選択した。すると画面に先ほどのスクリーンショットが画像として現れた。その中で人の名前や固有名詞やIPアドレスなどが読める箇所を、すべて白い網かけの図形で覆った。それらをグループ化して画面右上に移動させ、次にUSBメモリーから先ほどの写真を呼び出して中央に挿入し、画像の角をドラッグして引き伸ばした。拡大した分だけ多少画像が荒くなったものの、それが浅倉であることは容易に判別できた。それぞれの画像を画面上に配置していき、最後に浅倉の顔の真上の位置に 変質者、逮捕の瞬間 と書いた濃いオレンジ色の大きな文字を挿入した。そしてプロパティを開いてファイルサイズを確認し、そのファイルもUSBメモリーに保存した。これがポスターになるのだ。

次にインターネットの検索エンジンを經由して、コンビニのプリントサービスを呼び出した。そこにログインすると、いま作成したばかりのポスター用のファイルをアップロードした。それが完了すると、汐崎の携帯電話にプリントアウト用の受付ナンバーがメールで届いた。

ここまで一気にやり遂げると汐崎は立ち上がった言った。

「さて、コンビニへ行きましょう。今の写真をプリントして、それから何か食べるものを買ってこなきゃ。それから、ビールも」

それをじつと眺めていた並木は感嘆の声を漏らした。

「そうやればコンビニでプリントアウトしてくれるのかい？ えら

く便利なんだな。でも、それならこのプリンターを借りるか会社
のものを使えばいいのに」

「さっき受付で見たら、このプリンターはA3用紙に対応してい
なかったの。会社のカラー機は家庭用のインクジェットだから印刷
が遅くて、プリンターが紙を吐き出している間に誰かに見られるリ
スクが高いわ。モノクロ機じゃ雰囲気が出ないし。それに比べてコ
ンビニのプリントサービスはいいわよ。カラーコピー機で出力する
から、仕上がりがずっときれいだし。明日の朝、会社に貼るのが楽
しみだわ」

そう言つて汐崎は片目をつぶつてみせた。

二人はネットカフェを出てコンビニへ向かった。入口のドアをく
ぐると近くにコピー機が設置されているのを見つけた。そこに歩み
寄りコインを投入し、上部に伸びたアームに取り付けられた液晶パ
ネルを操作した。携帯電話のメールを見ながら受付番号を入力する
と、程なくコピー機が唸るような音を立てて紙を吐き出し始めた。
トレーから一枚を拾い上げてみると、先ほど作成したファイルがそ
の通りにA3の紙の上に再現されていた。画質は充分にきれいで、
これなら見る者の目を楽しませることだろう。

二人は弁当とビールが納まったコンビニのビニール袋を提げて、
並木のアパートの扉を開けた。腰を下ろし、先ほどプリントしてき
たポスターを広げてもう一度眺めた。顔を見合わせ、声をあげて笑
った。それから並木は、もう忘れかけていたビールの心地よい喉越
しを味わった。

つかの間の休息を楽しんだ後、汐崎がキャリングバッグからノー
トパソコンを取り出して起動した。再びUSBフラッシュメモリー
の端子をポートに挿し込む。続けてメールソフトを立ち上げて、メ
ニューから開く、続けてデータファイルを選択した。小さなウ
ィンドウが現れ、今朝のうちにUSBメモリーに保存しておいた浅倉
のメールアドレスのファイルを指定してOKを押した。メールソフト
の画面に戻ると、左側のフレーム画面の下方に、新たに

浅倉の受信ボックスと送信ボックスが加わった。

二人はノートパソコンの画面を食い入るように見た。受信ボックスをクリックすると、画面に受信メールの一覧が表示された。それを下の方へスクロールしていくと、しばらく下がったところで、差出人が木田社長の名前になっているメールに行き当たった。それを開く。しかしそこにあつたのは並木とは無関係の内容だった。それを閉じてさらに一覧を調べていく。次に見付けたのは、昨日の日付のメールだった。それをクリックすると、そこに現れたのはまさしく探していたものであつた。

冒頭から厳しい調子で並木を非難する言葉が連なっていた。そのまま文面を追っていくと、何度も返信を繰り返したことを示す引用符 < を伴って、それまでのやりとりの経過が記されていた。

浅倉人事部長殿

君の報告は理解した。もう、こちらで決断を下すことにする。

並木に誓約書を提出させるのに、このままでは時間がかかりすぎる。もう猶予はない。やつは我が社の敵だ。あの反乱分子を計画に従って外部に放り出せ。

関矢部長の口利きで、既に先方とは話がついている。明日の朝、出向を命じて、それを理由に誓約書の提出命令を出すように実質的には別の会社に出て行くのだから、こちらに守秘義務を誓わせるのは問題ないだろう。

向こうの弁護士共々、やつが存在をここから消し去れ。それから、以後の命令は北村部長を通して行うように。君はこれで手を引け。これ以上、やつと直接の関わりを持つてはならん。

< 木田社長殿

< 本日、並木に何度となく誓約書の提出を命じましたが、一向に従う様子がありません。本当に何度も何度も命じたのです。

< しかし並木はことあるごとに弁護士と相談していると言います。私はどうしたらよろしいでしょうか。

<< 浅倉人事部長殿

<< もはや並木にこれ以上の言い訳を許す訳にはいかない。とにかく絶対に今日中に誓約書を手に入れる。

<< それができなければ、やつを外に放り出すまでだ。成果など出されては迷惑だ。もっとやつを追い詰める。

<<< 木田社長殿

<<< 北村部長から報告がありました。並木のプロジェクトのメンバーに進捗状況を訊いたところ、一定の成果が上がっているようです。

<<< さらに悪いことには、メンバーの連中は並木について好意的な発言をしていたそうです。

<<< いい傾向ではありませんので、お耳に入れておく必要があると判断しました。

並木は全身がこわばっていくのを感じた。他のメールも一通り調べた。日付はまちまちだが、並木に関するものはどれも、これまでの推論を裏付ける結果しか得られなかった。その中で最も古いものは二月末に遡る。

浅倉人事部長殿

突然だが、顧客サービス部の並木を至急どこか別の部門へ異動させてほしい。

品質管理の関矢部長から、彼は危険だと厳しい指摘があった。我が社が将来を切り拓こうと命運を託した新製品エアートに何やら反感を抱き、どうにかして社の発展を阻止しようと躍起になっている。

しかし彼は仕事の上で社内の仕組みに精通していて、下手に首を切るとライバル他社に知り得たことを売り込みかねない。もはや彼の言うことに耳を貸しても、信用してもならない。

そこで、どこかへ隔離して彼の動きを止める必要がある。

これ以上彼を自由にしてはならないし、新たな作り話のきっかけを彼に与えてもならない。方法は任せるが、内密に頼む。ことは急を要する。

このメールが社長から浅倉に送られたのが二月二十七日の夕方、その翌日には浅倉がやってきて並木に工場への異動を告げたのだ。た。

もはや送信ボックスを確認するまでもなかった。この間に交わされた内容は、受信ボックスのメールにすべて残っていた。あれだけ待ち焦がれた木田社長からの返信が来なかったことにも、これで合点がいった。並木はもうたくさんだと思った。

そんな並木の気持ちを読んだように、汐崎が手を伸ばしてノートパソコンを自分の方に向けた。メールソフトから浅倉のデータを選択し、右クリックして 切断 を実行すると浅倉の受信ボックスと送信ボックスは消え、画面は元通りに戻った。

深く長い沈黙が流れた。並木は小刻みに震えていた。憤り、失望、悲しみ．．．．それらが複雑に交錯した。我を失い、叫び出した。衝動に駆られた。

その時、不意に嗚咽おえつが漏れてきたのに気付いた。驚いて顔を横に向けると、そこにはうつむいて涙を流す汐崎の姿があった。何が起こったのかわからずに戸惑う並木に、涙声があった。

「．．．．ごめんなさい、．．．．私が．．．．、北村部長の．．．．」

それ以上言葉にならない。並木は汐崎の肩を支えて待った。やがて汐崎は少し落ち着きを取り戻し、力なく言った。

「ごめんなさい。さっきのメールを見て、初めて知ったの。北村部

長に利用されていたなんて。並木さんがいない時に北村部長から仕事の報告を求められて、みんなで答えたことがあったの。うまくいっているって、もうすぐ成果が出るって。そして並木さんがみんなを支えてくれたんだって。みんな、本当にそう思っているのよ。でも、結果はそれが出向命令につながってしまった。あの時、もっと慎重に答えていれば……」

そして汐崎は、また顔を伏せた。

きつと、あのメールを見てから、じつと我慢していたのだろう。

心の中で、自分を責めていたのだろう。並木は首を左右に振りながら、つぶやくように言った。

「誰のせいでもない」

長い時間、二人は黙ったまま互いにもたれかかるようにしてうずくまっていた。時折聞こえるのは、汐崎のしゃくりあげるような小さなうめきだけだった。身体は脱力感に支配され、今や指の先さえ動かす気力もなかった。

どれくらい時間が経っただろうか。やがて汐崎の肩の震えは収まり、それに代わって呼吸がゆっくり一定のリズムを刻み始めたのがわかった。並木は肩に回していた手を緩めると、彼女の首を支えてそつと身体を横たえた。膝を立て片手を伸ばして垂れ下がった蛍光灯の紐を引くと、そこに完全な静寂が訪れた。

十二

約束の十一時、並木は診察室で小杉と向かい合って座っていた。昨日、会社から突きつけられた出向のことを医師に伝えた。小杉が重々しく口を開いた。

「それはまた唐突な辞令ですね。命令では仕方ないのかもしれないが、問題はあなたが今の状態で、また別の職場に変わっても大丈夫かということです。今度は知った人が誰もいない別の会社に行く

訳だし、通勤先が埼玉では、満員電車で押し込まれて長い時間揺られて都心を抜けていくことになる。健康な人でも大変なことですよ」

「ええ、本当に不安の種しか見当たりません。それに、ここに通院するのも難しくなってしまう。果たして、それで大丈夫なのかどうか……」

「医者としては医学的な見地でしか物を言えませんが、客観的に判断すれば、それは無謀なことだと思いますね。でも出向しなくてはならないのなら、会社には何らかの配慮をもらうべきでしょう。可能かどうかはわかりませんが、たとえば出勤時間をラッシュ帯からずらしてもらうとか、仕事中に具合が悪くなったら休憩させてもらうとか。それから向こうの近くであなたが通える医者を探しておく必要もあるでしょう」

「配慮をしてくれるでしょうか？」

「それはわかりませんね。うつ病についてという意味なら、その分野の産業医が居れば大丈夫かもしれませんが。多少の助言は得られるでしょう。でも、むしろ新しい同僚の人たちがあなたにどう接するかの方が心配です。この病気は、経験のない人にとっては頭ではわかったつもりでも心ではなかなか理解できないものですから。あなたのような患者さんに 頑張れ と言ってはならないということを知っていても、つい、そう言っているのと大差ない態度をとってしまふ人の方が多い。患者の多くは、そもそも根がまじめで頑張る人だから、そういう態度を感じてなんとかしようとする苦慮して、かえって病気を悪化させてしまうことがあるんですよ」

「私はどうしたら……」

「難しい問いですね。出向先に行かなければならないなら、できるだけ会社に配慮してもらおうようにする必要があれどしか言えません。断ることができるかと仮定した場合では、あなたが今の職場に留まるのかどうかポイントになるでしょうね。出向に従うにせよ断るにせよ、それによって環境またが変わってしまうのがあなたにとって

プラスになるとは思えませんね」

「それは、どちらの場合でも職場が変わるだろうということですか？ または何かの理由をつけて解雇される怖れがあるか？」

「それは会社の判断だからわかりません。私は医学的にしか話せませんから。でも、病気を直接の理由にした解雇はできないはずですよ」

並木は今の言葉をしばし考えた。そして小杉に問いかけた。

「今のお話しを踏まえて、診断書を書いていただけますか？」

「現在のあなたの病状を書いて、それについて配慮が要するというようなことを付記するのでいいですか？」

「はい、お願いします」

「わかりました。それから、これ以上状態が悪化するのはよくありません。思い切って休職することも考えてみてはどうですか？」

「休職、ですか？」

「ええ、会社の就業規則に定めがあると思いますよ。一箇月から二箇月ほど休職して治療するという選択肢もあるでしょう。うつ病はストレスの元から離れるのが一番効果的ですから。ただしその場合、休職明けに元の職場に戻るように会社を取り計らってくれるという保証はあった方がいいですね」

休職というのは、並木にとって考えてもみなかったことだった。

小杉の言うように治療にとってはその方がいいだろうし、多少なりとも回復するまで出向命令を一旦保留してもらおうこともできるかもしれない。しかし、今の職場に留まらせるような配慮を浅倉がするとは望めなかった。そうかといって、出向に応じて病状が悪化したら会社は病気ではない何か別の理由を挙げて解雇に踏み切るかもしれない。うつ病を抱えて解雇されたら、いったいどれほどのダメージを受けるのだろうか？ その後で再出発しようとしても、病歴として残ってしまい、再就職しようとした先がエア・アート社に人事確認をする度に浅倉によってそれを打ち砕かれたりはしないだろうか？ うつ病がもたらすダメージ 改めて考えてみると言いよう

のない不安に押し潰されそうになった。並木はつぶやくようにそれを口にした。

「もし、何らかの理由をつけて解雇されてしまったとして、後に再出発はできるのでしょうか？ その．．．．、病気さえよくなれば、それほど不安に思うことはないのでしょうか？」

小杉はじつと並木を見つめたが、やがてゆっくりと首を横に振った。「今は、それほど先のことを考えても仕方ないでしょう。仮定に基づく事柄が多過ぎますよ。ただし、どちらにしてもいずれ知ってしまふことですから話しておきますが、会社や雇用の問題の他にもいろいろと不便なことが出てくるでしょうね。こちらの方が、気持ちの上ではこたえるかもしれません。あなたは先ほど病気が治ればと言われましたが、治ってからもしばらくは不自由なことがあります。たとえばうちに来ている患者さんから聴いたところでは、生命保険は病中も病後も当分は入れません。確か、治療終了後も十年間はだめだったと思います。それからライセンスを伴うスポーツやレジャーの中にはできないものがありますね。スキューバダイビングなどは断られるかもしれません。うつ病の治療は薬を用いますので、ある意味ではそういつたことも仕方がないのですよ。またトラウマのように精神的な重荷になってしまうこともあって、以前通勤に利用していた駅や勤めていたエリアに近付いただけで具合が悪くなったり、同じ路線の電車にさえ乗れなくなったという人もいます。こういうことがどれほど影響するかはその人によって差がありますが、この病気はそういつた面でも厄介なところがあります。だからこそ、早くきちんと治すにこしたことはないのです」

その話に、並木は肩を落とした。

「そんな．．．．。心配すべきなのは、解雇のことだけじゃないんですね」

「まあ、現実はいろいろあるということです。あなたの場合は、休職という方法も治療の役に立つと思いますよ」

「ええ、そうかもしれません。でも、どう判断したらいいのか今は

わかりません。休職のことも含めて、一旦帰って少し考えてから夕方もう一度ここに来てもよろしいですか？ その時には診断書だけいただければ結構ですから」

「あまり時間がないのはわかりますが、こんを詰めて無理をしないでくださいね。病状を悪化させないことが第一です。夕方もう一度来るなら診療時間が終わるまでに来てください。少し待つことになるかもしれませんが」

小杉の病院を後にした並木は、牧山の事務所へ向かった。時計は昼を少し回っていた。

事務所の扉を開けると牧山が待っていた。会議用テーブルへ通されると、そこには夏目がノートパソコンを広げて待っていた。テーブルの上には三人分のコーヒーとサンドイッチが置いてあった。牧山が言った。

「食事はまだでしょ？ つまみながら話を始めましょう」

手短かに挨拶を交わすと、並木は 異動通知 と 命令書 を見せながら、起こったことを正確に二人の弁護士に伝えた。話が終わるのを待つて、牧山が夏目に顔を向けて口を開いた。

「夏目先生、どう考えますか？」

話を聴きながらノートパソコンにタイプしていた夏目は、手を止めて顔を起すと、椅子の背もたれに上体を預けた。

「厄介なことになってきたな。並木さんの話の中に牧山先生の見解が出てきたけど、その通りだと思えますよ。今回は人事部長が直接出張ってこなかったのは今までの流れから言うとおかしなことだけど、そもそもこれだけの短期間に何度も理不尽な配置転換を命じたことの方が異常なんだ。この出向命令というのは、今の仕事で成果を出される前に社外に追い出したかったということだろうな。出向だから今の会社との雇用契約は終了しないままで、もう一方の会社に勤めることになる。でも実際は目が届かない状態になるから、誓約書を出してから行けと言いたい訳だ。就業規則に守秘義務につい

て何らかの記述があつて、これは手続き上必要な書類に過ぎないと主張するつもりなんだろう。それで、並木さんの話し通りなら、会社は従業員を他社に出向させるのは初めてのようだし、少し前には就業規則をあつさり作り変えたという事実があるから、多少の不備があつたとしてもそれを繕うための言い訳の種はいくらでもあるという訳だ。まあそれでも、どうしてもそれを提出させなくてはならないだけの合理的な理由があるとは俺には思えないがね」

ここで一呼吸の間を取り、並木に視線を向けた。

「それから、もし並木さんが出向命令を受け入れて、先方への通勤と勤務の苦行に耐えた場合、会社は次の手を打ってくるかもしれない」

並木は夏目をじつと見て続きを待った。夏目は首をゆっくり横に振りながら言った。

「これは単なる予想だが、そうなつたら次は、なし崩し的に向こうの会社に移籍させるつもりかもしれない。つまり今の会社との雇用契約を終了させるんだ。するとその後は、向こうの会社が並木さんをどうしようと表向きは知らなくて済む訳だ。そんな話が両方の会社間でなされていたとしても不思議じゃない。本来、出向は期限があるものなんだ。しかし今回の命令にはそれが明記されていない。

だから余計に、この推測が成り立つように思える。でも、雇用は契約なんだ。今までの会社と合意して働いてきたのに、ある時からはその別の会社と労働関係を結べと労働者に強いるのは目茶苦茶な理屈だよ。もしそうしたいなら、個別であれ包括的なものであれ、本人の同意というものが要だ。労働者にも意思があるし、選ぶ権利だつてある。仮に、会社が手前勝手な数字上の利益や効率を追求して人員をこころと動かすことができたとしても、その利益を作り出す原動力である労働者を駒同然にぞんざいに扱って尊重しないんじゃ、そんな会社に未来はないさ」

夏目はそう言うと、ふっと息を吐いた。そして思い出したように尋ねた。

「ところで、並木さんの話に出てきた業務の進捗報告というのは、やはり行われていたんですね？」

「ええ。私が午後を休んだ日にプロジェクトのメンバーが北村部長に呼ばれて、成果に目処が立ってきたと報告していました」

「そして、そこに辿り着くのに並木さんが一定の貢献をしたと？」

伏し目がちに並木が頷くのを見て、夏目は先を続けた。

「それで、医者は何と言っていましたか？」

「医者は医学的な話しかできないという前提でしたが、出向に際しても応じなくても、職場環境がまた変わるかもしれないと考えていました。それは私にとってマイナスに働くだろうと。出向しなくてはならない場合は、通勤をラッシュ時間からずらすとか、仕事中に休憩できるように職場に配慮を求めべきだろうと言っています。それからもう一つ。思い切って休職するということも考えてみてはどうだろうかと言われました。どちらにせよ診断書を書いてもらうように頼みましたので、夕方もう一度医者に行ってくるつもりです」

三人は黙ってこのことに考えを巡らせた。しばらくして牧山が口を開いた。

「休職か、なるほどね。治療にはそれが一番いいのかもしれないな。並木さんが元気になることが第一だから。夏目先生はどう考えますか？」

「そうだな。でも問題がない訳じゃない。就業規則にどう書かれているかによるが、休職明けに並木さんがどう扱われるかわからない。一般的には復職すれば元の職場に戻るが、今回の場合は出向先がそうなんだと言われかねない。出向中も休職扱いとする会社が多いからな、向こうが譲歩したとしても別の部門への配属を検討すると言っに留めるだろう」

並木がおずおずと訊いた。

「それを会社に約束させることは可能でしょうか？」

夏目が首を横に振った。

「今の職場に留まらせろということだから、正直なところ難しいと

思いますね。出向命令を受け入れないという相当な理由を示して納得させる必要があるけど、会社は並木さんを追い出したいんだからまず応じないでしょう。仮に渋々でも首を縦に振ることがあったとしても、別の部門に一旦配属し直してから頃合をみて改めて別の出向命令を出してくるだろうな。それから、もう一つの案だった出向先に一定の配慮を求めるということだが、これなら会社もたいして抵抗しないんじゃないかな。先方に伝えておくだけで請け合っておけばそれでいいんだから。要望はきちんと伝えたから、後は向こう次第いう訳だ。でもこちらにとっては、出向先でその約束が履行されるかどうかの確認がないということが肝心なところなんだ。並木さんは出向先の就業規則や業務命令の影響下にある訳だから、どうとでも言い訳ができると考えるだろうな。どうやって並木さんを守るか……」

そう言つて夏目は横目で牧山を見た。二人は互いに視線を交差させたままではばらく黙っていた。

やがて牧山が口を開いた。

「そういえば、並木さんは電話で黒幕の正体がわかりそつだと言っていましたね。何かつかめましたか？」

並木はそれに頷いて、昨晩見た浅倉のメールのことを話した。二人の弁護士は目を丸くした。牧山が言った。

「随分と大胆なことをしましたね。でも、これではつきりしましたね。一連の指示は社長が下していたんだ」

その後を夏目が引き継いだ。

「それは内緒にしておいてくださいね。やばくて、とても証拠としては使えない。でも、誰の差し金なのか、はつきりした訳だ。そうになると、こちらがいろいろと条件をつけても上手くはいかないだろうな。既にあちこちに根回しがされているよ」

並木が戸惑った表情を浮べて訊いた。

「それでは、どうしたらよいでしょうか？」

夏目がきっぱりとした口調で答えた。

「労働組合があれば、労働委員会に持ち込むという手もあったんだがな。今回の場合は裁判を想定して動いておいた方がいいだろう」短い沈黙が流れた。それを経て、並木がゆっくりと頷いた。

それからの時間は、長い議論となった。目下の論点は、出向に依るとした場合に、並木が心身共に耐え得るかどうかと、その結果何が得られて何を失うかという点に集中した。

医者判断が示す通り、満員電車に揺られて出向先にはるばる通勤するのは今の並木の状態では無茶なことであり、勤務に条件をつけてもそれがろくに履行されないとしたら、得られるのは当面の間の給料くらいのもので、ごく近い将来に並木は健康と仕事のほとんどを失ってしまうだろうと結論付けるに至った。

そう考えると並木にはさほど選択の余地があるとは思えなかった。会社が並木の口を封じて葬り去ろうと腹を括ってかかるのであれば、それに抗う手段は法的に争うことと労働運動しかないだろうということだった。

裁判所に持ち込む場合、並木が求めるものは心身の被害救済と出向命令またはこれから発せられる怖れがある解雇の無効ないし禁止となるだろうと考えられた。しかしまず懸念されるのは、仮に職場での地位保全を申し立てたとしても、現行の法制度ではそれでさえ勝ち取るまでに時間がかかるということだ。

それまでの間に、会社は並木がとて働き続けることができないうちに職場環境を変えてしまおうと努力するかもしれないし、他の従業員に並木と同調しないように強く働きかけるかもしれない。こうして新たな火の粉が振りかければ、なおのこと、並木がまた元のように働けるという保証はどこにもないのだ。

法の裁きには見えざる限界があつて、会社は判決が下るまでおとなしく手をこまねいて待ち、その後は心を入れ替えて並木と打ち解けようなどということはまずあり得ない。判決が痒いところに手が届くような解決そのものであるということとは、なかなか期待できるものではないのだ。会社がその気になれば、判決の効力が及ばない

ような別の手段を講じて、再びその目的を遂げようとすることもできるだろう。そうさせないためには、現実的な労働環境の改善や労働者の保護を進めていく労働組合などの運動の力が必要だった。このことは今後考えなくてはならない課題となった。

並木は会社に対して、人を傷つける危うい人事が再び行われることがないように約束と謝罪を求めたい気持ちだった。しかし、企業イメージを何よりも守りたいであろう会社側からは必死の抵抗が予想された。それは、より解決が困難になるということを示唆していた。従って、これがいわゆる損害賠償を会社に請求する裁判となるのは必定だった。金銭を　これまでの悪行のつけを支払わせることで、非がどちらに在ったのが白日の下にさらされるのだ。

そうなれば、表向きは素知らぬ顔をしつつ、心の奥底ではじつと口を閉ざして耐え忍んできたはずの従業員たちも、自分たちで職場を変えようと立ち上がるかもしれない。それが会社のやり方を直すことになるなら、もう誰も並木と同じ苦しみを味わうことがなくて済むようになるかもしれない。

そこには確かに大儀があると感じた。仲間のために、そして自分のために、立ち上がるべきだと思った。それがひいてはエア・アートの社のためにもなるのだと思った。

そんな並木の考えを察したかのように二人の弁護士が言った。何よりも気がかりなのは、長い時間と重圧が圧しかかる係争ごとに耐えた末に、並木が元気になるかどうかなのだ。重要なのはそれだと言った。並木は頷いて、二人に感謝の気持ちを示した。

話がさらに進むと、他の事柄についても要点が次第に見えてきた。まず、並木の処遇は、どちらにしても休職扱いになることは明らかだった。仮に出向命令に従ったとしても、その前にこちらから申し入れたとしても、エア・アート社から見ればどちらの場合も並木は休職となるのだ。遅かれ早かれ、会社との対決は避けられそうもないとわかった。

それに伴い、この後の当面の行動も決まった。並木は医者から診

断書を受け取ってきて会社に提出し、牧山は急いで内容証明郵便を送ることになった。そこで並木の健康状態では出向に応じるのは到底無理なことであり、この命令を撤回するよう求めようということになった。それを会社が受け入れなければ、採り得る手立ては二つに一つとなる。

一つ目は異議を留めて出向命令に従うという手段だ。形の上では会社の思惑に乗りながら、地道に折衝を続けて条件を引き出すやり方である。

後に法廷の場に解決が委ねられた時に、会社側の理不尽なやり口にも、こちらはきちんと譲歩しているのだと言えるのだ。しかし一方で、これでは並木の負担は増すばかりで、いつ心身共に耐えられなくなるともわからないという危険性もあった。

また、通勤に多くの時間を割かねばなくなると、今後どれだけ医者にかかることができるかは極めて流動的になる。下手をすれば、具合のよくない並木の状態を見て、出向先では勤務怠慢だと言い出しかねない危惧もあった。少なくとも、予め公正な説明が行われなければ、従業員たちがそう捉えても不思議ではないだろう。

二つ目は診断書の見解に沿って休職に入ることだ。それに合理性があることは明白なので、会社は休職を拒むことはできないだろう。夏目によると、たいていの休職制度は一箇月程度の傷病欠勤扱いを経て始まり、療養後に職場に復職した後も一箇月間ほどはそれを理由に解雇できないことになっている。ゆえに、その数箇月の間はうつ病の治療に専念できるはずなのだ。

ただし、病状が快方に向かい、いざ復職するとなった時に問題が持ち上がることになる。復帰すべき職場がどこであるかを巡って終わりのない議論が闘わされるのは火を見るより明らかだった。また一定期間以上経っても職場に戻れない時は解雇を告げられる怖れもある。その時までには会社内で何かこちらにとって好ましい方向へ事情の変化があってくれれば話しは別なのだが、その淡い期待が極めて現実味に乏しいこともまたわかっていた。

どちらの方法を採るにせよ、並木には茨の道が待っている。二人の弁護士はあえて触れなかったが、実は第三の道があることに並木は気付いていた。

それは、並木が辞職することであった。こんな苦しみから逃れるには、それしかないのではないかとさえ思えた。しかし、これ以降、大いなる不安を抱えて生きていかなければならないという危機感が、その選択肢にはつきまとっていた。

退職を申し出れば、会社は小躍りするだろう。そして例の誓約書を提出すると再び強く迫られるだろう。あんなひどい内容の誓約書に同意してしまったら、今後何が降りかかるか知れたものではない。会社を辞めたところで、本当の意味ですべてが終わるかどうかには確信が持てなかった。それにうつ病を負った自分が、これから先どうなっていくのか予測がつかない。果たして完治して、元の自分に戻れるのだろうか？ それについては、まだ何も考えつかなかった。

もしこれらの懸念に関しては何も問題がなかったとしても、仲間を見捨ててここから一人逃げ出すような気がして、言いようのないやましさを感じた。それは同時に、会社の行き過ぎた行為を知りながら、それに目をつぶるようなものだとも思った。他の従業員のためにも、この一連の出来事の発端になったあのかわいそうな犬のためにも、ここで引き下がってしまったていいものだろうか、と、並木は自分自身に問いかけた。

結局、種々の事情に打ち勝ったのは正義感の方だった。会社を辞めるのは、今でなくてもできるはずだ。第三の選択肢は、もうそれしかなくなるまで封印しておくことに決めた。残る二つの道のうちでどちらを採るべきかと悩んだ。

一つ目の出向命令に一旦応じる道の方が、当面向き合わなくてはならない心身の負担が、より大きいように感じられた。また、それに耐えられるだけの自信もなかった。もし出向先に移籍させようと企てているとすれば、最後は会社の思惑通りに事が運んでしまうの

でないだろうかという不安が大きく膨らんだ。事態がそこまで進んでから会社に抗っても、または今の段階で対決したとしても、結局は法廷に持ち込むことになるのだろうと思った。

その点では第二の道も同じことだった。ただ、こちらの方が当面の数箇月間はうつ病の治療に専念できる分、第一の選択をして通院さえできなくなるよりはましだと思えた。結果どうしようもなくなってしまうたら、その時は退職を申し出るしかないだろう。それまでは、できることをしてみようと決めた。

並木は顔を上げ、この考えについて二人に話した。夏目がそれに答えた。

「そうですね。まずは並木さんにとって負担が少ない方がいいだろうし、うつ病の治療もしなくては。後に裁判になるかもしれないという前提で、こちらでいろいろと判例を調べてみましょう。そもそも出向も移籍も、会社の思惑一つでできることじゃない。原則は対象者の同意が必要なんだから。それについてはこちらに任せて、並木さんは医者から診断書をもらってきてください。コピーを取ってここにもファクシミリで送っておいてください。それから、原本は明日か明後日にでも会社に出しておいてください。牧山先生はその内容を踏まえて出向撤回を求める内容証明を送る。それでいいかな？」

一同がそれに頷いた。そして牧山が言った。

「内容証明はすぐに取りかかります。文中に回答期限を入れておきますので、それまでには会社側の対応がわかるでしょう。向こうの態度次第では、休職するという趣旨のものを再度送ることになるかもしれません。出向命令の期日にはまだ二週間ほどありますから、来週末にもう一度こちらの打ち合わせを入れましょう」

三人は次の週末の金曜日に再度ここを集る約束をして散会した。

並木はそのまま小杉の病院へ向かい、会社に休職を申し出るつもりだと伝えた。小杉は診断書を作成して並木に渡した。

今日すべきことを終えて外に出ると、空には鉛色の雲が垂れ込め

ていた。明日は雨になるかもしれない。くたくたに疲れていた並木は、這うようにして桜木町のアパートへ帰った。

灰色の空が広がり雨粒が傘を叩いた。並木は肩をすぼめながら、いつもの通勤路をのろのろと歩いた。人もまばらで、今朝の景色にはどこか活力がなかった。気分がすぐれないまま、重い足を引きずるようにしてエア・アート社の門をくぐった。

情報システム部のフロアでは、北村部長が相変わらずキーボードを叩いていた。疲れがピークに達していた並木は、今日一日を浅倉と北村に睨まれて過ごすのはよそうと思った。

汐崎は既に出勤してきていた。並木は鞆を置いて、コーヒーを取りに行こうと廊下へ出た。休憩室に入って少し待つと、申し合わせていたかのように後から汐崎がやってきた。

コーヒーを手に、互いに昨日の成果を簡潔に報告した。並木は休職することになるかもしれないとだけ伝え、詳しくは帰りに会社の外に出てから話すと言った。汐崎はちよつと驚いたような表情を見せたが、やがて小さく頷いた。

次にポスター騒動について汐崎が話し始めた。

「昨日、昼休みの少し前に例のポスターを貼って歩いたんです。キヤリングバッグに折り目がつかないように忍ばせて、作業用のノートパソコンを持って他の部門を回ってくると言ったの。それが最も人がまばらになる時間帯だし、防犯監視カメラはごく一部の場所にしかないから、それさえ避ければこちらの行動は誰にも見咎められることはなかった。まずは一斉に昼休みを取る物流部などの業務部門が来る直前に食堂の隅に一枚目を貼って、今度はその人たちが流れてくるのを狙って三十分後に休憩室にも貼ったの。その合間には、食事に出払っている部の周りの廊下と階段の踊り場の壁にさらに何枚かを。そうすれば浅倉のやつに剥がされてしまう前に、多くの人

の目に触れるでしょう？ 結果は案の定だったわ。あつという間にポスターの周りに人垣ができて、その少し後で浅倉がすっ飛んで来たの。慌てていたものだから、ポスターをその場でむしり取って何度も引きちぎってそこら辺に投げ散らかしていた。それを食堂と休憩室でやらかしたの。私は通りかかったふりをして離れて見ていたんだけど、それは大騒ぎだったわ。後で聞いた話だと、やつは社長室に呼ばれて釈明を求められたんですって。問題のポスターを見せると言われたみたいだけど、でも肝心の証拠は自分でちぎって棄てちゃったでしょ。だからやつは、ほんの少しの断片を見つけることしかできなかったの。ごみ箱の中身は食事の時間が終わってお掃除のおばさんたちがまとめて出した後だったし、破られずに残ったポスターは私が剥がして片付けたの。いかにも浅倉に同情しているかのようにね。それから夕方までの間、やつはずっと食堂のテーブルに座って、回収した僅かなピースを並べてパズルに取り組んでいたらしいわ。人の尻を蹴り上げてばかりいると、いつか自分も噛みつかれるって、これでわかったんじゃないかしら。それから、河合さんは無事よ」

そう言つて汐崎が笑顔を見せた。並木は頷いて右の拳を作つて体の前に掲げた。汐崎は右の拳を、それにこつんと軽く合わせた。

その日は静かに過ぎていった。並木は何事もなかったかのようにプロジェクトの仕事を淡々とこなした。

夕方の終業時刻が迫つた時、並木は診断書を手にして席を立ち、北村の机に向かった。前に立つて待つても、北村は顔を上げようとさえしなかった。並木は黙つたまま、机の上に淡いグリーンの細長い封筒を置いた。

北村は目だけを横に動かしてそれを見た。その視線は見覚えがある薄緑色の封筒に釘付けとなり、うつむき加減の表情が瞬時にこわばつたのを並木は見て取つた。

「医者 of 診断書です」

それだけ言つと並木はきびすを返して席に戻つていった。その時、

終業を告げるチャイムの荘嚴な音色が響いた。並木が机から鞆を拾い上げるのと同時に、北村は診断書を手にしてばたばたと廊下へ出て行った。

並木は桜木町に向かって濡れた歩道を歩いた。釣り船屋の前に差しかかった時に携帯電話が鳴った。汐崎からだった。もう会社を出たので、じきに追いつくからと言った。山下公園の前を通過してゆっくり歩いているからと伝えて、並木は電話を畳んだ。

通りの向こうにサニーフーフホテルの赤いレンガ見えてきたところで、汐崎が並木に追いついた。きつと急いで来たのだろう、汐崎の肩が上下に揺れている。並木は立ち止まって汐崎の呼吸が整うまで待った。

「大丈夫かい？ 急がせてしまったみたいだね」

「いえ、平気です。行きましよう」

傘を並べて歩きながら、並木は昨日の弁護士との打ち合わせの結果を伝えた。

「そうすると、内容証明が届いても会社が出向命令を見直そうとしない場合は休職することになるの？」

並木は小さく頷いた。少し間があって、汐崎が尋ねた。

「休職することになったとして、病気がよくなったら復職できるの？ つまり、また情報システム部に」

「いや、こちらの予想が当たっているとすれば、その確率はそんなに高くない」

汐崎は突然歩を止めた。並木が立ち止まって振り向くと、汐崎の顔は今日の空に負けないくらい暗く曇っていた。やがてその頬を一滴の涙が伝って落ちていった。

どちらにしてもよほど会社が譲歩しない限り、並木がここから居なくなってしまうのだと汐崎にはわかった。そしてそのきっかけを作ってしまったのは、北村から求められたあの業務報告だったのではないかと考えずにはいられなかったのだ。その思いが並木にもわかった。

並木は傘を畳み、そつと汐崎の肩に腕を回しかけた。汐崎はうな垂れるように、その腕に頭をもたせかけた。支え合うように寄り添って、黙ったまま山下公園沿いにしばらく歩いた。

海岸通りを抜けて県庁の辺りに差しかかると汐崎は足を止めて顔を上げ、今日はそこから電車に乗って帰るわと力なく言った。彼女の目の奥には、まだ先ほどと同じやましさか影を落としていた。

並木は腕を解き、汐崎の瞳を真っ直ぐにじつと見つめた。そして暗い陰影が、そこから消え失せるようにと心で願った。今やその耳には行き交う車が立てる湿った音も届かなくなっていた。まるでそこだけ時間が止まっているかのように感じられた。

やがて汐崎の目の端が下がり、口元が僅かに緩んだ。その間から八重歯の先がかすかに覗いた。汐崎は無理に穏やかな笑みを作るとくるりと背を向けて街路樹の下をゆっくり遠ざかっていった。並木はその場に佇んで、小さくなる汐崎の後ろ姿を黙って見送った。

翌日、汐崎はいつもと変わらない様子で並木に接し、仕事を着々とこなしていった。それでもどこか元気がないように、並木には思えた。

昼少し前になって、汐崎が手を休めて立ち上がり、こちらには目を向けずに廊下へ出て行った。並木は気になって、少し間を置いてから席を立った。

休憩室へ入っていくと、窓際の席に一人腰かけて外を眺めている汐崎の姿を見つけた。テーブルの上にはコーヒーが二つ載っていた。並木が近付いていくと、汐崎はゆっくりと顔を戻した。並木が尋ねた。

「ここにかけてもいいかな？」

「もちろん。コーヒーが一つ無駄にならなくてよかつたわ」

椅子を引き出して腰を下ろし、カップを手にとって一口すすった。その様子を眺める汐崎の眼差しはとても優しげだった。そして汐崎は静かに口を開いた。

「昨日はごめんなさい、辛いのは並木さんなのに。ちょっと動揺しちゃったの」

そう言つて静かに頭を下げた。

並木はゆっくりと首を振った。

「君が謝ることは何も無い。いろいろと助けてもらつてばかりなのに、またこんなことになつてしまつて。こちらこそ、すまなかつた」
「いえ、助けてもらったのは私。それにうちのプロジェクトとメンバーも。並木さんが来てくれて、大切なことをたくさん教えてもらったわ。なにしろ、あれだけ殺伐としていた部内の雰囲気が変わつたんだもの」

汐崎が微笑むと、唇の間から小さな八重歯が姿を見せた。

「もうこの話はここまでにしましょう。なんだかお別れの挨拶をしているみたいない気分になつちゃう」

汐崎は立ち上がつて深く息を吸つた。

「結果がどうなるかと、やるだけやってみましょう。応援しているから」

並木は感謝の気持ちを含めて、大きく深く頷いた。

その日は北村部長が席を空けることはなく、浅倉部長がやって来ることでもなかつた。

終業を告げるチャイムの音色が流れ、それを合図に何人かが帰り支度を始めた。このところ、週末にはいつもより早く職場を後にする者が徐々に増えてきていた。週末の休みを楽しむことが決して悪いことではなかつたのだと気付く者がこうして現れたのは喜ぶべきことだった。並木も机の上を片付けて鞆を手を取った。汐崎は仕事に区切りがつくまでもう少しだけ残ると言つた。

外に出ると、鉛色の重くけぶつた空が出迎えた。今年は曇つた日が多く、五月晴れとは程遠い天候が続いていた。帰り道、並木はこの週末を実家で過ごすかと、つらつら考えながら歩いた。

週末の夕暮れを迎えて、車の往来が増えて車道の流れが滞り始めた。早く仕事を終えてしまおうと急ぐトラックやライトバンと、既に会社をひけて家路を急ぐ車とが交錯し、エンジンとタイヤが立てる騒音が道路に溢れていた。やがて橋の向こうに、みなとみらいの観覧車が見えてきた時に携帯電話が鳴った。発信元表示を確かめると、それは白川からの電話だった。

「もしもし、並木さん？ 久しぶり。いま話しても大丈夫ですか？」
「ああ、もう帰り道なんだ。久しぶりだね」

「もう帰れるんですか？ 死にそうなくらい忙しいだろうと思って、ずっと遠慮していたんですよ。それならそうと教えてくれたらよかったのに」

受話器の向こうで頬を膨らませた白川の顔が見えるようだと思木は思った。

「ごめん、ごめん。少し前までは、ほんとにそれくらい忙しかったんだ。でもこのところはメンバーのみんながうまくやってくれたおかげで、こうして早めに帰ることができるようになったんだ」

「あら、それはよかったですね。少し前は電話をかける間もないほど多忙だったのに、ようやく電話に出られるくらいには手が空いてきたのね」

そのいたずらっぽくシニカルな口調に並木は苦笑いを浮かべた。こんなやりとりは久しぶりで、それがどこか心地よくも感じられた。

「悪かったよ、すまなかった。そんなに責めないでくれよ。ところで、何か用事があったんじゃないのかい？」

「あつ、そうなんです。声を聞いていたら楽しくて、危うく忘れちゃうところでした。電話したのは、大学の後輩から品質検査の結果が届いたことを伝えたかったんです」

それにはじかれたように、素早く並木が応じた。
「結果が出たんだな。それでどうだったんだい？」

「やはり思った通りでした。当初、品質管理部から顧客サービス部に示されたものとは大違いでした。詳しくは後で話しますけど、おびただしい数の雑菌やらなんやらが検出されました。これだけひどいのは珍しいと言っていました」

「そんなにひどい状態だったのか？」

「ええ。こんなものをうつかり口に入れたりしたら大変なことになるだろうと言っていました。口臭などへの用途を謳った新しい製品が、まだ発売されていなくてほっとしましたよ。それから、後輩が遅くなつてすみませんでしたと謝っていました。設備がなかなか空かなかつたらしくて。正規の依頼じゃないから、無理して割り込めなかつたみたいで。すみませんでした」

「いや、謝ることはないよ。ありがとう。忙しい合間に悪いことをしてしまったな。よく礼を言っておいてくれるとありがたい」

「わかりました。ところで、明日はお休みですよ？ 結果を渡しますから、どこかで会えますか？」

「ああ、週末は実家で過ごそうかと思っていたんだ。君の都合のいいところへ出向くよ」

「それじゃ、武蔵小杉のホテルの前でどうですか？」

「いいけど、わざわざここまで来るのは大変じゃないかい？」

「いえ、大丈夫です。その代わり、その後で少し付き合ってくださいませんか？」

「それは構わないけど、どこへ行くんだい？」

「不動産屋さんへ。実は武蔵小杉に引つ越そうかと思つて、アパートを見て歩こうと」

「えっ、武蔵小杉に越すのかい？」

「ええ、工場に通うのには便がいいし。それに、そこに住んでいた方が何かと都合がよさそうだから」

「あそこが、そんなに便利な土地だったかな？」

「まあなんとなく、ですよ。付き合ってくださいますか？」

「ああ、いいとも」

二人は十一時に待ち合わせて、早めのランチを取ることにした。

並木は実家に戻るのは明日にしようと思った。少し早めに出て実家に立ち寄って着替えを置いてから白川に会いに行けばいい。そう考えて、今夜は桜木町のアパートに帰ることにした。確か、冷蔵庫に一本だけビールが残っていたはずだ。

翌日の昼、並木は武蔵小杉の駅に程近いレストランにいた。向かいの席には白川が座っている。テーブルの上ではランチの皿が下げられて、代わりにかぐわしいコーヒーマーの香りが運ばれてきたところだった。

白川はオフホワイトのブラウスに、ふわりとしたロングのフレアカートを身にまとっていた。長い髪は肩の向こうへと広がり、絹のような柔らかさを漂わせている。それが聡明さをさりげなく引き立てていた。会社で会うのとは違って、また新鮮に感じられた。

並木はコーヒーマーカップをテーブルの脇へ置き直してから話を切り出した。

「昨日の電話で言っていた品質検査の結果はどうだったんだい？」
それに応えて白川がバッグから封筒を取り出し、三枚の紙をテーブルの上に広げて置いた。

「これが分析結果をまとめたものです。三つの検体ついて、それぞれ一枚ずつのレポートになっています。詳しい分析データは別にもらっていますが、まずはこれを見てください」

並木がレポートを拾い上げて読み始めると、それを補うように白川が話を続けた。

「問題のロットについては、検体が二個とも雑菌に汚染されています。そこから多量の大腸菌類とブドウ球菌が検出されています。またバクテリアやカビなども見つかりました。この検体は未開封のものでしたから、顧客側の管理状態が悪くなったのだという品質管理部の見解がたわごとだったとわかります。それからもう一つの別ロットの検体ですが、こちらからも若干の大腸菌類とカビが検出

されました。これら二つのロットは、少なくとも出荷前のどこかの段階で、菌などが混入したということになりますね」

「ひどい状態だったんだな。こんなものを販売していたと思うと背筋が寒くなるよ。いったいどこで雑菌が混入したんだろう？」

「それは確かなことは言えませんね。でも品質管理部でも菌検査を行っているはずですから、素直に考えれば、最も疑わしいのは製品の充填工程ということになるでしょうね」

それについて少し考えてから、並木は首を横に振った。

「確かにその可能性が高いことは疑う余地がないが、混入したのは別のところだったのかもしれない。もしかすると、どこかに記録があるかもしれないんだ」

「どういうことですか？」

「検査結果が別にもう一つあるかもしれないということさ。話したことがあるかもしれないが、品質管理部では問題の起きたロットを検査する時に重要度別に区分して処理しているんだ。最も優先されるものは、検査を待たずに報告書が先に作成されている。結果は作爲的に予め設定されているんだ。そんなことができるなら、日常の品質検査でも、結果に忠実に記録されているという保証はないということになる」

「それじゃ、品質管理部の人たちはいったい何の仕事をしているの？」

「だからこそ検査結果が二つあるかもしれないと思ったんだ。重要度の高い検査は、関矢部長が直々に担当者を指名しているんだ。不正が外に漏れることのないように。それ以外の検査は他の連中が担当しているんだが、その場合でも報告書として認められるには関矢部長の検閲を通らなくてはならない。検査結果をありのままに記した報告書だと、そこで引つかかって書き直しになることがあるんだ。それにうんざりした者は、果ては関矢部長好みの内容しか公式には記録しなくなるだろう。でもそれでは、やり場のない正義感や自分の仕事への責任感はどうなる？ もしそうだとしたら、報告書に仕

上げる前の正しい検査記録が、関矢部長の目に触れることのないどこかに、別に残っているかもしれない。それが反発を示すささやかな手段であり、自分たちは仕事を全うしているんだと納得するための方法なのかもしれないと思ったんだ」

「もしそうだとして、それを見つける方法はあるの？」

一瞬考えてから答えた。

「いや、たぶんそんな方法はないだろうな。もしそんなものが出てきてしまったら、誠実に仕事をしてきたはずの従業員たちが責任を問われかねない事態になる。関矢部長が部下をかばったり、自ら職責を果たそうとするとは思えないから、誰か実行犯を仕立ててそいつに責任を全部押し付けようとするだろうな。それは、きつとみんなもわかっている」

「それでも二重に検査結果が残っていると思う？」

並木は肩をすくめた。

「理不尽な抑圧の下には、それに反して正義感が生まれるものだろう？ 陽の目をみることがないとわかっていても、どこか簡単には見つからないところに記録を残している可能性はあると思う。でもそれが外に出ることは、きつとないだろう」

二人はしばらくそのことについて考えを巡らせた。ふと何かを思い出したかのように白川が口を開いた。

「そういえば、品質管理部の丘さんって知っていますか？ 近頃は彼女とよく立ち話をするんですが、気になることを言っていたんです」

「サバサバしていて、実直にものを言う女性だよな。何と云っていたんだい？」

「研究所が製品の処方を決めて原料を手配する時に使った業者から、内緒で訊いた話があるというんです。うちの会社の研究所では一般に流通している原料をあまり使いたがらなくて、オーダーメイドのとめ型で作ることが多いそうなんです。実際にはたいした工夫をしなくて、その方が独自の技術なんだとアピールしやすいという

理由で。でもその分、原料の単価は高くなる。だから原料のロットを大きくして、いくらかの埋め合わせをしようとするんですが、とてもその程度のことでは足りないんです。そこで今度は業者にコストを下げた納入価格を安くしろと強硬に迫る訳です。研究所が初期発注を行う時点で、その後の納入価格についても取引のベースを決めてしまうそうです。最低ロットと、後に発注が増えた時にその量に応じて単価の割引を行うようにポリユームディスプレイスカウンタも設定されます。そして生産が軌道に乗り、ある程度の発注量が出るようになる、次は工場の購買部が業者に対して、実績が出たんだからさらに単価を下げると交渉するようになるんです。話を訊かせてくれた業者は泣いていたそうです。一般に流通している原料なら他社も使っているから何とかやりようもあるけど、とめ型でうちのためだけに作らせておいてそれをもっと値引けと言われたら利益は出ないと。そうすると、どうなると思います？」

白川は言葉を切って反応を待った。並木は口をぽかんと開けて、目にはまばたきがない。それを見て白川が続けた。

「業者はオフレコだと念を押したそうですが、実際に原料を作るのに使う材料は、うちには内緒でそのランクを下げていっているんです。最初だけはきちんとしたものを見せて、いいものを使っていますと言っておけば、後から研究所が中身や細かいところをチェックして何か言ってくることは、まずないそうです。それにもう一つ、開発の最初から単価のことをうるさく言われるから、業者側では、元々いい材料は使えないんだという意識から出発しているそうです。そうになると、現実に配合された原料は、予定よりもさらにチープなものである場合が多いと考えられます。でも誰もそこはチェックしていないから、何かよほどの問題でも起こらない限りわからないだろうということのようですね」

「ああ、なんてことだ。しかも、そんな代物をろくに空調の効かないコンテナや倉庫に長い期間置いておくなんて。それに、うちの製品には防腐剤と言えるものがほとんど配合されていないんだ」

「ええ。研究所では処方について偏ったこだわりがあるんです。安全性という観点で言えば、実はアレルギーを引き起す成分というのは人それぞれなんです。一まとめにして防腐剤を使っていないと言った方が安全な商品として見てもらえて売りやすいだろうという歪んだ発想があつて、営業側もそれを歓迎しているようです。すると後は、お客さんの目を惹く魅力的な成分をどれだけ配合できるかを競うような偏執的なものづくりになつてしまふんですね。うち会社の場合は、ペット向けに美容成分を配合し始めた頃から、そつち寄りの成分ばかりに気を取られるようになってしまつたんだと思います。天然由来の防腐成分もあるんですが、それを表立つて訴求するより、お客さんの耳に馴染んでいる美容成分の名前の方が売りやすいですから。それに加えて、もう一つのこだわりが、いま話していた原料のとめ型です。喩え机上の計算や加速試験などでは安定性に問題がなかったとしても、とめ型であるということは、実際に何箇月間もかけて確かめた訳ではないということでもあるんです。原料メーカーの工場を出た後は、現実には多様な環境にさらされますから、ふたを開けてみたら計算外に不安定だったということがあり得ます。一般に流通している原料なら、様々なデータをとつてメーカーが改良を重ねることもできるでしょうが、うちの原料について言えばそういつたものは何もありません。本当に困つたこだわりです」

並木の両肩がやや下がつた。それに応じるように一呼吸継いでから、白川は話を続けた。

「後輩が行つた検査結果からは、長い時間保管されてきた中で製品が富栄養状態に傾いてしまい、且つそこは防腐成分が乏しかったために、雑菌やカビやバクテリアが伸び伸びと繁殖できたのではないかと考えられます。種類によっては感染症や皮膚炎を引き起こす危険なものもあるし、重篤な場合には生命に関わることもあるんです。海外の話ですが、汚水が流れ込んだビーチで、たちの悪いバクテリアに感染して亡くなつた人のニュース、聞きましたか？ それから

もう一つ、製品からごく微量のホルムアルデヒドが検出されました。海外では防腐剤などの用途で使われることがあって、原料を作っているメーカーのどこかで使用していたのではないかと推測されます。ちなみに、今回検出された量では、製品そのものに防腐効果をもたらしすことはありません。業界や品目によっては、これは既に規制の対象になっています。なんとと言っても、うちはチエックが緩いですから」

並木は力なく、うな垂れるように頷いた。これだけ揃ってしまったら、あのかわいそうな犬の身に降りかかった被害の元凶が エフレ・フォー・ペット ではなかったのだと証明するのは、もはや難しいだろう。それに、新たに発売を目指している エアート は老人臭や口臭にも用途を広げてシニアと介護市場を主なターゲットにしようとしている。こんな危険なものを、抵抗力の弱い高齢者の肌や口内に噴霧したらいったいどうなる？ 重篤な場合はいったいどうなってしまうんだ？ 並木は、どうにかしてそれを避けなくてはならないと思った。また、丘がこれほど正直に内情を明かしてくれたこととの意図も、今ならわかる。きっと彼女も何とかしなくてはならないと考えていたのだろう。並木はゆっくり顔を起した。

「詳しく調べてくれて助かったよ。これで問題はほぼ特定できた訳だ。これからどうするべきだろう？ 現行の製品と準備中の新製品をどうにかしないと、大変なことになる」

「ええ、そうなんです。でもどうしたらいいかしら？ 実際に何か被害を受けたお客さんなら、消費生活センターみたいな公的機関に持ち込むことができるかもしれないけど。それとも、社内でこんな話に取り合ってくれるところがある？ 顧客サービス部の方は本田さんに話しておくことはできるけど、彼女が具体的な対策を講じるのは難しいわ。うーん、木田社長に直接伝えることができれば話が早いんだけど」

「いや、社長はだめだ。工場にいた時に送ったメールは戻って来なかった。それどころか、顧客サービス部から工場へ、工場から情報

システム部へと、配置転換を命じたのが木田社長だったとわかったんだ。そして今度は埼玉の独立行政法人へ出向しろと言ってきた」白川が驚いて話を遮った。

「ちよつと待って。出向って、なに？」

並木は一瞬、しまったという表情をしたが、観念して情報システム部に異動してから起こったことをかい摘んで一通り説明した。話が進むにつれて、白川の眼は驚きで大きく見開かれていった。

「そんなことになっていたなんて。並木さんが忙しかったのは実績をあげていて、もう浅倉部長が手出しできないようになってきたからだと思っていたのに」

「ああ、忙しかったのは仕事がうまくいっていたからなんだ。でもそのおかげで、今度は放り出されそうになっている」

「そんなの許せないわ」

その言葉で並木はあることを思い出した。ここは話題を変えた方がいいかもしれないと思い、浅倉をサニーフーフホテルの前でやつけた時のことを話して聞かせた。

白川は最初は驚き、次には身をよじり涙を流して大いに笑った。

「すごい、傑作ね。その汐崎さんって、やるわね。ああ、私も見たかったな。でもおかげで、私もちよつとすつきりしたかな」

そう言って、視線を上げた。

白川に顧客サービス部から工場への配置転換を命じたのが浅倉の独断であったことを、並木は知っていた。浅倉のメールを調べた時に、木田社長とのやりとりの中には白川の件は含まれていなかったのだ。並木は白川に向かって、それとわからないくらいかすかに頷いた。

笑みを浮べたまま白川が言った。

「ありがとう。元気が出たわ。私もうかうかしてられないな。さて、この続きは後で話すとして、アパート探しへ行きましょう。付き合ってくださいね」

二人は駅前のビルの一階にある不動産屋のカウンターに並んで座った。白川によると、別の日に既に他の不動産屋は訪問済みなのだろう。店頭を何軒も回ってみても同じ仲介物件ばかり紹介されるが多かったそう。いまやこの業界もネットワーク化されていて、足を使って探したところで掘り出し物などそうそう出ているのだ。

応対に出た若い男性に物件に関する希望を伝えると、条件の合う貸しアパートの間取り図と写真がいくつか紹介された。その中から二つの物件を選び、現地を見せてもらうことになった。

目当ての物件のうち、最後に見たのは多摩川を臨む二階の陽当たりのいい部屋だった。駅から歩いて也十分少々という好立地だった。白川はそこを気に入って、ベッドをここに置いてあそこにはベージュの小さなソファが似合うわと言って、ひとしきりはしゃいで見せた。

その帰りの車中、不動産屋の男性が白川に尋ねた。

「地元の方ではなさそうですね？」

「ええ。今度引っ越して来ようと思っているんです」

「武蔵小杉を選ぶなんて先見性がありますね。新駅もできる予定だし、これから注目されるエリアですからね」

「あら、そうなんですか？ 知らなかったわ」

「ご存知なかったんですか。じゃあ、別の理由があったんですね」

「ええ、まあ。いろいろとね」

「そうですね。この辺りはいいですよ。ご結婚されてからも住みやすいところですし」

「ええ、知っていました」

微笑む白川を、案内役の男性は怪訝そうにちらりと見た。

「それで、物件は気に入っていただけましたか？」

「ええ、とつても」

そう言って、白川はとびきりの笑顔を並木に向けた。

駅に戻り、二人は並んで歩いた。白川はいかにも楽しそうに川に

面したアパートの話が続いている。こんなにもくつろいだ気分になったのは久しぶりだと、並木は感じていた。

目の前の横断歩道を渡ろうとした時、背後から誰かに呼び止められて並木ははっとして振り返った。そこには同じくらい驚いた顔をした両親が立っていた。

「湧葉わかばじゃないか。なんだ、デートだったのか」

こんなところで両親と鉢合わせしてしまったという決まり悪さに、並木は顔が火照るのを感じた。それに気付いた父は、それを面白がるように言った。

「そうならそうと言ってくれたらいいのに。なあ、母さん。それにしても、こんな美人と休日を楽しめるなんて、ちょっと羨ましいな」その言葉に、間髪入れずに母が横から肘で父を小突いた。父は肘がめり込んだわき腹を押さえて小さくうめいた。それを見て、白川が思わず吹き出した。その笑顔のまま、並木の両親に真っ直ぐに向いて言った。

「はじめまして、白川穂乃香しづかほのかです」

父と母は眉を下げて、心からの笑みで白川に応えた。父が穏やかに言った。

「もしよければ二人でうちに寄っていかないか？ ちょうど晩飯の材料を買いに出てきたところだったんだ。白川さんは何が好きかね？」

「私は何でも。伺ってご迷惑ではありませんか？」

「誘ったのはこちらの方だよ。私たちは買い物をしていくから、先に行っていてください」

並木が慌てて何か言おうとしたが、父が機先を制した。

「湧葉、鍵は持っているな？」

食器が並んだダイニングテーブルでは、四人が和やかに会話を楽しんでいた。食事が済むと母が、次いで白川が立ち上がり、キッチンへ向かった。母が白川に座っていてと言うと、彼女は手伝わせてほしいと頼んだ。それがご馳走になったお礼の気持ちなのだと言っ

た。母はそれを受け入れ、新しいエプロンを出してきて白川に手渡した。それから二人は並んでキッチンに立った。白川は母に顔を向けて、手を動かしながらずっと話をしていった。母は会話の合間に何度も声をあげて笑った。並木はこんなに楽しそうな母を見るのはいつ以来のことだろうかと考えた。横で父が言った。

「いいお嬢さんじゃないか？ あんなに楽しそうな母さんは久しぶりに見たよ」

そして父はキッチンを見やり、嬉しそうに目を細めた。

白川がコーヒーを載せたお盆を運んできて、四人は再びテーブルについた。コーヒーを一口すすってから父が訊いた。

「武蔵小杉は気に入りましたかな？」

白川は大きく頷いた。

「ええ、とつても。いいところですね」

父は笑顔で頷き返し、次いで並木に目を移した。

「よかったな、湧葉。それに、休日を楽しめるくらいに快復してきて、本当に良かった」

その話はよしなさいというように、母が父を横目で睨んでわき腹の辺りをつついた。それに気付いた白川が、母に微笑みかけた。

「並木さんが元気になってきて、私も嬉しく思います」

その言葉に、母は感謝を込めて頷いた。

並木が口を開いた。

「白川さんは、会社のこともうつ病のことも全部知っているんだよ。実は今日も、そのことに関係のある情報を持ってきてくれたんだ」
父と母が同時に白川に顔を向けた。

「ええ、そうなんです。これまでのことは、並木さんにとって、とても大変だったと思います。その発端となったのは製品の品質に関することなんです。それについて私の後輩に検査をしてもらっていて、今日はその結果を並木さんに届けたんです」

そこからは並木が話を引き継いだ。

「問題を起したロットの製品が手に入ったので、それを白川さんに

頼んで検査に出してもらったんだ。さつき結果を見せてもらったんだけど、とてもひどいものだった。会社の品質管理部から当初出された報告書の内容とはかけ離れていて、雑菌やら何やらで製品が汚染されていた。それから、同時に検査してもらった別のロットからも懸念材料が検出された。それをどうしようかと二人で話していたんだ」

それからの十分ほどをかけて、検査結果とそこから導いた考えを説明した。黙って聴いていた父が言った。

「大変なことになっていたんだな。以前からお前が言っていた通り、欠陥があったという訳か。その状況のまままで新製品が発売されたら、さらに厄介な事態になるところだったな。それを止める手立ては、何か見つかっていないのか？」

「ああ、まだなんだ。今のうちに何とかしないとならないと思ってるけど、いい手が見つからないんだ」

「検査したのは販売中のペット向けのやつだろう？　その被害を受けた人は消費生活センターへ持ち込んだりしていないのか？」

「会社の顧客サービス窓口が謝って、なんとかなだめているよ。もしかしたらそっちへ連絡した人がいるかもしれないけど、どうかな。消費者が持ち込んだ苦情の実態をすぐに一つひとつ調べ上げて問題を起した会社を追求するなんて離れ業は、あそこではまずできないだろうからね。苦情の数が相当程度まとまるまでは、相談した人への個別のアドバイスとして処理されてしまっんじゃないかな」

「そうすると、社内ですっかり調査して改めない限りどうにもならないということか。しかし、誰であれ、それを正面から具申するよくな真似をするとお前のような目に遭ってしまうし」

「再び母の肘が父のわき腹に食い込んだ。父は失言だったというように小さく頷いた。

しばしの沈黙の後、父が訊いた。

「ところで、湧葉はその後、どうなったんだ？　情報システム部の仕事で結果が出せそうだと訊いていたが」

その問いかけに、並木の表情がたちどころに曇った。答えるまでに一瞬の間があった。

「それが、今度は埼玉の別法人へ出向しろと命じられてしまったんだ。医者と弁護士は、それは無茶苦茶だと言っていた。たぶん仕事の実績などというものを作られると都合が悪いというのが、会社側の真意なのだろうという見解だったよ。この命令は、雇用契約を解消するための布石だろうと考えていた」

父は驚いて言った。

「会社は、また随分と辛らつなことをしてきたものだな。出向は原則として本人の同意なくしてできないはずだが、あの会社ではそんなことは意に介していかないのかもしれないな。しかし会社がそこまでするといふのは、湧葉を一種の見せしめしようとしているのかもしれないぞ。それによって抑え込みたいのはいったい何だろう？

会社にもものを言うのは天に唾するようなものなんだと他の従業員に示したいのか？ それとも製品の問題が実はかなり深刻なものでこれ以上誰にもそれについて触れられたくないのか？」

並木は父の言葉にはっとした。会社の行為からすれば、確かに前者の目的があることは明白だった。しかし、後者の意味合いがあるのだとしたら？ 守秘義務の誓約書にあれだけこだわるのはそのためなのか？ いま思いついたことを父に問いかけてみることにした。父はそのことについてしばらく考えた。

「そうかもしれないな。もしそうなら、会社は内部告発を怖れているのかもしれない」

その言葉に弾かれたように、並木と白川は顔を見合わせた。父が話を続けた。

「先だつて公益通報者保護法というのが施行されたんだ。うちの会社も、ものづくりを生業としているから、社内で話題に上ったんだ。近頃では会社の不正を正そうとしても、なかなかそう上手くはいかない。もみ消し、隠蔽、偽装など、枚挙にいとまがない。そしてそのしわ寄せはお客にいくから、心ある輩が何とかそれを避けようと

すると、どこか問題を糾弾してくれるところに託すしなくなるんだ。会社の窓口や公的機関では満足な対応が為されないだろうと知っている賢明な者たちは、その使命の担い手としてマスコミに期待した。そして自動車メーカーや食品会社など、相次いで深刻な問題が明るみに出たという訳だ。これまでは従業員がそんなことをしたとわかると、解雇されたり懲罰を食らったり、下手をすると損害賠償を請求されたりした。しかしそれでは不正がまかり通ってしまうから、一定の要件を満たした通報者を法律で保護しようということになったんだ。もちろん、それなりのハードルも設けられているのだが」

「でも、条件を満たした内部告発は保護される？」

「ああ、そういうことだ」

「しかしわからないのは、そんなふうに法的な整備がされているとすれば、誓約書を取ったり見せしめにするのに、いったいどれほどの意味があるんだろう？ 浅倉部長からは敵意がひしひしと伝わってきてはいたけど、やつが内部告発云々ということを意識していたという気はしないんだ」

横から白川が言った。

「浅倉部長がそれを知らなくても辞令は出せるわ。多少でも分別のある人なら、浅倉部長と重要な機密を共有しようなんて思わないでしょ？ 並木さんを敵視するように仕向けたければ、それに足るだけの何か別の理由があれば事足りる。しかも、それが必ずしも真相である必要はない。だから浅倉部長は、すべてを知っていた訳じゃないかもしれない。そこに誤算があったとすれば、立ち回りが派手過ぎたことくらいじゃないかしら。それから、誓約書については書かせることで守秘義務を意識させておくことができるだろうし、見せしめにするということについては他の従業員に力関係を思い知らせることになるから、ある程度の心理的な抑止効果があったんだと思う。それに会社は、内部告発には間違っても触れられたくないはず。そう考えれば、筋が通るの。だって、並木さんが次々にひどい目に遭

わされてきたものだから、告発なんてことを考える余裕は誰にもなかった。私たちがいつも気にしていたのは労働問題の方であって、製品の瑕疵が最優先の課題じゃなかった」

父がそれに頷いた。

「彼女の言う通りかもしれないな。だから、これまでは品質の問題には厳しい目が向かずに済んでいた。それが会社側の狙いだとしたら、泣き所もやはりそこだろう。内部告発に意識が向かないように、それほど腐心してきたんだとしたら、万一そこを突かれた時のことも既に何か考えているんだろうが」

一旦黙り、また少し考えてから父が話を続けた。

「もし証拠が揃ってこちらが告発に踏み切ったとして、一旦それが受け付けられたら通報者は保護される。その後では、不利益になるような配置転換や解雇などの取り扱いはできなくなるんだ。そうなると、もはや労働問題を煙幕にして品質問題を遠避けておくことはできなくなる。告発されるということは、社会的に会社が断罪されることにつながるんだ。お客が一気に離れれば業績も落ち込み、会社の命運は生死の境をさまようことになりかねない。最悪の場合でも、傷口が広がらないように留めたり、その傷口に塗るための薬を手に入れておきたいと考えるだろう。誓約書がそれだけで明確な抑止力にならないことはわかっているのだろうが、告発されてしまった場合に争う材料 傷口の薬くらいにはなると踏んだのかもかもしれない」

父は続く言葉を呑み込むようにして話を切った。まだ話が終わっていないことを並木はわかっていた。父をじっとみつめて、さらなる説明を促した。ややあって、父はためらいがちに再び口を開いた。「ここから先はいい話じゃないんだ。さっき言いかけたハードルのことだが、一番手前に置かれるのはそれが公共の利益になるかどうかという判断なんだ。言い換えれば、個人的な不満や意見が動機になつてはならないし、その会社内で可能な限り手を尽くした上で社外の機関に通報したのかどうかを問われるんだ。お前の会社は、万

一告発された場合にはこのハードルを盾に取って何らかの申し開きをする腹積もりかもしれない。早い段階で社内の調査をする機会があれば問題はもっと早期に是正できたとか、マスコミにリークしたのは悪意があったんだとかと言つてな。湧葉がそれを否定したとしても、要職にある連中が口裏を合わせて陥れられたと言つこともできるだろう。そして、もし僅かでも会社側の対応に酌量の余地があったとされたら、今度は誓約書を持ち出して、守秘義務を侵したのは悪意があったからで、あいつがリークしなければこれほど甚大な損害は生じなかったと言いかねない。そして誓約書に沿って、その分を賠償しろと言ってくるかもしれない。実現性はともかくとして、そういう対抗手段を表明しておけば、お客たちがしばらくの間は静観してくれるだろうという望みが出てくる訳だ。会社としては、悪いのは湧葉だったのだと言うだろうし、その時に湧葉に味方する連中が出てこないようにするには見せしめが効果的だったんだろう。それが、向こうが今のうちから講じておける予防措置の一つだったのではないかと考えることはできるんじゃないか」

並木は黙ってしばらく考えを巡らせていたが、やがて重く息を吐いた。

「確かにあまりいい話じゃないな。もしそれでも告発した場合、社内調査させるように求めていることを、後で証明することはできるだろうか？」

父は静かに首を横に振った。

「残念ながら、そんなことができるなら、こんな法律は必要ないんだよ」

この言葉に、並木は脱力感を覚えた。自然と視線が下を向いて首は前方へと垂れていった。それを見て、父が言った。

「内部告発は難しいんだ。社会的に一定以上の効果があるのはわかっているんだが、利権を守りたい側から大きな力がかかることもまた事実なんだ。そして、これは匿名の告発とは違う。今回の場合は、何かが起これば湧葉がリークしたという疑いにほぼ自動的に結びつ

くように仕組まれているように見えるんだ。どちらにしても、慎重に事を運ぶに越したことはないよ」

短い沈黙が流れた後、白川が苛立ちをにじませた口調で言った。

「そんな危険を冒してまで、どうして会社は並木さんの警告を受け入れないのかしら？ 調査して改めるという発想はないの？」

並木がうな垂れたまま首を振った。

「覚えているかい？ あそこにはいったいどれだけの在庫があるかを。仕掛かりや充填済みのものだけで、ゆうに半年以上の注文をまかなえる量だ。それを捨てるとなったら大騒ぎだよ。あの部長連中は、そうなれば自分たちがどうなるかよくわかっているはずだ。仮に改めて調査することになったとしても、連中が自分たちにとって都合の悪い結果を正直に報告するとは思えない」

白川が頷いた。

「そうだとしたら、並木さんの警告については既に処理済ということになっているかもしれない。社内で調査が指示されて、結果は何の問題もなかったという虚偽の報告が行われたことになっているとか。単なる手順に過ぎなくても、それを踏んでおけば何らかの対応をとったと言うことはできるから。それから、一定の善処をしたという証人も作っておくことができる。でもそれによって、上層部の一部は、何か重大な問題があることを知った。それと同時に、在庫や責任の問題、それに諸々の影響など、頭の痛い難題を抱えていることにも気付いた。でも、いろいろな人間と利害が複雑に絡み合っているから、問題の全容を正確につかめるとい保証がないこともわかってる。だから、いま騒がれてほころびが明るみに出してしまうと手の施しようがなくなる。それは何としても阻止したいと考えた」

並木はそれに頷いた後、そのままうつむくように再び首を下げた。

じっとみんなの様子を伺っていた母が、重い口を開いた。

「あのね、製品の品質問題が鍵なのはわかったし、それを何とかできれば多くの人被害に遭わなくて済むかもしれないということも

理解できる。でもね、私はもうこれ以上、湧葉に辛い思いをしてほしくないの。湧葉はもう充分頑張ったわ。そんな会社は、いずれ社会に淘汰される。もういいじゃないの」

母の言葉が首筋へと重く圧しかかると、並木には感じられた。

その時不意に、毛が抜けて荒れた地肌をさらして力なく座り込んでいた、あの犬を目にした時のやましさを記憶が蘇えってきた。並木は目を見開き、顔を起こした。

その目を母が恐る恐る覗き込んだ。やがて、そこに決意の色を見て取ると、母の頬を一筋の涙が伝い落ちた。白川がそつと差し出したハンカチを受け取り、少し気分を落ち着かせてから、母は父の方を向いた。

「湧葉の負担を少しでも軽くしてあげるには、他に何ができるでしょうか？ たとえば、新聞で読んだのですが、近頃はうつ病に労災が認められるケースが増えているそうです。そういうことでもできれば、いくらかでも楽にはなりませんか？」

父は少し考えてから答えた。

「母さんの言うことはよくわかる。湧葉の負担を少しでも軽くしてやりたいと、私も思うよ。精神疾患の増加を受けて認定基準が見直されてからは、労災が認められるケースも確かに増えている。もし会社が労災請求はだめだと言ったとしても、労働基準監督署に直接請求できるからな。やってみる価値は大いにあるが、その反面、認定されるかどうか決まるまでの道のりは依然として大変らしい。ほら、過労死のケースで遺族が労災を認めると裁判請求したという報道もあつただろう？ 患者側が業務との因果関係は明白だと信じていても、会社側はそんなことはあり得ないと必ず言うんだ。特に精神疾患については、業務上か業務外かの判定を役人と専門家が協議するんだが、労働基準監督署と労働局の間で検討の場が移ったりと、かなりの時間がかかるんだ。そうすると途方もない時間を費やして、その間こっちは神経をすり減らすことになる。うちの会社の労働組合が属している上の団体にメンタルケアを扱う部会のようなものが

あるんだが、そこで訊いた話ではそんなところだった。だから良く考えてから決める必要があると思う」

「父さん、訊いてくれていたのか。ありがとう」

並木が礼を言うと、父は小さく頷いた。

「それで、お前はこれからどうするつもりなんだ？ 随分と事態が複雑になっているし、まずは出向命令についての態度を決めなくてはならないだろう？」

並木は答えようとして言いよどんだ。いま立っている道にはもう分岐点はなく、これから向かおうとする先には、重く垂れ込めた暗雲が見えるように思えた。僅かに視線を上げると、辛抱強く答えを待っている父の顔がそこにあつた。並木は自分自身に向けて頷いた。「そのことについてなんだけど、医者からは休職を奨められたよ。埼玉へ通うのはとても無理だろうし、もし向こうへ行けたとしても、

通院や治療に当てる時間が取れなくなればうつ病が悪化するかもしれない。だから、出向命令を撤回するように求める内容証明郵便を送ってもらった。会社がそれにノーと言えば、休職することになると思う。でも一旦休職してしまったら、復職に際して元の職場はどこなのかといったことを巡って揉め事が起こると予想される。そうなれば、最後は辞職することにならざるを得ないかもしれない」

「茨の道か……」
ため息交じりに父がそう漏らした。並木はそれに頷いてから言い足した。

「そして、弁護士は裁判を想定しておいた方がいいだろうと言っていた」

この言葉が長い沈黙を引き寄せた。

やがて父が顔を上げた。

「どうやら、裁判を踏まえておくというのは正しい考えのようだな。お前は大丈夫か？」

並木は父から目を逸らした。その様子を見て父が言った。

「選択の余地なしというところか。エア・アートという会社は、ひ

どいことをするもんだな。巷ちまたではいいイメージで通っていると思っ
ていたんだが。保身や利得のために、力で人をいたぶるといふのは、
実に悲しいことだ」

父は母の方をちらりと見て、また並木に視線を戻した。

「そういうことなら、母さんが言っていた労災の件はもつとよく検
討しないとな。すんなり認定されればいいが、そうでなかったら会
社側がそれをどう利用してくるかわからない。それから、もし裁判
になってしまったら、大きな負荷をまた背負うことになってしまう。
弁護士がついているとはいえ、自分自身でやらなければならぬこ
とは両手に余るほどあるだろうからな。ああ、そういえば、労働組
合の人にはその後は相談していいののか？」

「父さん、白川さんがいるんだし、その話はやめよう」

並木はそう言っただけで話題を変えようとした。そこへ白川が口を挟んだ。
「私なら構わないわよ。労働組合のことは、私も父が話しているの
を聞いたことがあるし、以前に街頭で労働相談会をやっていたのを
見たこともある。うちの会社にもあればいいのと思うことがある
わ」

父が白川に頷いた。

「ご存知かもしれないが、湧葉はその労働相談会に行ったんだよ。
そこで弁護士さんともつながりができた。若い人には馴染まないの
かもしれないが、職場を変えるのは、実は運動の力なんだ。それが
ないと、会社のやりたい放題になって、それに対する抑止力はろく
に働かない」

言い難そうに並木が口を開いた。

「それはよくわかるよ。相談会で会ったのは素敵な人だったし、言
っていることもよくわかった。その人の生き方や価値観には共感し
たし、それがへこみかけていた自分を次の一歩へと進ませてくれた
んだと思う。それについてはとても感謝しているよ。でも労働組合
と言われると、どうにも敷居が高く感じてしまうんだ。その時にメ
ーデーに来ないかと誘われて、少し考えようとしたんだけど、やは

り断ってしまった。組合のことをちゃんと知らないからなんだろうけど、違和感があつて何かそこには入つていけそうにないんだ」

父が目を伏せるようにして頷いた。視線はテーブルの上に落ち、その口調には控えめなもどかしさが潜んでいた。

「ああ、確かに今の時代には合わなくなつたのかもしれない。陣旗を掲げて氣勢を上げたり、ストライキをやつて飛行機や電車が動かなくなるのは、時代の求める合理性にはそぐわないように見えるんだろうな。そんな古いやり方が余計に敷居を高くしているのかもしれない。しかし今の労働法制では、労働者の権利は労働組合と一定の関わりがあるんだ。だから、むげに脇へ押しやつてしまう訳にもいかないんだ」

並木は少し考えてから答えた。

「それはそうだけど、一方では組合の数が減つているんだろう？」

以前話した時にも、そんなことを言つていたような気がするけど」

「ああ、そうだったな。確かに今の組合は元気がないかもしれん。でもな、それには理由があるんだ。一昔前に組合が隆盛の頃は、会社側は何とかして組合側の団結力を低下させて弱体化させようと、あの手この手を繰り返してきたものだ。労働者が強い組合を作ると、会社側はその幹部に出世をちらつかせて引き抜こうとしたり、時には間接的に脅したりもした。もっと腹黒く計略的にやる会社は、裏で糸を引いて対抗する第二組合を作らせて、その組合員を優遇してみせることで力関係の逆転を狙つたりもした。御用組合というのは聞いたことがあるだろう？ 会社にとつても、お互いの関係さえよければ組合はあつた方がいいんだ。労働者側の代表だから、そこが言うことをきいてくれれば、決め事はみんな合意の上ということになるからな。違法すれすれだが、会社が隠れて支持する訳だから、御用組合はあつという間に増えていった。その反面、正規の組合は徐々に力を失つていったんだ。それは同時に、組合は弱い労働者を守れないという評価になった。その拳句、今では若い人が口を揃えて、スキルを高めて自己防衛する時代になつたなどと言つてい

る始末さ」

「それなら、組合に属さない労働者も多数いる訳だろう？ それなのに、労働者の権利や何かの仕組みが旧来のままなのはどうかと思うんだ。たとえばその法が現状に合うように見直されれば、もう少し感じ方が変わるのかもしれない」

「法を議論するとなると組合の在り方も見直さなくてはならないだろう。組合の役割が低下すれば、これ幸いと企業側にとって都合がいいように法が改変される怖れがある。一旦そうなると歯止めが利かなくなってしまうんだ。近頃は安易に法改正と言うが、それが実質的に力の強い者の利権や支配を助長する結果になるのは願い下げだ」

父は、その言葉と一緒に重く息を吐いた。そして肩の凝りでもほぐすかのように首を揺らすと、思い直したように視線を上げた。その目には息子へのいたわりの思いが満ちていた。

「湧葉の言うのももつともだな。若い人たちにとっては、取っ付き難いというのもわかる。組合の活動に関わることが負担になるとすれば、今は無理をすることはないだろう。ただ言いたかったのは、今のお前に必要なのは、一緒に本気で怒ってくれる仲間だということなんだ。お前を守ってくれるのは、理解してくれる仲間なんだ」

父が口を閉ざすと、後に短い沈黙が流れた。やがて母が時計を見上げて、驚いて言った。

「あら、もうこんな時間だわ。遅くなっちゃってごめんなさいね、白川さん」

「いえ、大丈夫です。私の方こそ、ご馳走になってしまった」

それを合図に、一斉に椅子が引かれた。父はトイレへ行くと言って部屋を出ていき、母はコーヒーカップをキッチンへ下げにいった。椅子を引いて白川が腰を浮かせたところで並木が言った。

「車があるから自宅まで送るよ。それとも、泊まっていくかい？」

その言葉に不意をつかれて白川は驚き、頬がたちまち赤く染まっ

た。それはほどなく、いつものいたずらっぽい笑みにかわった。
「空いている部屋があるの？」

十五

翌週は何事もなく過ぎていった。牧山から内容証明郵便が届いているはずだったが、会社側は並木に何も言っただけで来なかった。浅倉も姿を見せず、北村は相変わらずキーボードを介してパソコンと会話しているだけだった。

汐崎はプロジェクトの仕事に忙しく、その表情には疲労の色が浮かんでいた。それでも時折、コーヒーを取りに席を立つ時は、目配せをして並木を無言で誘った。そんな時は並木も手を休めて休憩室へと向かうのだった。そして二人はいつものように、コーヒーカップが空になるまで、つかの間の自由を楽しんだ。

この一週間というもの、汐崎は並木の抱える問題には触れようとしなかった。並木の方からもその話題は持ち出さないようにした。今のところ、この問題に関してこれ以上できることがないことは、二人ともわかっていた。

そして今日は弁護士と会う約束の日だった。並木は昼から半日の休暇を取った。外に出ると、空には覆いかぶさるような灰色の雲が広がっていた。並木はその下へと足を踏み出した。

手連人法律事務所に着くと、二人の弁護士が揃って待っていた。牧山が話を始めた。

「会社から返事がありましたよ。今回は向こうも内容証明郵便で返してきました。でもそこには弁護士の名前はなくて、浅倉人事部長が記名していました。こちらが求めた出向命令の撤回については、再考する必要はないと書いてきました」
続いて夏目が口を開いた。

「そういうことだから、並木さんの方には誰も何も言っただけで来なかつ

たでしょう?」

「ええ、静かな一週間でした」

並木がそう答えると、夏目が続けた。

「さて、ボールは投げ返されたから、いよいよこちらがどうするか決めないとならないな。休職の件については、その後、考えはどうですか?」

「もう選択の余地はないような気がします」

並木は一瞬顎を下げたが、すぐにまた顔を上げて決然と言った。

「休職しようと思います」

夏目がじつと並木を見た。その硬い表情から、並木の心が決まったことを読み取ると、ゆつくりと頷いてから言った。

「それでは、並木さんは月曜日に休職届けを提出してください。開始日は出向命令が発効する前月の末日にしておいてください。後で復職の議論になった時に、いくらかは役に立つかもしれないから。月曜日以後は有給休暇を取得して、しばらく会社には行かない方がいいと思う。牧山先生は内容証明を出して、休職することで不利な扱いをしないように申し入れる」

牧山が頷いた。次に夏目は並木に視線を向けた。

「よし、ではそれでいきましょう。並木さん、他には何かありますか?」

並木は実家で昨晚交わした話を二人にも伝えておくことにした。実は会社が怖れているのは品質の問題の追及と内部告発なのではないかということと、うつ病を労災請求することの是非について両親が言っていたことを話した。二人の弁護士は黙ってそれを聴いていた。やがて牧山が口を開いた。

「なるほど、内部告発ですか。それを危惧して、人事権を振り回すことで煙幕を張ったという訳か。そう考えられないこともないな。品質の問題が表に出たら、会社にとっては大打撃だから。確かに、そうやって奈落の底へ転がり落ちていった会社がありましたよ。でも労働問題だって相当厄介なはずでしょう? それを天秤にかけて、

お客にそつぽを向かれる怖れが小さい方を選んだということなんですかね？」

夏目が苦々しく首を振った。

「そんなことをしたって、所詮は一時しのぎに過ぎない。品質の問題を必死に隠したところで、それが事実ならいずればれて社会的に断罪されることになる。労働問題にすり替えてみたって同じようなもんさ。そんなことをする会社から、黙って物を買ひ続けるほど客は馬鹿じゃない。問題は、問題だよ」

夏目はそう言つと、一旦言葉を切った。短い間、少し考えてから再び口を開いた。

「 と言いたいところだが、近頃では少し事情が変わってきているとも言える。諸々の問題が客の喉元を過ぎるまでに、大した時間がかからないようになってきたんだ。問題が持ち上がるとマスコミは一斉にわつとやるが、その波は引くのも早いからな。そのことを会社の上層部では、おそらくわかっているんだろう。もし問題が外に出るのを止められなかった場合は、客が戻ってくるまでの間をどう持ちこたえるか。既にそのことを考えているだろう。でも告発を受けることはダメージが大きい。それはなんとしても避けたいから、部長連中に命令を下してあの手この手を講じてくるんだ。一方で部長連中は、上からの命令に忠実に応えているように振舞うことと、自分たちが預かっている業務の仕組みには問題がないかのようによくごまかし通すことが、自分の身を守ることだとわかっている。そのためには誰かを力で叩きのめすのも仕方ないという訳だ。わかるだろ？ あいつらが重要度をはかる天秤の片側に載せているのは、いつも保身なんだよ。そうまでしてあいつらが守りたいのは、肩書きと自分自身さ。上層部は、それをよく知った上で部長連中を利用したんだろう。この問題が告発されたら真っ先に首が飛ぶのは、まづ間違いなくあいつら部長連中だよ」

並木は頷いて同意を示した。確かに、保身に長けた部長連中が自分の尻に嘸み付きかねないような秘密を易々と明かすはずがない。

それは同時に、上層部が問題の全体像を洗い出すのは簡単にはできないことを意味し、並木が何をどこまでつかんでいるのかを知るのはさらに難しいということでもあるとわかった。

牧山が椅子の背にもたれて、天井を仰いだ。

「そんなに保身って大事なのかな？ ある程度はそれに長けていないと、この国じゃ働けないんだろうけど。でも度を越しているのは問題だな」

一拍の間があり、次に牧山は背を起こして椅子に座りなおした。並木に顔を向けて言う。

「それで並木さん、内部告発の件ですが、これがまたいろいろと難しいんですよ。そっちに明るい弁護士に訊いてみますけど、もう少し待ってください。ところで、労災の方はどうするつもりですか？」

並木は目を伏せて、しばし逡巡した。心の襞に刺さったとげのように、あの時の記憶がうずくのを感じた。やがて顔を上げたが、答えは決められなかった。

「やってみる価値はあると思います。でも以前、監督官から言われた言葉が、まだ自分の中で尾を引いているんです」

「工場のトラックヤードに座らされていた時に相談に行った話ですか？」

牧山の問いに、並木はかすかに頷いた。

「ええ。監督官に、そんなのは甘えだと一蹴されたんです。ちゃんと席があるんだからいいだろうと。その時に、うつ病なら労災を請求してみればいいじゃないかとも言われました。でも審査は難しいぞと釘を刺されたんです。それから、役人というのはいったいどこを向いて仕事をしているのだろうか、つい考えてしまうんです。だから、どうも役所が絡むと前向きになれないんですよ」

夏目が、わかるよというように頷いた。

「いかにも古狸が言いそうなことだ。あそこは役所だから、クロだと断定したらことんやるんだが、グレーは限りなくシロと同じなんだ。だからグレーの話は疎ましいとばかりに早めに撥ねつけよう

とする爺さんがいるんだよ。それに一つの監督署が見なければならぬ会社の数があまりに多くて、監督官の数との釣り合いがとれていないという側面もある。でも、中にはまともなやつもいる。ほら、いい学校にもだめ教師はいるし、だめ学校にだっていい教師はいるものだろ？ 監督官がすべてだめという訳ではないさ。だけど、それが並木さんの負担を増やすことになるなら、今は考えから外しておこう」

並木は、乱暴な字で 負けるな！ と書いたメモ紙を手渡してくれ、た若い監督官のことを思い出していた。

週明けの月曜日、並木は会社に着くとそのまま人事部に向かった。フロアに足を踏み入れると、奥の机で浅倉部長が驚いて反射的に身を屈めたのが見えた。それには構わず、手前のカウンターに置かれたプラスチックの引き出しから目的の書類を手に取り、きびすを返して廊下へ戻った。歩きながら、浅倉の様子について考えた。少し前までは権限をかさに着てあれほど高圧的だった男が、社長から関わるなという指示をメールで受けた途端に並木を避けるようになった。

「所詮は借り物の威権か」

並木は一瞬足を止めてそうつぶやき、かすかに頭を振った。

情報システム部に入っていくと、もうほとんどの者が出勤してきており、いつものようにキーボードを叩く乾いた音が室内に満ちていた。

並木は汐崎の隣に黙って立ち、プロジェクトのメンバーの一人ひとりを順に見つめた。やがて全員が並木の視線に気付いて顔を上げ、そこに込められた意味を感じ取り、別れを悟った。誰も何も言わなかったが、表情には一様に無念さが浮かんでいた。並木は丁寧に深く頭を下げた。

次いで汐崎に目を向けると、彼女は頷くようにしてそのまま頭を垂れた。その肩がかすかに震えているのがわかった。

並木は自分の席に座り、人事部のカウンターから取ってきた 休職届 と 有給休暇届 の空欄を埋めた。そして机の上からメモ紙を一枚取り、それに短くメッセージを書いた。そして荷物をまとめ席を立ち、今書いたメモを汐崎の机の端にそつと置いた。

北村部長の席へ向かう並木の背中を、汐崎は上目遣いにじつと見つめていた。その後、並木がフロアから出て行ってしまうと、汐崎はのろのろと机に置かれたメモに目を移した。そこに書かれた字を見ていると、こらえていた涙が静かにこぼれ落ちた。

きつと戻ってくる

桜木町のアパートに帰ると、身に着けていたストライプの入ったアイボリー色のスーツをハンガーに吊るしてクロゼットに押し込んだ。そのまま床に身体を投げ出して天井を眺めた。これからのことを考えると、言いようのない不安に襲われた。目をつぶり、しばらくそのまま横になって、頭の中から不安を閉め出そうとした。

やがて目を開け、それがうまくいかない試みだったことを悟った。仕方なく上体を起こし、当分は実家で過ごそうと決めた。

十六

それからの毎日は、これまでとは異なり穏やかに過ぎて行った。時間が経つにつれて、徐々に体調も良くなってきた。思い切ったストレス源から離れてみて、正解だったかもしれないと思い始めている。当初は生活リズムの違いに戸惑ったものの、今はこの時間の流れを受け入れつつあった。

実家の中で気に入っている場所は、窓に向いた古い木の椅子だった。長い時間それにもたれて、レースのカーテン越しに灰色の空を眺めて過ごすことが多くなった。ここに来てから晴れた日は数えるほどしかなかったが、それでも窓辺のぬくもりは心を穏やかにして

くれた。

会社からはほとんど音沙汰がなかった。六月の末に、母が桜木町のアパートへ換気のために窓を開けに行ってくれた時に、有給休暇分の給与明細が郵便で届いていただけだった。

それと同じ頃、携帯電話に同期の山口からメールが届いた。それは、並木を心配する言葉で始まり、会社を気遣う言葉で締め括られていた。機会があつて浅倉人事部長と話をした時に元気がないので理由を尋ねたら、お前のことをとても心配していると言っていたぞ。とお前も意地を張らずに大人になればよ、それが会社のためだろう、と書かれていた。並木はそのメールを削除し、返事は送らなかった。山口もそれ以上は何も言つてこなかった。

医者と弁護士の間へはこまめに通つた。共に武蔵小杉であつたため、実家に世話になつて居るのは、その意味でもありがたかつた。小杉医師は並木が実家に身を寄せたことを歓迎した。身内が一緒にいてくれるのはいい事なのだよと言つた。弁護士も快方に向かつているのを喜んでくれた。

六月下旬になつて、復職についての検討を始めた。復職するか、それとも休職を延長するか、そろそろ医者に判断を託さねばならない時期に差しかかるのだ。

久しぶりに晴れた朝だった。母は、貴重な晴れ間だからアパートの窓を開けてくるわと言つて出かけていった。それからしばらくして、まだ昼にもなつていないというのに慌てた様子で母が戻つてきた。手にしたバッグの口を開くと、中から一通の封筒を取り出して並木に手渡した。

「窓を開けていたら、ちょうど郵便局が来たのよ。書留だったから何か大事なものかもしれないと思つて、急いで帰つてきたの」

封筒の下段にはエア・アート社のロゴが印刷されていた。並木は息を呑み、封を破つた。

中には四枚の紙が入つていた。取り出して広げ、最初の紙を見た。

タイトルには 休職期間満了について とある。

並木湧葉殿

下記の通り、休職届に記された満了日を迎えます。

復職を希望する場合は、次の期日までに医師の診断書を添えて復職願を提出してください。

なお、提出がなされない場合、及び復職が適当でないとして会社が判断した場合は、八月末日をもって解雇するものとします。

記

休職期間満了日 七月三十一日

提出期限 同日までに必着のこと

紙をめくると、その下には就業規則の改定通知があった。その最初には 休職 という項があり、（新） 休職期間満了後に復職の可能性が低いと会社が判断したときは、休職またはその期間の延長を認めないことがある と書かれていた。

次に 復職 の項があり、（新） 復職願を受理した後に会社が休職事由の解消を認めた場合は、原則として休職前の職務に復帰させる。休職前に既に発効された人事命令がある場合は、その命じられた職場に就くものとする。ただし、必要に応じて旧職務と異なる職務に配置することがある と記されていた。

さらにその下の段には 解雇 と 懲戒 という項があった。

解雇 の項には、（新） 心身の疾患または障害により、業務に耐えられないと認めたととき と（新） 休職期間が満了しても復職できないとき が新しい解雇事由として加えられていた。

懲戒 は、（新） 次の事由に該当する場合は懲戒解雇に処す。ただし、事情によっては諭旨退職とすることがある。この場合、退職を勧告してから一週間以内に従わないときは懲戒解雇とする と断りがあり、その下に 諭旨退職および懲戒解雇 と 損害賠償 という項があった。その後には四つの新しい 懲戒事由 が示され

ていた。

(新) 正当な理由なく配置転換・出張・転勤・出向等の人事命令を拒否したとき

(新) 許可なく会社の記録・帳簿・文書等の書類を部外者に開示したとき

(新) 会社で知り得た重要な秘密を社外に漏らしたとき

(新) 会社の経営をおびやかす行動・画策、または宣伝流布するなどの行為により、会社の名誉・信用を傷つけたとき

最後の 損害賠償 の項は、これらに該当する行為があった場合は、その損害について賠償請求するという短いくだりであった。

この通知をめくると次の紙は、並木が提出した退職届のコピーだった。この用紙では期間の開始と終了は日付で記入することになっており、並木はその終了日を、開始日の二箇月後に当たる七月三十一日としていたのだった。

最後の紙は復職願の用紙だった。復職という文字は、提出できるものならしてみると挑んでくるかのように見えた。

就業規則はまたも変更されていた。今回も山口が従業員の代表者として署名したのだろうか、この前の山口からのメールはその件で人事部に呼ばれた時のことを言っていたのだろうかと言った。しかし、それはもはやどうでもいいことだと気付いた。代表者に選ばれる者が誰であれ、山口の他にも黙って署名に応じる人間はいくらでもあるのだろうか。

四枚の紙を折り畳んで元の封筒に戻した。来るべき時が来たのだ。それを持って弁護士事務所に向かった。

手連人法律事務所には牧山がいた。並木から封筒を受け取ると、すぐに開いて中の通知に目を通した。やがて顔を上げると言った。

「やはり来ましたか。内容はこちらが思っていたよりも厳しいな。労災を受けて休職している訳ではないから、あくまでも私傷病なんだという理屈のようですね。それで外堀を埋めてきという印象です。タイトルこそ休職期間満了の通知となっていますが、解雇日までに

三十日の猶予を持たせていますから、見ようによっては解雇予告とも受け取れます。復職の書類が 届 ではなく 願 となっているのは、復職が妥当かどうかの判断は会社側が行うという意味ですね。念を押すように通知に書いて寄越したのは、こちらが復職について何らかの条件を診断書に付してくと読んでのことでしょう。また、就業規則に懲戒と損害賠償を明記したから、問題の誓約書についてはもう求めてこないかもしれませんね」

牧山のこの分析は正しいように思えた。並木が力なく目を伏せると、牧山が元気付けるように言った。

「やるだけのことはやりましょう。並木さんは医者に復職の相談を試してみてください。病状によっては、休職期間を延長した方がいいと言いかもしれない。医者判断がわかったら、それを認めるといふ主旨の内容証明を送りますから」

並木はそれに頷き、ためらいがちに訊いた。

「会社が認めないと、どうなりますか？」

牧山がちよっと間を置いてから答えた。

「裁判、ですかね」

次に並木は小杉医師の元を訪れた。だいぶ待たされたが、少しの時間話すことができた。

小杉の判断では、並木の状態は上向いてきてはいるものの、復職については職場での配慮が必要であり、可能ならばもう一箇月ほど休職期間を延長した方がいいということだった。せつかく良くなり始めているので、このままもう少し治療に専念できる時間を取った方がいいと言った。診断書を書いてもらい、並木はそれを牧山に届けた。

牧山はコピーを取り、診断書を並木に返した。そして、休職届の期間延長を申し入れる書面を作り、それに診断書を添えて会社にするようにと言った。しかし、改定された就業規則の記述から見て、八月末日付で解雇通知が届きかねない懸念が、それで拭える訳ではなかった。そのことは二人ともわかっていた。

牧山は、回答期限を明示した内容証明をすぐに出しておくに付加えた。そして、並行して裁判所に提訴するための準備を整えておいた方がいいだらうと言って締め括った。

それから十日ほど経って、会社からの回答が牧山の元に届いた。そこにはたった一言、こう書かれていた。

適切に判断します

それからの日々、牧山の予定が許す限り、並木は手連人法律事務所ので長い時間を過ごすようになった。いざ裁判に打って出ざるを得なくなつた時に備えて、これまでの経過をまとめて理論構成を練っておこうということになったのだ。

取りまとめの作業に必要な材料は概ね揃っていた。並木は経過を逐一記録に留めていたし、やりとりはICレコーダーに録音されている。それは後に裁判に進んで両者の主張が膠着した時の切り札になるはずだった。

その録音記録のほとんどをダビングしたカセットテープの山に目をやつて、今は手間のかかる録音の反訳には手をつけないでおくことに決めた。まずはメモや記録をひも解いて、事実を時系列に沿って正確に整理する作業から始めることにした。

しかし、スムーズに進むかと思われた作業は、しばしば中断された。記憶が刺激されるたびに、どうしても気持ちが沈んでしまうのだ。

それでも前に進むしかなかった。もはや会社との交渉の余地はさほど残っているとは言えず、解雇通知が届くのは時間の問題だと思えた。

そんな日々が流れて七月も終わりに近付いた頃、牧山が内部告発について別の弁護士から話を聞いてきてくれた。それによると、父が言っていた公益通報者保護法は、施行後まだ間もないので判断が難しいところだということだった。

告発が保護されるのは、いわゆる刑罰を伴う一部の犯罪行為に限

定されており、見方によっては間口が狭いということらしい。また社内に通報すると証拠を隠滅される危険がある場合には外部への告発が認められるとされているが、その危険性が充分にあったことを後になってから客観的に立証するのは極めて困難なのだったということだった。

どうやらこの制度は、現時点ではあてにできないようだ結論付けた。ただし、この法律の施行前の判例からは、参考になりそうなものがいくつも見つかった。

それらが示すのは、仮に一部の手続きに若干の不手際があったとしても、総じて告発が正当であると解釈される場合があるということだった。共通しているのは、告発の内容が真実またはそう信じるに足る相当な理由があったことと、それが決して看過されてはならない問題であったということだ。特に会社や組織ぐるみの不正行為においては、仮に内部で努力してみても会社がそれを聞き入れる可能性は極めて低いと認めたケースもあった。

これらの判決は、解雇を無効にし、損害賠償を認めるという成果を残した。しかし、直接それが不正を正したり再発防止を確約させたりというところまで、深く及ぶことはないということもまた事実であった。後に何らかの改善がみられたケースでは、会社の敗訴が公になり社会的に断罪された結果、態度を改めざるを得なくなったというのが実際のところのようだった。正義は世論や人の行動によってもたらされるのだ。それは、父が以前口にした運動の力ということなのかもしれないと、並木は思った。

並木と二人の弁護士は、今は労働問題を解決することが先決であるという考えに至っていた。それは、この問題を論じる上では、うつ病の原因となった一連の人事措置やトラックヤードに置かれた席への言及は避けられないはずだと読んだからだった。さらに遡れば、それは並木が品質問題を指摘したことが契機となったことに、自ずと辿り着けるはずだと考えた。そうやって、最後には製品の瑕疵にスポットが当たることになるのだ。問題の核心に近づくには、今は

この切り口が最も有効だろうと思えた。

会社側は、そうやって問題が明るみになるかもしれないと怖れているのだろうかと言った。その考えが正しいとすれば、本心では裁判など起されたくはないはずだ。会社側が解雇というカードを持っているように、こちらには品質問題を公にするという切り札がある。また、双方ともそれが互いを深く傷つけるとわかっていているのだ。ただしばらくは、こうしたせめぎ合いが続くのだろう。そう思うと並木は気が重くなった。

しかし並木が次にすべきことは明らかだった。もし会社から解雇を突きつけられたら、それを撤回しろと申し入れるのだ。応じなければ法的手段を講じるという一言を添えて。

現時点で、ボールは会社側にある。間もなく、それがこちらに投げて超越されるだろう。その時に会社が行う選択によって、事態が進む方向が決まってしまう。告発されるリスクとその後のダメージを憂慮して会社が改心するかもしれないという、あまり現実的でない考えに一縷の望みを託そうと思った。

その考えに辿り着いた時、ラジオから天気予報が聞こえてきた。

その声は、長かった梅雨がようやく明けたと告げた。

八月に入ると、明るい空が広がる日が俄然多くなった。今月になってから雨が降った日は、前の月に晴れ間を見た日数とさほど変わらない。並木は空を見上げて、この天気のように抱えている問題もすつきりと晴れてくれたらいいのにと願った。

その後、会社からは何の音沙汰もなかった。指定された復職願の提出期限を過ぎても、はがき一枚さえ届かなかった。果たして、休職届の延長が無事に受理されたのかどうか不安だった。会社が何か言ってきたら、すぐに復職願に切り替えることには医師も概ね同意していた。しかし、どうなっているのか会社に問い合わせるのは怖かった。そうしてしまうと、自ら最後の引き金を引いてしまうような気がした。並木は、そんな懸念を振り払うように記録の整理を続

けた。

世間がお盆休みに差しかかるうかという頃になって、ようやく並木の作業が終わった。牧山は並木の労をねぎらい、お盆の間はゆっくり休むようにと言った。

手連人法律事務所を出ると、まだ暑い夕方の陽射しがアスファルトを照らしていた。並木はなかなか晴れない気分を引きずって、しばらく地面の照り返しの中に佇んでいた。やがてのろのろと歩き出そうとした時、背後で二階の窓が開いて牧山の声が聞こえた。

「並木さん、この後一杯やりにいきませんか？　いま降りていきますから待っていてください」

並木が答える前に窓が閉まった。

二人は駅を越えてしばらく歩いたところで裏路地へ入り、一軒の小料理屋の前で立ち止まった。外には看板もなければ、のれんも出ていない。周りに他の店がなければ、そこが小料理屋だとはわからないだろう。牧山が店の扉を引き開けて、二人は中へ入った。

小さなカウンターの向こうで、六十がらみの恰幅のよい男が顔を上げた。

「今日は随分と早いじゃないか？」

「ええ、マスター先生がもう来ていてよかったですよ。まだ開いていないかなと思ひながら来たんです。今日はお客さんが一緒なんですよ」

牧山はそう言って並木を紹介した。マスター先生と呼ばれた男は軽く会釈しただけで、特に名乗る様子は見せなかった。

座るように並木に言ってから、牧山はカウンターを回ってビールを二本取ってきた。並木に差し出した瓶に自分のビールを軽く合わせてカチンと鳴らすと、そのまま瓶をくわえて長々とビールを喉へ流し込んだ。

その瓶を下ろすよりも早く、次の客が入ってきた。その客も牧山と同じく自分でビールを取りに行った。それからしばらくすると、カウンターの一段高くなったところに大皿が置かれた。牧山は脇に

積み重ねた小皿に手を伸ばし、大皿からじゃがいもの煮物を取り分けた。一つを並木の前に、もう一つを別の客の前に置いた。

「さあ、食いませう。マスター先生の煮物はうまいですよ」

「牧山先生、ここは？」

戸惑いの表情を浮かべた並木に、牧山はじゃがいもをほお張りながら答えた。

「ここは、仲間の店なんです。だから、よその店とは違っていいんです。向こうで飲んでいるのも、あそこで料理しているのも弁護士。それでこの中心になっているのがカウンターの向こうにいるマスター先生なんです。小料理屋のマスターと弁護士の先生を足してマスター先生。でもね、二足のわらじという訳ではなくて、ちょっと事情があつたんです」

そう言つて、牧山はまたビールをあおつた。

「昔、ここは年配の夫婦が営む小料理屋だつたんです。ある時、酔つた客が大暴れしたことがあつてね。サバイバルナイフを振り回して、あるうことが奥さんの方へ向かつていったんです。びっくりしたご主人が、下げたばかりで手に持っていたビールの空き瓶で応戦して、一撃で仕留めちゃつたんです。でもそいつは暴力団の下っ端で、おまけにつまはじき者だつた。面子を潰されたと、それから何度も店にやつて来るようになった。がらの悪いのが出入りするから客足も落ちてきて、警察に相談しても何も手立てを講じてくれる様子もない。困つた夫婦が辿り着いたのが、あそこでねぎを刻んでいるマスター先生だつたという訳です」

カウンター越しにじろりと睨まれたが、牧山はそれには構わずに話を続けた。

「ある日、マスター先生はカウンターの中に入れてもらつて、そいつを待たんです。やがてそいつがやつて来て、何かが気に入らないと言つて、いつものように身を乗り出して怒鳴り始めたんですね。先生はカウンターから出て、ビール瓶が詰まったプラスチックのケースを持ってそいつの隣に立った。椅子を一つ引き出して、ケース

を置くと一本を手を取って栓を抜いてラッパ飲みしたんです。そいつは何事だかわからず、怒鳴るのをやめて先生を見上げた。先生は飲み干して空になった瓶を掲げて軽く振り回しながら、こう言ったんです。さて、瓶はたくさんあるからこの前の続きを始めようじゃないか　ってね。そいつはふざけるなと叫んだけど、先生はにやりとして　お前はそうやって怒鳴っているし、こつちも酔っているから何が起こつても不思議じゃないよな。おまわりが来たら困るのはどつちだと思つう？　と言つてやつた」

牧山は残つたビールを一気に飲み干し、いま空になつたばかりの瓶を持ち上げて軽く振り回すしぐさをしてみせた。

「まあ、そんなことがあつてからは、そいつはあまり来なくなつたけど、代わりに先生が入り浸るようになったという訳です。でもね、一旦遠のいた客足は、そう易々とは戻つて来なかつたんです。夫婦は店を畳むと言つたんですが、先生は必死に励ましたんです。それでも夫婦は、ある時ここから去つていった。その日、先生の事務所にこの店の鍵が書留で届きました。先生が店に行つて鍵を開けるとカウンターには、店を処分してお金は受け取ってくださいと書かれたメモと、登記簿謄本、権利証、印鑑証明、印鑑、それに委任状までが置いてあつたんです。きつと、助けてくれた先生に報いようと考へたんでしょうね。しかし、先生はそれからずっと店に立ち続けているんです。毎日という訳にはいかないけど、できる時はこうやって。それを知つた仲間が店に通うようになって、今じゃ弁護士の間隠れ家みたいなもんです。だから、この店にはメニューもないし、全部がセルフサービスなんです。お勘定は、帰る時に扉のところの箱にめいめいが入れていく。金額は自己申告です。みんなで信じて支え合つのが、ここでの唯一のルールなんです。先生は、時々箱を開けて店で使う食材や酒を買う代金と光熱水費を差し引いて、残つたものは店の口座を作つて貯めているんです。そのうちに夫婦が帰つてきたら渡せるようにね」

話し終わると、牧山はビールのおかわりを取りに席を立つた。ふ

と見回すと、いつの間にか店内は席がみんな埋まっていた。

ここに居る者たちには、何か目に見えない絆のようなものがあるような気がした。たった今、その一端に触れたことで、並木もこの空間を共有する一人に加わられたのだと感じた。ここでは誰も何も訊いてこないし、うわべの社交辞令もない。人を理解するというのは、こういうことなのかもしれないと思った。

並木は手の中でぬるくなってきたビールを喉へと流し込んだ。気が抜けて柔らかくなった炭酸のほのかな刺激が、並木の気持ちを包んで癒していった。

その時、トンという小気味いい音と共に、カウンターに新しい大皿が置かれた。並木が見上げると、マスター先生が、ほんの一瞬だけ小さく微笑んだように見えた。

十七

大きな入道雲が青い空にその存在感を誇示していた。せみが一斉に鳴く声が、あたかも過ぎ行く暑い夏を追い立てるかのように辺りに響いている。じりじりと照りつける陽射しを受けて、並木は手連人法律事務所に向かって歩いていった。

とうとう会社から連絡が来たのだ。ご丁寧なことに、牧山宛に解雇通知がファクシミリで送られてきた。それには、原書は並木に郵送したが行き違いにならないように念のために送信したと書き添えられていた。

並木の側では、ここまでは想定内の範囲内だった。そして対策もまた進んでいた。時間はかかったが、並木が時系列に沿って取りまとめた事実について、牧山が法律構成して、それを訴状として仕上げてきていたのだ。

これから内容証明を再び会社に送って解雇の撤回を求めることになるが、それが撥ね付けられたら、その新しい事実を加えて細部を

見直せば訴状を裁判所に持っていける程度にまで推敲を重ねてあった。同時に、証拠の選別もほぼ済ませていた。

裁判では、解雇を無効とし休職の延長を認め、病状が回復してきた折には復職手続きを正しく行えるようにせよということと、職権を超えた陰湿ないじめ行為と、それにより罹患したうつ病について損害を賠償しろということが請求の主となる。決定的な事実である録音については、後に裁判が進んで会社側の主張が積み上がった時に、それを一気に突き崩す切り札として使うことに決めていた。反訳はそれまでにじっくり進めればいい。

そんな場面に至るまでには、多くの時間を費やす必要があるだろう。しかし、後にこの録音の反訳というカードを切った時点で、この裁判は概ね決着するはずだと考えた。

今日は牧山と会って、これらの手はずを確認するだけの予定だった。並木は心の準備が整ってきており、解雇通知が届いたという報告にもさほど動揺しなかった。このことは多少なりとも腹が据わって、来るべき闘いに備えようとしている証なのか、それとも会社にはもう未練がなくなったと示唆しているのだろうか、自分の心の動きを訝った。

それから十日後、晴れた空とまだ強い夏の陽射しが、八月の終わりと、会社と並木の雇用関係の終焉を告げた。

並木は牧山と何度も打合せを重ねた。二人は証拠を確認し、訴状を再検討して必要な修正を加えていく作業に没頭した。会社が解雇の撤回には応じないと回答し、いよいよ提訴が秒読みだと悟った時、夏目の提案で 売れる訴状 に仕上げようということになったのだ。たとえば、もし本屋にこの訴状を並べたとして、立ち読みした人が代金を払い買って帰ってゆっくり読みたいと思えるものにしようと夏目は言った。それくらいの説得力が伴わないと、裁判官がしっかりと読み込んでくれないのだとも言った。裁判官が思わずこちらの味方になりたくなるような、そんな訴状を作ろうと、このところ多くの時間を費やしてきた。

九月もすでに半分が過ぎようとしており、今週はずっと曇りがちの空が続き、太陽の存在がつかの間忘れられていた。連日の疲れがピークに達そうかという頃の週末、ようやく訴状は完成した。

夏目が加わり、三人は仕上がったばかりの訴状にじっくり目を通した。訴状は実に三十ページに渡っており、そこでは事実と法律解釈が展開され、その時々における並木の心情がストレートな表現で織り込まれていた。浅倉人事部長の数々の発言は、インパクトがある箇所に絞って会話調で盛り込まれ、効果的に事実を補強するのに一役買っていた。

読み終わると夏目が目を上げて、牧山と並木に向かって頷いた。

「よくできているじゃないか。訴状というよりはドキュメンタリー作品みたいだな。それがかえって新鮮だし、読んでいて引き込まれたよ。二人ともすごいじゃないか」

並木は牧山と顔を見合わせて頷きを交わした。夏目がもう一度頷いた。

「よし、これでいこう。あと若干の準備をしたら裁判所へ行くぞ。

来週は祝日があるから、それが明けた月曜日、二十五日がいいんじゃないか？ それなら火曜日の朝刊にちょうどいいだろう」

並木が少し驚いて訊いた。

「新聞に載るんですか？」

「載るように仕向けるのさ。ああやって威権を振りかざせば何でも好き勝手にできると勘違いしているような会社が相手だからな、こういった外圧があつた方がいいと思つたんだ。だから月曜日の夕刊が締め切られた後の時間に、裁判所の記者クラブで会見をする。そこでこの件に興味をもってもらえれば、翌朝の朝刊に載るかもしれないという訳さ」

牧山が口を挟んだ。

「それなら夕刊の方が記事になる確率が高いんじゃないですか？」

「それはそうかもしれないが、記者と話せば、こうなつたそもその原因はなんですか？ と訊かれるとは思わないか？ もしこち

らが詳しく説明しなかったとしても、記者の立場で考えれば、エア・アート社の製品は何か重大な問題を抱えていて、それがこの裁判に付随して出てくるかもしれないと推測して然るべきだろう？ 裁判に発展するようなりスクを負ってまで、会社が隠しておきたかったものとはいったい何だろうと。このネタなら朝刊の社会面の方がデスクも喜ぶというものさ」

「なるほど。では、休み明けの月曜日を選んだのは？」

「新聞に載った場合、その後で休みを挟んで会社に対策を講じる猶予を与えたくなかったんだ。一たび報道されたなら、従業員や顧客に対しての説明責任が会社に生じるだろう。取引先からも何か言ってくるかもしれないし、新聞社から根掘り葉掘り尋ねられるかもしれない。インターネットにも何か載るかもしれないし、他紙や地方紙にも載るかもしれない。一紙が報道すれば、他紙もそれを追いかけるものなんだ。それが話題になれば、一般の人がインターネットの掲示板やブログで、ああだこうだと言い始める。そうなれば会社の電話はしばらく鳴り放しだろう。そんな事態になるとすれば、こちらとしては週末までの日数が少しでも長い方がいいじゃないか」

牧山は理解した印しに、口元にニヤリと笑みを浮べた。

「それなら、週刊誌からも取材の申し込みが来るかもしれませんね」

「いや、そっちは考えない方がいいだろう。取材まではあるかもしれないが、それを記事として載せるかどうかは、また別なんだ。もし記事の対象になった会社から、魅力的な条件で広告枠をちらつかされてみる。そこに政治的な判断が介在しないとはいえない」

「うーん、そうかもしれないですね。気の毒なことに、それは雑誌記者にとってはストレスなんだろうな。逆に言えば、そういったマスキミの力というのは、報道される側の会社にとっては大変な外圧だということですね。もしかすると、内部告発そのものよりも、それを報道されることで受けるダメージの方が、より深刻なのかもしれない」

それに夏目が頷いた。

「ああ、そうだと思う。だからこっちは大衆の声を味方につけたいんだ。それから、地元や会社内の人たちの声も。ああいう会社は、評判が命綱みたいなものだからな。だから、二十五日は朝ビラをやろうと思う」

きよとんとしている並木に気付いて牧山が説明した。

「事実とこちらの主張に沿ったビラを作って、朝の出勤時間帯に会社の近くで撒くということですよ。従業員やその地域に関係のある人たちに直接手渡す訳だから、事実を知ってもらうにはいい手なんです。後で問題にならないようなことなら、ビラにはいろいろと書けますからね」

夏目が苦笑した。

「いや、会社にとっては何がどう書かれていようと、ビラなど撒かれた時点で問題ありさ。それは踏まえるとして、こちらが法的に糾弾されない表現にはしておいてほしいな。それについては田中さんのところが専門家だろう？ 彼女は手を貸してくれないかな？」

「ああ、ナナギさんは適任だ。後で電話しておきますよ。あちらが手伝ってくれば、新山下の本社の他に綱島の工場にもビラを撒けますからね。並木さんと関わりがあったところでは特に、並木さんの名誉回復の役に立つと思いますよ。ビラを読んだ人は、少なくともこの裁判がお金目当てじゃないことを理解するでしょうから」

並木は感謝を込めて、深々と頷いた。

十八

明るい朝の陽光を受けて、八時に並木は石川町の駅に立っていた。会社が交通費の支給要件を見直して以来、ほとんどの従業員はこの駅を通勤に利用することになっていた。夏目と牧山と待ち合わせて、まだ人のまばらな元町の通りを歩いた。

三人は谷戸橋へ抜ける手前で立ち止まった。ここは元町の表と裏

の通りが合流し、且つ元町中華街の駅よりも手前の地点であった。即ち、ほとんどの従業員はここを通るが、たいていの役員たちはここを通らないことを意味している。

この場所は田中が地図から割り出した。こちらの邪魔をしそうな会社のお偉方に直接ビラを手渡すリスクが低いこの地点は、最適な選択だと思えた。

また、ビラを配る際に夏目と牧山がエア・アート社の従業員を判別できるはずはないし、それは綱島の工場付近を受け持つってくれることになった田中と他の労働組合から手伝いに来てくれる人たちにとっても同じことが言える。だからエア・アート社の従業員でない人の手にもビラが渡ることは必然であった。同じ地域に関わりのある人に知ってもらおうのもいいのではないか、それを考慮しても十分な枚数を印刷機にかけておくと田中は言った。

三人は谷戸橋側の元町アーケードを背に、歩道の両側に分かれて立った。手には、昨晚のうちに田中から受け取ってきたビラの束を持ってしている。石川町方面から歩いてくる人の流れに意識を集中させた。今から概ね三十分間が勝負だ。

それからの時間、並木は歩道の通行を妨げないようにしながら、エア・アート社の従業員と視認できた人、またはそうだろうと判断できた人に対して挨拶をしながらビラを手渡していった。夏目と牧山はもつと勢いがよく、通りかかる人のすべてに声をかけてビラを差し出した。並木であると気付いて会釈して受け取ってくれる者もいれば、避けるように脇を小走りで駆けていく者もいた。それでも数人は足を止めて、理解を示すように並木の肩を軽く叩いていつてくれた。並木にはそれが嬉しく思えた。

用意した百枚あまりのビラが十五分ほどでなくなった。その頃になると、歩道をこちらに歩いてくる人の波も一段落していた。三人は視線を交わし、これで撤収することにした。

並木は理解を示してくれたかつての同僚の存在に満足していた。そして一緒に朝から付き合ってくれた夏目と牧山に感謝を伝え、三

人は横浜地方裁判所へ歩いて向かった。

谷戸橋を渡りコンテナ街道を進み、日本大通を横浜公園に向かつて曲がると、すぐに目的の建物が目に入った。こちらの通りから見ると、スクラッチタイルの外壁とルステイカ積みのポーチを構えた重厚な低層階に周囲を守られるようにして、その中央ではクリーム色の近代的なコンクリートのビルが高層階へと伸びる複合的な外観をたたえていた。歴史を感じさせる半円形のアーチの下をくぐり、裁判所の中へ入った。

三人は提訴の手続きをとり、訴状を裁判所に提出した。その足で一階の奥にある記者クラブへと向かった。扉を開けると、部屋の中には一人の若い男性の記者がいただけだった。たつた今、提訴の手続きをとってきた案件について夕方ここで説明したいと牧山が伝えるとき、彼は他の記者にも声をかけておくと思じた。十五時に再会する約束をして、三人はそこを後にした。

夏目と牧山は、そのまま隣接するみなとみらい線の駅へ降り、武蔵小杉へと帰っていった。並木は二人を見送ってから、桜木町のアパートへ向かって歩きはじめた。

その道すがら、今朝のビラ撒きから今しがたの裁判所での手続きまでを思い返した。ほんの二時間ほどの出来事だったが、並木は疲労感を覚えていた。慣れないことをしたための疲れと、裁判手続きが意外なほどあっけなかつたことにいささか拍子抜けしたのだった。この手続きというのは、その準備にこちらが注いだ労力に相反して至って淡泊ものだった。並木はアパートに戻ったら少し横になりたいたいと思った。

久しぶりにアパートの扉を開けると、むっとするようなカビの臭いと湿気が鼻を突いた。扉にチェーンをかけてから再び少し開き、そこにサンダルを突っ込んで空気の流れる隙間を作った。次に窓を開け放ち、部屋にこもった湿気を追い出そうとした。

クロゼットを開けると、手前に吊るされたストライプの入ったアイボリー色のスーツが目に入った。休職願を提出した日に、脱いで

ハンガーに吊るしたきりになっていた。それに鼻を近付けると、やはり湿気の嫌な臭いがした。クロゼットの中をかき回して他のスーツの臭いも嗅いでみたが、その中で最もましだと思えたのは、手前にあつた先ほどのアイボリーのスーツだった。それをハンガーごと手に取ると、開けた窓へと運んでいってカーテンレールに引っかけた。これで夕方までには臭いが気にならなくなるだろう。母が時々窓を開けて来てくれていたおかげで、きつとこれくらいで済んでいくのだろうと思つた。並木は床に身体を投げ出し、静かに目を閉じた。

綱島の工場では急遽ラインを止めて、その日に出勤した者が食堂に集められていた。前に立つた中村工場長が掲げた手には、沿道で今朝配られたビラが握られていた。

「皆さんがもうご存知の通り、今朝この付近でビラが配られました。本社の近くでも同じものが撒かれたそうです。これによると、並木さんが会社を提訴したと書かれています。本社からは、ビラの内容を皆さんがそのまま受け取ることのないように注意をしておくようにと言われています」

中村は一旦言葉を切り、一同がその意味を咀嚼するのを待った。再び口を開くと続けた。

「ここまでは本社の指示です。でも皆さんは並木さんを知っています。彼はここにいたのですから。皆さんは、それぞれがそのことを評価して個々に判断してくださいされば結構です」

ここに集つた者は、まだ誰も一言も発していない。静寂がこの空間を支配していた。

長い沈黙が流れた。しばらくして扉がそろそろと開く音がして、次いで男の低い声その扉をくぐって入ってきた。

「それなら、俺は並木支持に一票だ」

皆が一斉に振り向くと、そこには寺下が、扉を押した手に身体を預けるようにして立っていた。

「あいつは人からどう思われるかという怖れを脇にどけて、自分で自分を評価することを選んだんだ。それが自分自身のためだけじゃなく、きつと俺たちみんなのためになると考えたんだろう。いかにも、あいつ　らしい　し、うち　らしい　じゃないか。俺はいいと思うぜ」

そう言うと寺下は扉から手を離して身体を起こし、真っ直ぐに立つて中村を見た。

中村は静かに頷いた。

「マイクさんもか。わしもだ」

何人かが頷きはじめ、やがて全員が顔を起した。眼には一様に何かを確信したかのような光が宿っているのを中村は見取った。そして満足気にゆったりとした口調で告げた。

「さて皆さん、仕事に戻りましょう」

夕方、並木はアイボリーのスーツをまとって裁判所の記者クラブに座っていた。急ごしらえの会見席は、キャスター付きの事務椅子を三つ並べただけのものだった。その周りは、やはり事務椅子を転がしてきて集った記者たちがひしめいていて、並木は息苦しさを覚えた。その時、今朝応対に出た若い記者が立ち上がった。

「それでは始めます。こちらは牧山弁護士です。今朝提訴に至った事案について、会見されます。では、どうぞ」

牧山は簡単な挨拶をしてから話を始めた。訴状のコピーを数部配って被告会社がエア・アート社であると伝えたと、記者たちからざわめきが起こった。その反応は、この会社がクリーンなイメージで通っており訴えの被告になるなど、よもや想像が及ばなかったということを示していた。それは同時に、この社名が記者の関心を惹いたという証でもあった。

続いて裁判に至った経緯を説明し、牧山は並木を紹介した。記者の一人が質問した。

「うつ病については労災の請求をしているのですか？」

牧山が答える。

「いえ、していません。主な理由は、請求にかかる原告の負荷と審査に要する時間を勘案して、今はまだ検討途上ということなんです。しかし因果関係は医師の見解からもしっかりしているのです、そのこともこの裁判で明らかにされると思っています」

別の記者が質問した。

「先ほどの話によると、被告会社から受けた一連の人事命令は製品の問題について原告が指摘したことから始まったということのようですが、その発端は正確には何だったのですか？」

その問いを受けた牧山は、素早く並木を見て、次いで夏目に目を移し、そこで二人の視線が一瞬交錯した。牧山は記者に目を戻すと、つとめて冷静な口調で答えた。

「原告が、被告会社で顧客サービス部の責任者であった当時に受けたクレームが発端で、その後調べを進めると大きな問題に突き当たりました。それは同社の根幹を揺るがしかねない社会的にも影響の大きな……」

ここで慌てて夏目が割って入り、牧山を制した。

「その部分は本裁判の立証には含まれませんので、それ以上の詳細説明は差し控えます」

この二人の弁護士の様子は、数名の記者の興味を即座に惹いた。

その記者たちは、さらに身を乗り出した。

「原告が指摘したその問題というのは何ですか？ それがこの裁判の発端にもなったということではないですか？」

夏目は記者に厳しい視線を返し、彼らの疑いを深めるのに最も役立つ定番の一言を発した。

「ノーコメント」

質問をした記者は引き下がったが、その表情からこの一言が奏功したのは明らかだった。牧山がちらりと夏目を見やり、夏目がかすかに頷いたのに並木は気付いた。どうやら二人の弁護士は、このやりとりを事前に企てていたようだと思った。

記者連中の興味を惹くには、これだけ与えれば充分だった。それから何人かの記者が追加の質問をして会見は終了した。記者クラブを出る前に牧山は、参加した各紙の記者と名刺を交換した。そのうちの三人の記者が、後日改めて取材させてもらえないかと訊いてきた。牧山は、その際は連絡してほしいと伝えた。

裁判所のエントランスで夏目と別れ、牧山と並木はエア・アート社へ向かった。訴状を直接手渡してやろうということになっていたのだ。並木にとっては、こういう形でエア・アート社に赴くことは本意ではなかった。しかし、あえてそうすることで、この長い闘いへの決心が固まるだろうという気がしていた。

エントランスをくぐると、まっすぐに社長室を目指した。扉は牧山がノックする前に開き、秘書の河合が応じた。牧山が訴状を差し出して提訴したので届けに来たと告げると、社長は留守なので代わりに預かりますと河合は答えた。二人はそこを辞して廊下を戻る途中、開いた扉から慌てた口調で電話に対応する声が漏れてくるのに気付いた。

「コメントはありません。まだ訴状を見ていませんから」

二人は元町中華街の駅へ引き返し、そこで別れた。外にはまだ夕方方の弱い陽射しがあった。並木は山下公園沿いを歩いて、桜木町のアパートへ戻ろうと思った。長かった今日一日を振り返り、今ようやく黄昏の景色を楽しもうという気になれたのだった。

街路樹がぼつかりと途切れた一角に差しかかり、サニーワーフホテルの赤いレンガ敷きのポーチが視界に入ってきた時だった。不意にすぐ横手で車のホーンが短く二回鳴った。立ち止まって振り向くと、そこには白いボルボがハザードランプを点灯して停まっていた。並木は背筋を冷たいものが駆けるのを感じた。動けずに立ちすくんでいると、ボルボの歩道側の窓が下がった。右側の運転席からこちらへ身乗り出しているのは、紛れもなく木田拓実社長の姿だった。

「並木、歩いて帰るのか？ よかつたら途中まで乗っていかないか？」

それは思いもよらない申し出だった。つい先ほど、河合から社長が留守だと聞かされたばかりだ。並木はさつとその身を固くした。再び拓実社長が呼びかけてきた。

「ほら、早くしろ。こっちはガソリンを入れたら久しぶりの我が家が待っているんだから」

そう言つて盛んに手招きをしている。細部の表情までは見えなかったが、声に作為は感じられなかった。その時、後方から駐停車違反を取り締まるパトカーが、回転灯を回しながらゆつくりと近付いてくるのが目に入った。拓実社長がそれに気付き、もう一度大きく手招きをした。それに弾かれたように、並木はボルボの助手席へ向かった。

助手席のドアが閉まると拓実社長は並木に笑顔を向けた。

並木は顔を動かして運転席の計器類に目をやった。そこには給油を促すサインが灯っていた。ボルボを車線に乗せると拓実が話しかけてきた。

「見ての通り、もうガソリンがなくてな。最後に乗ったのは随分と前だったのだが、その時はガソリンスタンドに立ち寄る時間がとれなかったんだ。もう長いこと海外だ地方だと、出張とか外出ばかりが続いていて、昼も夜もない日々だったんだ。特にこの半年間は数えるほどしか会社にいられなかった。その間に誰かがこの車を使ったのかもしれないが、まあ賭けてもいいが、長いこと居ないとわかっていたから、誰かが乗って帰って自家用車代わりに使っていたんだろうな。もしそうなら、咎めはしないのだから少し給油しておいてくれていたら助かったに。燃料計の針を、こうして律儀にエンブティーに戻さずにな」

そう言つて、やれやれという表情を浮べて話を続けた。

「つい先ほどようやく会社に戻れたのだが、車をとつてくるだけになつてしまった。今夜と明日は夕方ぶりの休みなんだ。ようやく待

ち焦がれた我が家に帰れるという訳さ。そして、うかれた気分で走っていたら君を見かけたんだ。君が歩いて通勤しているなんて知らなかったな。毎日こうやって歩いているのか？」

これも並木にとつては意外な話だった。口調からは、何か隠された意図があるようには感じられない。しかし何かがあるはずだと思つた。並木は警戒しながら答えた。

「今までは いつも でした。でも、もう解雇されてしまいましたから」

突然ブレーキが強くかかり、ボルボは急停止した。真後ろでけたましくホーンの音が鳴り響き、一台の車が対向車線に膨らんで衝突を避け、そのまま走り去った。後続の車も同じ軌跡を辿っていく。別の車が鳴らした警笛で拓実是我に返り、ボルボを慌てて路肩に寄せた。

「おい、悪い冗談はやめてくれ。どうして君が解雇されなくてはならないんだ？」

今度は並木が驚く番だった。言葉を失っている間にも、後方から先ほどの赤い回転灯がゆっくりと近付いてきた。バックミラーに映るそれに気付き、拓実はボルボを再び車線に戻した。

「今の話しをきちんと訊かせてくれ。少しの時間はあるな？」

並木が僅かに頷くと、拓実はボルボをゆっくり進めながら辺りに目を配つた。パトカーに邪魔されず、しばらく停めていられる場所を探して。

やがて大栈橋を過ぎて横浜税関の手前に差しかかった時、右手の建物の間から色あせた緑色の倉庫の屋根が覗いた。それを目にして、拓実は次の信号でハンドルを右へ切つた。

交差点を右折してすぐのところ倉庫があつた。そちらへ近寄ろうとした時に、道路の少し先に解体中の骨組みが見えた。ちょうど部材を積んだトラックが出て行くところで、後には人影がないようだった。どうやら、これが今日最後のトラックだったのだろう。ボルボは倉庫をやり過ごし、そちらへ向かった。

かつての臨港鉄道高架橋の名残を留める 開港の道 遊歩道の下をくぐると、そこは最近までイベントに使われていた大きなテントを撤去する工事現場となっていた。クレーンによってテントを剥がされ、残された鉄の骨組みが暮れかけた港の淡い背景に浮き上がって見えた。周囲には、所々に解体して出た部材や廃材が積み置かれ、明日またトラックがやってくるのを待っている。そこから少し間を空けたところに、重厚な鋼鉄製の産廃用大型ごみコンテナが設置されている。部材の山とコンテナの間がトラックの走路になっているようだ。

ここでは、今日の作業は終わっているようで辺りに人気はなかった。そのうちに仮設の門を閉じるために守衛がやって来るのだろう。この場所は遊歩道から見渡すことができた。しかし、今日は半期の決算を控えた会社が多い九月末の月曜日であり、給料日と重なるところも多い。それに加えて、繁華街から離れているため、人通りがほとんどなかった。それでも人の目が少しでもあるということは、ささやかな保険のように、短い時間を安全に会話するために必要なことだと並木には思えた。

ボルボはそのまま奥へと進み、岸壁の手前で停止した。拓実はエンジン切り、話しかけた。

「さて、どうということなんだ？ 久しぶりに会ったというのに、こんなに驚かされるとは思ってもいなかったぞ」

疑念を拭い去ることができない並木は、答えを探すように拓実の目をじっと覗き込んだ。しばらくして、拓実が再び尋ねた。

「何か事情があるのかな？ そうなのか？」

依然、並木は答えない。拓実がわかったというように、独り領いた。「では、もう一つ訊きたいと思っていたことがある。随分前のことになるが、君はどうして私にメールの返事をくれなかったんだ？」

この質問が並木に投じた衝撃は計り知れないものだった。いったいどういふことなのかかわからず、拓実を直視したまま身じろぎもできなかつた。その様子に、今度は拓実が戸惑いの表情を浮かべた。

そして拓実は、互いの理解の溝を埋めるかのように説明を試みた。
「君が工場にいる頃のことだ。私に君からメールが届き、そこには何か製品に重大な問題が見つかったと書かれていた。私はそれに返信し、事の詳細をメールで送ってくれるように君に頼んだ。ここまではないかな？」

並木はぎこちなく頷いた。拓実が続ける。

「オーケー。でも、ここからが問題なんだ。その後、君からのメールは途絶えてしまった。私は気になって、もう一度君に催促のメールを送ったが、これにも返事が来なかった。私はこのところ、ほとんど会社にいられなかったから、外からでも会社のネットワークにアクセスしてメールを確認できるようにしてもらっていたんだ。私は君を多少知っているつもりだったから、返事が来ないことを不思議に思った。しばらくして会議の席で中村工場長に会ったので、君のことを尋ねたんだ。すると彼は一瞬だが苦々しい表情を浮べて、君は情報システム部へ異動になったと言った。またそれからしばらくして、北村部長と一緒にになった時に、やはり君のことを尋ねた。彼はこう答えた。並木にどうしても任せたいプロジェクトがあつて無理を言つて引き抜いたのだと。それから、並木はうまくやっているから何も心配は要らないと言つたんだ。私はその時にピンと来て、中村工場長が苦い表情を見せたのは、君を引き抜いた時の情報システム部のやり方がきつとよくなかったのだらうと思つた。君のことだから、問題が継続しているなら私に返事を寄越すはずだと考えた。君が生き活きとやってくれているなら、今はそれで良しとすることにした。いずれこうやって会う機会があれば、その時に訊いてみればいいと考えることにしたんだ」

拓実は辛抱強く反応を待った。しかし、並木は疑問が膨らみ過ぎていて、何をどう話したらいいか判断がつかずに黙つたままでいた。既に疑問が疑念を遙かに凌いでいた。

やがて拓実が言った。

「仕方ないな。私は訊きたいことは訊いたから、君からは何かない

か？」

並木はしばし黙考したものの、結局はあまりいい考えは浮かばなかった。ふとその時、一つ思いついたことがあった。試みに、それを投げかけてみることにした。今できるのはそれくらいだろうと、並木は思った。

「社長は、どうして返信が来ない私のメールをそれほど待ち続けたのですか？ どうして、それから工場長や部長に尋ねるほどに、私を気にかけていたのですか？」

拓実は迷いもためらいもなく、きっぱりと答えた。

「それは私が君を信じているからだ。それに、君も私を信じてくれていると感じてきたからだ」

「それが理由だったと？」

「ああ、一番大事なことじゃないか。信じることは社長業のすべてだ。人を信じられなければ感謝もできない。そうなったら、いったい誰がついて来てくれるというんだ？ そんな人間だったら、組織のトップでいる資格はないんだ。人から信じてもらうには、まず自分から人を信じて、感謝することだ。信頼を手渡しして感謝を受け取り、その感謝を返すからまた信頼を寄せてもらえるようになる。

これには、ごまかしは一切通用しない。もしそこに偽りがあれば、いずれ必ずそれは露呈することになる。信頼は嘘を見抜くんだ。だから私は部下を本気で信じるんだ。それからもう一つ。話したことがあると思うが、私の亡き父の事業は、善良な従業員の声にろくに耳を貸さなかったために外部に告発されてしまい、果ては経営が立ち行かない事態に陥ったんだ。でも私は、それが会社やお客様を救おうとした結果だったと知っている。だからうちの従業員には、何でも私に話してほしいと常々言ってきたし、送られてくるメールは特に苦言を呈する内容は、真摯に受け止めようと決めていたんだ。私にとつては、君たち従業員が一番身近なお客様であり、その一人ひとりが大切な家族のようなものなんだ」

拓実が口にした最後のフレーズ、それは拓実が常々言つてはばか

らないことそのものであり、並木の耳によく馴染んだものだった。そして、それは並木が愛してやまないエア・アート社の文化であり、同時に、らしさの源流でもあった。その言葉を口にした時、拓実の目はかすかに潤んでおり、光る滴が確かに見えたと思った。そこには一片の偽りもないと、並木にはわかった。やがて、それは並木の心の奥底へと沁み込んでいき、疑念の塊を静かに溶かして心の外へと押し流していった。以前牧山が、告発によって奈落の底へ転がり落ちていった会社があったと話していたのを、ふと思い出す。拓実の父もそんな辛酸を舐めたのだとわかった。次の瞬間、言葉が自然に溢れ出た。

「社長………」

「私は、人が働くのはサラリーだけが理由じゃなく信じて認められ
」

「社長　社長、すみませんでした」

拓実は穏やかな表情を浮かべて、静かに並木を見つめた。

「話してくれるか？」

並木は頷くと、これまでに起こったことを話しはじめた。そこからは、まるで言葉がこぼれ落ちるように息も継がずに一気に話した。すべての話を終えるまでに、いったいどれくらいの時間がかかったのだろう。気がつくくと、辺りはもうすっかり夕闇に覆われていた。ややあつて拓実が深々と頭を下げた。

「話してくれてありがとう。そして本当にすまなかった」

涙が並木の頬を一筋伝い落ちた。拓実が言う。

「製造も出荷もすべて、至急止めなくてはならない。新製品もそう
だ。それに社内も思い切って刷新しなくてはならない。私たちの間で届かなかつたメールの件も誰か信用できる人を選んで調べてもらうことにしよう。そして私こそ、猛省する必要があるな。真にエア・アートらしい会社に戻すためには、まずは私の人を見る目を何とかしなくてはならない。それから、君には今後もぜひ力を貸してもらいたい」

並木が顔を上げると、拓実が力強く頷いた。

「君なら誰を信頼する？ 君が大変な苦勞をして守ってくれた情報だ。託すパートナーも君が直接選んだ方がいい。信頼は一方通行ではだめだ。互いに同じだけの信頼を通わせることができる相手という観点で選んでくれ。それが誰であれ、私も全力で取り組むと約束する」

それに頷くと、並木は迷うことなく答えた。

「中村工場長と寺下マイクさんです」

「よし」

拓実は携帯電話を取り出した。秘書室長を電話口に呼び出し、話の概要を伝えた。

「そうだ。全品ストップだ。製造も出荷も、すべてだ。外に出てしまったものは急いで回収する。もちろん新製品も止めるんだ。ああ、大至急だ。それから工場長の中村と連絡便の寺下には明日付けで人事部と品質管理部の責任者になってもらいたい。そこを変えないとだめなんだ。従前の部門が困るかもしれないから、当面は兼務でもいい。何だ？ 寺下はパート？ ああ、わかっている。だが、どうしてパートじゃだめなんだ？ 重要なのは価値観であり人間性だ。肩書きを雇っている訳ではないだろう？ なに、就業規則？ 定年規程のことか？ それについては、従業員みんなに訊いてみようじゃないか。規則はみんなのためのものだ。同意が得られればどうにかなるだろう。ああ、やり方は急いで考えるよ。現職の浅倉人事部長と関矢品質管理部長と北村情報システム部長については、只今から彼らの役職と権限を凍結する。彼らにこれ以上は何も執行させな。他にもそうなる役職者が出ると思う。とにかく明日の朝、中村と寺下を社長室に呼んでおいてくれ。私もそこへいく。休んでなご、いられるものか。詳しくは明日並木が話す。そうだ、その並木だ。解雇？ そんなものは撤回だ。えっ、裁判？」

携帯電話を持ったまま、拓実が並木を見た。その視線に思わず並木は下を向いた。拓実は小さく頷くと、電話を続けた。

「まあ、裁判は大丈夫だろう。後で本人から訊いておくが、こちらが誠心誠意償えば赦してくれるだろう。それより、さっき話したように会社は取り返しのつかない大きな過ちを犯す寸前のところだった。それを止めてくれたのは、他ならぬ並木なのだ。明日、彼の話をよく訊いてくれ。それからこの話は不用意に漏らしたくない。明日までは副社長たちにも言わないでくれ」

携帯電話を畳むと拓実は並木に真っ直ぐに顔を向けた。並木が何か言いかけたが、拓実は手をあげてそれを制した。

「明日ゆっくり訊かせてもらうよ。今日は驚くことだらけで、もう頭もお腹も一杯だ。君のことだから、裁判の件は苦渋の決断だったのだろう。そんな思いをさせたのは私に責任がある。すまなかつた」拓実はもう一度謝った。それからおもむろにクラブボックスに手を伸ばすと一本のスプレー缶を取り出した。それを並木に渡した。

「これが エアート の最終試作品だよ。缶にラベルを印刷すれば、中身はそのまま出せると思っていた。まさかこれが問題だったとはな」

並木は、受け取った缶から半透明のキャップを外して傍らに置いた。缶を軽く振ってみると、内容物がその動きに合わせて音を立てた。次にそれを目の高さに持ち上げて、ためつすがめつ仔細に眺めた。

そんな並木をよそに、拓実は気持ちを切り替えるかのように、シートの上で窮屈そうに背筋を伸ばした。

「明日からまた宜しく頼むよ。九時に社長室に来てくれ。秘書室は了解済みだ。さて、どこへでも送っていくよ。遅くなってすまなかつた」

拓実がそう言っただけでエンジンをかけようとキーをつかんだ時、バックミラーにライトの光が反射した。こちらにやって来る車があるのだ。こんな時間に解体工事の現場に入ってくるのだから、きつと門に鍵をかけに来た警備員か何かだろうと並木は考えた。車はおよそ百メートル後方で、こちらを真っ直ぐ向いて停止してライトを消した。

その様子に、並木はどこか違和感を覚えた。何かこちらに用があるなら、もつと近くまで来てから止まればいいはずだ。本当に警備員なのだろうかと訝つてみると、その先の道路を通つていった大型車のライトが横切り、一瞬だけその車を闇の中に浮かび上がらせた。その車は白いボルボだった。

「也仁なほひとのボルボじゃないか。何でこんなところに？」
バックミラーに映った後方の車を見て、拓実は驚いて言った。

そのまましばらく待ったが何も動きはなかった。拓実はやれやれと言つようにドアを開けて外に出た。

「きつと通りから白いボルボが見えたので入ってきたのだろう。ここは暗いものだから、こつちが身内の車かどうか確信がなくて、じつと様子を見ているのかもしれない。ちよつといつてくるよ。あいつの車があそこにいたんじゃない、どうせこつちは出られないんだから、すぐ戻ってくるから待っていてくれ」

並木の答えを待たずに、拓実は後方のボルボに向かって歩き始めた。バックミラーに映るその姿を見送りながら、並木は胸騒ぎを覚えた。どこか腑に落ちない。

もう一台の白いボルボが現れた時の様子を、素早く頭の中で再現してみる。あの時、向こうの車の周辺は暗かった。奥の道路を通り過ぎた車のライトに一瞬照らし出されたのをバックミラーで見て、それだけで拓実はあるが也仁副社長の車だと判別した。それほど、この辺りでも目立つ車であり、色なのだろう。では、あちらの車からこちらを見分けることはできなかったのか？

その疑問に気付いてはつとした。違う。向こうはヘッドライトをつけていた。こちらから見てすぐに判断できたものを、もつと条件がよかつたはずの向こうが認識できなかったはずはない。何か目的があつてやつて来たか、または、ずつとこちらの後をつけてきたに違いない。

並木が急いで振り返ろうとした瞬間、後方でタイヤが軋んで勢い

よく砂利をはむ音が聞こえた。次の瞬間、別の鈍い音が響き、黒い人影が眼前で宙を舞った。

思わず目を閉じた時、猛然と向かってきた車がこちらの車体をかすめ、その衝撃波が並木を襲った。なす術もなく、頭が派手にのけ反って内装にしたたか打ちつけられ、さらにその反動をもろに食らって顎が激しく揺さぶられた。意識がもうろうとし始める。それをなんとか押し止めようと、並木は大きく唸るように叫んだ。

点灯したルームランプの明かりを薄いまぶた越しに受けて、はっとして並木は我に返った。運転席の扉が開いており、今まさに乗り込もうとしている也仁副社長の姿をそこに認めた。その向こうには、どうにか追突を回避して斜めに投げ出されたように停まった、もう一台のボルボが目に入った。

激しい危機感に駆られ、体勢を立て直そうとして、並木はとっさに手を引つ込めた。その手には、キャップを失った エアートのスプレー缶が、まだしっかりと握られていた。それはスーツの上着のポケットのところで、何か別の硬いものに当たった。缶を持った手を急いで上着の下に滑り込ませて也仁の側からはわからないように隠すと、空いている方の手をポケットに突っ込んだ。そこにあったのは、使い慣れたICレコーダーだった。手探りで録音スイッチを入れると同時に、運転席のドアが音を立てて閉まった。

「随分と楯突いてくれたじゃないか。でもお前もこれでおしまいだ」
語気鋭くそう言い放つと、也仁は並木を鋭く睨みつけた。

並木は恐怖を感じていなかった。身体が熱くなり、怒りが全身を一気に駆け巡った。それは即座に、他のすべての感情を凌駕した。
並木は也仁を鋭く睨み返して言った。

「なぜこんなことをする？ どうして社長を撥ねた？」

その問いに、也仁は口の端を持ち上げて不敵な笑みを浮べた。

「自分のことを心配したらどうだ？ お前は泳ぎが得意か？ なんならそこから飛び込む時に錘おもじをつけてやってもいいんだぞ」

そう言つて、也仁は岸壁の方へ顎をしゃくつた。この脅しを浸透さ

せる効果を狙って、そのまま黙って並木の目を見据えていたが、そこには恐怖の色は見取れなかった。也仁の片側の口角がきつい角度に上がった。

「そうか、それなら最後に教えてやるよ。なぜなら、あいつは俺の上に乗ったままだったからだ。だから排除した。お前もまた、俺の前に立ち塞がるうとしていい」

並木はその答えに衝撃を受けた。

「そんな……そんなことが理由なのか？ それだけで自分の兄を撥ねたというのか？」

也仁の目に憤怒の炎が上がったのがわかった。

「兄だと？ お前に何がわかるというんだ。あいつは兄貴面をしてきたに過ぎない。突然現れて、俺の親父とその遺産をさらっていったんだ。そうやって興じたのがエア・アートじゃないか。その一切合財を俺に差し出して身を引くべきだった。外回りを絶え間なくあてがって警告してやったのに、あいつはそれを無視したんだ。あいつがない時に会社を切り盛りするのは誰だ？ それはこの俺じゃないか。誰の目にも明らかだ。あいつは愚かにも潮時をやり過ぎしちゃったんだよ」

並木の中の怒りが、先刻の衝撃を再び乗り越えた。血が激しく逆流してくるのを感じる。

「退路がないのは今のそつちも同じじゃないか。社長と車が、ここで何があったのか証明してくれる」

それを聞くと、也仁は突然声を立てて笑い出した。

「そんなものは電話一本でどうとでもなるんだよ、俺の場合はな。要は金と力だ。あいつは今日から行方不明だ。もしかしたら、そのうちに亡骸が見つかるかもしれないが、その時にはもう俺まで辿れる証拠はどこにも残っていない」

一旦言葉を切り、並木にその意味を考えさせようとした。再び口を開いた時、也仁の顔には不気味なほど不敵な笑みが浮かんでいた。

「それに、車は既に処分先が決まっているんだ。買い替えの手筈が

ついていたのさ。まあ、車が潰れてしまったところで、くず鉄を欲しがるのもいくらでもあるんだよ。それに、あいつにはもう車は要らないだろう？ だったら俺の好みの車に替えたっていいじゃないか。俺は左ハンドルの方が好きだし、何よりもメルセデスが欲しいんだ」

この言葉で、並木の怒りは頂点に達した。しかしまだ訊きたいことがある。努めて抑えた口調で言った。

「だから社長の車をつけてきたというのか？ こんなことをするつもりで」

「いや、正確にはお前をつけてきたんだ。夕方、秘書の河合が訴状を持ってきた。俺は車に乗ってお前に追いつこうと思ったが、くそいまましいあの弁護士が邪魔だった。後で葬ってやるつもりだったが、同時に二人と対峙するのはリスクがある。何せ急なことで、こっちは一人だったからな。そこで人事部に電話すると、浅倉が前の人事ファイルを読み上げてくれた。それによると、住所は桜木町の辺りで、通勤手当は申請していなかった。それでピンときた。お前は歩いて通勤していたんだろうと。それなら弁護士は武蔵小杉の方だったから、きっと元町中華街から電車に乗ってお前と分かれるだろうと踏んだ。後はゆっくり追いついてお前を捕まえればいい。しかし、駐車場に降りるとあいつがボルボで出て行くこうとしていた。俺は浅倉と電話していて、あいつが車を取りに戻ったのに気付いていなかったんだ。あいつのボルボは山下公園の方に向かったから、仕方なく距離を空けて後から車を走らせた。するとあいつが先にお前を見つけてしまったという訳だ。それからはお前らの後についていって、事の成り行きを見ていたのさ。それにしても、二台の白いボルボでは目立って仕方がないな。苦労したよ」

それから也仁は真顔になって言った。

「もういいだろう。今度はこっちの番だ。お前が裁判に使う証拠はどこにある？ お前が指摘しようとした製品の問題についての証拠はどこだ？」

並木は黙って也仁を見返し、その問いに答える気はないと伝えた。それを読み取って、也仁が言った。

「そうか。ならば、答えたくなるように訊いてやろう。以前、お前が犬の毛が抜けたというクレームを調べた結果をあいつにメールで送っただろう？ そのメールには、その時点ではさほど脅威になりそうなことは書かれていなかった。しかしこちらは、クレームそのものよりも、そうやって調べて回るお前の熱意と行動力の方に危機感を持った。トラックヤードに閉じ込めてやったというのに、お前はあれほど長い文面のメールを送ってきたんだからな。そのうちに何かをつかむと厄介だと思った。万が一にも、流行りの内部告発などされたらたまらないからな。しかし他方では、それに値するくらい何かを既につかんでいなければ裁判になど打って出ないのでないかとも思っている。こちらを切り崩そうと思ったら、事の発端に遡って事実を持っていないと難しいからな。あのメールを送った後、お前は新たな何かをつかんだんだ。それをこの裁判のどこかで提示しようと思んでいる。お前の本心は労働問題を争いたい訳じゃない。この予想は当たっているかな？」

並木は息を呑み、これにどう答えるべきか逡巡した。その様子に也仁は満足気に頷いた。

「どうやら凶星だったようだな。それなら、その証拠はどこにある？ 弁護士のところなのか？」

「その前に、どうしてメールの中身を知っている？」

也仁の口元に不敵な薄ら笑いが戻った。

「お前はメールの秘匿性を信じているのか？ あれは管理者が覗き見ないという不文律の下に成り立っているようなものだ。その気になれば見ることができるとだよ。北村部長に内密に作らせたメール監視システムがあつてな、お前たちは監視の対象だったんだ。いや、もっと正確に言えば、例のクレームの件で、お前が関矢部長たちを集めてがたがた文句を言った会議があつただろ？ 俺もその場にはいたが、あの時、俺はお前に目をつけたんだ。しばらくは注意を払う

程度で泳がせていたが、お前とあいつの最初のやりとりを目にして、その対象者に急いでお前を加えた。もちろん、あいつは元々対象者だった。すると、お前たちが特定の相手と送受信しようとするメールはサーバーで網にかかって隔離されるんだ。それは即座にスキヤンされて、文中に指定したワードが含まれていないものはそのまま相手に送られるが、問題があればそこでストップする。メールソフトのフィルターと似たような機能さ。引っかけたものについては、後はこっちでいいように文面を作って、さも本人のようにしてメールを返せばいいんだ。それをなんと言ったかな……ああ確か、なりすましとか何とかというんだったな。他にも、リモートのようにパソコン内部を覗ける道具も、全部に予め仕込んである。まあ、こんなことが行われているなんて、一般の従業員は知る由もないだろうがな。それにしても、実に優秀な仕組みだと思わないか？」それがどんなものなのか、並木にもわかった。也仁が、あざけるようにもう一度短く笑った。

「お前は世の中のことを何もわかっていないんだな。とんだ甘ちゃんだぜ」

こみ上げる怒りをこらえようとした時、ふと並木はあることを思いついた。それは、試してみる価値があるかもしれないと思えることだった。並木は也仁の目を見返して言った。

「何もわかっていないのは、そっちだって同じじゃないか。あんたは話しの中で、こっちがつかんでいる事実について、予想は当たっているかと訊いたな。内部告発のことも、万が一という言葉を使っただ。あんたはそのメール以外に、確かなものは何も持っていないんだ。悪いが、こっちは既にあんたの予想の遙か先を行っているんだ。もつと用心しておくべきだったな」

これを聞くと也仁は口を閉ざした。短い間を置いて、その両肩が小刻みに震え出した。並木は也仁が怒りを爆発させるものと思っただけで構えた。しかし次にやってきたのは、小馬鹿にするように鼻を鳴らす音と低い笑い声だった。

「くだらないな。はつたりをかまそうとしたって、そうはいくか。俺は他人を信じないんだ。残念だったな。もしお前が何かをつかんでいると言うのなら、試しにそれをここで示してみたらどうだ。どうせ信じるに値しない、ちんけなものだろうがな。それによっては、お前の寿命が少しは延びるかもしれないぞ」

語尾がかすかに揺れた。それを並木は聞き逃さなかった。一瞬だけ、声のトーンが僅かに変わり、かすかにビブラートがかかって聴こえた箇所があったのだ。嘲笑の中にも不自然さがあった。それは也仁が嘘をついたか、自信がないことの表れだと、並木は経験からわかった。はつたりをかましたのは也仁の方だと判断した。そして、こういう時の心理もまた、顧客サービス部で過ごした日々によって既に心得ていた。それを素早くアレンジし、也仁に揺さぶりをかけた。

「あんたは誰も信じないんだろう？ こつちがつかんでいるものが何であれ、説明したところでそれを信じる道理はないよな。あんたが他人を信じないというなら、逆に誰もあんたを信じるはずがない。あんたはこつちがつかんだ事実を気にしているが、実は部下が何をしていた、社内に本当は何があるのかさえ知らないんだ。先にそつちを心配した方がいいと忠告しておくよ。近いうちに、あんたは思わぬところで足をすくわれることになる」

也仁はふてぶてしく答えた。

「余計なお世話だ。俺には忠実な部下がいる。彼らには要職に取り立ててやると言っておけば、出世路線に乗った夢を見る。それから後は、その夢を見せてくれる枕を手放さないためなら何だっつてするようになるんだ。お前と違ってな。人というのは、そんなもんだ」

今度は並木が鼻を鳴らす番だった。わざと笑みを押し殺すような表情を作った。

「ご立派な副社長殿だな。あんたは自分が他人を懐疑的に見るくせに、周りの連中が同じようにあんたを見ていることには気付いていないんだ。だったら一つ、とっておきの話を教えてやるよ。こつち

は、あんたが関心を持っている内部告発について、それをするに充分な証拠を持っている。特に品質管理部からは、非公式な検査データや書類が山のように出てきた。こっちはそれも持っている」

それは也仁の横面を引つ叩く効果をもたらした。瞬時に眼は大きく見開かれ、受けた衝撃の激しさを物語った。短い沈黙を経て、ようやく也仁が言った。言葉に力はなかった。

「それこそが、はったりだ。俺は関矢部長はじめ、幹部全員に指示を出した。何が起ころうとも対処できるように、過去に遡って問題を全部潰せと。そして報告書やその他何でも、危険なものはすべて棄て、必要なものは作っておけと言ったんだ。だから……」

也仁は何かを悟ったように、続く言葉を呑み込んだ。並木はそれに大きく頷いて見せた。

「ああ、そうだよ。どこにどうやって棄てたのか、末端まで目を配っておくべきだったな。あんたは指示さえすれば、それが思い通りに完遂すると思っ込んでいた。でも、それができるのは、相互に信頼し合った者同士だけだ。うわべだけを取り繕っても、思いは深くまで届かない。信頼されていないとわかってる者たちは、自分の身を守ることしか考えない。あんたが他人を信じないというのなら、細かいところまですべて自分でチェックすべきだったな。だが、あんたはしくじったんだ。こっちの手の中には、ずっと部内で隠して保管されてきた本物の検査結果がある。これがあれば、あんたの部下が後から捏造した報告書類など、何の役にも立ちほしくない」

そう言いながら、並木は心の中で、自分の声が揺れを帯びなかったようにと願った。

也仁はそのまま押し黙り、目の焦点はどこか遠くを見ていた。その様子から、このはったりが也仁に通用したのだと判断した。そして並木は、厳しい口調で決然と言った。

「もうあんたはおしまいだ」

その一言にはじかれたように、也仁は突如我に返った。それはあたかも、縮んだバネが跳ねるようだった。つかみかからんばかりの

勢いで並木をねめつけると、怒声を張り上げた。

「弁護士に電話しろ。証拠の一切合財を引き上げると言え。訴訟は取り下げるから、それでいいんだと。会社とは合意したから、会社から代理の者が一式を受け取りにいくと伝える。余計なことは何も言うな。弁護士がお前を助けようとしても、もう間に合わない」

並木は何も反応を示さず、頭の中でこの状況を素早く吟味した。それをためらっていると思えた也仁が再び語気を荒げた。

「早くしろ。お前を始末して、俺はさっさと引き上げる。時間を無駄にさせるな」

並木は、怒りに燃えた也仁の瞳を見返した。そこには、動物的な威嚇と苛立ちが映し出されていた。それをできるだけ引き延ばそうと、並木はわざと迷っている仕草をして見せた。再び也仁の怒号がとんだ。

少しの間があった。やがて観念したように、携帯電話を取り出そうと、並木はのろのろと片手を伸ばして上着にかけた。そうしながら横目で素早く確かめると、也仁の視線が並木の手へと逸れた。その一瞬を捉えて、並木はもう一方の手を勢いよく振り出し、握っていた缶のスプレーを也仁の顔めがけて勢いよく長く噴射した。続いて悲鳴に近いうめき声上がり、也仁が手で目を覆った。

手に持っていた缶を也仁に投げつけると、並木はボルボのドアを押し開け、急いで外に出てボルボの後方へ転がるようにして駆け出した。缶は也仁に当たった後、ハンドルで跳ねて運転席の下に落ちた。

也仁は両手で目をかきむしった。スプレーが染みて目が開けられない。激しい怒りが渦を巻いて怒涛の如く湧き上がる。跳ねるように顔を起こすと、息を吸って大きく咆哮した。

強引にこじ開けるようにして薄目を開けて、バックミラー越しに並木の姿を探した。続けて、手を前へ伸ばし、イグニッションを力任せにひねってエンジンを始動させた。ギヤを乱暴にバックに入れ

と、アクセルペダルを思い切り蹴りつけた。

車は大きくタイヤを軋ませて猛然と後退し、開け放たれた助手席の扉が反動を食らってもげ落ちた。尚もそれを引き剥がそうとするかのように車は唸りをあげ、グラブボックスとトランクで中のものが荒々しく踊った。

也仁は上体を左にねじり、リアウインドウ越しに後方に視線を走らせた。視界はまだぼやけており、ものが重なって見えだが、それでも構わなかった。車は必死で逃げる並木の背に、どう猛に迫っていった。

両者の距離が瞬く間に縮まっていく。その時、並木の右手に廃材の小さな山が目に入った。並木は迷うことなくそちらに飛びすさった。その瞬間、也仁の視野の中央にいた並木は右隅へ尾を引くように流れて消えた。也仁は反射的に、ブレーキペダルを強く踏み下ろした。

しかしペダルは下りなかった。もう一度、さらに強く踏みつけた。するとカチンという乾いた音がして、何かがペダルの裏側に挟まったのがわかった。也仁の視線が足元へと流れた。それと同時に、ハンドルを握った手に激しい振動が伝わった。タイヤが何か柔らかいものに乗り上げ、続いて間髪入れずに金属が跳ねたような重い音がした。次の瞬間、さらに大きくハンドルが振れた。車はそのままコントロールを失い、車内の空間が傾いた。

並木は硬い地面の上をもんどり打って何度も転がった。反射的に受身の姿勢をとり、どうにか僅かに顔を起した瞬間、片側の車輪を浮かせた車が鋼鉄製の産廃用大型ごみコンテナに後部側面から斜めに突っ込むのが、眼前の廃材の隙間から見えた。それと同時にけたましい爆発が起こり、火柱が立った。並木はとっさに頭を伏せ、腕と身体を丸めて爆風に耐えようとした。空気をつんざくような衝撃がやってきて、鼓膜を叩き、身体の中を暴れ回った。両耳が途方もなく痛む。全身がしびれ、平衡感覚が失われた。

どれくらい経ったのだろう。ようやく手足に感覚が少し戻り始めた。それに伴い、いくらかは身体を動かせるようになってきたのを感じた。恐る恐る顔を上げると遊歩道には人だかりができており、緊急車両のサイレンが近付いてくるのがわかった。どうにか膝をついて上体を起こし、天に昇りゆく竜のごとき炎をただ呆然と眺めた。

十九

並木が再び外に出たのは、翌日の朝だった。連行された警察署では、休息は挟んだものの、永遠とも思えるほど長い取調べを受けた。何度も何度も同じことを質され、ほとほと嫌になった頃、ようやくICレコーダーに取りかかった。そこには、テープにダビングした際に消去し忘れていた浅倉のかすれ声と、昨夜の也仁とのやりとりが録音されていた。たつぷりと時間をかけて調べられた末に、つい先ほど晴れて解放されるに至ったのだった。

現場からは三つのものが見つかった。一つは焼け焦げた車のブレーキペダルの裏に挟まり、へこみがついたスプレー缶。二つ目は、肩の辺りにタイヤに踏みつけられた跡がある拓実社長の遺体と、その付近に散乱した鉄の部材類。最後は、その亡骸の横に斜めに刻まれたタイヤ痕だった。その痕は、大型ごみコンテナの方向へ車が向きを変えたことを示していた。

そしてわかったことがもう一つあった。車の燃料タンクは、あの時点ではほぼ空だった。タンク内には気化したガスが充満していた。セルフのガソリンスタンドでキャップを回すとプッシュと出てくる、あのガスだ。

これらのことから想像できるのは、こういうことらしい。あの時、車は猛然と後退しており、途中で拓実の遺体に乗り上げた。それで車輪が僅かに浮き、再び接地する前に、近くに低く重ねられていた部材の上を踏みつけ、その反動が片輪をさらに強く押し上げた。た

ちまち車は悍馬かんばのようになり、一切の制御を拒んだ。バックの際のハンドル操作は極めてデリケートなものであり、ちよつとしたことで車は大きく振られてしまうものだ。

コントロールを失った車は、タンクのある右側後方の側面から猛スピードで分厚い鋼鉄製のコンテナに突っ込んだ。気化したガソリンは非常に引火しやすい。衝突によってタンクが急激に変形し、それが中のガスを瞬時に圧縮した。次の瞬間、そこに開いた裂け目の向こうでは、火花と新鮮な空気が待ち受けていた。これは乗用車としての安全性能を遙かに越えたところで起こった惨事だった。

こうして也仁副社長は業火に焼かれた。結果として拓実社長は、文字通りその身を挺して並木を守ったのだった。

並木はその後、手連人法律事務所に向かった。扉をくぐると、ここでは夏目と牧山、それに田中が心配して待っていた。まず牧山が口を開いた。

「えらいことに巻き込まれましたね。無事でよかったですよ。警察からの電話には飛び上がって驚きましたよ。一瞬で目が覚めたもんないや、本当にびっくりしました」
続いて夏目が言う。

「ほんとだよ、心臓が止まるかと思った。こうして無事だったのは、一種の奇跡かもしれないね。それに朝刊各紙はエア・アート一色だ。裁判の記事と昨晚の派手な花火で、主な新聞の社会面と地方版にでかく載っていましたよ。その件で、会社から早々に連絡がありました」

そう言うって牧山に向いて頷く。話の続きを牧山が引き取った。

「ええ、そうなんです。会社としては裁判を取り下げて欲しいということでした。既に争う理由がないとも言っていました。並木さんに誠心誠意償うということですよ。そして、これからも並木さんの力が必要だから、落ち着いたら戻ってきて欲しいということですよ。それから、なんと、あの浅倉人事部長はじめ数名が今朝一番で更迭さ

れたそうです。左遷先は綱島工場です。後任には並木さんが良く知
っている人物が就いたそうです。それは中村工場長なんですよ。こ
の伝言の主も彼です。それで会社では――

そこから先は並木の耳に届いていなかった。浅倉たちが送られた
のが、あのF O Cだと聞かされると複雑な気持ちになった。工場が
人事政策上の墓場同然に利用される実態が、何ら変わっていないこ
とに並木は胸を痛めた。拓実社長なら、それも至急改めると言った
ことだろう。そう思うと心が締め付けられた。

ふと焼けた車の中から見つかった エアートのへこんだスプレ
ー缶のことを考えた。それが、こういう悪しき慣行が放つ臭気さえ
も消し去ってくれるものだったらいいのと思った。

「並木さん、大丈夫ですか？」

牧山の呼びかけに、並木は我に返った。そして、それとわからない
ほど、かすかに首を横に振った。気を取り直し、きつと中村新人事
部長によって今後それは変わるだろうと考えた。

そんな並木の様子を気にして田中が言った。

「あんなことがあった後ですもの、無理もないわ。後日また改めて
会うことにして、今日は休んだ方がいいんじゃない？」

並木は感謝を込めて頷いた。

夏目が再び口を開いた。並木が向き直ると、夏目が硬い表情をし
ているのがわかった。

「最後に一つだけ。並木さんが決めたのなら止めはしないが、もし
要請を受けて会社に戻るなら、心しておいた方がいいことがある。
裁判と事件が重なって、会社は社会的に厳しい目を向けられている。
そんな中に飛び込むのは、それはとても大変なことだ。それにうつ
病の治療もまだこれからだ。くれぐれも無理をしないことです。そ
れから、なんと言うか、社長たちが亡くなったのは、あれは並木さ
んのせいじゃない」

しばし間を置き、並木は夏目の言葉を噛みしめた。やがて感謝を込
めて、再び深く頷いた。

そして立ち上がった時、鉄扉の奥の壁に二つの額縁が下がっているのが目に留まった。以前から気付いてはいたのだが、手前に低く積まれたダンボール箱の山に阻まれて近付けなかったのだ。コピー機側から額の正面に回り込んで、初めてじっくりとそれらを眺めた。

その一つには、高い山の尾根にひっそりと座する古代遺跡の写真が収められていた。そこでは地は緑をたたえ、石造りの遺跡が背後を深い谷と切り立った山に守られながら雲間に静かに浮かんでいた。さながら太古の天空都市といった趣だった。しかし並木は、そこに古の栄華の跡を感じなかった。写真の中には、天にそびえる華美な柱もなければ、見るものを圧倒するような大きな建造物も映っていない。あるのは、柔らかい曲線の壁と、陽の恵みを抱いて映える緑の大地だけだった。それらは周囲と見事に調和しており、この遺跡が山の頂きそのものであり、また自然の一部でもあるかのように見えた。

もう一つの額の中には、勢いのある筆文字が躍っていた。お世辞にも達筆とは言えそうもないが、やや不規則に並んだ文字の一つひとつからは、見る者の心に真つ直ぐに飛び込んでくるような迫力が感じられた。そこには、こう書かれていた。

誰しも決して一人ではない。自らを赦すことができた時、理解者の姿が現れる

「もつとよく見えるところに移した方がいいわね」

背後で田中が言った。並木はダンボール箱の山を越えて二つの額縁を手に取った。それを牧山に渡す。牧山はそれらを、鉄扉を挟んで反対側の壁にかけなおした。

「うん、ここならよく見える」

そう言つて、二つの額を眺めながら満足気に腕組みをした。並木は、その後ろに立って頷いた。田中が並木の隣にきて問いかけた。

「写真はペルーのマチュピチュなの。知っていますか？」

並木は以前、マチュピチュについて耳にしたことがあった。工場

の食堂で朝礼を聴いた時に、テープから流れた也仁副社長の声がこの遺跡について語っていたのを思い出す。その時は、威権の象徴として、そしてエア・アート社が目指すべきものとして話されていた。あいまいに頷いた並木を見て、田中が話を始めた。

「かつてここには多くの人々が暮らしていて、高低差と気温差をうまく利用して生活していたの。段々畑が作られ、水路が張り巡らされて、今でも水が枯れていない。そこではたくさん農作物を育て、飢える人はなく、福祉もかなり充実していたそうよ。昔の人は実にうまく自然と仲良くしていたと思わない？ でも、なぜここから人々が去り、今では遺跡になったのか……。時々、そんなことを考えることがあるの」

並木はじつと田中を見つめた。どうやら以前聴いた話とは、随分と違いそうだと思った。並木はそれに興味を惹かれた。田中は顔を壁に向けたまま、話を続けた。

「真相は永遠に謎かもしれない。様々な説があるけど、私には何が正解かなんてわからない。でも、諸説を全部脇にどけていいなら、私なりの解答はあるの。これだけの文明を途絶えさせたのは、詰まるところ人間の意識の底にある欲の力だったのだろうと私は思う」

田中は言葉を切り、じつと額の写真に見入った。そうすることで、かつてこの遺跡に暮らした人々の様子がありありと目に浮かぶとでもいうかのように。ややあって、田中が再び口を開いた。その口調には敵かな響きがあった。

「欲の暴走、それは人類固有の問題だね。そもそも自然界に存在する秩序は、欲による支配が生み出したものではない。たとえば蜜蜂には女王蜂がいるけど、彼女は王権を揮わないし既得権もない。動物の集団にボスはいても、欲に駆られた支配者はいない。でも人間には欲がある。他のものに対して、行き過ぎた支配をしようとすることがままある。相手は同じ人間であったり、他の動植物であったり、自然そのものであったり。欲は人々の怖れや不安も巧みに利用する。守ってやると言いつつ、最後にはすべてを呑み込んでしまう。」

そして、その背後には富や主義や思想がある場合が多い。そこには経済という指標が立てられ、人間の欲をてこに、多くの人々を次々と巻き込みながら、あたかも万能な価値観であると信じられるまでになった。でも別の側面から見れば、それは従来の秩序を壊し、新たに身勝手な順列を生み、人を次の欲へと駆り立てている。そうやって、社会はバランス感覚を失ってきたのかもしれない。ある者は自然より経済や生活の発展だと言い、ある者は他人より自分だと言う。海を埋めようが森を焼こうが、その行為の理由が経済的なものであるなら、他のことは犠牲にされてもやむなしというおかしな理屈がまかり通ってしまう」

田中が並木を見た。並木が小さく頷くと、田中は再び額縁の中の写真に視線を戻した。

「でも、そこには経済的な利害が生じていて、保身に長けた者がうまく世の裏側を渡っていく傍らで、表の世では多くの正直者が苦しんでいるという現実があるわ。でも、一たび力を持ってしまった者は、人々が苦しむ側を世の表だと認めようとはしない。彼らにとって、そこは常に陽の当たることのない裏側なの。でも賢明な民は、自分たちがひたすら登り続けてきた梯子はしは、一部の者がそれに似せて立てかけた算盤そろばんに過ぎなかったのだと、やがては気付くことになる。その梯子が作為的に外されたら、そこに置き去りにされることになるのが誰なのかも同時にわかり始める。どちらの世が表側であるべきなのかということも、真剣に考えるようになる。そして弱い部分に圧しかかる歪みと負担に耐えかねて、世界のあちこちで何かはじけている……。そして、それは今も同じ。格差やいじめ、それに地球環境の問題も、その根っこには欲があったのかもしれない」

そう言つと田中は黙り、壁の写真を静かに眺めた。並木も田中にならった。しばらくそうしていると、この写真には、単なる風景以上のものが写っているように感じられた。短い沈黙を経て、田中が再び話し始めた。

「人間の営みは、欲と保身が絡み合い、ちつぽけな威権を巡って諍いさかいが絶えない。欲をめぐる争いは、生き抜くための本能に根差した闘いとはまるで別物なの。それは限られた小さな世界観の中では意味があつたとしても、もつと大きな地球全体の助けになることは決してない。このことは、多くの人がもう気付いているはずよ。そこには国境も国益も何も無い。先んじた者が潔く利権や既得権を棄てられたら、後から来る者を手助けすることがずっと容易になるわ。欲深さを省みて足ることを知るということを、人はそろそろしてもいいはずだわ。心が解放され、幸せであり続けるために」

人間の欲と保身。そう考えてみると、今の話しが並木の身に起きた一連の出来事にどこか通じるものがあると感じた。人がもつと謙虚だったなら、他の何かを傷つけようとはしなかったことだろう。他のものを力で支配しようとはしなかったことだろう。木を見て森を見ず　以前、品質管理部で丘と話をした時に、彼女がそんなことを言っていたのを思い出す。謙虚になれたなら、きつと森全体が見えるようになるのだろう。本当の力は、自分だけのものじゃない。我欲を満たすための道具じゃない。

田中が並木を見つめ、考えを察したように頷いた。

「人は経験や価値観の物指しを持っている。私もあなたも、先生と呼ばれる人も、みんな。そして、それで測れるものは限られているわ。でも、一つひとつは短くても、たくさん物指しがあれば様々な尺度に対応できるようになる。加えて、人には知恵がある。考えることができる。物指しの向こうから教訓を学びとって、それで未来を推し量ることができる。大事なものは、その推量を恣意的に捻じ曲げないことよ。だからこそ、人は謙虚であるべきだと思う。私はこの写真を見るたびに、ここには汲み取るべき何かがあると思うの」

並木は頷いて賛意を示した。田中がそれに頷き、二人は再び壁の額縁へ顔を向けた。

「そしてこっちの文字。いい言葉でしょ。理解者が出現するのではなく、その姿が見えるようになるというところに、私は共感してい

るの。これは駅の向こうで小料理屋のカウンターに立つ、この辺りではちよつと有名な弁護士さんが書いたものなの。みんなからはマスター先生と呼ばれているわ。この言葉も字の勢いも不器用さも、すべてがマスター先生の生き方を雄弁に語っている。先生は、この言葉通りに生きていて、そのことがみんなに静かに力を与えているような気がするの」

並木は、その意味が今ならわかると思った。それは、少し前に不眠不休の世の中に揉まれて生きていた時には考えもしなかったことだった。

その頃は普段から時間に追われていて、追われないで済むようにしようと頑張ると、また時間が足りなくなる。それは人を追い詰めるだけの泥沼だった。そこから抜け出すには、時には思い切つて、時計やカレンダーを壁から外してみることが必要だったのだ。でも、流れの只中においては、それはなかなかできることではなかった。

しかし今振り返れば、そんな時には実に多くの人に助けられてきたことがよくわかる。そこにはお互い様という摂理だけがあつた。そんなことをつらつら考えていると、田中が静かに言った。

「誰も、知らないうちに他の誰かの役に立っていたということがきつとあるはずですよ。それに気付けば、同じように誰かが差し伸べてくれる手もあるはずだと知ることができる。望もうと望むまいと、人は何かの形で誰かと関わつて生きているのだから、その手を取り合い支え合うのは、決して甘えた行為ではないわ。一人の力には限界があるのだと認めてこそ人はもつと謙虚になれるし、その時に人生の意味は考えるものから感じるものに変わるの。それは他人を赦せるようになるきつかけになるし、次第に自分自身も赦して解放できるようになっていく。そして、自分は決して独りきりで生きてきた訳じゃないんだと理解できるようになるのね。人は赦し合つて生きている。少なくとも、私はそう信じている」

田中が口にした最後のフレーズは確信に満ちたものだった。この言葉は、並木の心の奥で最後の扉を引き開けた。並木は、その音が

聞こえたと思った。

心の眼は、扉の向こうでたくさん善意の手を見ていた。その手の主に想いを馳せると、友の顔が次々と浮かんだ。その瞬間、独りでは決して今日まで乗り越えてくることはできなかつたと、はつきり悟った。

並木はいま、この経験から学ぼうとしていた。かつて田中がそうだったように。

不意に二つの額縁が語りかけてきたような気がして、並木は改めて壁にかかった写真と毛筆を見上げた。額のなめらかな表面には、自分の姿が映り込んでいた。それをじつと眺めていると、欲や時間が多くのものを押し流していく社会の激流の中に危うく呑み込まれかけていたのだとわかった。そして思う。きっと自分は、どこがおかしくなっていたのだ。人間として、生き物として、何かが狂いかけていたのだろう。それにブレーキがかかり、生まれて初めて立ち止まってみる事ができたのが、奇しくもこの一件だったのかもしれない。そんな中で自分と接してくれた身近な人たちは、どれほど辛かったことだろう。

こうやって考えられるようになったのは、きっと後に大きな財産になるだろうと思えた。工場にいた時、神は相對する準備ができていない試練は超越さないと言った前嶋の言葉が記憶の彼方から蘇えってきた。今なら、その意味がわかるような気がした。

やがて並木は田中に感謝を込めて頷き、鉄扉のドアノブへ手を伸ばした。田中は心からの微笑みで並木を見送った。

後ろ手に扉を閉めると、並木は思い切り伸びをした。普段なら、そろそろ昼休みになる頃だ。警察署に連れて行かれて以来、携帯電話の電源を切っていたことに気付いてスイッチを入れた。

階段を下りかけて間もなく、電話が鳴った。携帯電話を取り上げて発信元表示を見る。そこには、並木にとつて一番の理解者の名があった。思わず笑みがこぼれた。電話を耳に押し当て、ふと空を見上げた。そこには、厚い雲の僅かな切れ間から覗く、太陽の横顔が

あつた。

「もしもし」

了

4 (後書き)

小説の中に新聞があり、How to本があり、哲学書があり、それらが複合的に読者に語りかけるスタイルの小説にしてみよう。試みに、本書を通して社会に対して声を上げてみよう。

読後に何かを読者の心に引っ掛かり、そこから何かを感じてくれさえすればいい。そんな思いを込めて。

お読みいただきまして、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4206i/>

理解者 - Residents of FOC -

2010年10月10日01時18分発行